東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

-平成 21 年度-

2010. 3

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懐に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課を設置、郷土博物館を開館するなど、広く市民の方々に文化財の活用と普及に努めてまいりました。平成14年11月には、市立埋蔵文化財センターがオープンし、多くの市民に利用されています。

本書では、平成21年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、上小阪遺跡、船山遺跡、馬場川遺跡の調査概要を掲載しています。いずれも遺存状態の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。また、塚山古墳の現況測量の概要を掲載しました。これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成22年3月

東大阪市教育委員会

目　次

はしがき
目次・例言
第1章　平成21年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要…… 1
第2章　上小阪遺跡第8次発掘調査…… 5
第3章　船山遺跡第8次発掘調査…… 71
第4章　馬場川遺跡第20次発掘調査…… 82
第5章　塚山古墳の現況測量 ……129

例　言

1　本書は、国庫補助50%・市負担50%(総額12,000,000円)で実施した、個人及び零細事業主施行による開発工事に伴う発掘調査ほかの概要報告書である。
なお、昨年度実施した塚山古墳の現況測量についての報告を併載した。

2　本発掘調査は、調査原因に係る個人および法人の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。

3　現地の土色および土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』(2000年版)に準拠し、記号表示も同書に従った

4　本書の執筆は次のとおりである。
第2章5)は佐藤由美、第3章1)～3)・5)、第4章1)～3)・6)は若松博恵、第3章4)・第4章4)は奈良拓弥、第4章5)は安部みき子(大阪市立大学大学院医学研究科器官構築形態学講座)。その他の章項および編集は菅原章太が行なった。
安部みき子氏から、馬場川遺跡の人骨について玉稿を賜わった。厚くお礼申し上げます。

5　考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学事典』(2002年)の表記に従った。

6　調査では、遺構名称に略号を使用したものがある。略号は以下のとおりである。

SP	ピット・柱穴	SD	溝・濠・溝状遺構
SK	土坑	SE	井戸
SX	その他の遺構		

7　現地調査の実施及び報告書作成にあたり、ご協力いただいた地権者の方々や関係諸機関に対し厚くお礼申し上げます。

第1章　平成21年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成21年度の文化財保護法第93条・94条に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出(通知)件数は、平成22年2月28日現在で届出400件、通知41件で合計441件である。届出(通知)にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる。

個人住宅　96件　分譲住宅　179件　共同住宅　14件　兼用住宅2件　店舗　8件
その他建物 21件　道路　1件　学校　1件　電話　1件　ガス　34件　上水道　15件
下水道　56件　河川　1件　宅地造成　7件　その他の開発　5件

441件の届出(通知)の指導内容は、発掘調査62件、工事立会119件、慎重工事260件であった。

平成18年度では届出(通知)が585件、19年度が583件、20年度が427件であったことと比較すると、昨年度とほぼ同様、微増の件数であるが、昨年度の下半期の届出件数が急激に落ち込んだことを考えると、経済情勢の悪化は継続しているものの、やや持ち直した状態が感じられる。これを工事別にみると、個人住宅が30件、分譲住宅が47件増加しており、先の予想が裏付けられる。いっぽう、ガスが36件、下水道が9件減少し、公共ないし公共的な性格の強い工事が減少傾向にある。

東大阪市教育委員会では、個人専用住宅建設ないし個人・小規模事業主による賃貸共同住宅建設等に伴う確認調査と発掘調査、小規模事業主による分譲住宅建設に伴う発掘調査、国史跡内容確認の確認調査・発掘調査について平成21年度国庫補助事業として実施した。昨年度の報告書の補遺とともに次ページ以下に掲げた。その内容は個人専用住宅建設に伴う確認調査が19件、個人による賃貸共同住宅建設に伴う確認調査が4件、小規模事業主による賃貸共同住宅建設に伴う確認調査が1件、国史跡内容確認の確認調査が1件、個人専用住宅建設に伴う発掘調査が2件、小規模事業主による分譲住宅建設に伴う発掘調査が1件、国史跡内容確認の発掘調査が1件で合計29件である(平成22年2月28日現在、予定も含む)。これも昨年度が27件であったことと比べると、ほぼ同様で、一昨年度からは減少傾向にある。

平成21年度の国庫補助事業では、例年と同じく、個人専用住宅建設に伴って実施する確認調査の件数が優位を占める。これらは基礎工事に地盤改良や柱状改良、杭打設を伴うことによるもので、国庫補助事業として確認調査を行い、埋蔵文化財保護行政等に必要なデータを得ているところである。また、大阪府教育委員会の指導を得て、国史跡の現状変更に際して、史跡の内容確認のために確認調査や発掘調査を実施した。史跡鴻池新田会所の確認調査では、同会所に先行する建物や遺物包含層が検出される可能性が考えられたが、明確な痕跡は見出せなかった。史跡河内寺廃寺跡の発掘調査については、平成21年12月に河内寺廃寺跡整備委員会を組織し、その助言と指導をもとに調査地を設定した。整備事業に必要なデータを得る目的で調査を行うものである。また小規模事業主による分譲住宅建設に伴う発掘調査についても大阪府教育委員会の指導を得た。

次に、平成21年度で調査成果を得つつ発掘調査に至らなかった確認調査事例を報告しておきたい。別表の№10と№27は西ノ辻遺跡の範囲内にあり、互いに隣接した箇所にあたる。いずれも遺物の出土は少量であったが、№10で弥生～古墳時代、№27で古墳時代の遺物を検出した。調査地点の位置関係から、弥生土器は古墳時代の再堆積によるものと考えられる。各々の調査箇所の周辺は遺跡調査の例が少ない地点であるが、付近に同期の集落が広がっている可能性が考えられる。№11の花草山古墳群では、平安時代の黒色土器がまとまって出土した。過去の調査で同時期の土器が出土したことがあり、古墳の追葬にかかわるものか、あるいは古墳群とは別個の集落が存在するものかは現時点で明確にしがたい。周辺での今後の調査が進展することを期待したい。

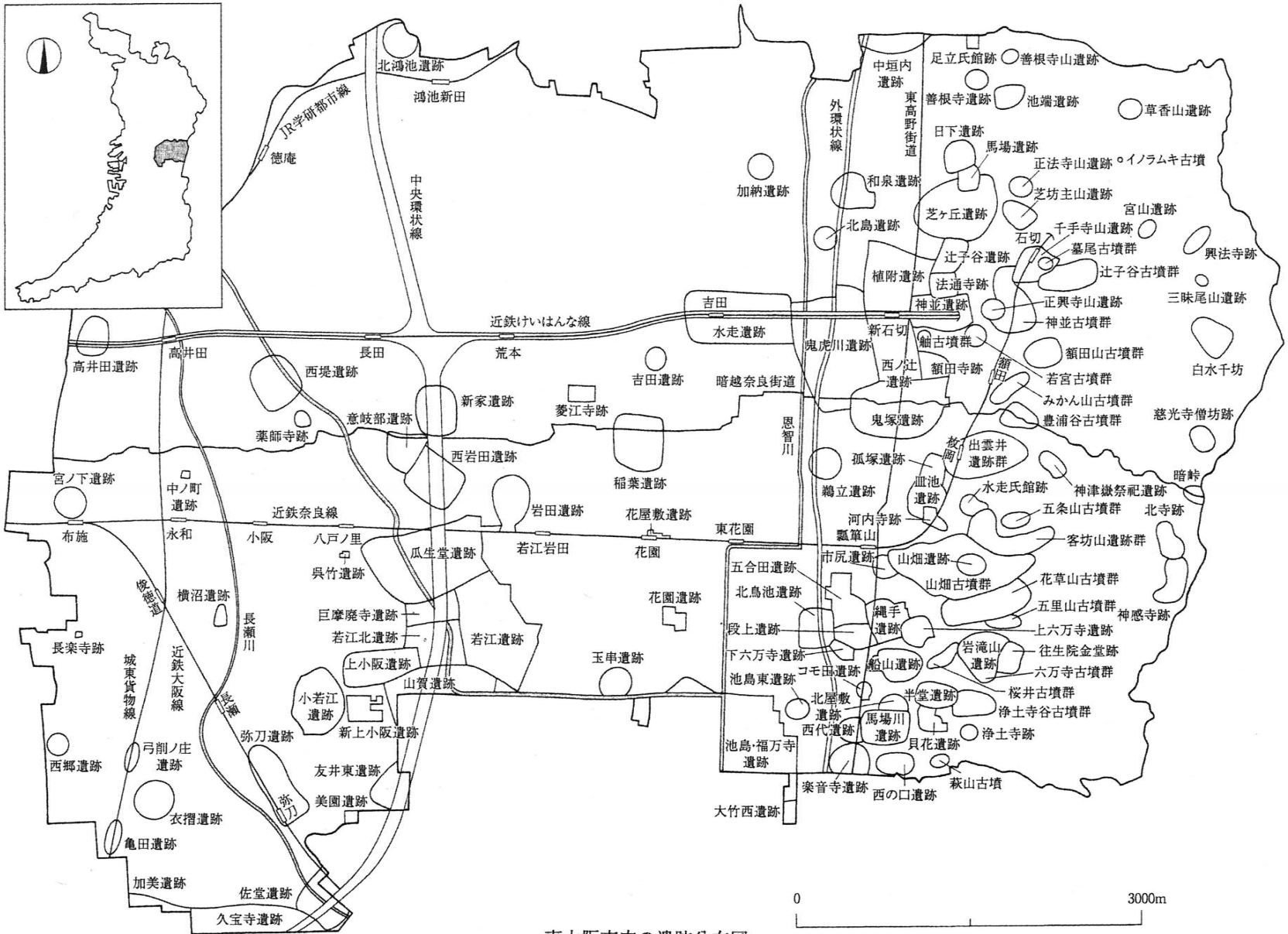
平成20年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況(補遺)

	調査事業名 及び 用途	実施場所	担当	調査期間	調査 面積	調査結果
1	上小阪遺跡第8次 発掘調査 (賃貸共同住宅)	若江西新町4丁目17-1 番地	菅原	平成21年3月4日 ～3月25日	108㎡	本書第2章。
2	上六万寺遺跡確認調査 (個人専用住宅)	南四条町1006-1,-11,- 13番地	菅原	平成21年3月11日	2.2㎡	GL-1.2mまで確認。埋蔵文化財検出せず。 工事実施。
3	若江遺跡確認調査 (個人兼用住宅)	若江南町2丁目483-1の 一部　番地	若松	平成21年3月17日	4.0㎡	GL-1.45mまで確認。近世の整地層から遺物 出土。工事実施。
4	上小阪遺跡確認調査 (個人専用住宅)	宝持3丁目32-8,-9番地	菅原	平成21年3月23日	2.2㎡	GL-1.2mまで確認。埋蔵文化財検出せず。 工事実施。

平成21年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

	調査事業名 及び 用途	実施場所	担当	調査期間	調査 面積	調査結果
1	段上遺跡確認調査 (個人賃貸共同住宅)	下六万寺町3丁目 1327-2,-5,-8番地	菅原	平成21年4月15日	7.5㎡	GL-1.4mまで確認。埋蔵文化財検出せず。 工事実施。
2	西堤遺跡確認調査 (個人専用住宅)	御厨2丁目 94-14,-15,-16番地	菅原	平成21年4月16日	2.6㎡	GL-1.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。 工事実施。
3	縄手遺跡確認調査 (個人専用住宅)	南四条町766-1番地 の一部	菅原	平成21年5月19日	2.3㎡	GL-1.2mまで確認。埋蔵文化財検出せず。 工事実施。
4	玉串遺跡確認調査 (個人専用住宅)	玉串町西3丁目 1061,1060-1番地の 各一部	菅原	平成21年5月22日	2.3㎡	GL-1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。 工事実施。
5	若江北遺跡確認調査 (個人専用住宅)	若江西新町4丁目12-6 番地	菅原	平成21年5月29日	2.3㎡	GL-1.7mまで確認。埋蔵文化財検出せず。 工事実施。
6	山畑古墳群確認調査 (個人専用住宅)	瓢箪山町4-12,4-13番地	菅原	平成21年6月19日	2.3㎡	GL-1.4mまで確認。埋蔵文化財検出せず。 工事実施。
7	鬼塚遺跡確認調査 (個人専用住宅)	新町312-6、312-7番地 の各一部	菅原	平成21年7月10日	2.3㎡	GL-1.3mまで確認。埋蔵文化財検出せず。 工事実施。
8	西ノ辻遺跡確認調査 (個人専用住宅)	南荘町349番地の一部	菅原	平成21年7月31日	1.4㎡	GL-1.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。 工事実施。
9	船山遺跡確認調査 (個人専用調査)	六万寺町3丁目603-5番 地の一部	菅原	平成21年8月4日	1.4㎡	GL-1.4mまで確認。弥生～古墳時代の遺物 包含層を検出。発掘調査実施(№12)。
10	西ノ辻遺跡確認調査 (個人専用住宅)	南荘町347-4番地の一 部	菅原	平成21年8月7日	2.3㎡	GL-0.7mまで確認。弥生～古墳時代の遺物 少量検出。立会調査を経て工事実施。
11	花草山古墳群確認調査 (個人専用住宅)	上四条町1290-25番地	菅原	平成21年8月10日	2.3㎡	GL-1.2mまで確認。平安～鎌倉時代の遺物 包含層を検出。大阪府基準により立会調査 を経て工事実施。
12	船山遺跡第8次発掘調査 (個人専用調査)	六万寺町3丁目603-5番 地の一部	若松 菅原	平成21年8月20日 ～8月24日	4.9㎡	本書第3章。

	調査事業名 及び 用途	実施場所	担当	調査期間	調査 面積	調査結果
13	馬場川遺跡確認調査 (個人専用住宅)	横小路町4丁目755-3番地	菅原	平成21年9月15日	2.3㎡	GL-1.8mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
14	北屋敷・馬場川遺跡確認調査(零細事業主賃貸共同住宅)	横小路町3丁目158番地	菅原	平成21年10月14日	1.6㎡	GL-0.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
15	辻子谷遺跡確認調査 (個人専用住宅)	中石切町2丁目204-2番地	菅原	平成21年10月16日	2.3㎡	GL-1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
16	岩田遺跡確認調査 (個人専用住宅)	岩田町4丁目526-12、526-13番地	菅原	平成21年10月19日	2.3㎡	GL-1.4mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
17	花草山古墳群確認調査 (個人賃貸共同住宅)	上四条町1360-2、1361、1362番地	菅原	平成21年10月21日	6.5㎡	GL-1.4mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
18	衣摺遺跡確認調査 (個人専用住宅)	衣摺2丁目61-2番地の一部	菅原	平成21年10月30日	4.0㎡	GL-1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
19	馬場川遺跡第20次発掘調査 (零細事業主分譲住宅)	横小路町4丁目433-3番地	若松	平成21年9月17日 ～10月31日	184.7㎡	本書第4章。
20	国史跡鴻池新田会所確認調査 (史跡内容確認)	鴻池元町674番ノ3	菅原	平成21年11月9日	1.0㎡	GL-1.1mまで確認。鴻池新田会所に先行する遺構・遺物包含層等検出せず。
21	瓜生堂遺跡確認調査 (個人専用住宅)	中小阪5丁目318-7、-8番地	菅原	平成21年11月11日	2.3㎡	GL-1.6mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
22	西ノ辻遺跡確認調査 (個人賃貸共同住宅)	南荘町522-3、524の一部、525-1番地	菅原	平成21年11月26日	1.4㎡	GL-0.9mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
23	神並古墳群確認調査 (個人賃貸共同住宅)	東石切町3丁目1060-4、-8、-9番地	菅原	平成21年12月28日	1.4㎡	GL-1.1mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
24	河内寺跡第18次発掘調査(個人専用住宅)	河内町674-16番地の一部	菅原	平成22年1月22日 ・1月25日	11.4㎡	奈良時代の土師器・瓦が出土。詳細は次年度報告予定。
25	船山遺跡確認調査 (個人専用住宅)	六万寺町3丁目1037-4、-5番地	菅原	平成22年1月26日	2.3㎡	GL-1.3mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
26	弥刀遺跡確認調査 (個人専用住宅)	近江堂2丁目570-2番地	菅原	平成22年2月2日	1.4㎡	GL-1.2mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
27	西ノ辻遺跡確認調査 (個人専用住宅)	南荘町347-8番地	菅原	平成22年2月4日	1.4㎡	GL-1.0mまで確認。古墳時代の遺物少量検出。立会調査を経て工事実施。
28	神並古墳群確認調査 (個人専用住宅)	東石切町3丁目1087-5番地の一部	菅原	平成22年3月1日	2.3㎡	GL-0.6mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
29	国史跡河内寺廃寺跡第19次発掘調査 (史跡内容確認)	河内町441番地	菅原	平成22年3月11日着手予定	24.0㎡	金堂と回廊の取り付き推定箇所を調査予定。詳細は別途報告予定。



東大阪市内の遺跡分布図

第2章　上小阪遺跡第8次発掘調査

1)　はじめに

上小阪遺跡は、東大阪市宝持3丁目、東上小阪、新上小阪、若江西新町4・5丁目に所在する弥生時代から鎌倉時代の集落跡である。遺跡の範囲は、東西約640m、南北約340mの規模と推定されている。本遺跡は標高約4mの沖積低地に位置し、旧大和川とその分流路の土砂堆積作用により形成された自然堤防の微高地上に立地している。

平成20年12月、東大阪市若江西新町4丁目17番地の1において、個人から賃貸共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。建設工事には杭打設工事を含むものであったため、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、確認調査が必要である旨、届出者に通知した。確認調査を平成20年12月16日に実施したところ、弥生時代後期の土坑状遺構や遺物包含層が検出された。とくに弥生土器は多量に出土した。この結果を受けて取扱いを協議し、建築工事により埋蔵文化財が破壊される部分を対象として、事前の発掘調査を実施することで双方合意した。発掘調査は平成20年3月4日から3月25日まで行った。調査面積は108㎡である。

2)　上小阪遺跡の既往の調査

上小阪遺跡の周辺には、北東側に瓜生堂遺跡、若江遺跡などが所在する。瓜生堂遺跡、若江遺跡では弥生時代から戦国時代の末期まで断続的に城館、官衙、寺院、集落が造られ、現代の開発工事がたびたび行われてきたこともあって、発掘調査はそれぞれ54次、84次を数えるまでに至っている。

いっぽう、上小阪遺跡の立地が、以下に述べるように、自然堤防の小規模な微高地上と推定され、試掘確認調査で工事予定深度までに遺物包含層が確認されるのはきわめて局所的、偏在的であるため、発掘調査は今回を含め8次のみとなっている。ここでその成果をまとめておきたい。なお、遺構名称等は、報告書記載例を尊重したが、一部改変したものがある。

昭和38年(1963)、下水道埋設工事中に弥生土器が出土し遺跡が発見された。次いで、現在の上小阪配水場一帯に遺跡が広がるものとして周知されるようになった。

第1次調査　昭和50年2月に、公営住宅建設に伴い試掘確認調査が実施された。11箇所の調査トレンチが設けられた。調査面積は99㎡である。第1次調査地は、上小阪遺跡の範囲では西側にあたる。敷地西側では上層で平安～鎌倉時代の遺物包含層が確認され、また下層から後期の弥生土器が多量に出土した。このことから第1次調査地の周辺に時期の異なる集落が存在することが推定された。

第2次調査　昭和50年1月から3月まで、上小阪遺跡と瓜生堂遺跡にかけて上水道布設工事に伴い実施された。調査面積は114㎡である。遺跡範囲のうち中央から東側にあたる。調査は上水道布設工事に伴い実施されたもので、上小阪遺跡には5箇所のトレンチが設定された。トレンチ5箇所のうち中央から東側にかけて、現地表下約1mの遺物包含層から多量の後期弥生土器が出土した。遺物包含層下面で精査が試みられたが、湧水などのため遺構の確認はできなかったようである。出土土器は畿内第Ⅴ様式古相から新相までのものが見られた。

第3次調査　平成元年6月から9月まで、下水道埋設工事に伴い実施された。調査面積は250㎡である。遺跡範囲では東側にあたり、一部は第2次調査のトレンチと北側で隣接する。幅約1.5m、延長約270mのトレンチが設定された。上層では奈良時代の土坑が確認された。土坑の分布は疎らで遺物の量も少ない。奈良時代の集落は調査地の西側に想定され、集落の縁辺にあたることが推定されている。下層では東西約150mにわたって弥生時代後期の遺構が検出された。遺構には溝、土坑、ピット、

落ち込みなどがある。第３次調査で初めて同期の遺構が確認された。報告書に拠れば、今回の第８次調査地に近い第３次調査のＧ地区・Ｈ地区では土坑やピットが密集して検出されている。出土土器は第Ｖ様式中葉の弥生土器が大半を占め、遺物包含層に少量の庄内式土器が認められた。その他には古墳時代後期・奈良時代の須恵器、平安時代後期の土師器、同期の瓦器があるがごく微量であった。

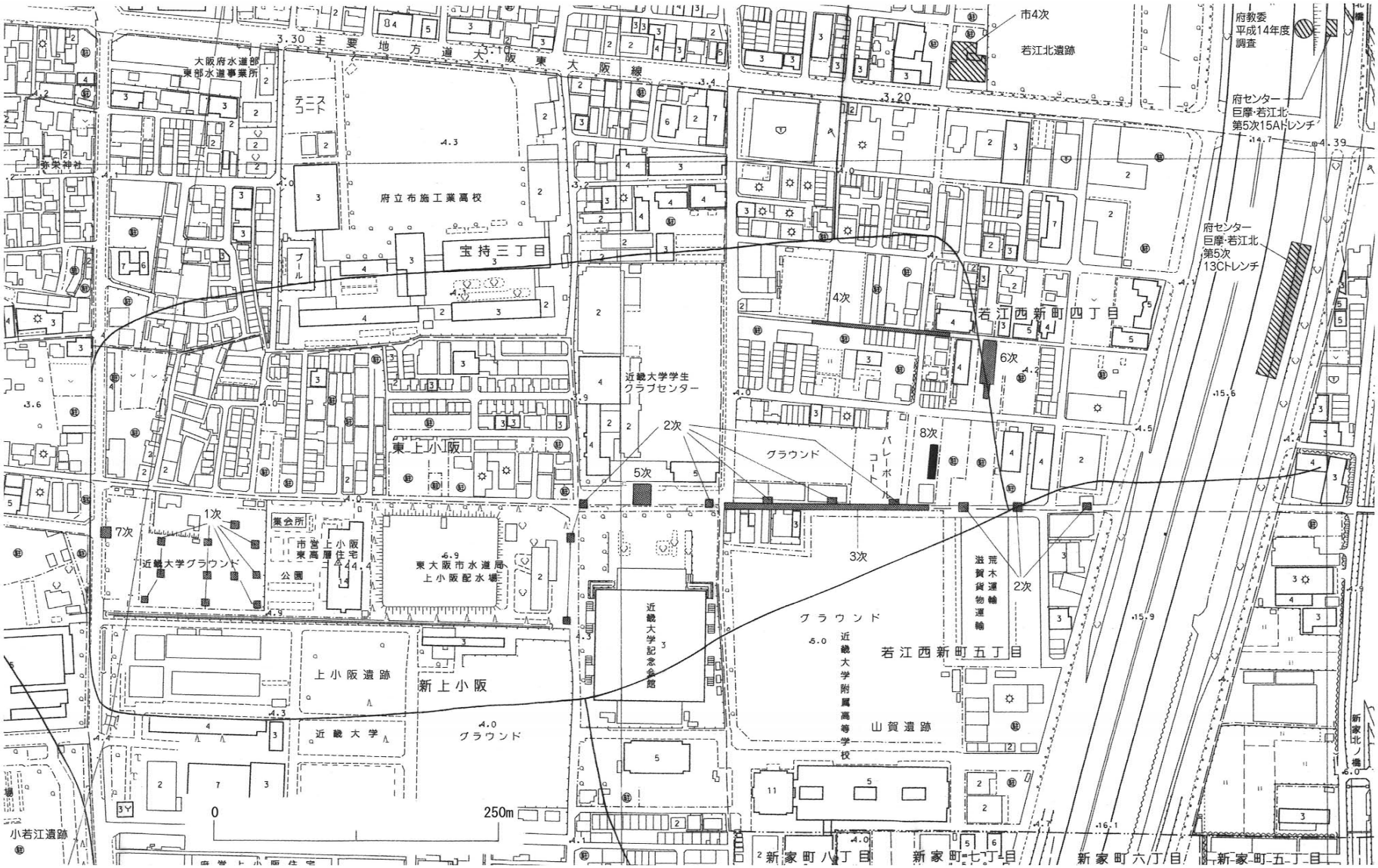
第４次調査　平成３年10月から翌４年１月まで、下水道埋設工事に伴い実施された。調査面積は244㎡である。第３次調査の北約120mに位置し、ほぼ平行する管路である。トレンチは幅約1.3m、延長約170mの規模である。上部から古墳時代後期の須恵器が少量出土したほかは、遺構や遺物包含層から多量の後期弥生土器が出土した。古墳時代前期に推定される自然堤防がトレンチの西側で検出され、その東側で弥生時代後期の溝、土坑、井戸などが発見された。井戸は直径約2.3m、深さ約0.9mを測り、底面には植物繊維の網籠が遺存していた。網籠は取水施設として使用されたと考えられる。トレンチの東端と西端では遺構面の比高が約0.5mを測り、西側が低くなる。この傾斜面に自然堤防が形成されている。また東端の高まりは、トレンチ外の東側に弥生時代後期以前の自然堤防の存在を示すものと考えられ、遺構面は自然堤防間の後背湿地に位置すると推定されている。これらのことから、同期の集落が後背湿地の僅かな微高地を選択して営まれたことがうかがわれる。

第５次調査　平成６年12月に下水道埋設工事に伴い実施された。調査面積は32㎡である。この調査では、工事に併せて現地表下5mまで壁断面の観察が行われ、地表下約1.5mで弥生時代後期の遺構、遺物包含層が確認された。遺構にはピット、溝、不整形土坑、浅い落ち込みがある。出土土器は弥生時代後期末から古墳時代初頭に属すとされている。その下部には約1mの層厚をもつ砂層が続く。さらに下部には地震の痕跡が４層にわたって確認された。調査者は他遺跡の層序対比から地震痕跡層を上から、弥生時代中期末、中期前半～中頃、前期、縄文時代晩期後半に推定されている。

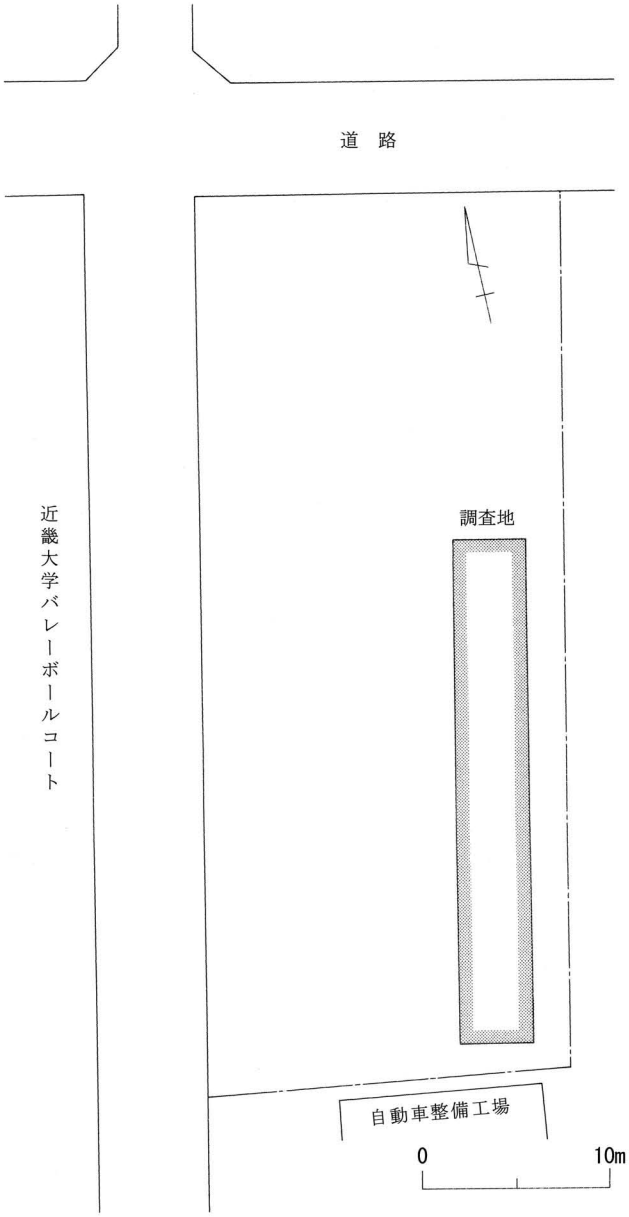
第６次調査　平成８年４月から６月まで共同住宅建設に伴い実施された。調査面積は446㎡である。第５次調査まではトレンチや下水管を調査対象としており、この調査で初めて遺構面の広がりを把握することができた。調査地は遺跡の東端で若江北遺跡に跨る。上層では平安時代の土師器・黒色土器片、古墳時代後期の須恵器片が微量に出土したのみであったが、下層では弥生時代後期中葉の竪穴住居跡、土坑、壷棺墓、ピット、溝が錯綜して検出された。調査地中央の竪穴住居跡には壁溝が３重に廻り、改築が２回施されていた。住居跡は一辺約5mの隅丸正方形をなし、中央に炉跡を伴う。壁溝の縁辺には平坦面があり、さらにその外縁には円形に廻る周溝がある。また調査地北西部から弥生時代中期の土器溜りが検出されている。本遺跡で中期に遡る遺構の確認は初めてである。各遺構やその上部の遺物包含層から多量の弥生土器が出土した。調査者は土層の地質学的検討を通じて、遺跡東部の２本の埋没流路間に排水の良い後背湿地が弥生時代中期末に形成されたことを明らかにしている。

第７次調査　平成18年１月に下水道埋設工事に伴い実施された。調査面積は36㎡である。調査地は遺跡の西端にあたる。遺物が出土せず時期不明であるが、上部で落ち込みと溝、下部で水田畦畔を検出した。平安時代の土師器・須恵器、鎌倉時代の瓦器の各破片が出土した。出土土器の所属時期から第３次調査の上層の状況に類似すると考えられる。第１次調査地に近接することから弥生時代後期の集落の広がりが遺跡の西端までは及ばないことが推定されている。

以上をまとめると、上小阪遺跡では弥生時代中期末ごろ居住に適した微高地が形成され、後期中葉を中心とした時期に小さな集落が微高地ごとに営まれた景観が想定される。庄内式土器が少量見られることは、同期に短期間の居住があったと推定される。後世の削平を考える必要があるが、古墳・奈良・平安・鎌倉の各時代の土器はごく小破片にとどまり、集落についての具体的なデータに乏しいことから、古墳時代の上小阪遺跡は居住域とはならず、生産域に変化したものと考えることができる。


主要地方道大阪東大阪線
大阪府水道部
東部水道事業所
テニスコート
府立布施工業高校
プール
宝持三丁目
東上小阪
近畿大学学生
クラブセンター
集会所
市営上小阪
東高層住宅
公園
東大阪市水道局
上小阪配水場
近畿大学グラウンド
上小阪遺跡
新上小阪
近畿大学
グラウンド
近畿大学記念会館
グラウンド
バレーボールコート
近畿大学附属高等学校
滋賀荒木運輸
貨物運輸
若江西新町五丁目
山賀遺跡
若江西新町四丁目
若江北遺跡
市4次
府教委
平成14年度
調査
府センター
巨摩・若江北
第5次15Aトレンチ
府センター
巨摩・若江北
第5次
13Cトレンチ
1次
2次
3次
4次
5次
6次
7次
8次
0
250m
小若江遺跡
新家町八丁目
新家町七丁目
新家町六丁目
新家町五丁目
新家北ノ橋

第1図　調査地点位置図



第2図　調査トレンチ位置図

3)　調査トレンチ設定、調査方法および層位（第2・3図）

確認調査の終了後、その結果に基づき調査依頼者側と直ちに協議に入った。工事は東西2本の基礎杭列があったが、調査依頼者側から西側の基礎杭列については、埋蔵文化財を破壊しない設計に変更されたため、東側の基礎杭列を調査対象とした。その結果、調査トレンチは東西4m、南北27mとなり、面積は108㎡となった。

調査は確認調査の結果にしたがい、第1～6層の中途まで重機で除去し、以下を人力で掘削する計画を立てた。ところが、機械掘削を開始したところ、トレンチ北端から撹乱部までの間のみ堆積する第5層から弥生土器が中量程度出土したため同区間は第5層から人力の掘削に切り替えた。撹乱部からトレンチ南端までは第5層および第5層に相当する土層が見られず、第6層中途まで重機で除去した。

検出した層位は次のとおりである。なおトレンチ南東側のＳＤ1周辺では第6A層、第8層の下部が細分できた。これについては後述する。

第1層　暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)中粒砂混じりシルト。旧耕土層。この層の下部には、近年に堆積したと考えられる耕作土層が累重しており、これを3層に区分し第1Ａ層～第1Ｃ層とした。

第1Ａ層　緑灰色(10G6/1)中粒砂混じりシルト。

第1Ｂ層　オリーブ灰色(5GY5/1)シルトとオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトの混合土でオリーブ灰色(5GY5/1)粗粒砂を多量含む。

第1Ｃ層　オリーブ灰色(5GY5/1)シルトとオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトの混合土でオリーブ灰色(5GY5/1)中粒砂を少量含む。断面で溝状に落ち込む箇所の堆積層である。

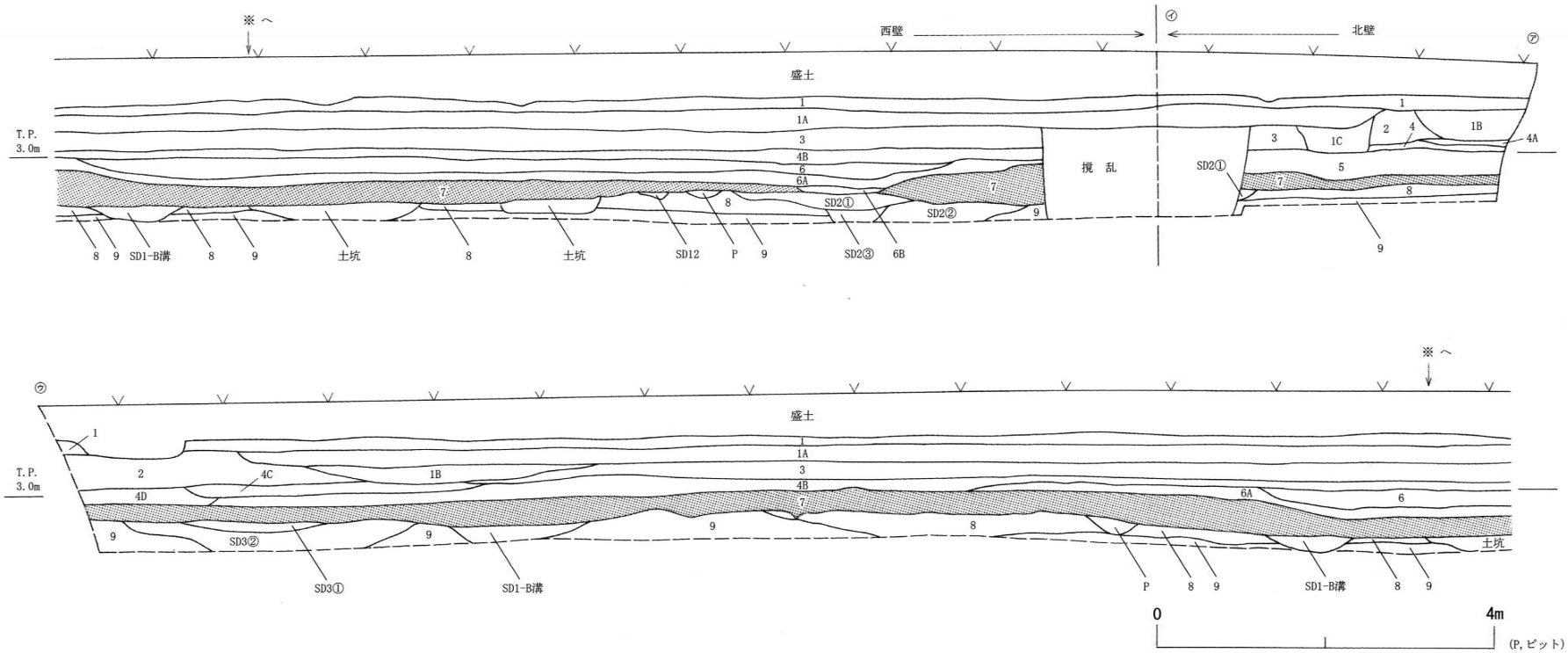
第2層　オリーブ灰色(5GY5/1)シルトとオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトの混合土。上部がマンガンにより赤変しており床土層である。

第3層　オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂混じり粘土。

第4層　灰色(10Y4/1)粘土。マンガンの沈着が著しい。この層の上部に同色の細粒砂層が見られた。これを第4Ａ層とした。

第4Ａ層　灰色(10Y4/1)細粒砂。マンガンの沈着が著しい。

撹乱部より南側では第4層、第4Ａ層は認められず、ほぼ同レベルに土色土質とも異なる層が堆積していた。この層を第4Ｂ層とし、その上部に堆積する層を第4C層、第4D層とした。



1A　緑灰色(10G6/1)中粒砂混じりシルト。
1B　オリーブ灰色(5GY5/1)シルトとオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトの混合土でオリーブ灰色(5GY5/1)粗粒砂を多量含む。
1C　オリーブ灰色(5GY5/1)シルトとオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトの混合土でオリーブ灰色(5GY5/1)中粒砂を少量含む。
2　オリーブ灰色(5GY5/1)シルトとオリーブ褐色(2.5Y4/4)シルトの混合土。
3　オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂混じり粘土。
4　灰色(10Y4/1)粘土。
4A　灰色(10Y4/1)細粒砂。
4B　オリーブ色(5Y6/6)シルト質粘土。
4C　黄褐色(2.5Y5/6)シルト。
4D　灰色(10Y5/1)シルト。
5　暗褐色(10YR3/4)シルト質粘土。
6　青灰色(5BG6/1)中粒砂〜細粒砂。
6A　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト。
6B　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。
7　黒色(5Y2/1)中粒砂混じり粘土。
8　黄褐色(2.5Y5/4)粘土。
9　青灰色(5B6/1)粗粒砂。

第3図　調査地土層断面図（㋐ー㋒は第5図参照）

第４Ｂ層　オリーブ色(5Y6/6)シルト質粘土。撹乱部からトレンチ南端まで広く堆積する。

第４Ｃ層　黄褐色(2.5Y5/6)シルト。マンガンを含む。耕作土層。

第４Ｄ層　灰色(10Y5/1)シルト。マンガンを含む。耕作土層。トレンチ南端では、この層上面は遺構面をなし、ＳＫ1 を検出した。

第５層　暗褐色(10YR3/4)シルト質粘土。後期の弥生土器を少量含む。

第６層　青灰色(5BG6/1)中粒砂～細粒砂。断面の観察で下部には土色土質とも異なる層が分層できた。これらは第６層と同じく次の第７層を広く覆うもので、それぞれ第6A層、第6B層とした。

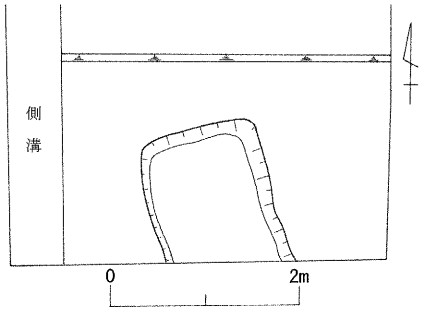
第6A層　にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト。

第6B層　灰黄褐色(10YR5/2)シルト。第6B層はトレンチ北側の一部で検出した。次の第７層を切り込む形に見えるが、第７層の凹みに堆積したもので遺構の埋土とは考えられない。

第７層　黒色(5Y2/1)中粒砂混じり粘土。弥生時代後期遺物包含層。多量の弥生土器が出土した。調査トレンチを覆う。

第８層　黄褐色(2.5Y5/4)粘土。上面は弥生時代後期の遺構面をなす。

第９層　青灰色(5Ｂ6/1)粗粒砂。



第４図　第4D層上面ＳＫ1 平面図

第１表　ピット一覧表

遺構番号	平面形態	規模(cm) 長径	短径	深さ	埋土	出土遺物
SP1	楕円形	19	14	18	A	
SP2	楕円形	22	14	23	A	
SP3	楕円形	47	23	7	A	
SP4	楕円形	52	29	10	A	
SP5	円形	39	38	14	A	
SP6	円形	17	14	5	A	
SP7	円形	21	18	4	A	
SP8	楕円形	26	22+	11	A	
SP9	円形	24	22	15	A	
SP10	楕円形	42	29	10	A	
SP11	円形	52	47	5	A	
SP12	不定形	60	47	10	A	弥
SP13	円形	38	38	29	B	弥
SP14	方形	21	10+	3	A	弥
SP15	楕円形	53	32	4	A	
SP16	円形	26	22	4	A	
SP17	円形	40	31	10	A	
SP18	楕円形	70	28	19	A	
SP19	楕円形	41	27	7	A	
SP20	円形	50	40	9	B	弥
SP21	楕円形	56	30	3	A	
SP22	楕円形	62+	23	10	A	

〔規模〕＋はその数値以上を示す。
〔埋土〕A;灰色(N4/0)粘土
B;灰色(N4/0)粘土に第9層の砂層が混じる
〔出土遺物〕弥は弥生土器を示す。

4)　検出した遺構(第４～８図)

第4D層上面遺構(第４図)

機械掘削中に検出した。平面および断面で検出したのはＳＫ1 のみにとどまる。ＳＫ1 はトレンチ南端に位置し、方形を呈する。東西 1.34m、南北 1.60m 以上、深さ 0.36m を測る。土坑の底面は第９層に達し、埋土は灰色(10Y5/1)シルト(第４Ｄ層)・黒色(5Y2/1)中粒砂混じり粘土(第７層)・青灰色(5Ｂ6/1)粗粒砂(第９層)の混合土であった。第６次調査でほぼ同水準から中世期の土取り穴が確認されており(SPIT と呼称)、同様の遺構と考えられる。土坑内から遺物は出土しなかった。

第８層上面遺構(第５～８図)

ピット・土坑・落ち込み・大溝・溝などを検出した。遺構面のレベルは、トレンチ北端がＴ.P.2.52m、南端がＴ.P.2.60m で平坦である。遺構掘削中の精査で、遺構とは認められないもの、溝から土坑へ遺構名称を変更したものがある。このため、ＳＤ4・ＳＤ5 は欠番とした。主要遺構について説明する。

ピット　22 個を検出した。ピットの規模・埋土・出土遺物については、別表にまとめた。埋土はほぼ共通し、灰色(N4/0)粘土を主体とする。ＳＤ1 の内部に分布するピットは溝底面で検出した。大溝の外面にあるものと埋土が共通することから、これらは大溝の埋没後に造られた可能性が高い。ＳＰ12～14・20 から弥生土器が出土した。

土坑　3基検出した。

ＳＫ2 はトレンチ中央北よりで検出。遺構面精査の段階では撹乱部を介して大溝のＳＤ2 と接続する溝と捉え、ＳＤ4 としていたが、遺構内部の掘削を通じて土坑と判明した。ＳＫ2 の東側ラインは調査地外へ出るが、東西に長い方形を呈していたと考えられる。東西 3.26m 以上、南北 1.55m、深さ 0.36m を測る。土坑断面はU字形を呈する。土坑の北側は底面に緩く２段に傾斜する。埋土は２層に区分される(第７図)。①層は黒色(5Y2/1)中粒砂混じり粘土(第７層)を主体に黄褐色(2.5Y5/4)粘土(第８層)を微量に含む層である。検出面に近く、土坑の上面を薄く覆う層で、土坑の埋没、廃絶時の埋土と考えられる。②層は暗灰色(N3/0)中粒砂混じり粘土で、炭化物を多く含む層である。土坑の機能時の堆積層である。土坑の底面は凹みがあり、その底面に接して多量の弥生土器が出土した(図版５)。一括性の高い資料である。

ＳＫ3 はトレンチ中央東側で検出。土坑のラインは調査地外へ出るが、楕円形を呈したと考えられる。現存長で東西 0.56m、南北 2.25m、深さ 0.08m を測る。土坑断面は浅い皿形を呈する。埋土は灰色(N4/0)粘土である。平面ラインの形状から墓壙の可能性があり底面を精査したが、人骨その他の遺物は検出されなかった。

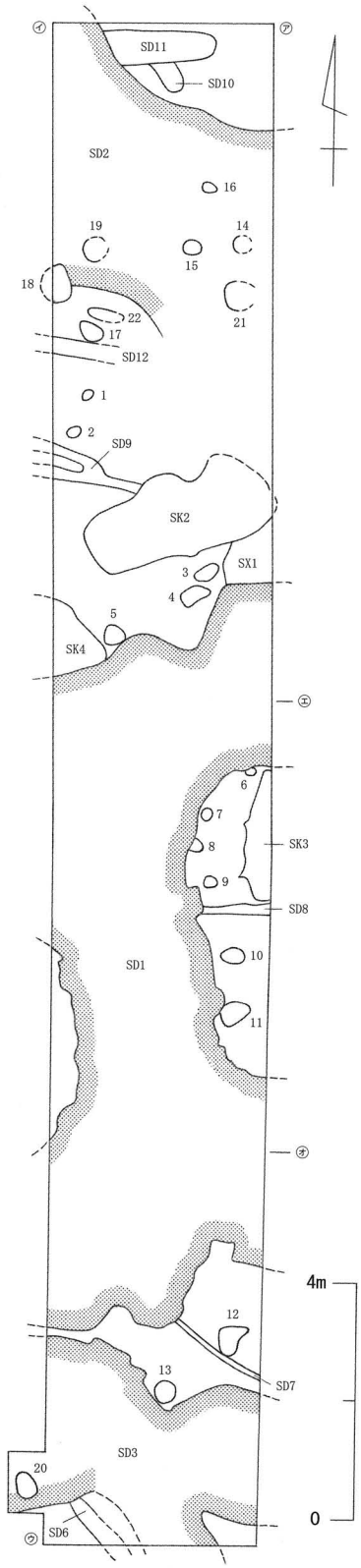
ＳＫ4 はＳＫ2 のすぐ南側で検出。土坑の南側ラインは後述するＳＤ1 の北側ラインと接する。西側は調査地外へ出るが、楕円形を呈すると考えられる。現存長で東西 0.89m、南北 1.37m、深さ 0.33m を測る。土坑断面は緩いU字形を呈する。埋土は灰色(N4/0)粘土である。甕ほかの弥生土器が少量出土した。

落ち込み　１箇所検出した。

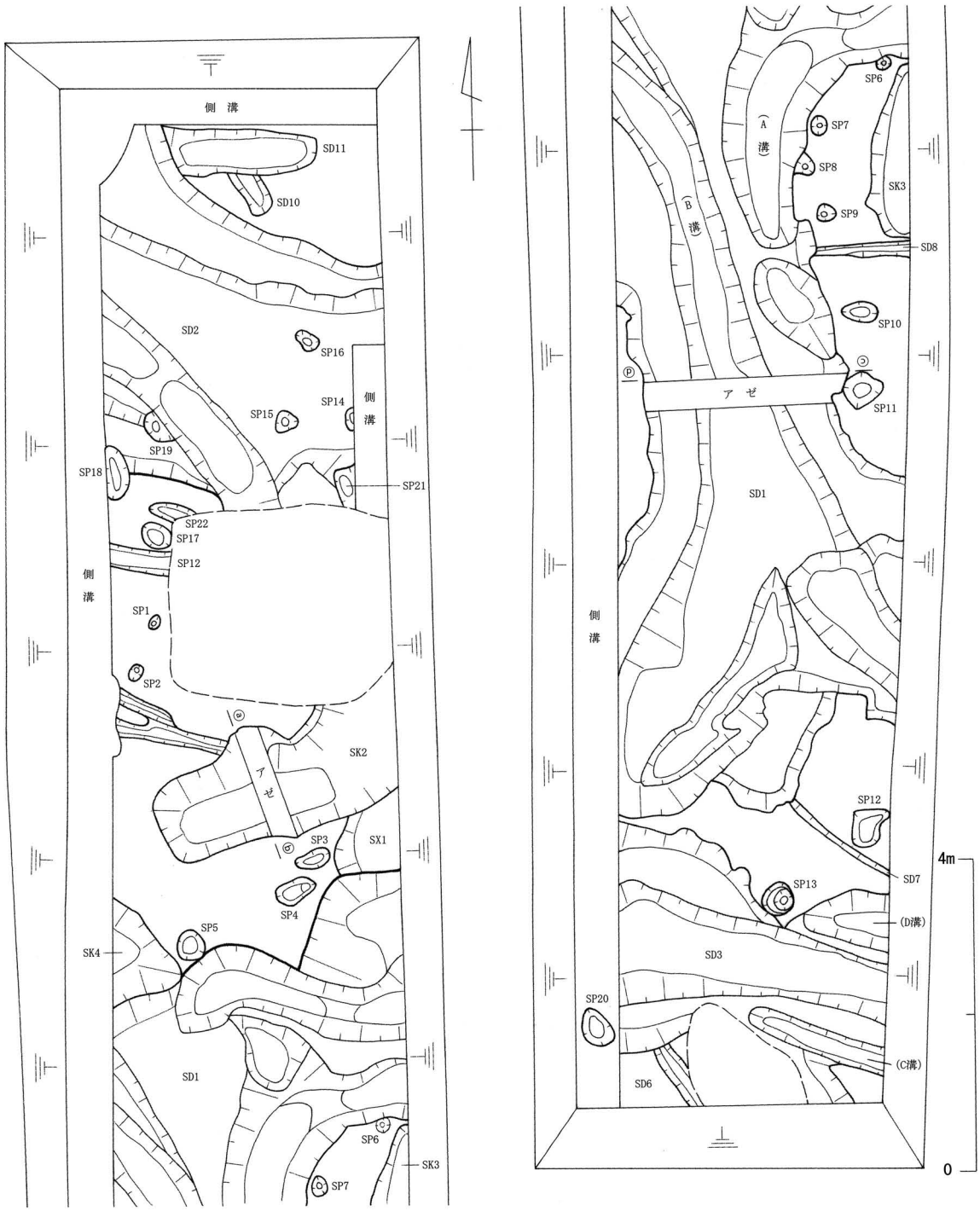
ＳＸ1 はＳＫ2 とＳＤ1 との間で検出。これらの遺構と切り合い、先行する遺構であるが、平面ラインが判然とせず、土坑か溝か不明。落ち込みとした。埋土は灰色(N4/0)粘土である。甕・高杯ほかの弥生土器が少量出土した。

大溝　３条検出した。

ＳＤ1 はトレンチの中央から南側を大きく占める。大溝内部の最底面レベルをみると、北端で T.P.2.10m、南端で T.P.2.18m を測り、差が小さく、滞水状態と考えられる。またこのことから排水を目的に掘削したものとは考えられない。ＳＤ1 中央部の東西畦の観察から断面形状は二段に落ち緩いU字形を呈する(第７図)。ＳＤ1は、北東側で幅 3.27m・深さ 0.29m、南東側で幅 3.20m・深さ 0.30m、南西側で幅 3.23m・深さ 0.40m、中央部で幅 2.59m・深さ 0.45m を測る。中央で括れ部がある他は、均一した規模であることがわかる。大溝の内部には、いくつかの支流がみられ、分流している。これをＡ溝、Ｂ溝と仮称して説明を加える(第６図)。



第５図　第８層上面検出遺構配置図
(㋐－㋒は、第３図、㋓－㋔は、第８図の断面位置を示す)

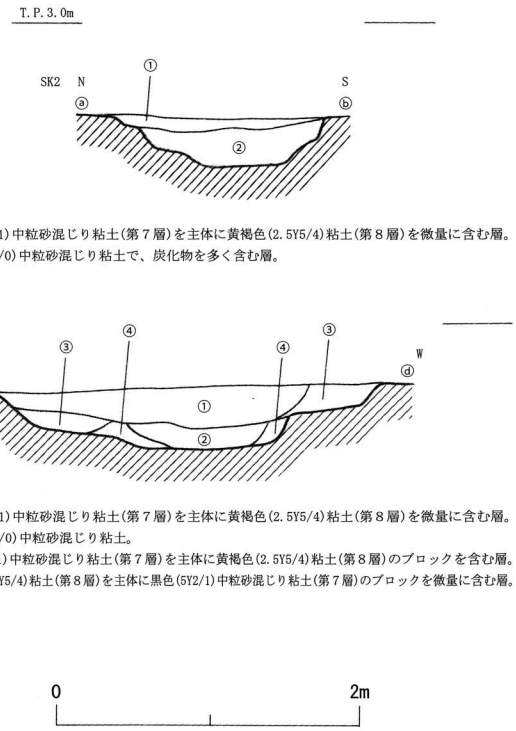


第6図　第8層上面検出遺構平面図

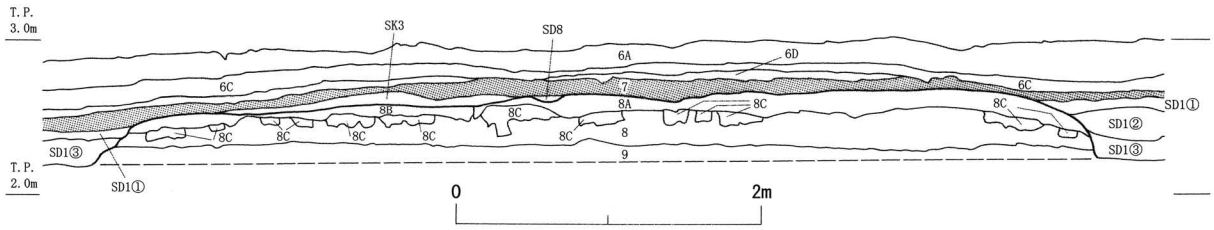
A溝はＳＰ6からＳＰ11付近にかけて、方形状に弧状を描くＳＤ1の東側ラインの直下にある。東側ラインの中央直下には幅約0.15mの掘り残しが認められる。掘り残しの南側は土坑状の凹みで閉じ、畦から南側では溝状の落ちは認められない。幅0.62～1.12m、深さ0.36mを図る。Ｂ溝はＳＤ1の北側から南側へラッパ状に開く形態をなす。北側は幅0.71m、深さ0.22m、中央が幅0.85m、深さ0.20m、南側が幅1.41m、深さ0.25mを測る。南端には長楕円形・多角形状の凹みがみられる。ＳＤ1の埋土は4層に区分される(第7図)。①層は、黒色(5Y2/1)中粒砂混じり粘土(第7層)を主体に黄褐色(2.5Y5/4)粘土(第8層)を微量に含む層である。廃絶時の埋土にあたる。②層は暗灰色(N3/0)中粒砂混じり粘土

で、大溝機能時の堆積層であり、A溝、B溝の埋土となっている。③・④層は溝の側面に堆積している。③層は黒色(5Y2/1)中粒砂混じり粘土(第７層)を主体に黄褐色(2.5Y5/4)粘土(第８層)のブロックを含む層である。④層は黄褐色(2.5Y5/4)粘土(第８層)を主体に黒色(5Y2/1)中粒砂混じり粘土(第７層)のブロックを微量に含む層である。①～③層から多量の弥生土器が出土した(図版６)。

ＳＤ2 はトレンチ北側で検出。底面の東西レベル差はなく平坦である。北側ラインは三段に落ち断面は緩いＵ字状を呈する。幅 3.41m、深さ 0.59m を測る。埋土は３層に区分される。①層は黒色(N2/0)粘土。②層は黒色(N2/0)粘土・黄褐色(2.5Y5/4)粘土(第 8 層)・青灰色(5Ｂ6/1)粗粒砂(第 9 層)の混合土。③層は暗灰色(N3/0)中粒砂混じり粘土。①～③層とも炭化物を多量に含む。内部から多量の弥生土器が出土した。



第７図　ＳＫ2・ＳＤ1 断面図
(ⓐ～ⓓは第６図と対応)



第８図　両 SD1 間のマウンド状高まり断面図(層名は本文に記載)

ＳＤ3 はトレンチ南側で検出。底面の東西レベル差はなく平坦。断面は２段に落ち緩いＵ字形を呈する。東西溝であるが、南側ラインの一部が調査地外へ出る。幅 2.74m、深さ 0.39m を測る。溝の東側には深い凹部が２箇所あり、南からＣ溝、Ｄ溝とした。Ｃ溝は 0.37m、深さ 0.15m を測る。Ｄ溝は幅 0.73m、深さ 0.42m を測る。埋土は２層に区分された。①層は、黒色(5Y2/1)中粒砂混じり粘土(第７層)を主体に黄褐色(2.5Y5/4)粘土(第８層)・ 青灰色(5Ｂ6/1)粗粒砂(第９層)を微量に含む層である。②層は暗灰色(N3/0)中粒砂混じり粘土。溝内から弥生土器が出土した。

溝　７条検出した。幅 0.2～0.3m、深さ 0.1m 程度の規模のものが多い。

最後に、両 SD1 間の断面観察を行った結果について報告する。遺物包含層の第 7 層を覆う層は、第 6A 層のほかに２層認められた(第 6C 層;にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土質シルト・灰色(5Y4/1)極細粒砂の混合土。第 6D 層; 黒色(5Y2/1)中粒砂混じり粘土に灰色(5Y4/1)極細粒砂のブロックを含む。)。下部の第８層は３層に区分された(第 8A 層; 黒色(5Y2/1)中粒砂混じり粘土を主体に灰色(5Y4/1)中粒砂のブロック混入。第 8B 層;暗灰色(N3/0)粘土主体で黄褐色(2.5Y5/4)粘土のブロック混入。第 8C 層; 黄褐色(2.5Y5/4)粘土主体で灰色(5Y4/1)中粒砂のブロック混入。)。これらの土質から、第８層をベースに３層分の盛土を施し、人為的にマウンド状の高まりを築いたことが判明した。

5)　出土遺物

弥生時代の遺物が出土した。遺物は土器、土製品、石器などがある。以下、項目ごとに分けて記す。

（1）土器

土器は弥生時代後期のものであり、畿内第Ⅴ様式に属する。弥生土器の胎土においては石英・長石・角閃石・雲母を含むものを生駒西麓産とし、それ以外は非河内産で記す。今回掲載した遺物だけでみると、59%が非河内産、41%が生駒西麓産であり、他地域からの搬入品が半数以上を占めた。また、土器は風化が著しく調整法は不明なものが多い。判別できるものは本文中に調整法を記しているが、口縁部と高杯などの裾端部のヨコナデ調整は普遍的なのであえて記さない。以下、遺構及び遺物包含層に分けて記す。また試掘確認調査遺物も含めて記す。

①遺構出土土器

SD1 出土土器（第9～12図　1～102）

広口壷・二重口縁壷・細頸壷・長頸壷・短頸壷・壷蓋・甕・鉢・高杯・ミニチュア土器・手焙型土器・器台の器種がある。

1～20・22は広口壷である。1～3は口縁部が緩やかに外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。4・8～11は口縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。4は外面をハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。8は外面をハケメ調整する。内面はヘラケズリ調整する。外面には煤が付着する。9は内外面共にナデ調整する。外面には煤が付着する。10・11の外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はヘラミガキ調整する。5～7・12～16・22は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上方へ摘み上げ拡張する。5は外面をナデ調整する。内面はヘラミガキ調整する。6は頸部外面に刻み目を施す。体部外面はヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。外面には煤が付着する。7は口縁端部に刻み目を施す。さらに頸部から体部にかけて7条の直線文と刺突文を施す。内面はナデ調整する。また、これは角閃石を含むが形態・調整は近江・山城系の土器に類似する。12～16・22は口縁端部に2～3条の凹線文を施す。さらに15・22は2～3個1単位の竹管文のある円形浮文を貼り付ける。外面はハケメ調整、あるいはハケメ後ヘラミガキ調整するものが多い。内面はヘラミガキ調整するものが多い。17～20は口縁部が大きく外反し、口縁端部は下方に拡張する。口縁端部に2～3条の凹線文を施す。さらに17・20は竹管文のある円形浮文を貼り付ける。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。2・7・8・10・18・22は生駒西麓産。その他は非河内産。

21は二重口縁壷である。口縁部に屈曲部を持ち、二段の形状を呈する。受口状の口縁部外面に4条の直線文を施し、その上に3個1単位の竹管文のある円形浮文を貼り付ける。口縁部内面には波状文を施す。外面はハケメ後ヘラミガキ調整する。内面はヘラミガキ調整する。非河内産。

23は細頸壷である。腹部中央が最大径となる算盤型の体部を呈すると思われる。長い頸部から細長く上方へ伸びる。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く終わる。頸部と体部に直線文・波状文・直線文の順に施文する。外面は風化が著しく調整法は不明である。内面は指頭圧痕が残る。非河内産。

24は長頸壺である。口縁部はラッパ状に外方に開く。外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。非河内産。

25～28は短頸壺である。25・26・28は口縁部がラッパ状に外方に開く。外面はヘラミガキ調整あるいはハケメ後ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整あるいは板状工具によるナデ調整する。26は体部最大径部位に1方向の円孔を穿つ。27は口縁部が直線的に外方に伸びる。外面はヘラミガキ調整する。頸部内面はヘラミガキ調整する。体部は指頭圧痕が残る。27は非河内産。その他は生駒西麓産。

29は壷蓋である。体部は緩く立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部に2方向1対と思われる小円孔を穿つ。外面はハケメ調整する。内面はナデ調整する。非河内産。

30～56は甕である。30・31は口縁部が外反し、口縁端部は丸味を持つ。30は外面にタタキメを施す。内面はハケメ調整する。31は外面をハケメ調整する。内面はナデ調整する。32～34・39～41は口縁部が外反し、口縁端部は面を持つ。32・33は外面をタタキメ後ナデ調整する。内面は指頭圧痕が残る。34・40は外面をタタキメ後ハケメ調整する。内面はハケメ調整、あるいはナデ調整する。外面には煤が付着する。39は外面にタタキメを施す。内面は指頭圧痕が残る。外面には煤が付着する。41は外面にタタキメを施す。内面はハケメ調整する。35～38は口縁部が外反し、口縁端部を下方へ肥厚する。35は外面にタタキメを施す。内面はハケメ調整する。外面には煤が付着する。36は外面をハケメ調整する。内面は指頭圧痕が残る。37は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。38は外面をタタキメ後ハケメ調整する。体部内面はハケメ後ナデ調整し、頸部から体部は板状工具によるナデ調整する。外面には煤が付着する。42～56は口縁部が外反し、口縁端部を上方に拡張もしくは摘み上げる。42・43・51・53は外面にタタキメを施す。内面は風化が著しく調整法は不明である。44・49は外面をタタキメ後ナデ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。49は外面には煤が付着する。45・52は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。54は内外面共にナデ調整する。46は外面にタタキメを施す。内面はナデ調整する。外面はハケメ調整やタタキメを施す。内面はヘラケズリ調整やヘラミガキ調整やハケメ後ヘラミガキ調整する。50は外面にタタキメを施す。内面はハケメ調整する。56は外面をナデ調整する。内面はハケメ後ヘラミガキ調整する。外面には黒斑がみられる。31・39・40・42・43・47・49・54は生駒西麓産。それ以外は非河内産。

57～69は鉢である。57～61・68・69は口縁部が外反する。57は頸部で屈曲し外反した後上方へ伸びる。口縁端部が尖り気味で、底部は平底である。内外面共にヘラミガキ調整する。外面には黒斑がみられる。58は口縁端部が面を持ち、底部は上げ底気味である。内外面共にヘラミガキ調整する。底部に木葉痕がみられる。59は口縁端部が丸味を持ち、底部は平底である。底部に穿孔途中の凹みを持つ。体部外面はタタキメ後ナデ調整する。内面はナデ調整する。口縁部内外面は指頭圧痕が残る。60は外反した後やや上方に伸びる。口縁端部が丸味を持ち、底部は平底である。外面はタタキメを施す。内面は風化が著しく調整法は不明である。外面には煤が付着する。61・68・69は口縁端部に面を持つ。61は体部外面をハケメ調整する。口縁部は指頭圧痕が残る。内面は風化が著しく調整法は不明である。68は外面をハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。69は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。62～67は口縁部が直口する。62～64は口縁端部が丸味を持つ。62・64は内外面共にヘラミガキ調整する。63は外面を板状工具によるナデ調整する。内面はハケメ調整する。65～67は口縁端部を打ち欠いたまま終わり、底部は上げ底気味である。65は外面は風化が著しく調整法は不明である。内面は板状工具によるナデ後ヘラミガキ調整する。66は外面をタタキメ後ナデ調整する。内面は板状工具でナデ調整する。外面には黒斑がみられる。67は内外面共にハケメ調整する。66・69は生駒西麓産。その他は非河内産。

70～92は高杯である。70～73は浅い椀形を呈する。70は杯部内外面をヘラミガキ調整する。脚部外面はハケメ後ヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。脚部に4方向の円形透かし孔を穿つ。71～73は杯部である。内外面共にヘラミガキ調整するものが多いが、風化が著しく調整法は不明のものもある。74～81は外方に広がる体部からさらに外反する口縁部を持つ。口縁部と体部の境に稜を持つ。口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。74～79は杯部である。内外面共にヘラミガキ調整するものが多いが、風化が著しく調整法が不明なものもある。80は杯部内外面

をヘラミガキ調整する。脚部外面はハケメ後ヘラミガキ調整する。内面はハケメ後ナデ調整する。脚部に4方向の円形透かし孔を穿つ。81は杯部内外面をヘラミガキ調整する。脚部外面はヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。脚部に3方向の円形透かし孔を穿つ。82～92は脚部である。なだらかに「ハ」の字形に広がる裾部を持つものと、ラッパ状に大きく広がる裾部を持つものがある。外面はヘラミガキ調整するものやハケメ後ヘラミガキ調整するものが多い。内面はハケメ調整するものもあるが、ほとんどのものは風化が著しく調整法は不明である。82～87は円形透かし孔が1方向残存する。82は円形透かし孔が大きいことから器台の可能性もある。84は裾端部外面に列点文を施す。87は裾端部内面にリング状の煤が付着していることから甕蓋への転用品とも考えられる。88は3方向の円形透かし孔を穿つ。91は4方向からなる円形透かし孔を穿つ。70・73・75・79・80・83・89・91は非河内産。その他は生駒西麓産。

93～99は底部である。93は外面にタタキメを施す。内面は風化が著しく調整法は不明である。底部に木葉痕がみられる。内面底部には黒斑が見られ、外面には煤が付着する。94を外面は底部までタタキメを施す。内面は風化が著しく調整法は不明である。95は外面の風化が著しく調整法は不明である。内面は板状工具によるナデ調整する。底部に孔を穿つ。96は外面の風化が著しく調整法は不明である。内面はハケメ調整する。底部に孔を穿つ。93・95は生駒西麓産。その他は非河内産。

97～99は脚台部である。97は内弯気味に立ち上がり裾端部は面を持つ。外面をタタキメ後ハケメ調整する。内面は体部、脚部共にハケメ調整する。外面には煤が付着する。98・99は裾部が直線的に立ち上がり、丸く終わる。98は体部内面と脚部内外面は風化が著しく調整法は不明である。体部内面はハケメ調整する。99は外面にタタキメを施す。内面はハケメ後ナデ調整する。製塩土器の可能性もある。98は生駒西麓産。その他は非河内産。

100はミニチュア土器である。壷または鉢と思われる。底部が上げ底気味である。外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はハケメ調整する。非河内産。

101は手焙型土器である。膨らみ気味にやや内傾する体部から、口縁部が大きく外反する。胴部最大径に凸帯を貼り付ける。覆部は全て欠損。内外面は風化が著しく調整法は不明である。非河内産。

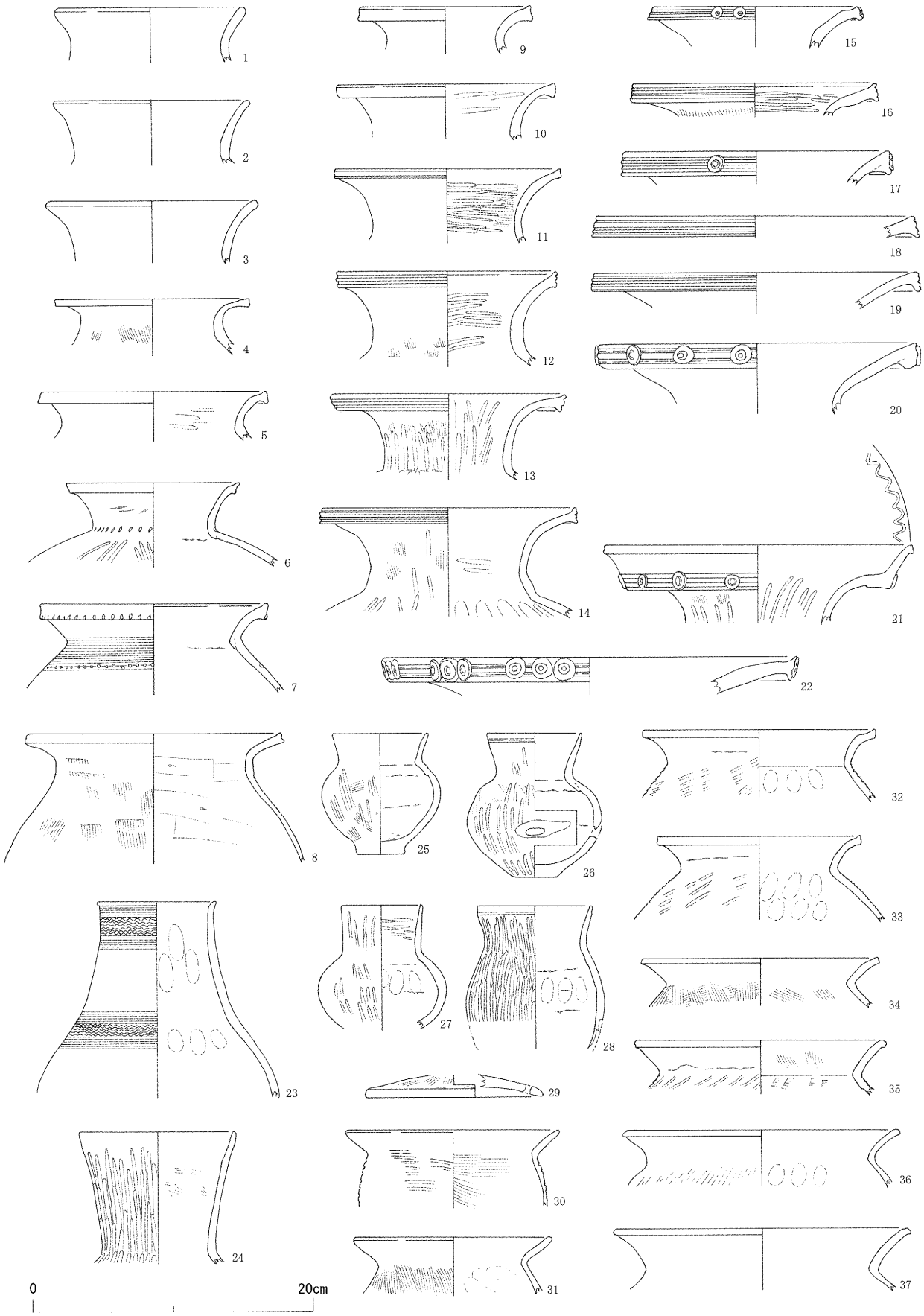
102は器台である。口縁部を上方へ摘み上げ拡張する。口縁部端面に5条の凹線文を施し、その上に竹管文のある円形浮文を貼り付ける。円形浮文との間に小さい竹管文を一部に施す。口縁部端面にも竹管文を施す。内外面はヘラミガキ調整する。器台としたが高杯の可能性もある。非河内産。

SD2出土土器（第12～13図　103～146）

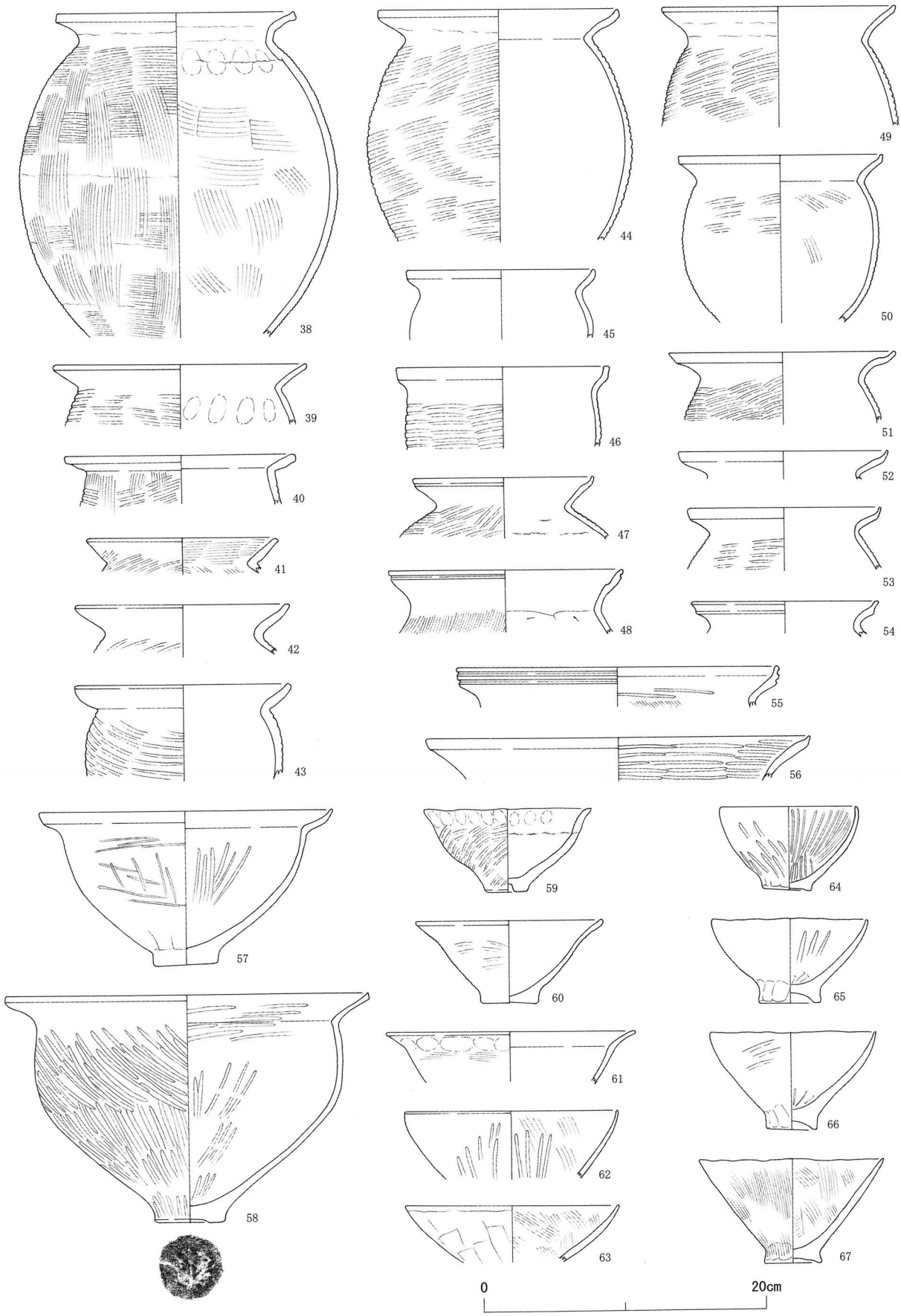
広口壷・短頸壺・長頸壺・甕・ミニチュア土器・手焙型土器・高杯・器台・鉢の器種がある。

103～109は広口壷である。103は口縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。外面はヘラミガキ調整する。内面は指頭圧痕が顕著に残る。104・105・107は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。104は内外面共にヘラミガキ調整する。105は口縁端部に2条の凹線文を施す。外面はハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。107は内外面共にハケメ調整する。106は口縁端部を上方へ摘み上げ拡張する。口縁端部に3条の凹線文を施し、竹管文のある円形浮文を貼り付ける。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。108は口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。109は口縁部が大きく外反し、口縁端部は屈曲して直線的に立ち上がる。口縁端部は面を持つ。外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はナデ調整する。外面には煤が付着する。104・105・109は非河内産。その他は生駒西麓産。

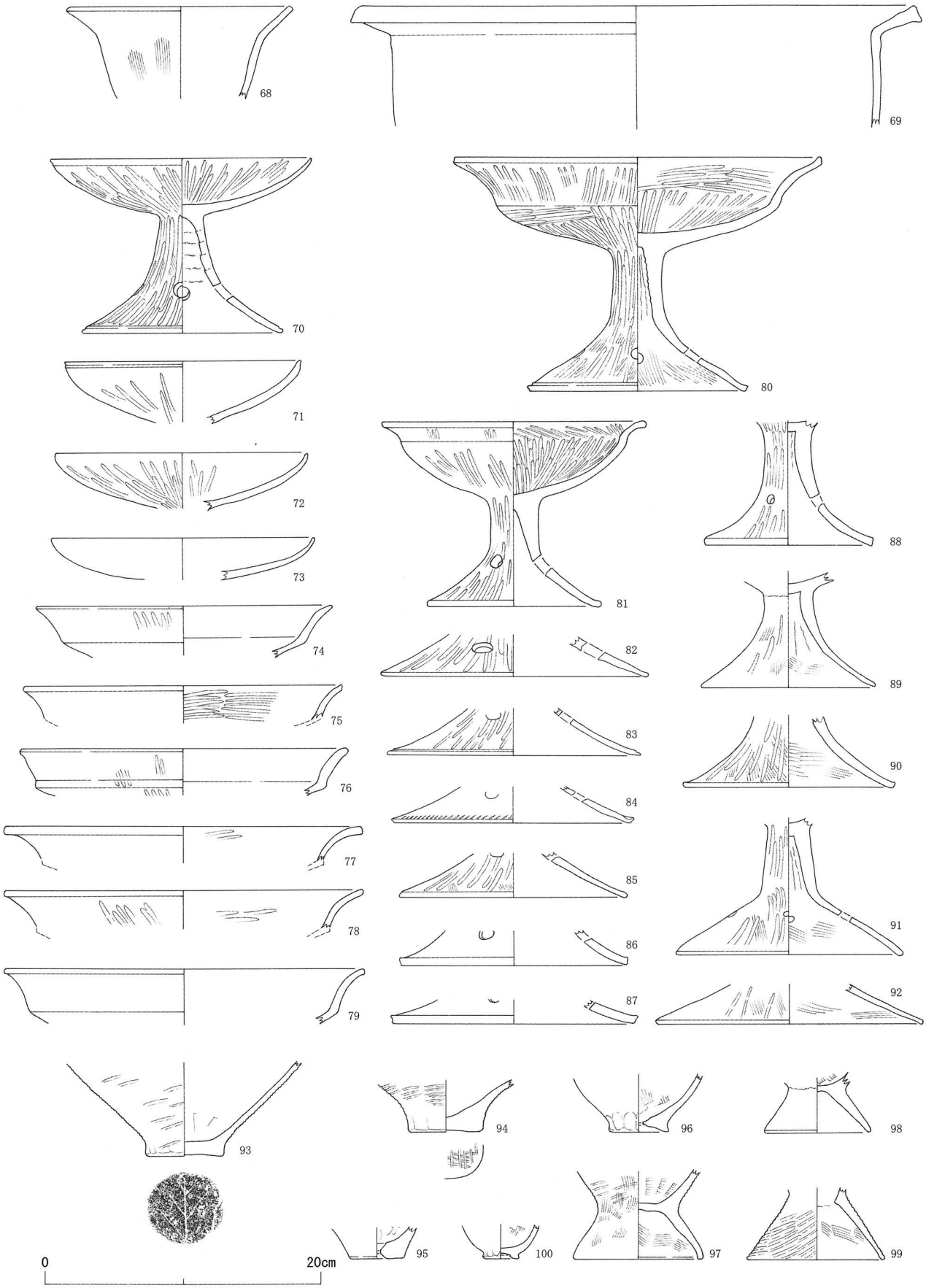
110は短頸壺である。口縁部がラッパ状に外方に開く。内外面共にハケメ調整する。外面には黒色塗料が付着する。生駒西麓産。



第 9 図　SD1 出土土器実測図(1)



第 10 図　SD1 出土土器実測図(2)



第 11 図　SD1 出土土器実測図(3)

111・112 は長頸壺である。口縁部が直線的に外方に伸びる。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。112 は口縁部に 1 条の凹線文を施す。頸部には竹管文を施す。111 は生駒西麓産。112 は非河内産。

114～126 は甕である。114・115 は口縁端部を下方へ肥厚する。114 は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。115 は体部外面にタタキメを施し、頸部はハケメ調整する。内面はハケメ調整する。116・121 は口縁端部が丸味を持つ。外面はタタキメを施す。内面はナデ調整する。121 は外面頸体部境に指頭圧痕が残る。117・118・124・125 は口縁端部が面を持つ。117 は外面にタタキメを施す。内面はハケメ調整する。118 は外面をタタキメ後ハケメ調整する。内面はハケメ調整する。指頭圧痕が残る。124・125 は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。124 は外面に煤が付着する。119・120・122・126 は口縁端部を上方に拡張もしくは摘み上げる。119 は外面にタタキメを施す。内面はナデ調整する。120 は外面にタタキメを施す。内面はハケメ調整する。122 は口縁端部に 2 帯の凹線文を施す。外面をヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。126 は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。123 は口縁端部が凹む。内外面共にナデ調整する。115・116・120・123 は生駒西麓産。その他は非河内産。

113 は脚部である。台付壷または鉢と思われる。底部は低く、ラッパ状に広がる。裾端部は面を持つ。脚台部に 3 方向からなる円形透かし孔を穿つ。外面はヘラミガキ調整する。体部内面はハケメ調整し、脚台部はナデ調整する。指頭圧痕が残る。非河内産。

127 は底部である。甕と思われる。底部に孔を穿つ。外面はナデ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産。

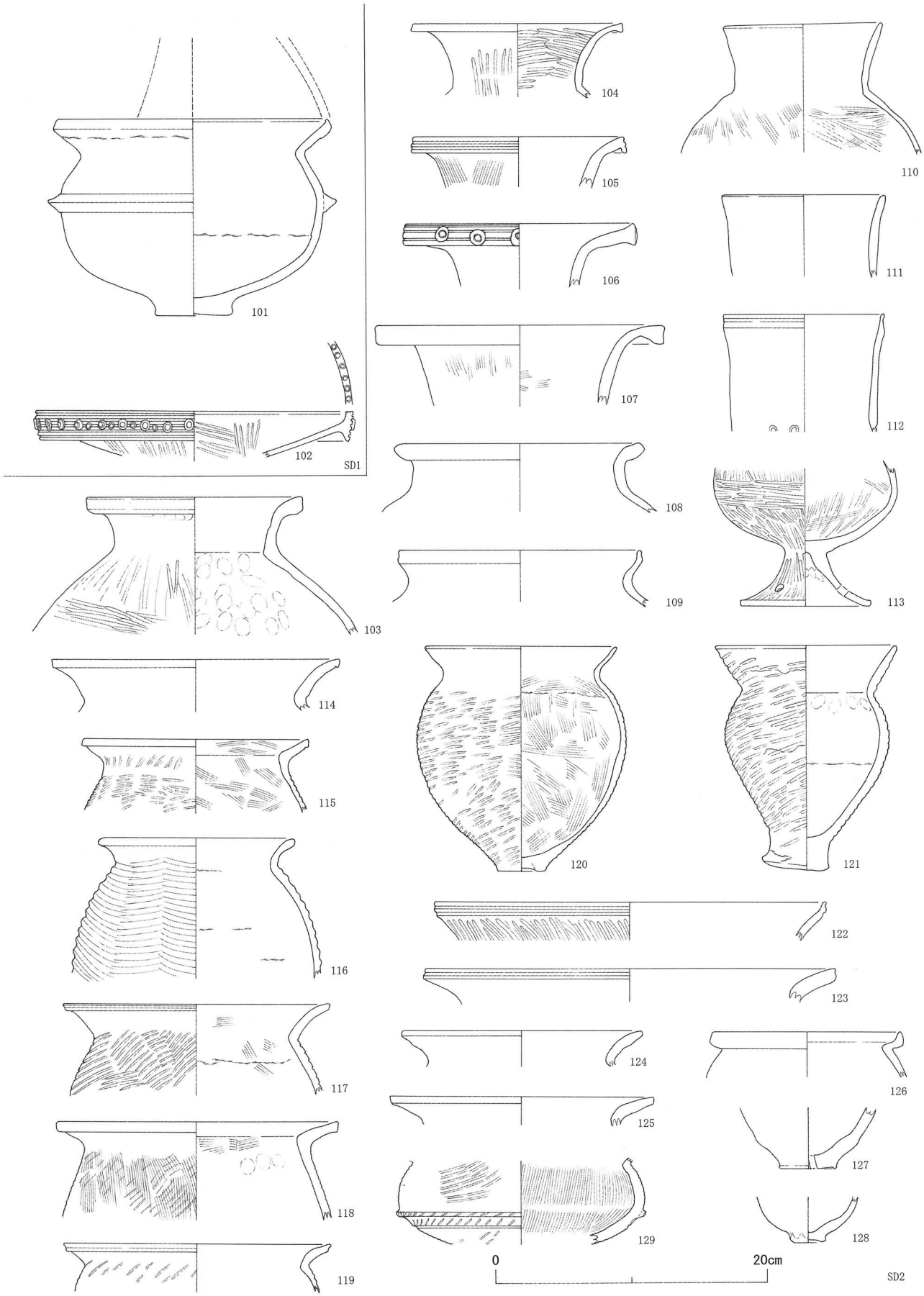
128 はミニチュア土器である。甕と思われる。外面はナデ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。非河内産。

129 は手焙型土器である。体部は膨らみ気味にやや内傾する。底部と胴部の境に刻み目を施した凸帯を貼り付け、さらにその下に刻み目を施す。外面はタタキメ後ナデ調整する。内面はハケメ調整する。非河内産。

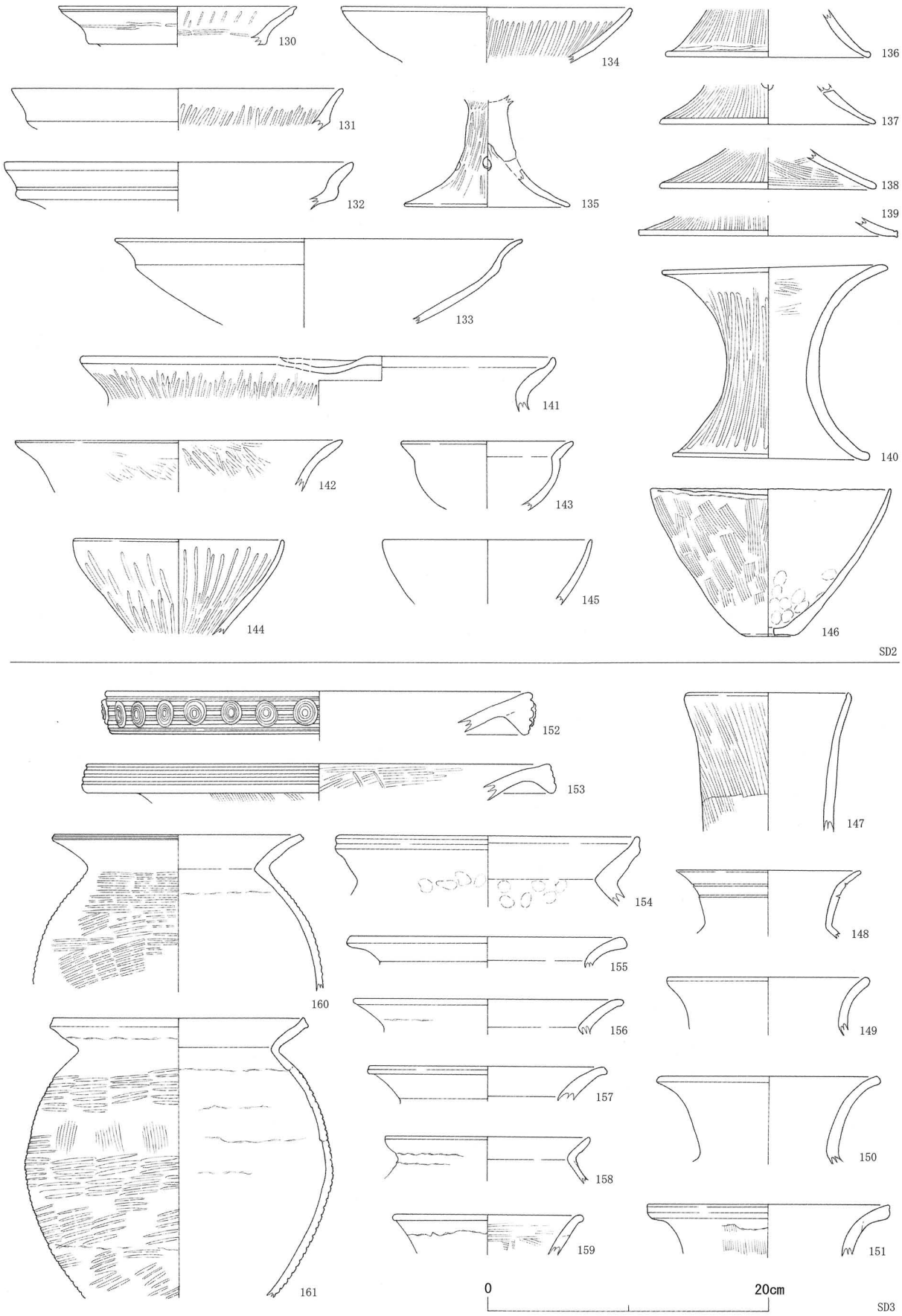
130～139 は高杯である。130～134 は杯部である。130～133 は外方に広がる体部からさらに外反する口縁部を持つ。口縁部と体部の境に稜を持つ。口縁端部は丸く終わる。130 は内外面共にヘラミガキ調整する。131 は外面の風化が著しく調整法は不明である。内面はヘラミガキ調整する。132・133 は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。134 は浅い椀形を呈する。外面はナデ調整する。内面はヘラミガキ調整する。135～139 は脚部である。135～138 はなだらかに「ハ」の字形に広がる裾部を持つものと、ラッパ状に大きく広がる裾部を持つものがある。外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整するものもあるが、風化が著しく調整法は不明なものが多い。135 は 4 方向の円形透かし孔を穿つ。137 は円形透かし孔が 1 方向残存する。132 は生駒西麓産。その他は非河内産。

140 は器台である。口縁部・裾部がラッパ状に開き、中央部の狭い鼓胴形で中空をなす。裾部から受皿口縁部までなだらかなカーブを描く。内外面共にヘラミガキ調整する。生駒西麓産。

141～146 は鉢である。141～143 は口縁部が外反する。141 は外反した後上方へ伸びる。口縁端部が丸味を持つ。外面はヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。142 は口縁端部が尖る。内外面共にヘラミガキ調整する。143 は口縁端部が丸味を持つ。内外面共にはナデ調整する。外面には黒斑がみられる。144～146 は口縁部が直口する。144・145 は口縁端部が丸味を持つ。144 は内外面共にヘラミガキ調整する。145 は外面をナデ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。146 は口縁端部を打ち欠いたまま終わり、底部に孔を穿つ。外面はハケメ調整する。内面



第 12 図　SD1・SD2 出土土器実測図



第 13 図　SD2・SD3 出土土器実測図

はナデ調整する。体部下半に指頭圧痕が顕著に残る。外面には黒斑がみられる。143・145 は生駒西麓産。その他は非河内産。

SD3 出土土器（第 13～14 図　147～173）

長頸壺・広口壷・甕・高杯・器台・鉢の器種がある。

147 は長頸壺である。口縁部が直線的に外方に伸びる。外面はハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産。

148～154 は広口壷である。148・149 は口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。148 は頸部外面に２条の凹線文を施す。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。149 は内外面共にナデ調整する。150・151 は口縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。150 は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。151 は外面をハケメ調整する。内面はナデ調整する。152・153 は口縁部が大きく外反し口縁端部を下方へ拡張する。152 は口縁端部に４条の凹線文を施し、竹管文のある円形浮文を貼り付ける。内面は風化が著しく調整法は不明である。153 は口縁端部に３条の凹線文を施す。外面はハケメ調整する。内面はヘラミガキ調整する。外面には黒斑がみられる。154 は口縁部が大きく外反し、口縁端部は屈曲して内弯気味に立ち上がる。内外面共にナデ調整する。指頭圧痕が残る。

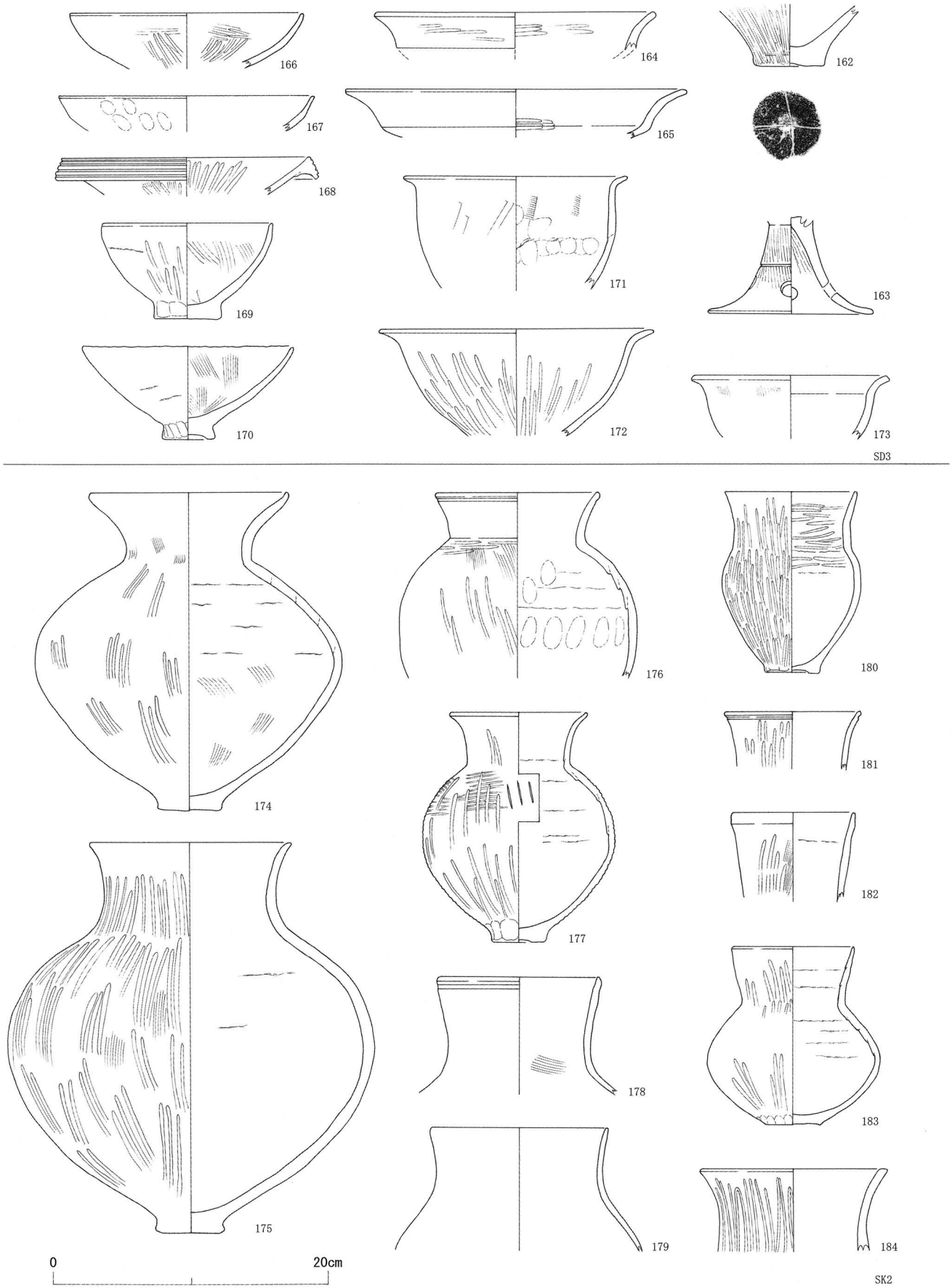
155～161 は甕である。155・160 は口縁端部が面を持つ。外面はナデ調整、あるいはタタキメを施す。内面はナデ調整する。156・158 は口縁端部が丸味を持つ。内外面共にナデ調整する。157 は口縁端部が凹む。内外面共にナデ調整する。159 は口縁端部を下方へ肥厚する。外面はナデ調整する。外面はハケメ調整する。160 は口縁端部が凹む。外面はタタキメを施す。内面は風化が著しく調整法は不明である。161 は口縁端部を上方に拡張もしくは摘み上げる。外面はタタキメ後ハケメ調整する。内面はナデ調整する。外面には煤が付着する。148・150・151・154・156 は非河内産。その他は生駒西麓産。

162 は底部である。壷または甕と思われる。外面はハケメ後ヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。底部にヘラによる十字状の線刻を施す。生駒西麓産。

163～167 は高杯である。163 は脚部である。ラッパ状に大きく広がる裾部を持つ。外面はヘラミガキ調整する。内面はシボリメ、ナデ調整する。脚部に４方向の円形透かし孔を穿つ。164～167 は杯部である。164・165 は外方に広がる体部からさらに外反する口縁部を持つ。口縁部と体部の境に稜を持つ。口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。164 は内外面共にヘラミガキ調整する。165 の外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はヘラミガキ調整する。166・167 は浅い椀形を呈する。166 は内外面共にヘラミガキ調整する。167 は外面をナデ調整する。指頭圧痕が残る。内面は風化が著しく調整法は不明である。164・165 は生駒西麓産。その他は非河内産。

168 は器台である。口縁部を下方へ拡張し、口縁部端面に４条の凹線文を施す。外面はハケメ後ヘラミガキ調整、内面はヘラミガキ調整する。非河内産。

169～173 は鉢である。169・170 は口縁部が直口する。169 は口縁端部が丸味を持ち、底部が平底である。外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。170 は口縁端部を打ち欠いたまま終わり、底部は上げ底気味である。外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はハケメ調整する。171～173 は口縁部が外反する。171・172 は口縁端部が丸味を持つ。171 は外面を板状工具によるナデ調整する。内面はハケメ後ナデ調整する。指頭圧痕が残る。172 は内外面共にヘラミガキ調整する。173 口縁端部が面を持つ。外面はハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。169・171 は生駒西麓産。その他は非河内産。



第 14 図　SD3・SK2 出土土器実測図

SK2 出土土器（第 14～16 図　174～211）

広口壷・短頸壺・長頸壺・甕・ミニチュア土器・甕蓋・高杯・鉢・鉢把手の器種がある。

174～177・184 は広口壷である。174・177 は外方に開く頸部から、屈曲して内弯気味に立ち上がる口縁部を持つ。174 は外面体部をハケメ後ヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。外面には黒斑がみられる。177 は体部に 3 条からなる線刻がある。外面はタタキメ後ヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。175・176・184 は口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。175 は外面をハケメ後ヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。外面には黒斑がみられる。176 は外面をハケメ後ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。184 は外面をヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。外面には黒色塗料が付着する。176 は生駒西麓産。その他は非河内産。

178・179・183 は短頸壺である。178・179 は口縁部が僅かに外反する。178 は口縁端部に 1 条の凹線文を施す。外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はハケメ調整する。179 は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。183 は口縁部が直線的に外傾する。外面はヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。179 は生駒西麓産。その他は非河内産。

180～182 は長頸壺である。180・181 は直立に立ち上がる頸部から口縁部が屈曲し外方にひろがる。180 は内外面共にヘラミガキ調整する。外面には煤が付着する。181 は口縁端部に 1 条の凹線文を施す。外面はヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。182 は直線的に外方に伸びる。外面はハケメ後ヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。182 は非河内産。その他は生駒西麓産。

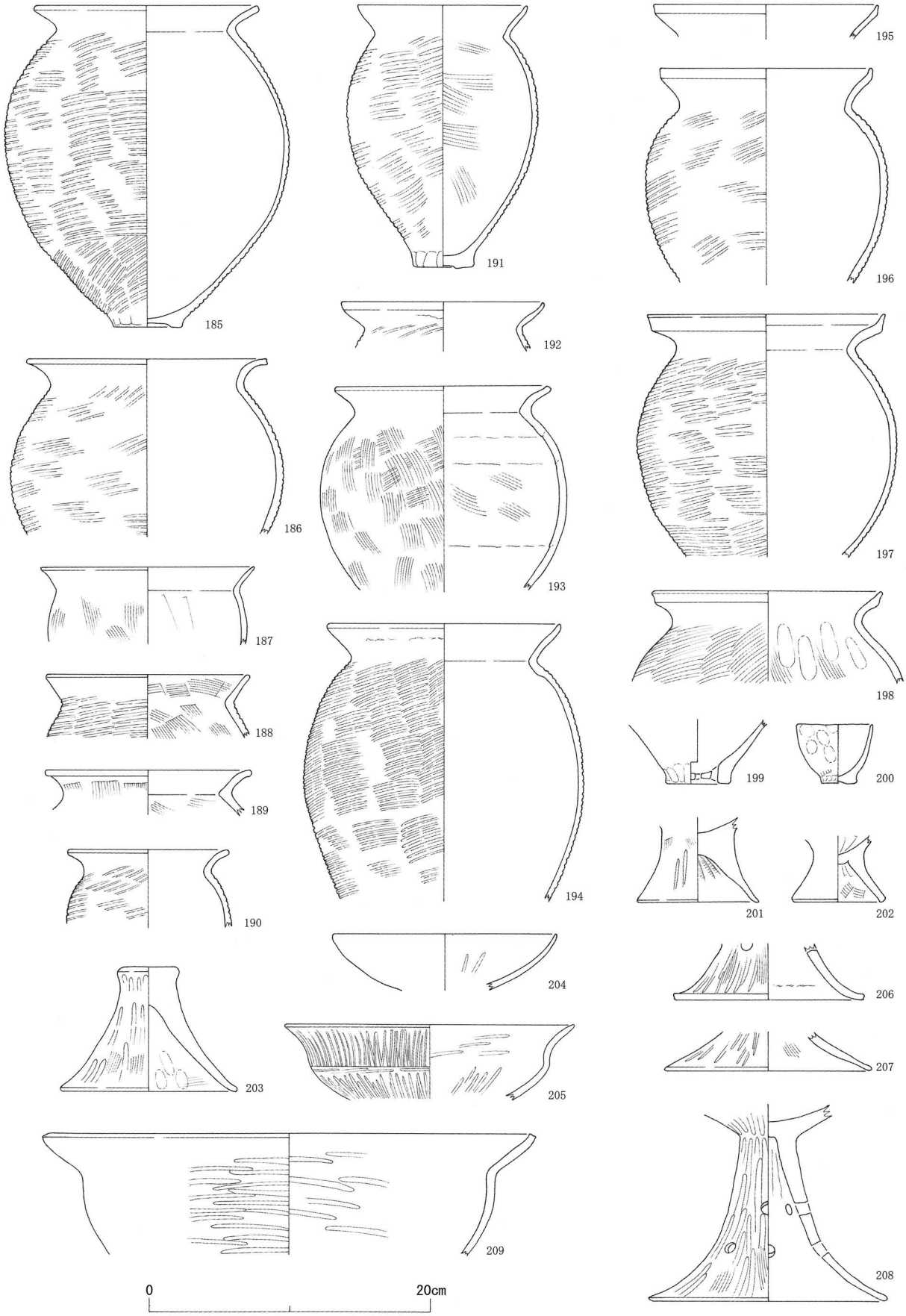
185～198 は甕である。185・186 は口縁端部に面を持つ。外面はタタキメ後ナデ調整する。内面はナデ調整する。185 は外面に煤が付着する。187・188・190 は口縁端部が丸味を持つ。187 は外面をハケメ調整する。内面は板状工具によるナデ調整する。188 は外面にタタキメを施す。内面はハケメ調整する。190 は外面タタキメを施す。内面はナデ調整する。189 は口縁端部を下方へ肥厚する。内外面共にハケメ調整する。191～198 は口縁端部を上方に拡張もしくは摘み上げる。191～197 の外面はタタキメ後ナデ調整、あるいはタタキメ後ハケメ調整するものが多い。内面はハケメ後ナデ調整するものもあるが、風化が著しく調整法は不明なものが多い。191・193 は外面に煤が付着する。198 は外面を幅の広いハケメ調整する。内面はハケメ後ナデ調整する。外面には煤が付着する。口縁部の屈曲は弱いが東海系の S 字状口縁土器に類似する。186・188・196 は生駒西麓産。その他は非河内産。

199 は底部である。199 は甕または壷と思われる。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。底部に 2 方向の孔を穿つ。201・202 は脚台部である。裾部が急に立ち上がり、裾端部が面を持つものと丸く終わるものがある。201 は外面をハケメ後ヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。202 の外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はハケメ調整する。199・201 は非河内産。その他は生駒西麓産。

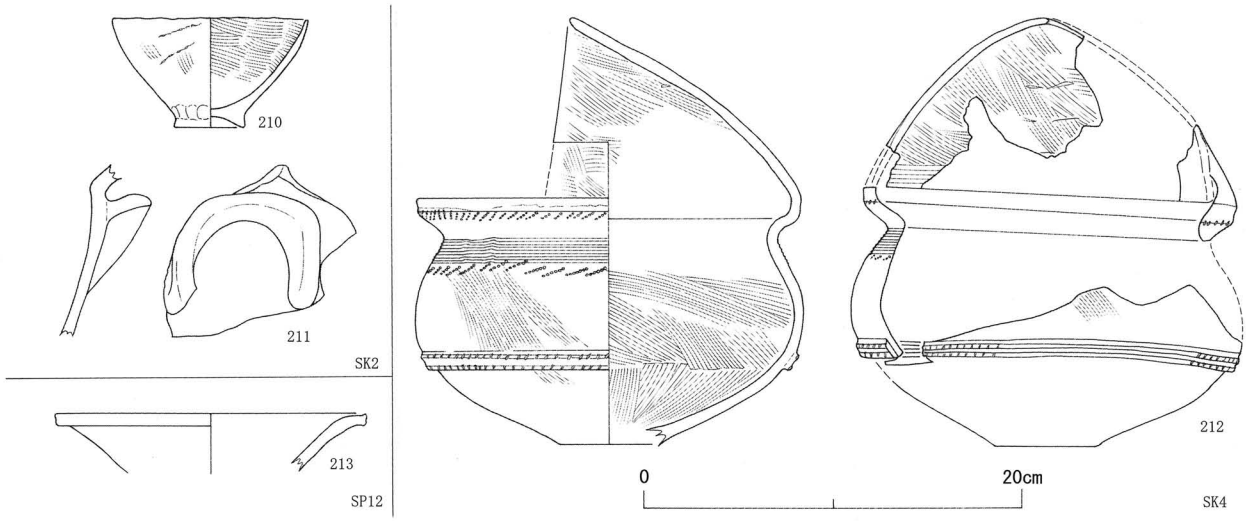
200 はミニチュア土器鉢である。外面はナデ調整する。指頭圧痕が残る。内面は風化が著しく調整法は不明である。外面には黒斑がみられる。生駒西麓産。

203 は甕蓋である。外面はハケメ後ヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。指頭圧痕が残る。内面には黒斑がみられる。非河内産。

204～208 は高杯である。204・205 は杯部である。204 は浅い椀形を呈する。外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はヘラミガキ調整する。205 は外方に広がる体部からさらに外反する口縁部を持つ。口縁部と体部の境に稜を持つ。口縁端部は面を持つ。内外面共にヘラミガキ調整する。外



第 15 図　SK2 出土土器実測図



第 16 図　SK2・SK4・SP12 出土土器実測図

面には黒斑がみられる。206～208 は脚部である。ラッパ状に大きく広がる裾部を持つものとなだらかに「ハ」の字形に広がる裾部を持つものがある。外面はヘラミガキ調整、あるいはハケメ後ヘラミガキ調整する。内面はナデ調整、あるいはハケメ調整する。206 は円形透かし孔が 1 方向残存する。208 は脚部に 2 段に 3 方向からなる円形透かし孔を穿つ。204・207 は非河内産。その他は生駒西麓産。

209・210 は鉢である。209 は口縁部が外反する。口縁端部が面を持つ。内外面共にヘラミガキ調整する。外面には黒斑がみられる。210 は口縁部が直口する。口縁端部は打ち欠いたまま終わり、底部は上げ底気味である。内外面共にハケメ調整する。生駒西麓産。

211 は鉢把手である。口縁部直下に、逆「U」字形に曲げる。外面はナデ調整、内面はヘラミガキ調整する。内面には煤が付着する。非河内産。

SK4 出土土器（第 16 図　212）

212 は手焙型土器である。口縁部が受口状を呈し、体部は膨らみ気味にやや内傾する。底部と胴部の境に上下に刻み目を施した凸帯を貼り付ける。覆部の頂部はやや尖り気味である。口縁部下端に列点文、胴部上半に直線文と列点文を施す。内外面共にハケメ調整する。外面には黒斑がみられる。非河内産。

SP12 出土土器（第 16 図　213）

213 は広口壷である。口縁端部を上方へ摘み上げ拡張する。口縁端部は面を持つ。内外面共にナデ調整する。外面には煤が付着する。非河内産。

②包含層出土土器

第 1～4・5・5～7・7 層より土器は出土した。各層に分けて説明を記す。

第 1～4 層出土土器（第 17 図　214～220）

高杯・甕・鉢の器種がある。

214・215 は甕である。口縁端部を上方に拡張もしくは摘み上げる。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。214 は非河内産。215 は生駒西麓産。

216・217 は高杯脚部である。なだらかに「ハ」の字形に広がる裾部を持つ。216 は外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はハケメ調整する。217 は内外面共にハケメ調整する。216 は非河内産。217 は生駒西麓産。

218・219 は底部である。甕と思われる。底部に孔を穿つ。218 は外面はタタキメを施す。内面は風化が著しく調整法は不明である。219 の外面はタタキメ後ハケメ調整する。内面はハケメ調整する。非河内産。

220 は鉢である。口縁部が直口する。口縁端部が丸味を持つ。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。生駒西麓産。

第 5 層出土土器（第 17 図　221・222）

広口壷・甕の器種がある。

221 は広口壷である。口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。非河内産。

222 は甕である。口縁部が外反し、口縁端部が丸味を持つ。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。非河内産。

第 5～7 層出土土器（第 17 図　223～229）

甕・広口壷・高杯の器種がある。

223～225 は甕である。223・225 は口縁端部が面を持つ。223 は内外面共にナデ調整する。225 の外面はハケメ調整する。内面はナデ調整する。224 は口縁端部を下方へ肥厚する。内外面共にナデ調整する。225 は生駒西麓産。その他は非河内産。

226～228 は広口壷である。226・227 は口縁部が大きく外反し口縁端部は面を持つ。226 は口縁端部に 3 条の凹線文を施し、竹管文のある円形浮文を貼り付ける。口縁部内面には波状文を施す。内外面はナデ調整する。227 は口縁端部に竹管文を施す。外面はナデ調整する。内面はヘラミガキ調整する。228 は口縁部が大きく外反し口縁端部は下方へ拡張する。内外面共にナデ調整する。生駒西麓産。

229 は高杯である。外方に広がる体部からさらに外反する口縁部を持つ。口縁部と体部の境に稜を持つ。口縁端部は丸く終わる。内外面共にヘラミガキ調整する。非河内産。

第 7 層出土土器（第 17～19 図　230～278）

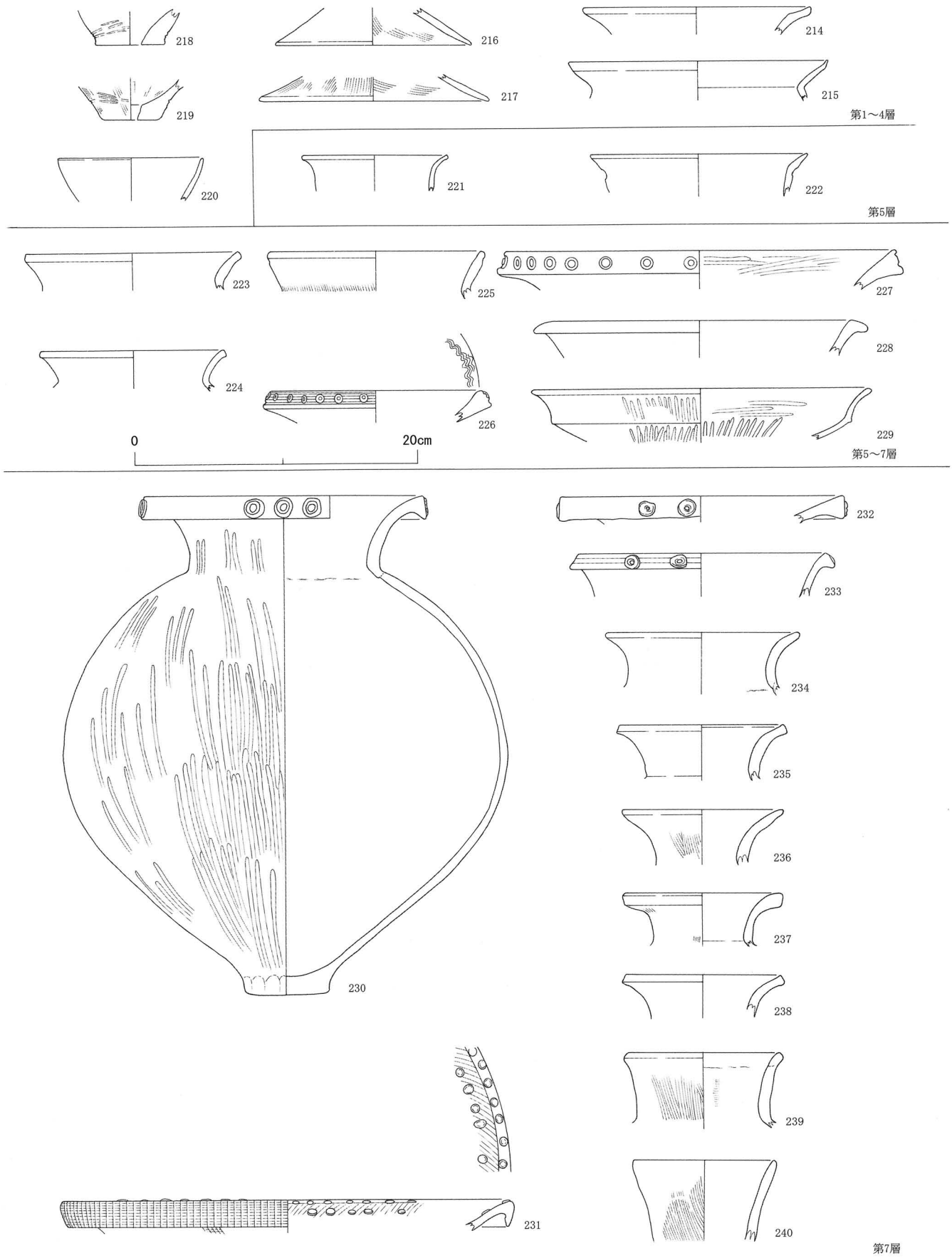
広口壷・短頸壺・長頸壺・甕・高杯・鉢・ミニチュア土器の器種がある。

230～238 は広口壷である。230～233 は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。230 は口縁端部に 3 個 1 単位の竹管文のある円形浮文を貼り付ける。外面はヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。外面には黒斑がみられる。231 は口縁部外面と体部に簾状文を施す。口縁端部内面にも簾状文を施し、その上に二重に円形浮紋を貼り付ける。外面はハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。232・233 は口縁端部に竹管文のある円形浮文を貼り付ける。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。234・236 は口縁部が大きく外反し、口縁端部は丸く終わる。外面はハケメ調整やナデ調整する。内面はナデ調整する。235・237・238 は口縁部が大きく外反し口縁端部は面を持つ。外面はナデ調整やハケメ後ナデ調整する。内面はナデ調整するものもあるが風化が著しく調整法は不明なものが多い。233・236・238 は非河内産。その他は生駒西麓産。

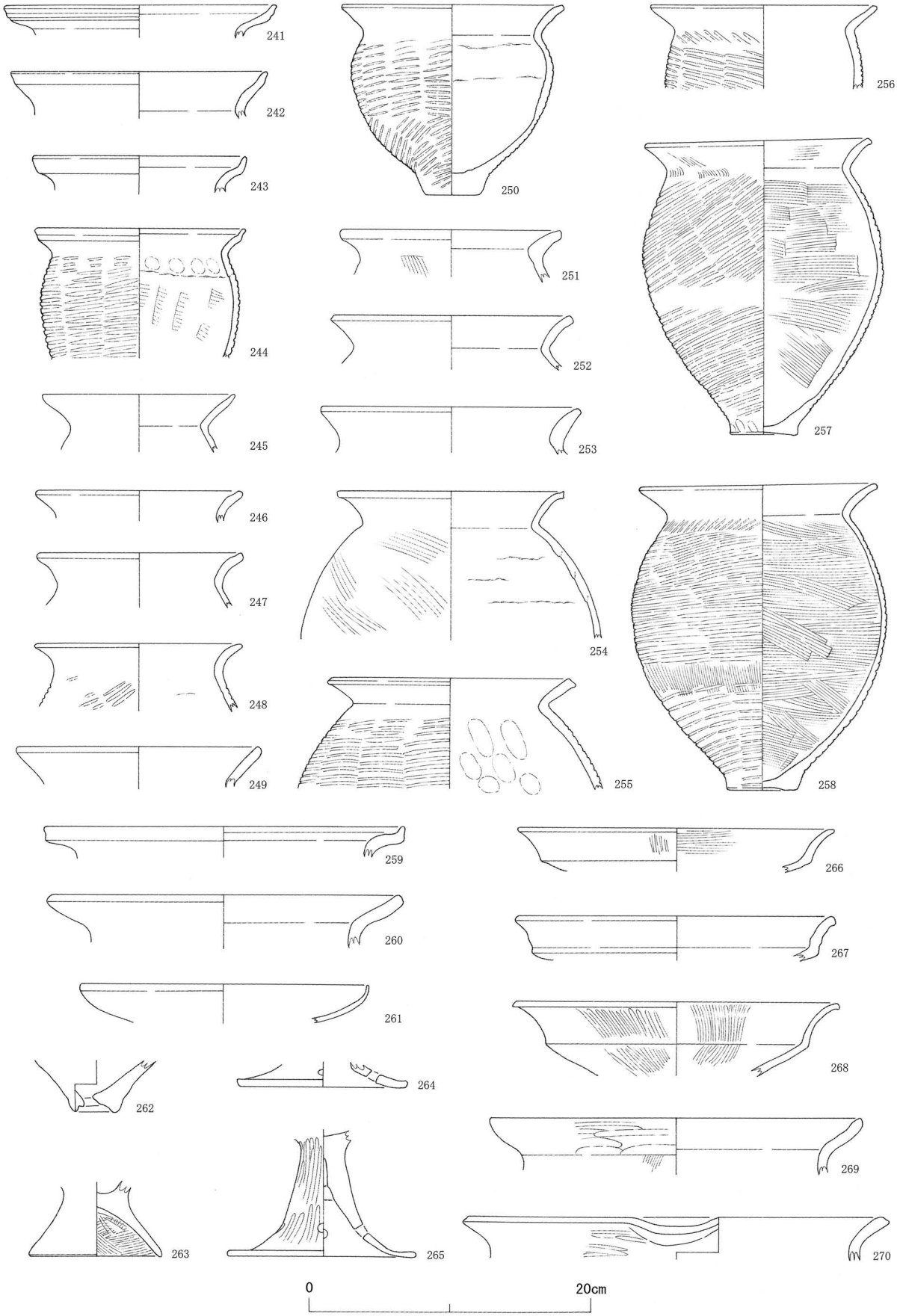
239 は短頸壺である。直立に立ち上がる頸部から口縁部が外折する。内外面はハケメ調整する。非河内産。

240 は長頸壷である。直線的に外方に伸びる。口縁端部は丸く終わる。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。外面には黒斑がみられる。非河内産。

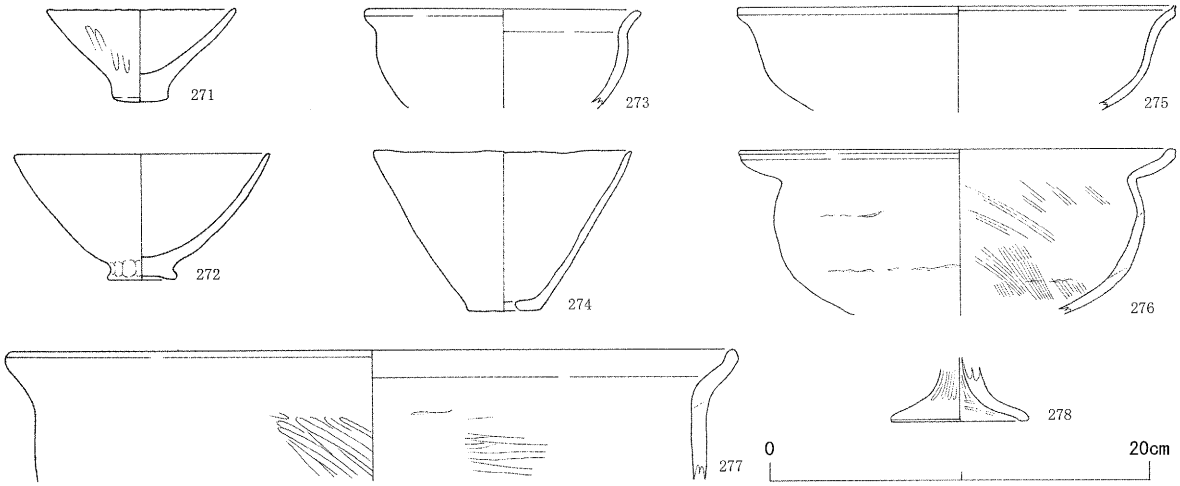
241～260 は甕である。241～245・259・260 は口縁端部を上方に拡張もしくは摘み上げる。外面はナデ調整やタタキメを施す。内面はナデ調整やハケメ調整する。241 は口縁端部に 2 条の凹線文を施す。244 は指頭圧痕が残る。260 は鉢の可能性もある。246・247・249～253・257 は口縁端部が面



第17図　第1～4層、第5層、第5～7層、第7層出土土器実測図



第 18 図　第 7 層出土土器実測図(1)



第 19 図　第 7 層出土土器実測図(2)

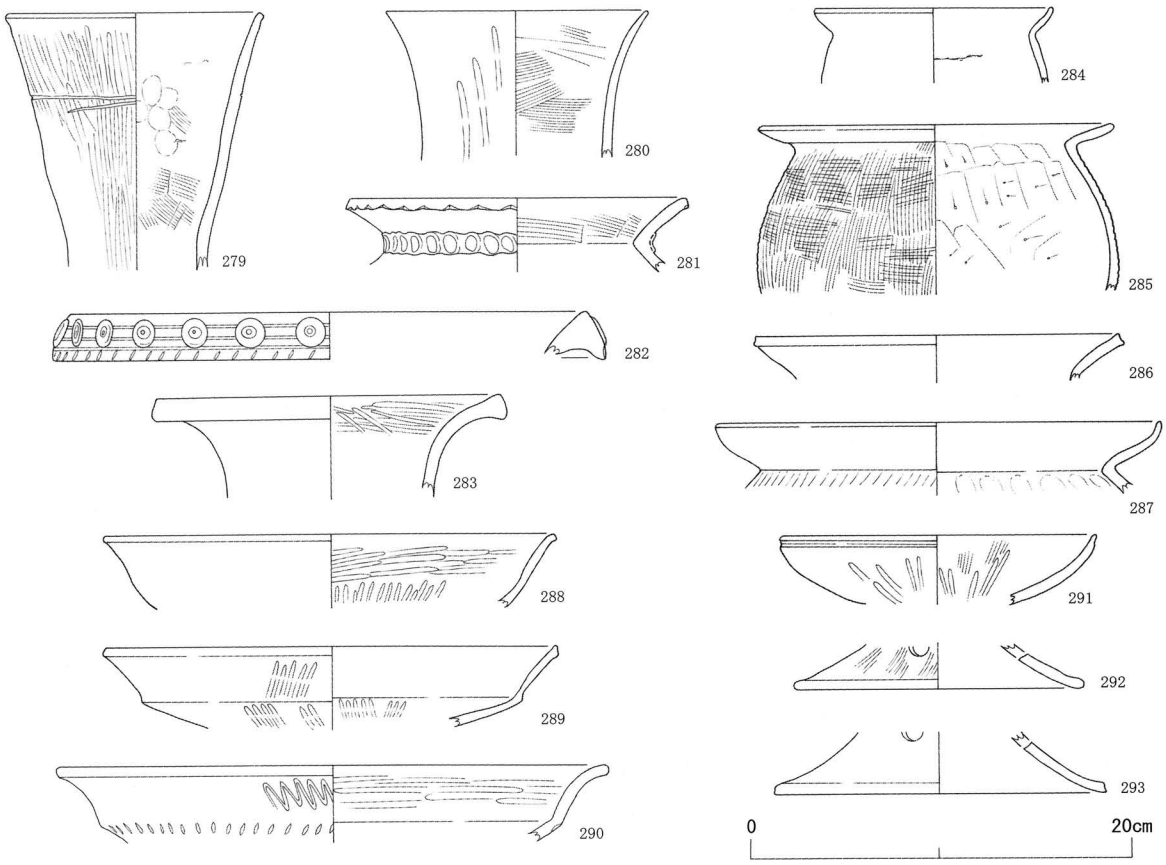
を持つ。246・247・249～253 は外面をナデ調整やハケメ調整やタタキメを施す。内面はナデ調整する。257 は体部外面にタタキメを施す。頸部はハケメ後ナデ調整する。内面はハケメ調整する。外面には煤が付着する。248・256・258 は口縁端部が丸味を持つ。外面はタタキメ、あるいはタタキメ後ナデ調整、あるいはタタキメ後ハケメ調整する。内面はナデ調整、あるいはハケメ調整する。258 は外面に煤が付着する。254 は口縁部が外反し、口縁端部を下方へ肥厚する。外面はハケメ後ナデ調整する。内面は風化か著しく調整法は不明である。外面には煤が付着する。255 は口縁端部が凹む。外面はタタキメ後ナデ調整する。内面はナデ調整する。指頭圧痕が残る。外面には黒斑がみられる。241・242・244・246・248・249・253・255・259 は非河内産。その他は生駒西麓産。

262 は底部である。壷または鉢と思われる。底部に孔を穿つ。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。外面には黒斑がみられる。生駒西麓産。

263 は脚台部である。内湾気味に立ち上がり、裾端部は丸く終わる。外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はハケメ調整する。前述のＳＫ２出土の東海系Ｓ字状口縁甕(198)と胎土が類似することから同一個体と思われる。非河内産。

261・264～268 は高杯である。261・266～268 は杯部である。261 は口縁部がやや内湾気味に立ち上がり、浅い椀状を呈する。口縁端部は丸く終わる。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。266～268 は外方に広がる体部からさらに外反する口縁部を持つ。口縁部と体部の境に稜を持つ。口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。266・268 は内外面共にヘラミガキ調整する。268 は口縁端部内面にリング状の煤が付着していることから甕蓋への転用品とも考えられる。267 は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。264・265 は脚部である。ラッパ状に大きく広がる裾部を持つ。264 は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。円形透かし孔が 1 方向残存する。265 は外面をヘラミガキ調整する。内面はナデ調整する。脚部に４方向の円形透かし孔を穿つ。265・266・268 は非河内産。その他は生駒西麓産。

269～277 は鉢である。269・270・273・275～277 は口縁部が外反する。269・276・277 は外反した後上方へ伸びる。口縁端部が丸味を持つ。269 は外面をハケメ後ヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。276 は外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はハケメ後ナデ調整する。277 は内外面共にヘラミガキ調整する。270・273・275 は口縁端部が面を持つ。外面はヘラミガキ調整するものもあるが風化が著しく調整法は不明なものが多い。内面は風化が著しく調整法



第20図　試掘確認調査出土土器実測図

は不明である。271・272・274は口縁部が直口する。271は口縁端部を打ち欠いたまま終わり、底部が丸味を持つ。外面はヘラミガキ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。272は口縁端部が尖り気味で、底部は上げ底気味である。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。内外面に煤が付着する。274は口縁端部を打ち欠いたまま終わり、底部に孔を穿つ。内外面共に風化が著しく調整法は不明である。269・271・272・277は非河内産。その他は生駒西麓産。

278はミニチュア土器である。高杯脚部である。外面はヘラミガキ調整。内面はシボリメ・板状工具によるナデ調整する。非河内産。

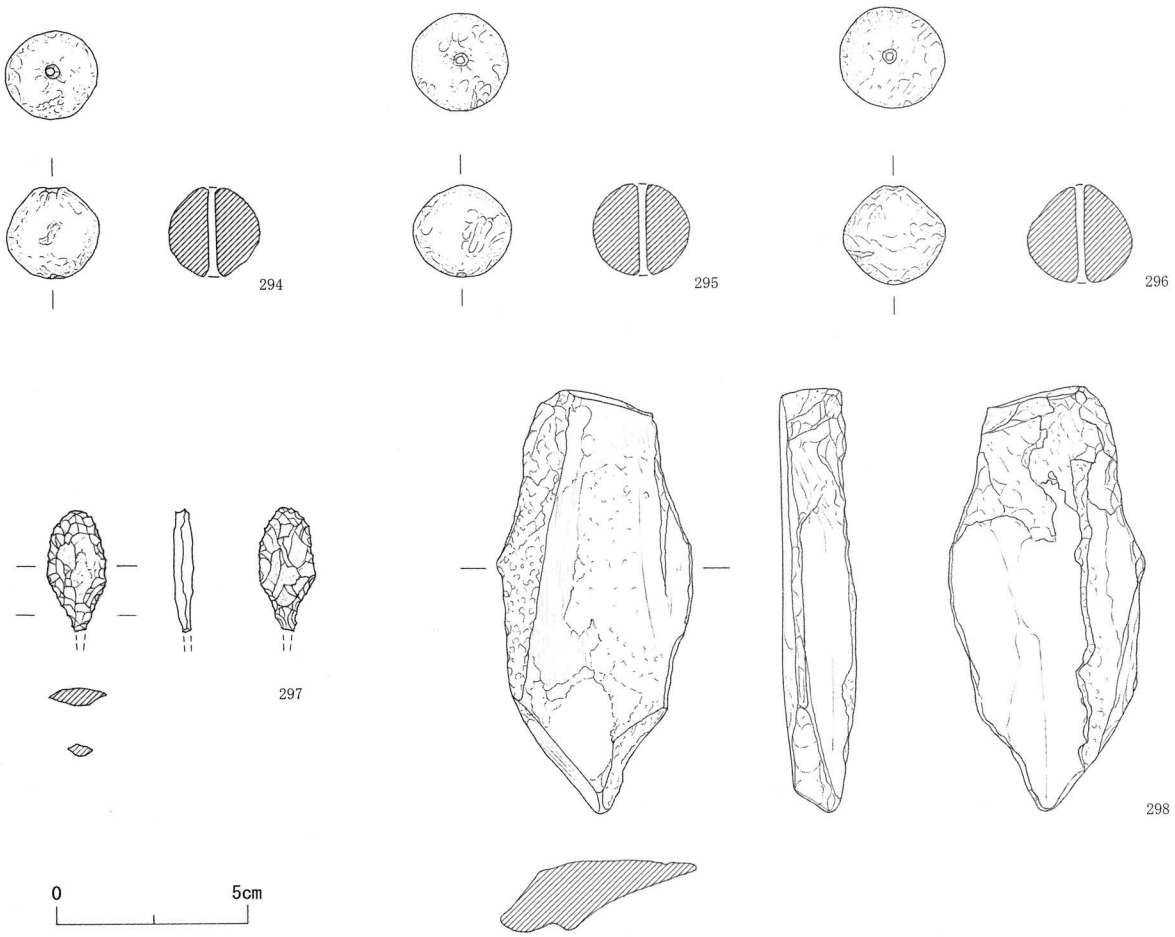
③試掘確認調査出土土器（第20図　279～293）

長頸壺・広口壷・甕・鉢・高杯の器種がある。

279・280は長頸壺である。ラッパ状に外方に開く。279は頸部外面にヘラによる直線文が巡る。外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。指頭圧痕が残る。280は外面をヘラミガキ調整する。内面はハケメ調整する。279は非河内産。280は生駒西麓産。

281～283は広口壷である。281は口縁端部外面に刻み目を施す。頸部と体部境には粘土帯を貼り付けユビオサエを施す。外面はナデ調整する。内面はハケメ調整する。外面には煤が付着する。282・283は口縁部が大きく外反し、口縁端部を下方へ拡張する。282は口縁端部に3条の凹線文を施し、竹管文のある円形浮文を貼り付ける。さらに口縁端部に刻み目を施す。283は外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はヘラミガキ調整する。内面には黒斑がみられる。281は生駒西麓産。その他は非河内産。

284～287は甕である。284・285は口縁端部が丸味を持つ。外面はナデ調整、あるいはタタキメ後ハケメ調整する。内面はナデ調整、あるいはヘラケズリ調整する。外面には煤が付着する。286は口



第21図　土製品・石器実測図

縁部が大きく外反し、口縁端部は面を持つ。外面はナデ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。外面には煤が付着する。287 は口縁端部を上方に拡張もしくは摘み上げる。外面をハケメ調整する。内面はナデ調整する。指頭圧痕が顕著に残る。284・286 は非河内産。その他は生駒西麓産。

288 は鉢である。口縁部は外反し、口縁端部は面を持つ。外面は風化が著しく調整法は不明である。内面はヘラミガキ調整する。生駒西麓産。

289～293 は高杯である。289～291 は杯部である。289～290 は外方に広がる体部からさらに外反する口縁部を持つ。口縁部と体部の境に稜を持つ。口縁端部は丸く終わるものと面を持つものがある。289 は内外面共にヘラミガキ調整する。290 は口縁部と体部の境外面に刻み目を施す。外面はジグザグ状のヘラミガキ調整する。内面はヘラミガキ調整する。291 は浅い椀形を呈する。口縁端部に1条の凹線文を施す。外面はヘラミガキ調整する。内面はハケメ後ヘラミガキ調整する。292・293 は脚部である。なだらかに「ハ」の字形に広がる裾部を持つ。裾端部が面を持つ。292 は外面をハケメ調整する。内面は風化が著しく調整法は不明である。293 は内外面共に風化が著しく調整法は不明である。共に円形透かし孔が1方向残存する。290 は生駒西麓産。その他は非河内産。

(2) 土製品（第21図　294～296）

294～296 は土玉である。296 は算盤形を呈するが、その他は球形を呈し、中央に約 0.2cm の孔を穿つ。外面は丁寧なナデ調整する。径は約 2.4～2.7cm を測る。生駒西麓産。SD1 より出土。

(3) 石器（第21図　297・298）

打製石器と磨製石器がある。

297は石錐である。サヌカイト製で涙滴形を呈する。錐部に欠損があり回転痕はみられない。全体に丁寧な調整剥離を施す。その形態から石鏃の転用と思われる。残存長3.25cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。平井勝氏の分類(平井1991)Ⅱ類に該当する。第7層より出土。

298は砥石である。砂岩を用いる。4面に使用痕が残る。裏面に比熱による黒変がある。長辺16.7cm短辺7.65cm厚さ3.0cmを測る。SD1より出土。

6) まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の大溝、土坑、ピットなどを検出し、おびただしい量の後期後半の弥生土器が出土した。大溝ＳＤ1は、断面観察の結果、マウンド状高まりが人為的に構築されていることが知られた。しかし、主体部が検出されなかったこと、溝内の土器出土状態も多量ながらやや疎らで供献土器とは判断できないことなどから、現状では方形周溝墓の可能性がある大溝としておきたい。第8次調査地すぐ北の第6次調査では竪穴住居跡が検出されている。出土土器の年代観から土器型式上の同時性が強く、同時期に住居と大溝が存在したものと見られる。大庭氏はⅤ期後半に居住域と墓域が近接することを指摘しており(大庭2009)、ＳＤ1を方形周溝墓とすれば、今回の調査例はそのひとつの証左になろう。上小阪遺跡の南に接する新上小阪遺跡でも後期後半の遺構が密に発見されており(財団法人大阪府文化財センター2007)、周辺での調査例の増加が待たれるところである。

【参考文献】

・上小阪遺跡ほか調査報告書

東大阪市遺跡保護調査会1975『上小阪遺跡試掘調査報告書』〔1次〕

東大阪市遺跡保護調査会1976『上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書』〔2次〕

財団法人東大阪市文化財協会1998『上小阪遺跡第3次発掘調査報告書』〔3次〕

財団法人東大阪市文化財協会1992「上小阪遺跡第4次調査」(『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告―1991年度―』〔4次〕

財団法人東大阪市文化財協会1997「上小阪遺跡第5次発掘調査概要」(『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告―1995年度―』〔5次〕

財団法人東大阪市文化財協会2001『上小阪遺跡東端部における弥生時代後期以後の遺構群　共同住宅建設に伴う上小阪遺跡第6次発掘調査報告』〔6次〕

東大阪市教育委員会2007「上小阪遺跡の第7次調査」『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告―平成18年度―』〔7次〕

財団法人大阪府文化財センター2007『新上小阪遺跡Ⅱ』〔大阪府文化財センター調査報告書第166集〕

・論文、著書等

田中清美1996「畿内第Ⅴ様式土器」(大川清・鈴木公雄・工楽善道編『日本土器事典』、雄山閣出版。)

寺沢薫・森岡秀人編1990『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』木耳社

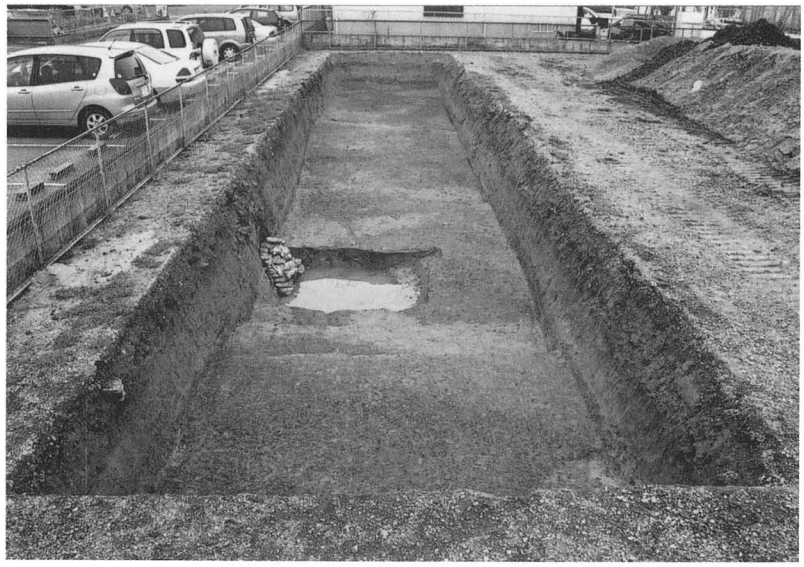
平井勝『弥生時代の石器』(考古学ライブラリー64) 1991ニューサイエンス社

角南聡一郎1997「大阪府下の近江・山城系土器－巨摩遺跡出土の新資料より－」(『大阪文化財研究』12、(財) 大阪府文化財調査研究センター。)

大庭重信2009「近畿地方の弥生時代後期墓制」(埋蔵文化財研究会編『弥生時代後期の社会変化』〔発表要旨・資料集〕。)　および同書

図版1　上小阪遺跡第8次調査　遺構

1　調査前の状況（北から）



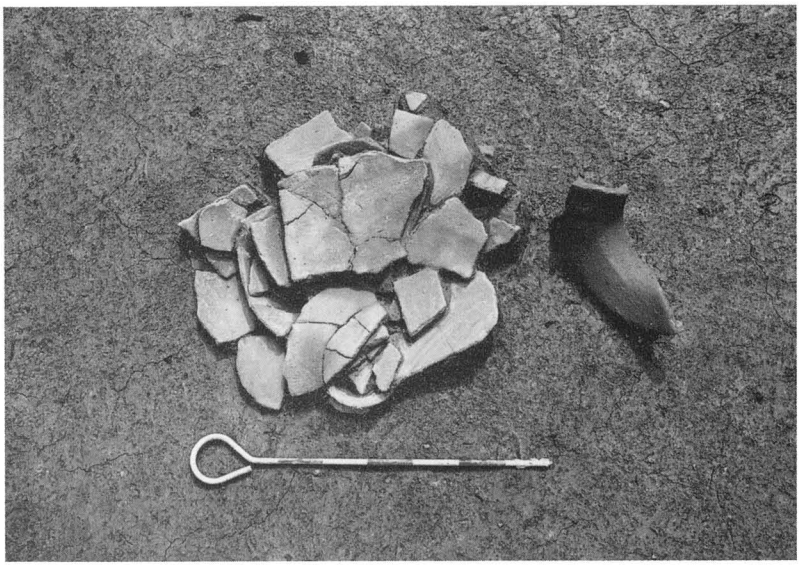
2　第5層・第7層上面検出状況（北から）

3　第5層・第7層上面検出状況（北西から）

図版2　上小阪遺跡第8次調査　遺構

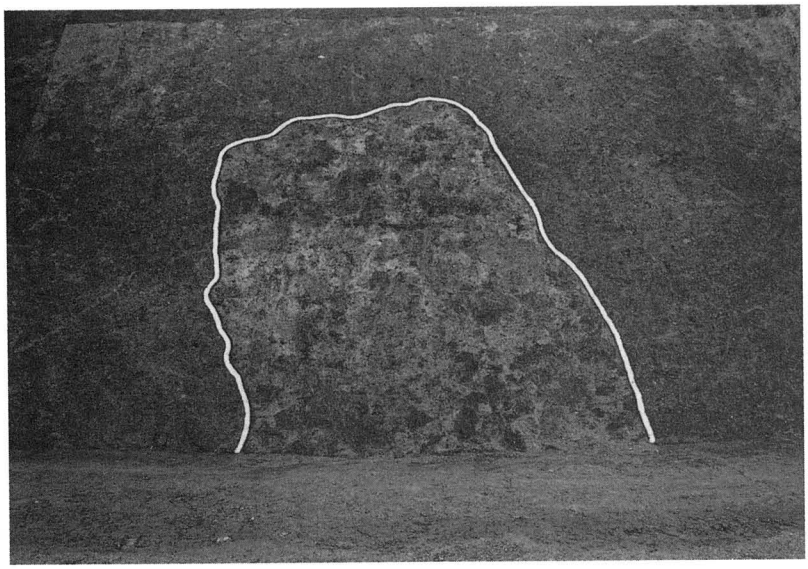
1　第7層内（北側）土器出土状況（南から）

2　第7層内（中央部）土器出土状況（東から）

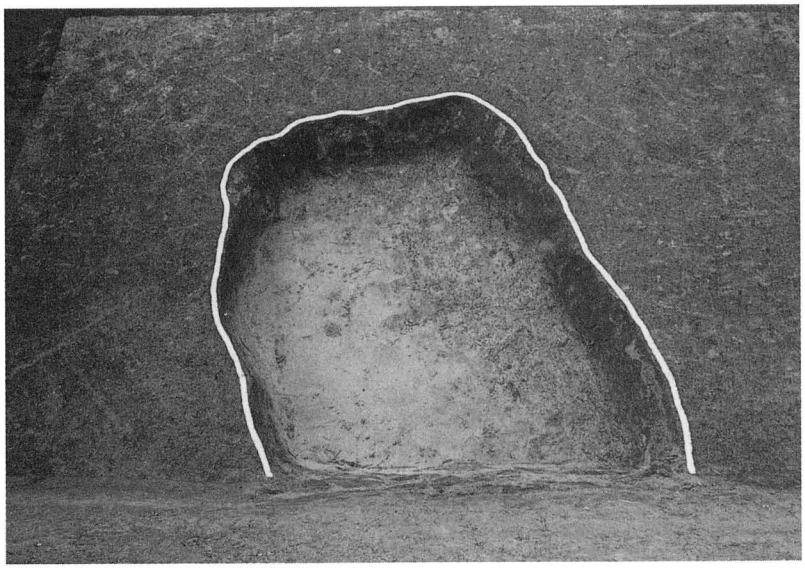


3　第7層内（北側）土器出土状況（東から）

図版3　上小阪遺跡第8次調査　遺構



1　第4D層上面 SK1検出状況（南から）

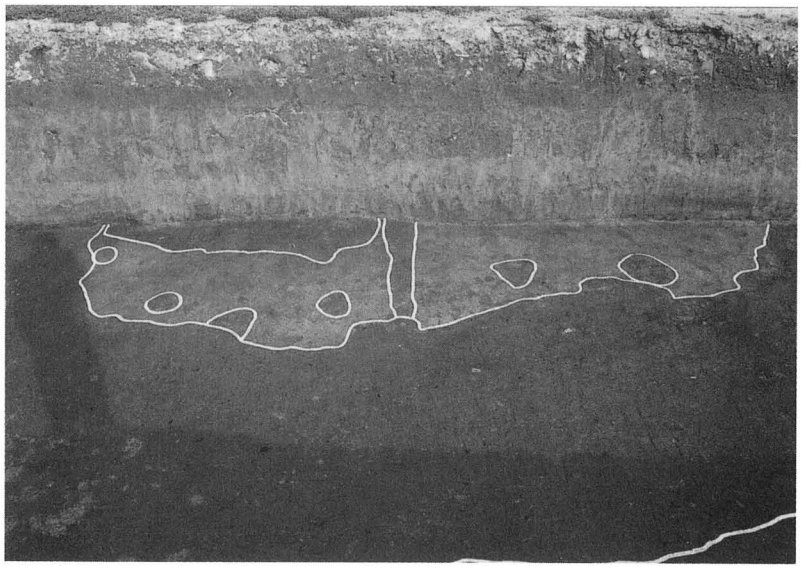


2　第4D層上面 SK1掘削後状況（南から）

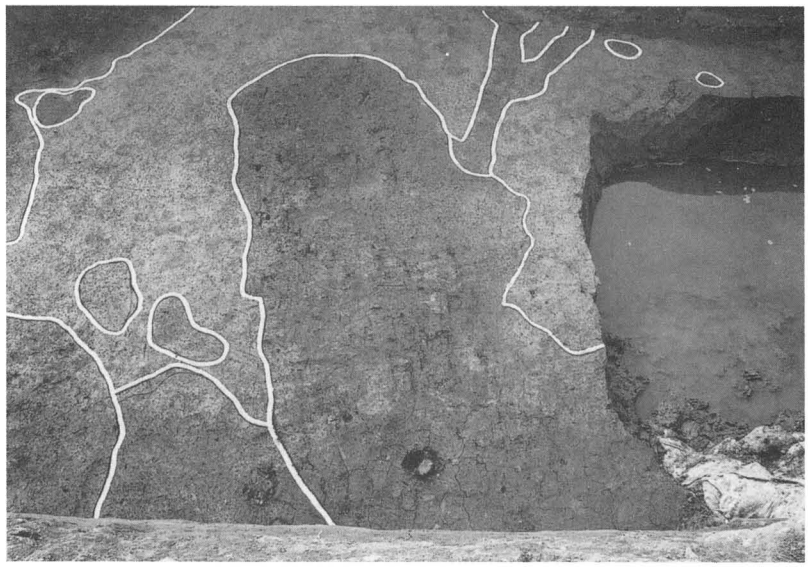
3　第8層上面遺構検出状況全景（北から）

1　第8層上面遺構検出状況［SD2周辺］
（南西から）

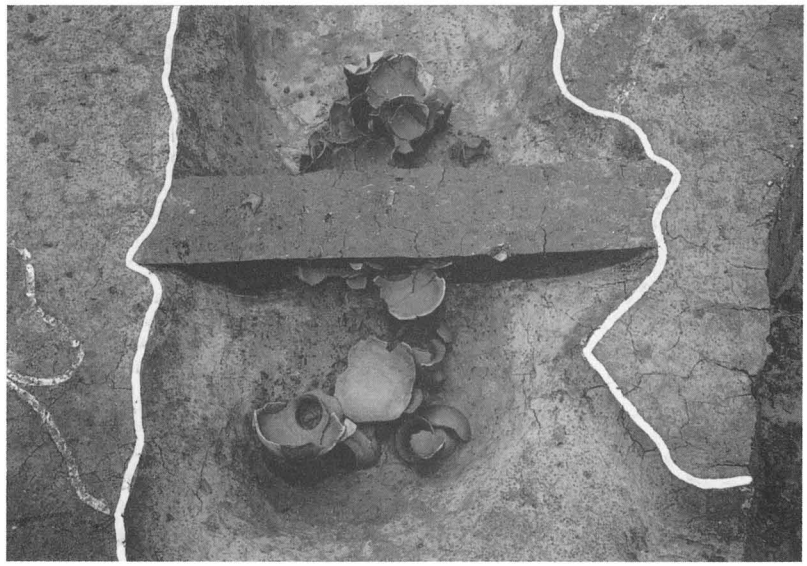
2　第8層上面遺構検出状況［SD1・SD3周辺］
（南西から）



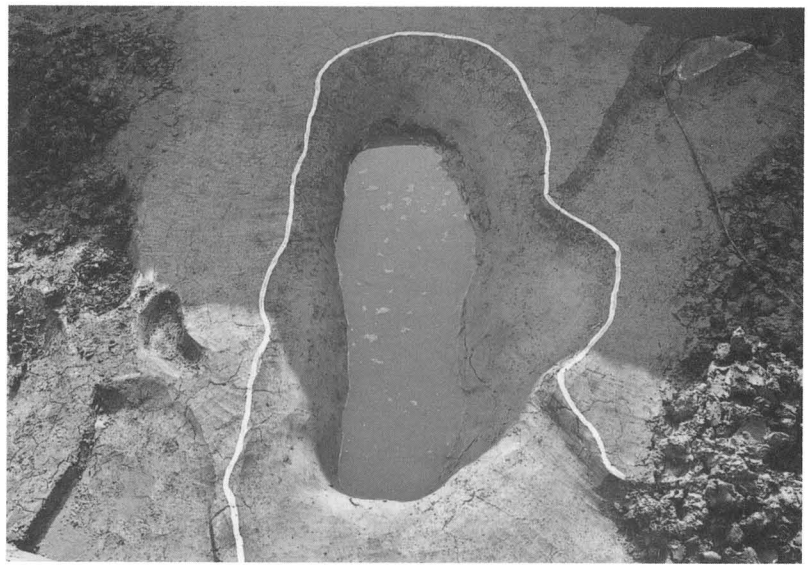
3　第8層上面遺構検出状況［SD1東側周辺］
（西から）



1　SK2周辺検出状況（東から）



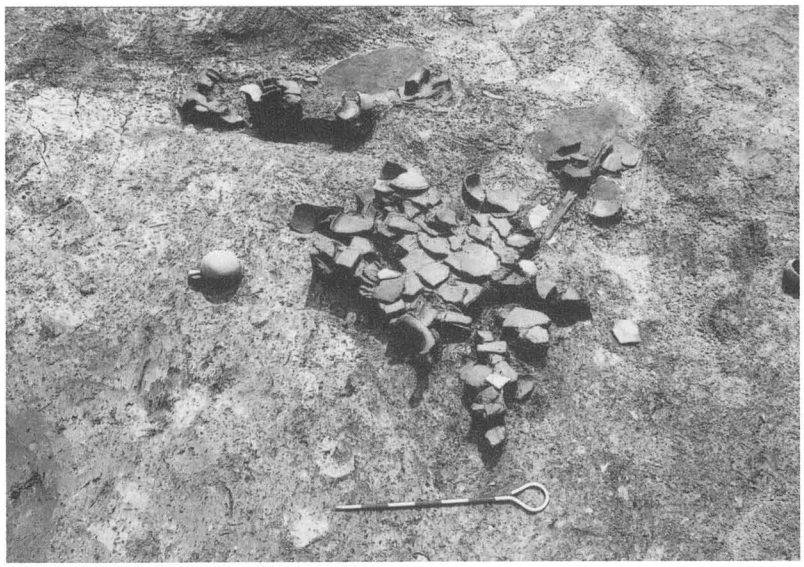
2　SK2内土器出土状況（東から）



3　SK2掘削後状況（東から）

図版6　上小阪遺跡第8次調査　遺構

1　SD1 内土器出土状況［①層上面］（西から）

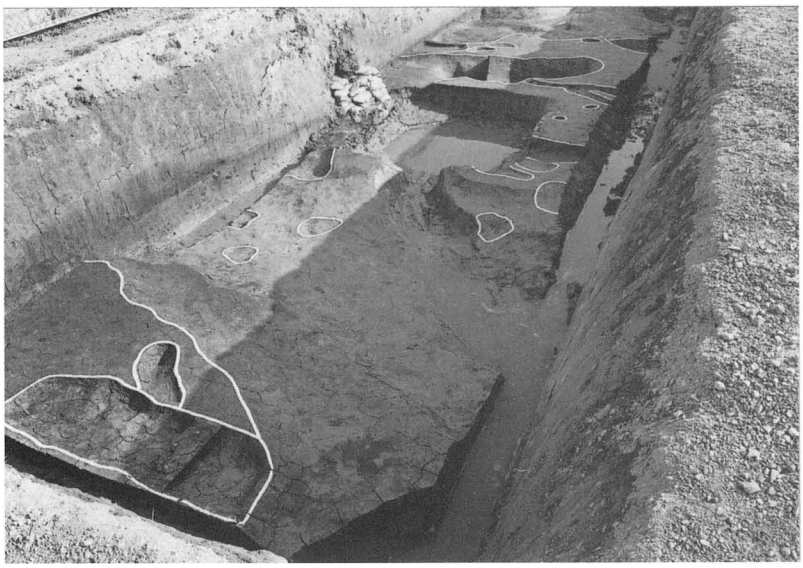


2　SD1 内土器出土状況［①層内］（西から）

3　SD1 内土器出土状況［①層内］（南から）

図版7　上小阪遺跡第8次調査　遺構

1　第8層上面遺構掘削後状況全景(北から)



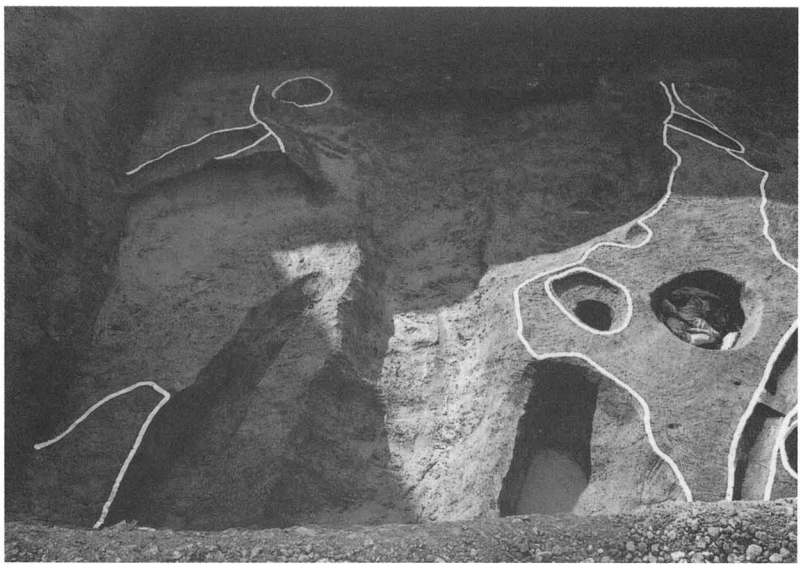
2　第8層上面遺構掘削後状況[SD2周辺]
(北西から)

3　第8層上面遺構掘削後状況[SD2周辺]
(東から)

図版8　上小阪遺跡第8次調査　遺構

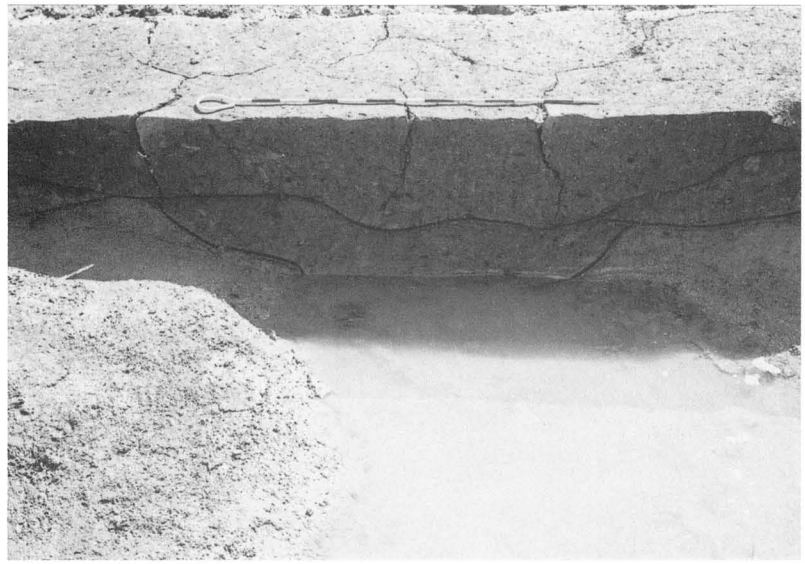
1　第8層上面遺構掘削後状況［SD1 周辺］（北から）

2　第8層上面遺構掘削後状況［SD1 周辺］（南から）



3　第8層上面遺構掘削後状況［SD3 周辺］（西から）

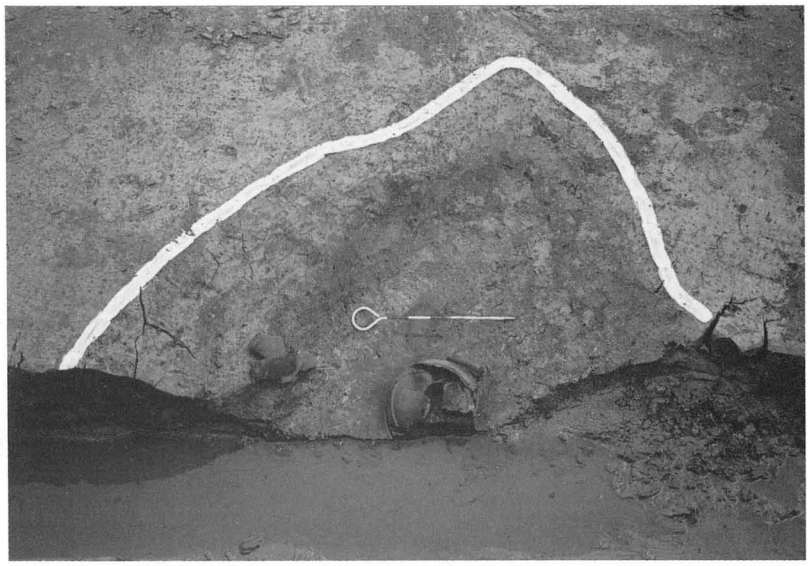
1　SD2内溝状落ちこみ検出状況(西から)



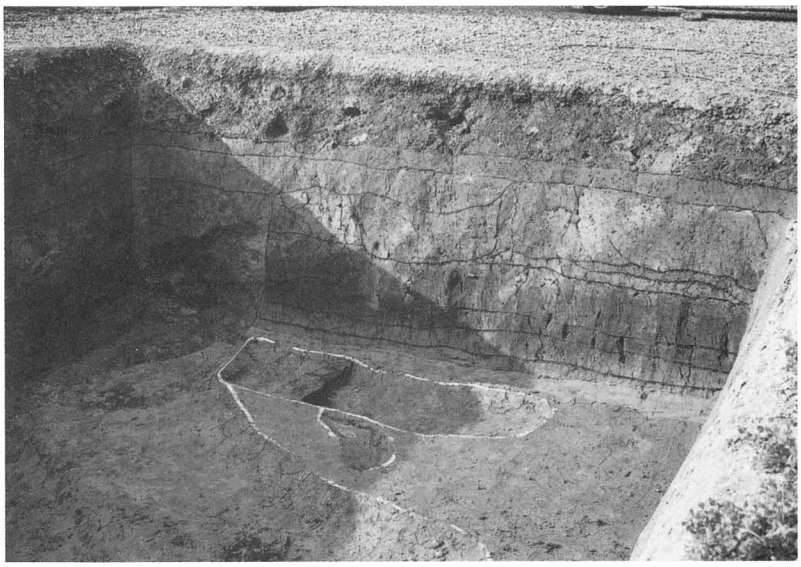
2　SK2 内アゼ断面（西から）

3　SD1 内アゼ断面近景（北から）

図版10　上小阪遺跡第8次調査　遺構



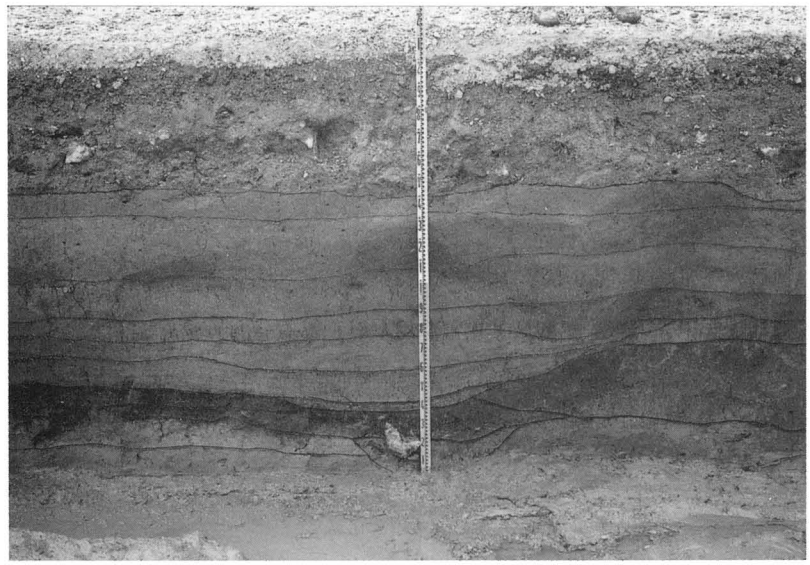
1　SK4 内土器出土状況（西から）



2　トレンチ北壁断面（南から）

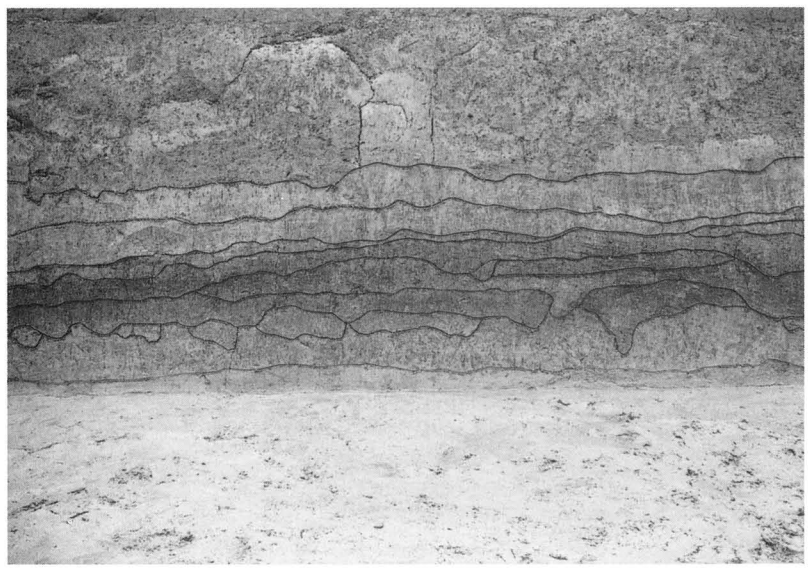
3　トレンチ西壁断面（東から）

図版11　上小阪遺跡第8次調査　遺構



1　トレンチ西壁断面(東から)

2　SD1のマウンド状高まり（北から）



3　SD1のマウンド状高まり（西から）

3

6

23

7

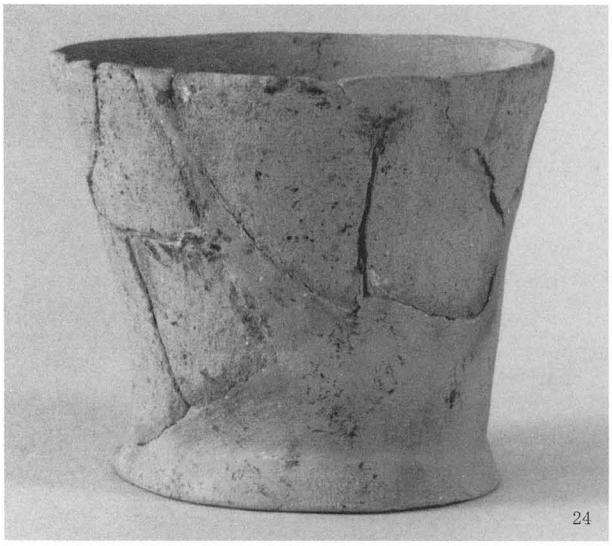
12

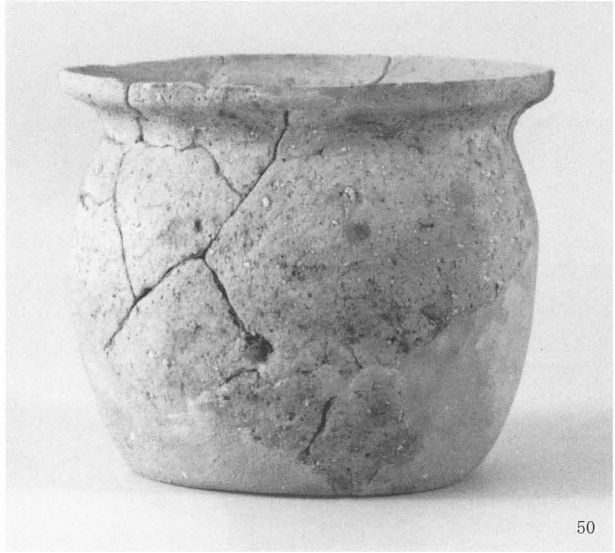
26

28

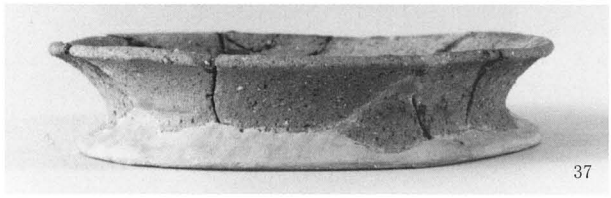
25

SD1 出土弥生土器　壷・細頸壷・短頸壷


24


50

21


37

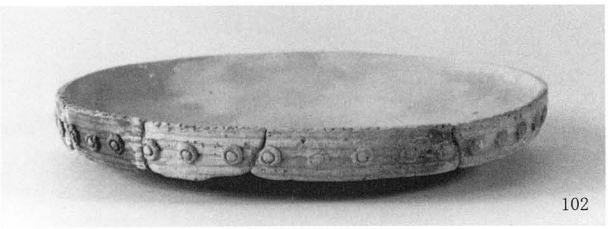
44

93

93'

38

SD1 出土弥生土器　二重口縁壷・長頸壷・甕・底部


102

65

67

66

64

60

59

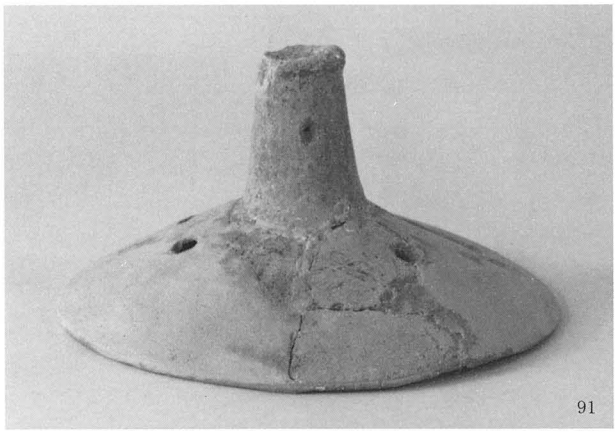
57

58

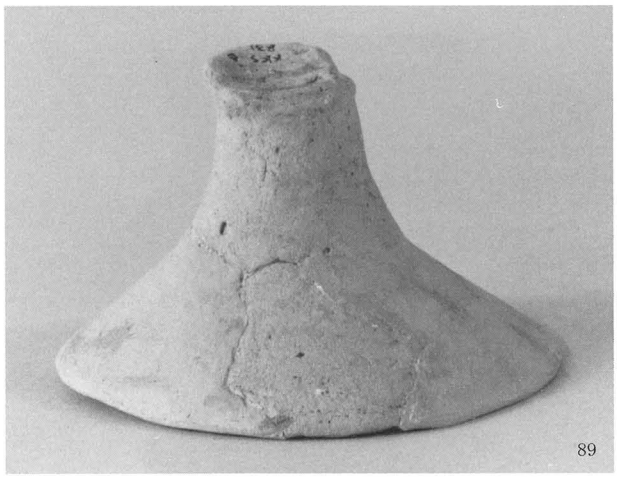
58'

SD1 出土弥生土器　鉢・器台

80


91

81


89

70

98

88

97

SD1 出土弥生土器　高杯・脚台部

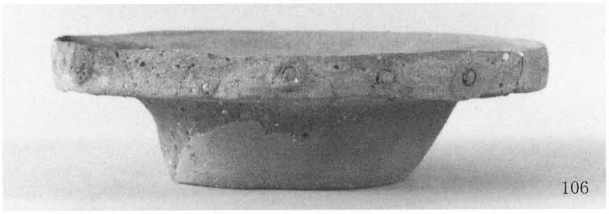
101

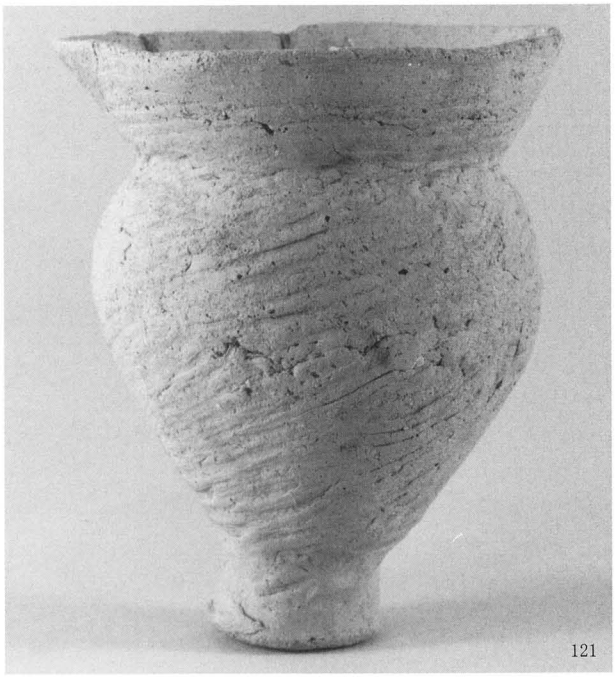
113

110

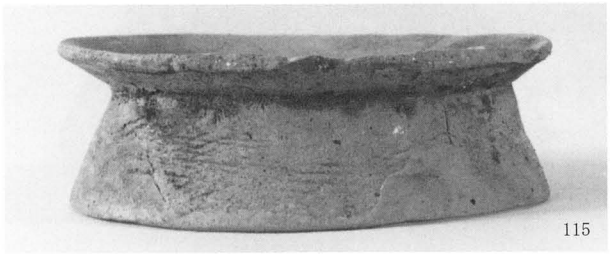
120

103

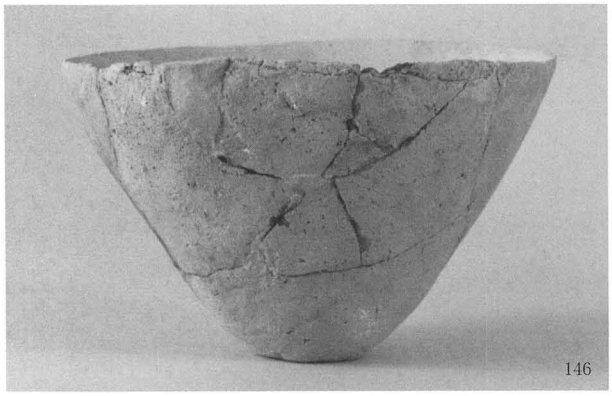

106

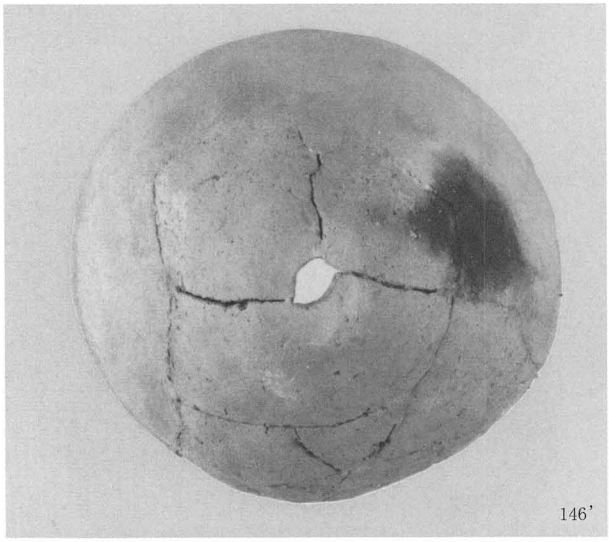

121

124


115

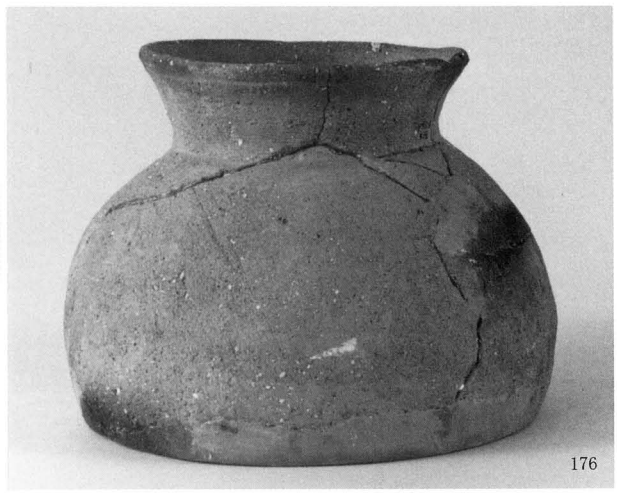
SD1・2出土弥生土器　手焙型土器・壷・短頸壷・台付壷・甕





SD2・3出土弥生土器　高杯・器台・鉢・壷・甕

172


176

170

175

169

162

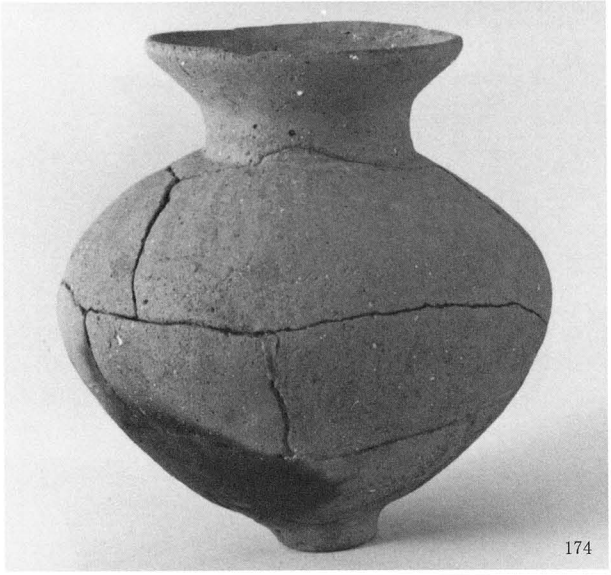
180

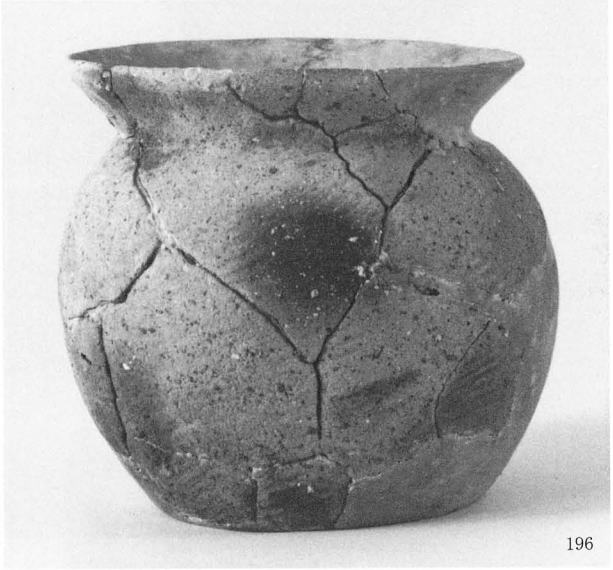
162'

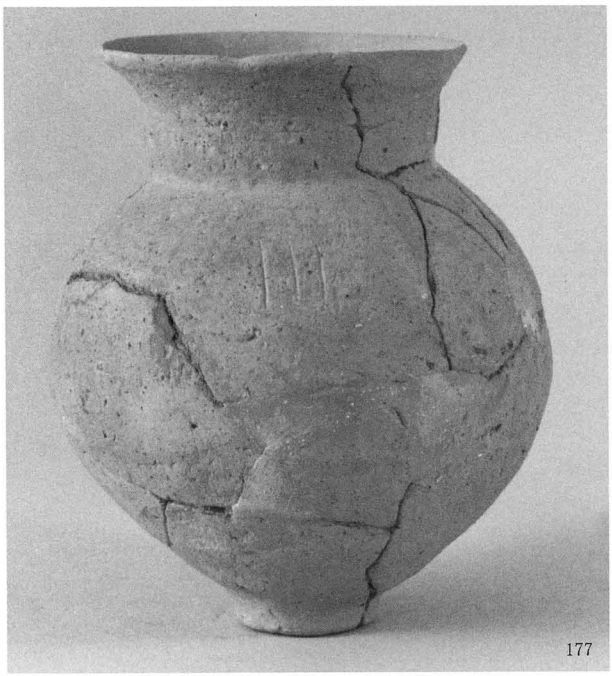
SD3・SK2 出土弥生土器　鉢・底部・壷・短頸壷

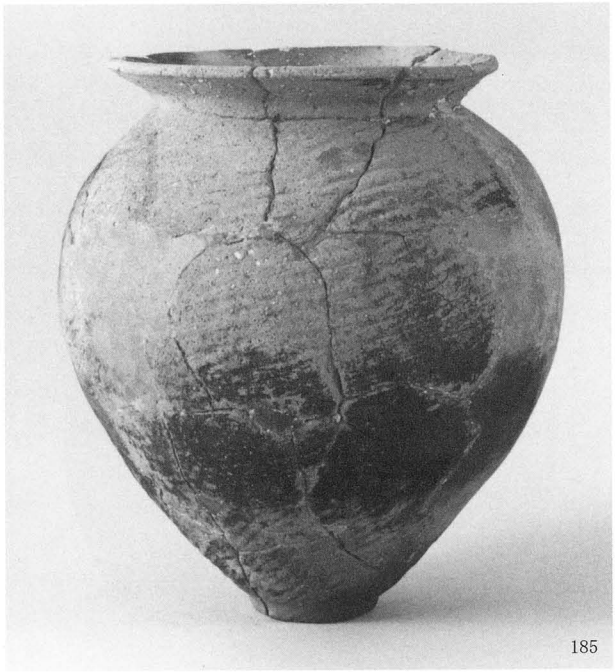
183

197


174


196

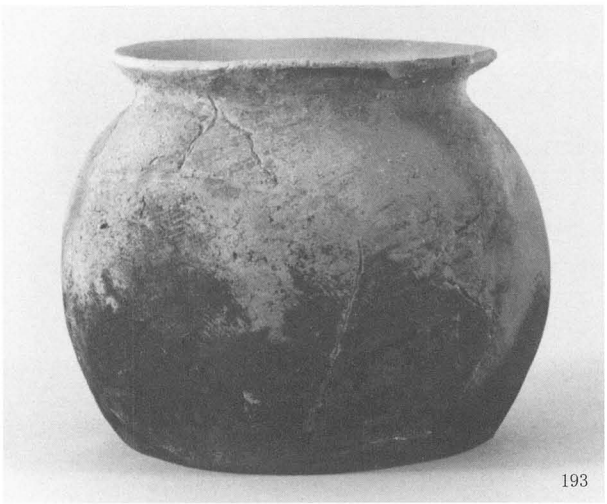

177


185

SK2 出土弥生土器　壷・短頸壷・甕

191

194


193

198

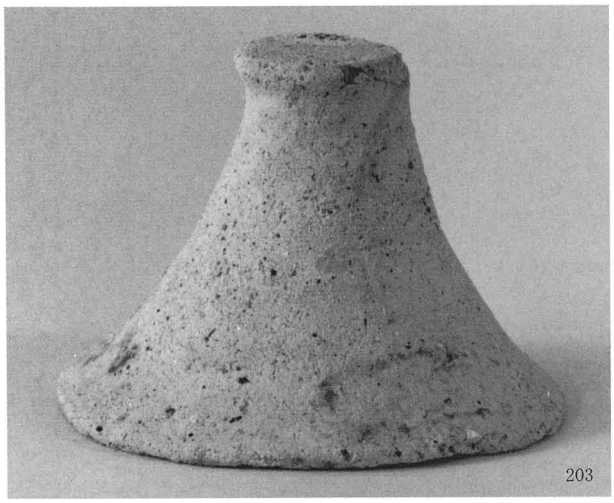
187

186

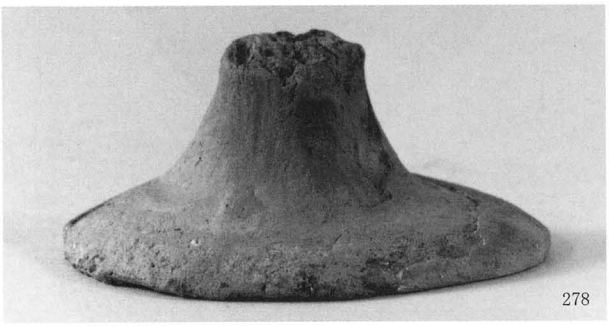
210

200

SK2 出土弥生土器　甕・鉢


203

235


278

230

202

208

201

263

SK2、第7層出土弥生土器　脚台部・甕蓋・高杯・壷・ミニチュア土器

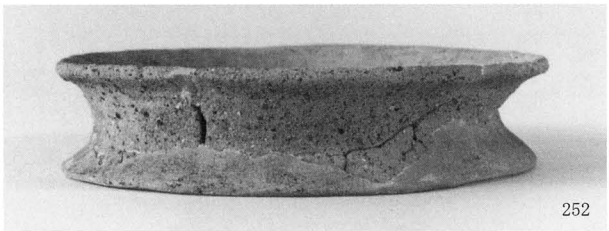
257

258

250

276

272


252

247

271

第7層出土弥生土器　甕・鉢

274

274'

283

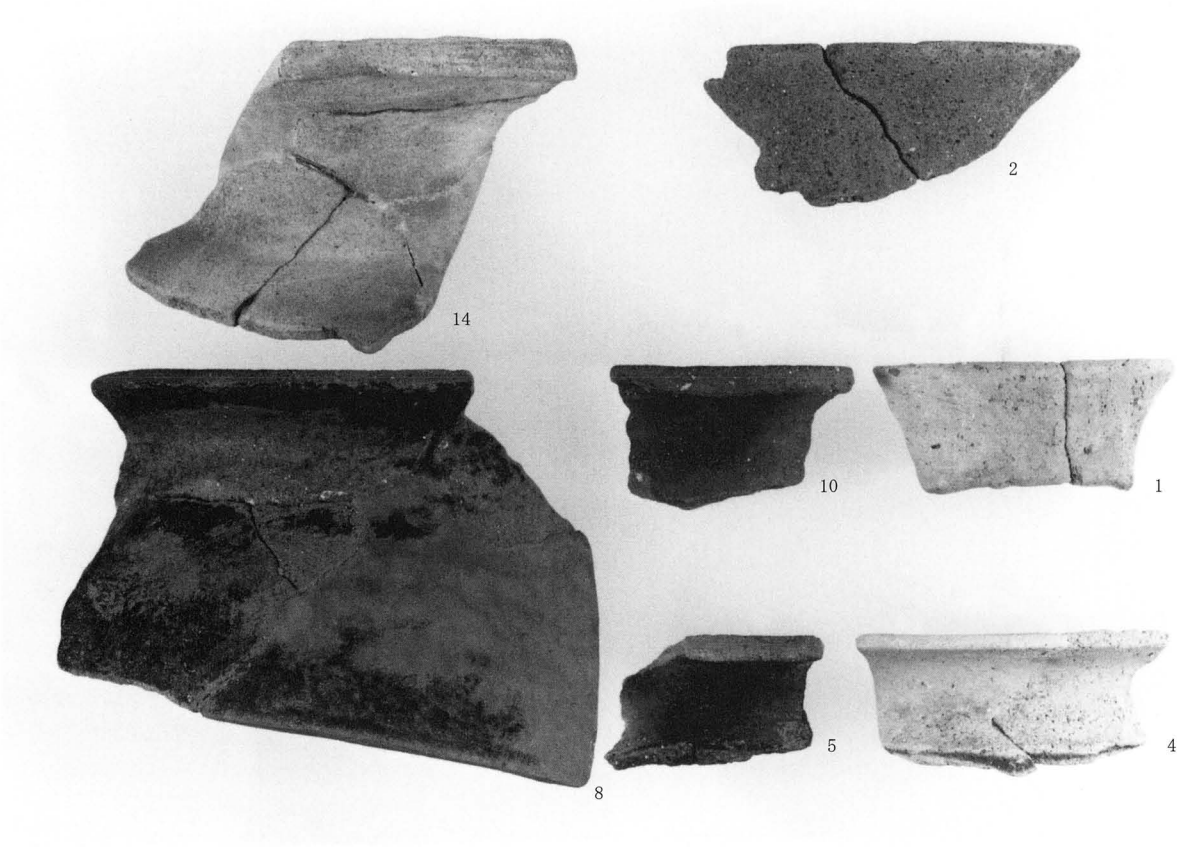
279

265

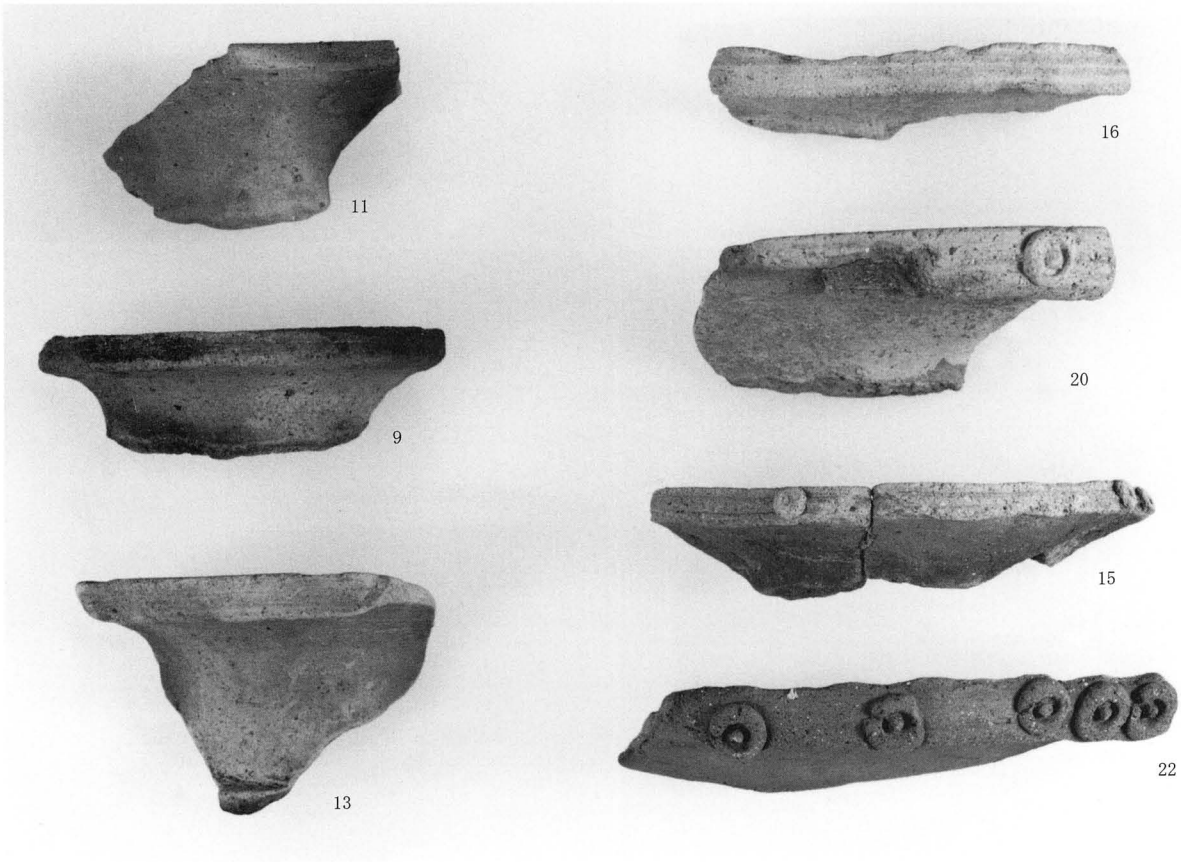
212

212'

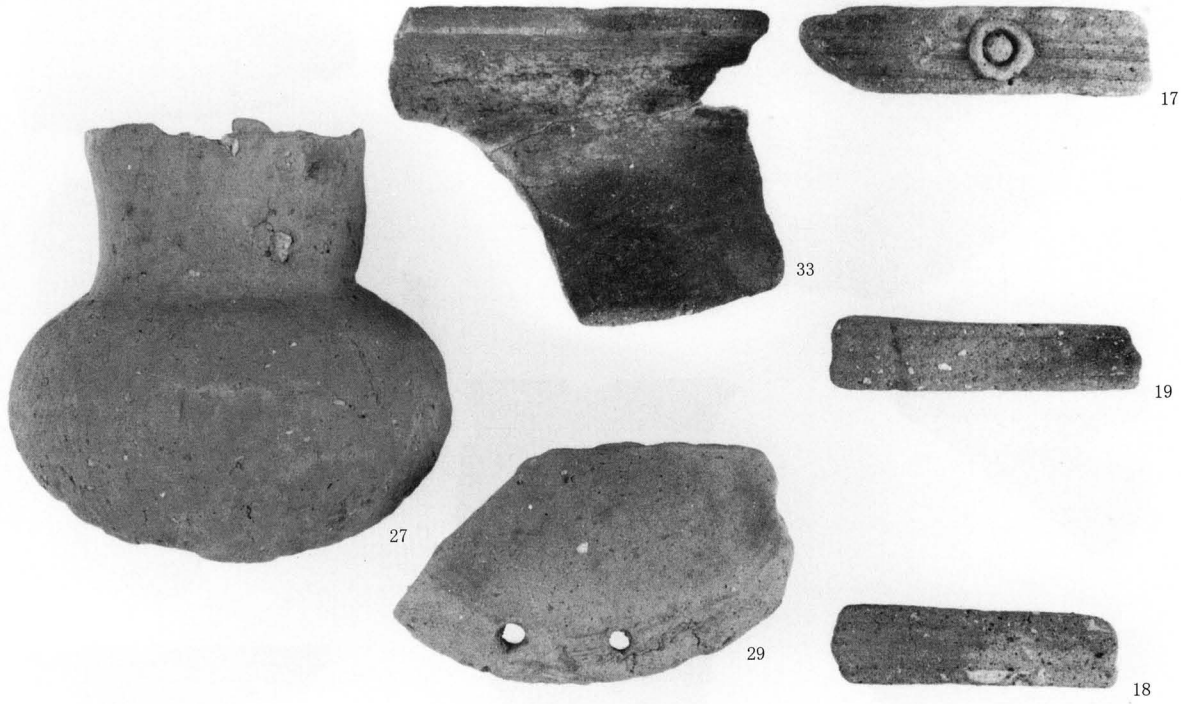
SK4、第7層、試掘確認調査出土弥生土器　手焙型土器・高杯・鉢・長頸壷・壷



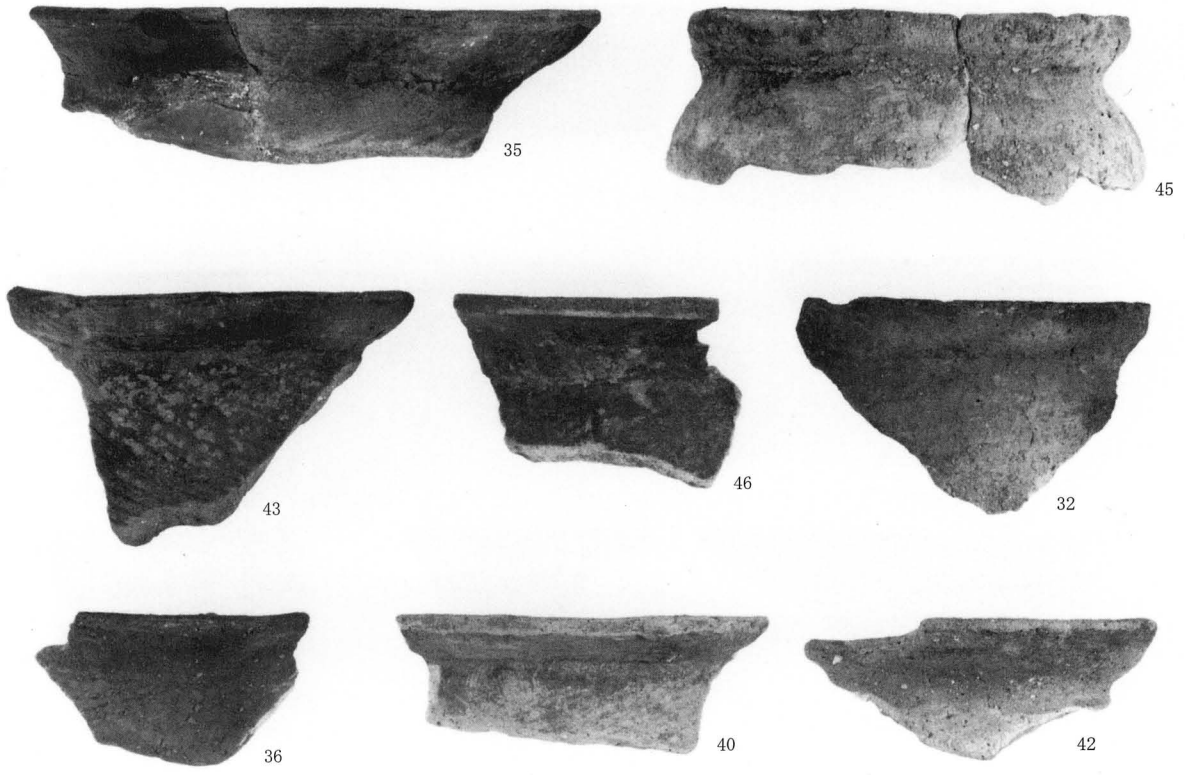
1. SD1 出土弥生土器　壷



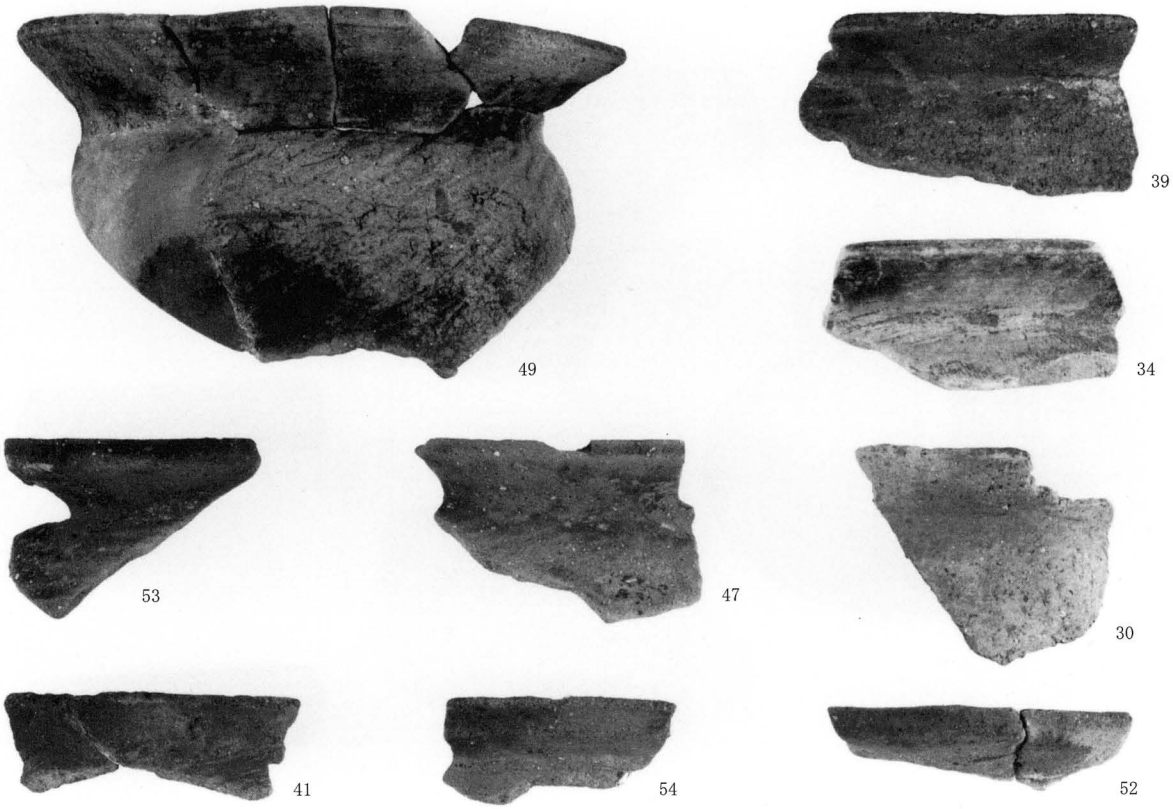
2. SD1 出土弥生土器　壷



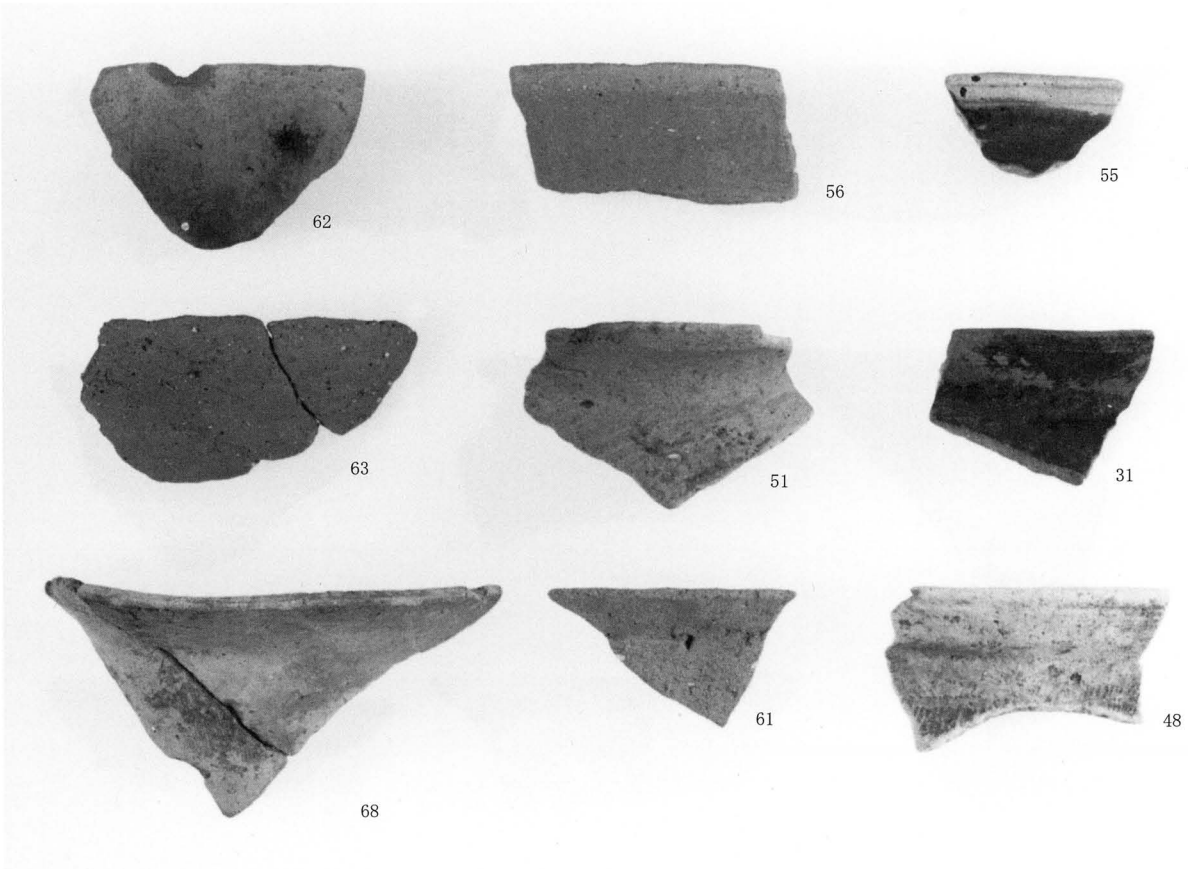
1. SD1 出土弥生土器　壷・短頸壷・壷蓋・甕



2. SD1 出土弥生土器　甕

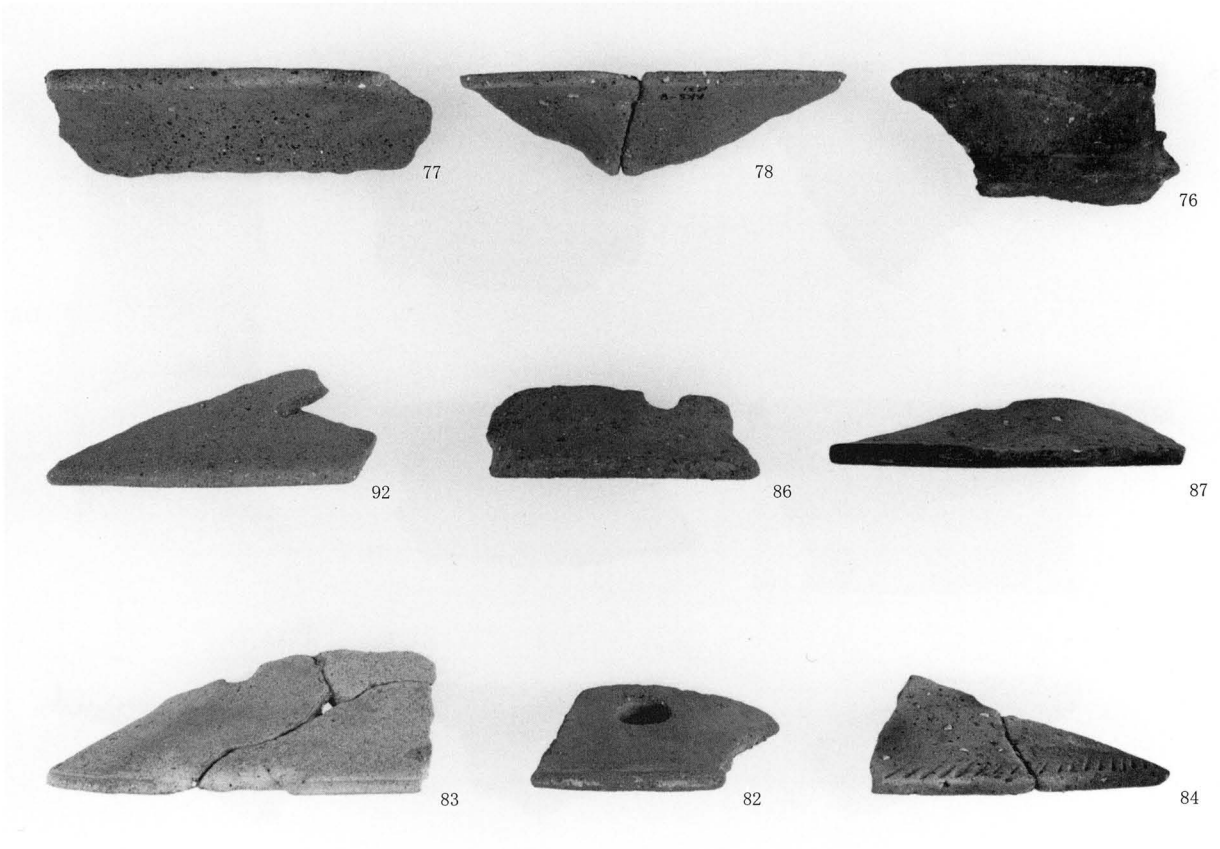


1. SD1 出土弥生土器　甕

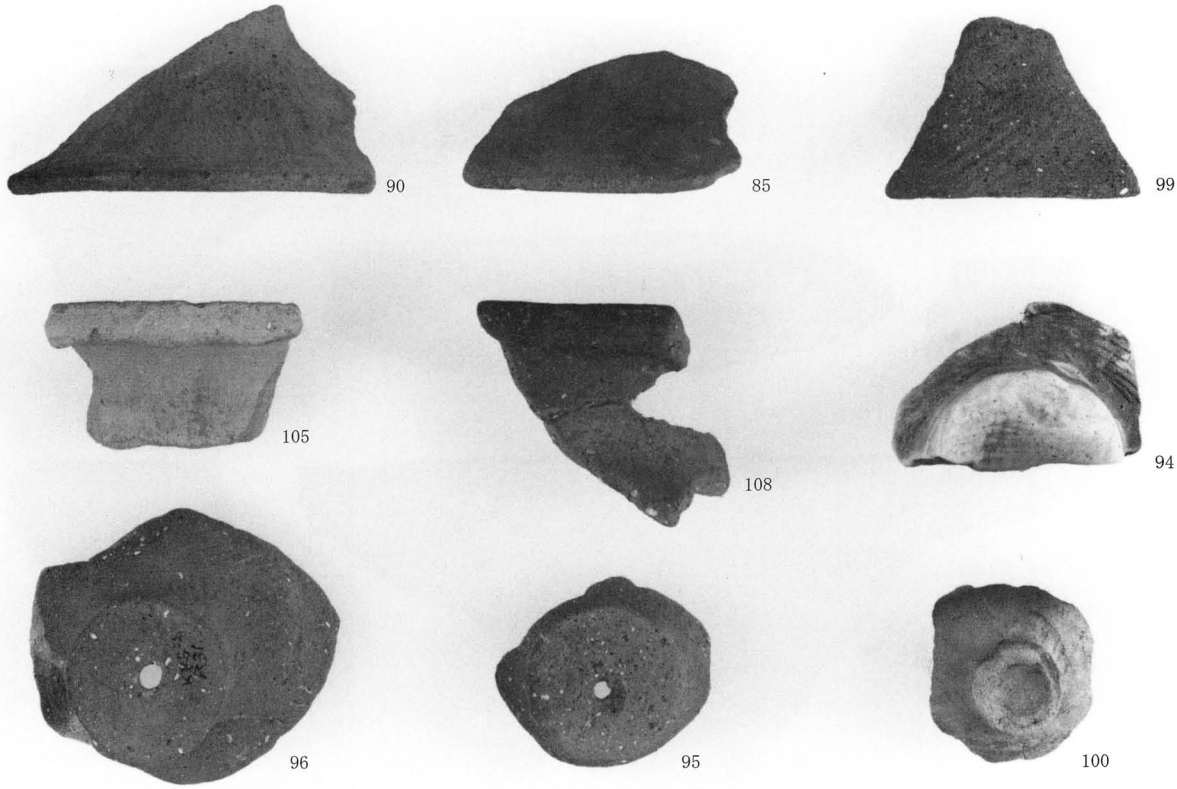


2. SD1 出土弥生土器　甕・鉢

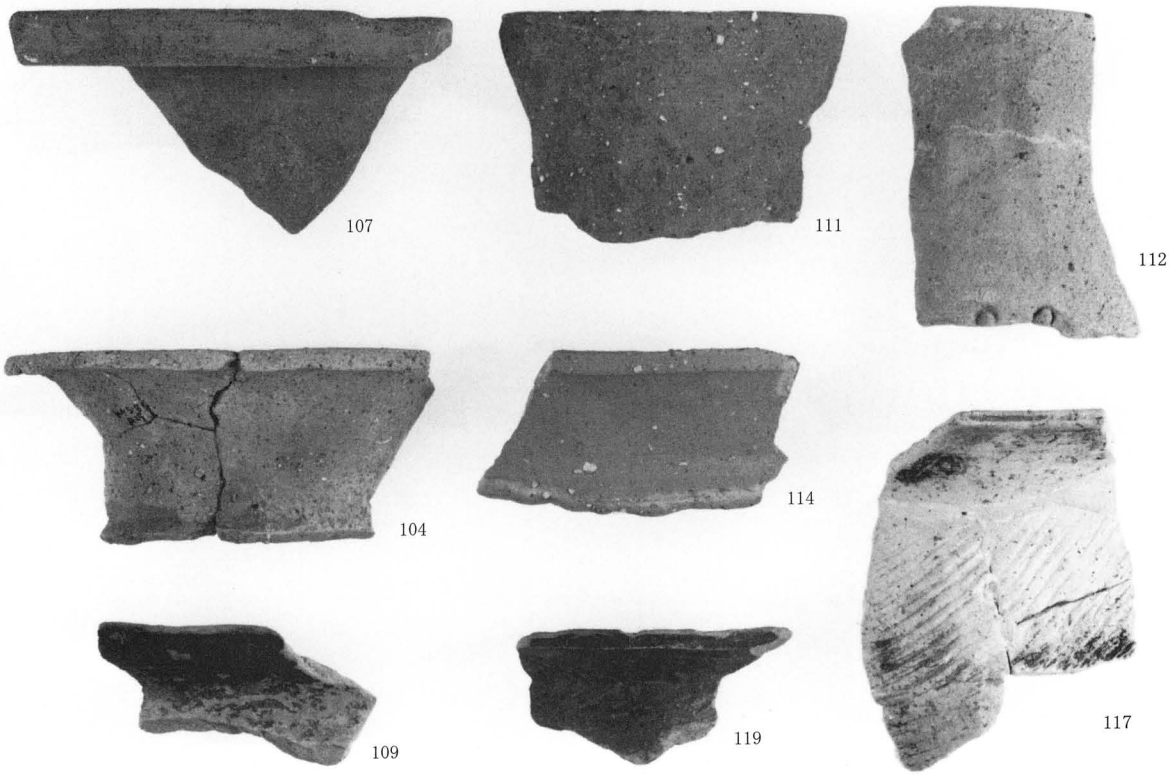
1. SD1 出土弥生土器　鉢・高杯



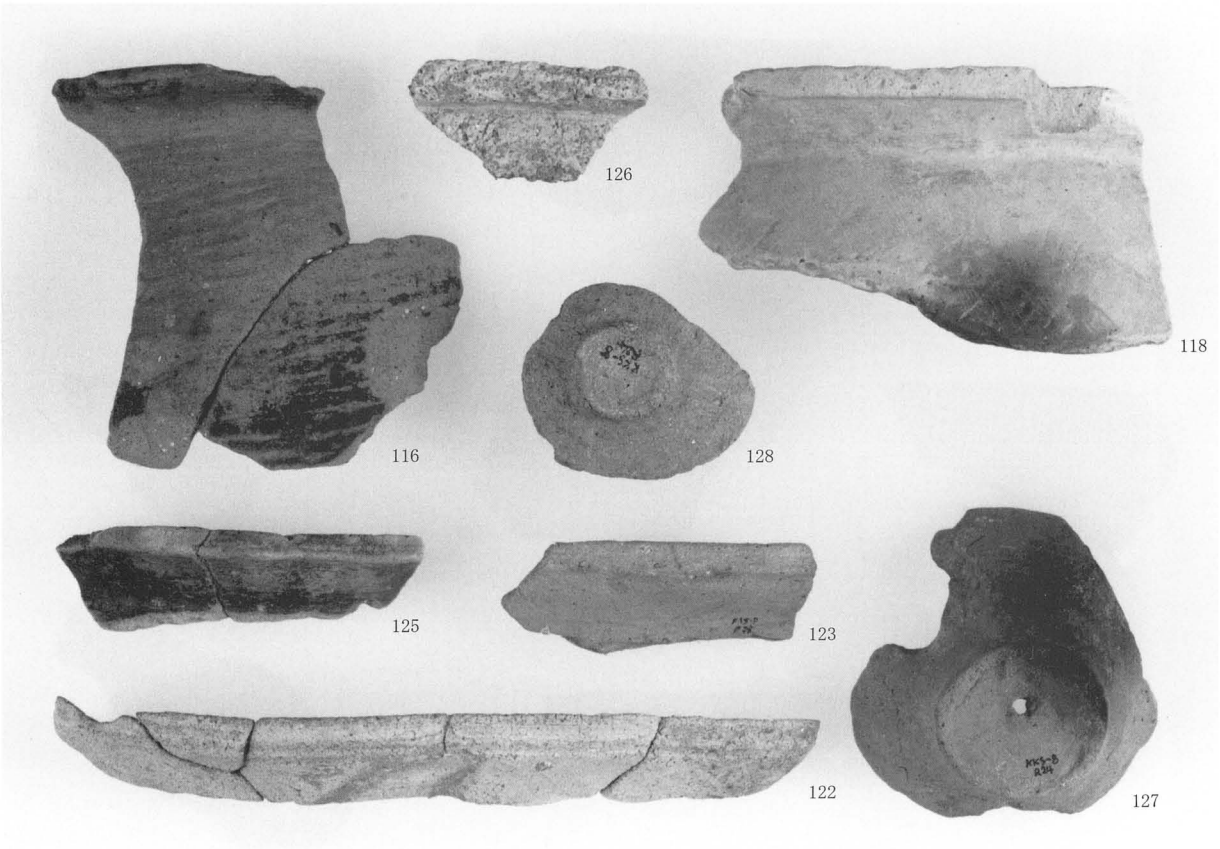
2. SD1 出土弥生土器　高杯



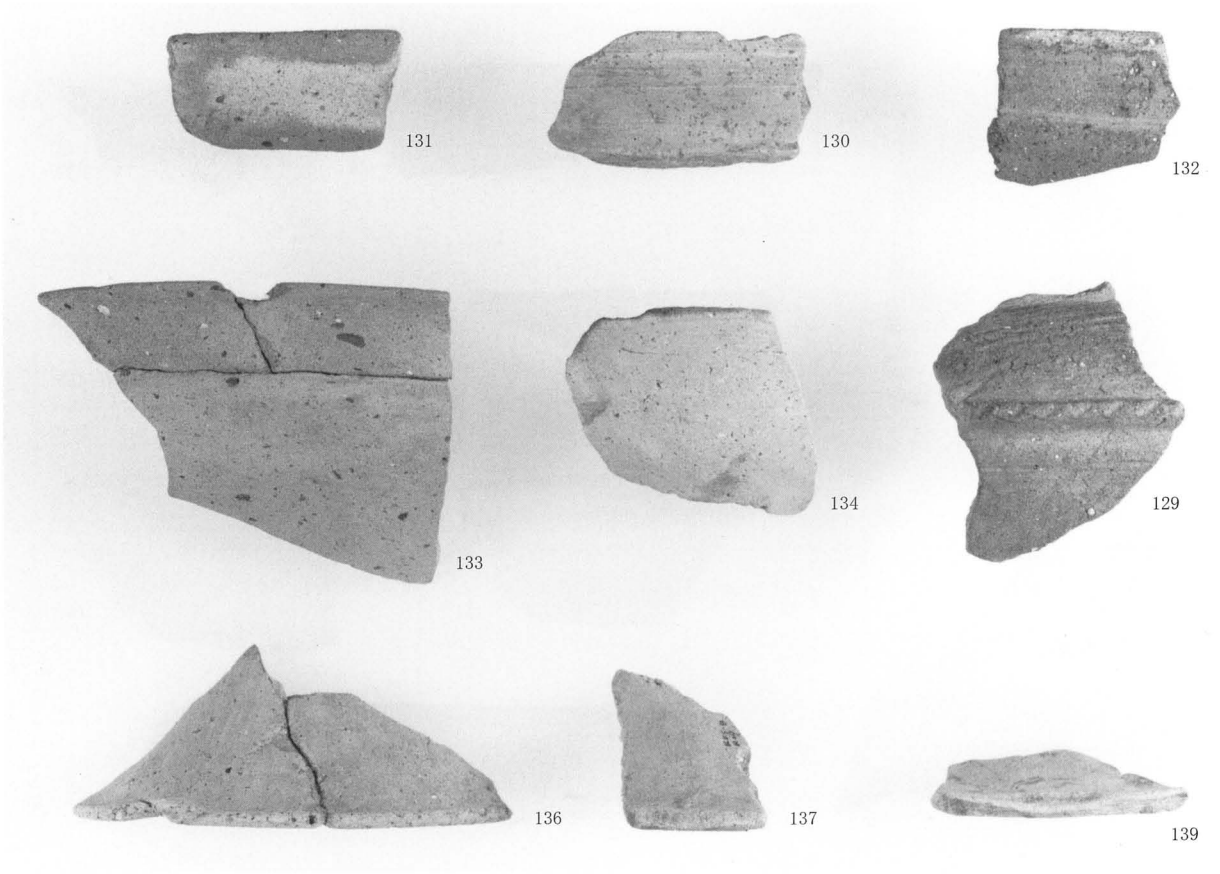
1. SD1・SD2 出土弥生土器　高杯・底部・脚台部・ミニチュア土器・壷



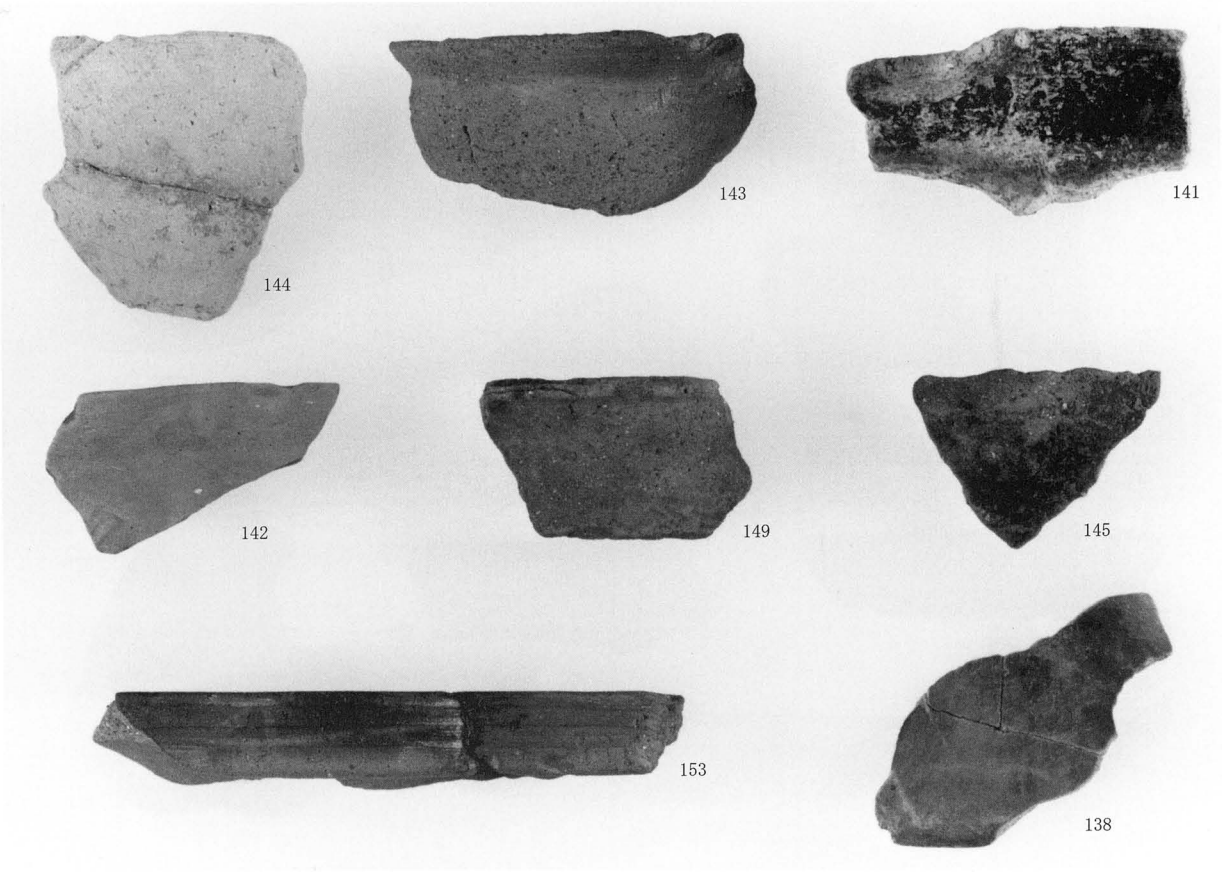
2. SD2 出土弥生土器　壷・長頸壷・甕



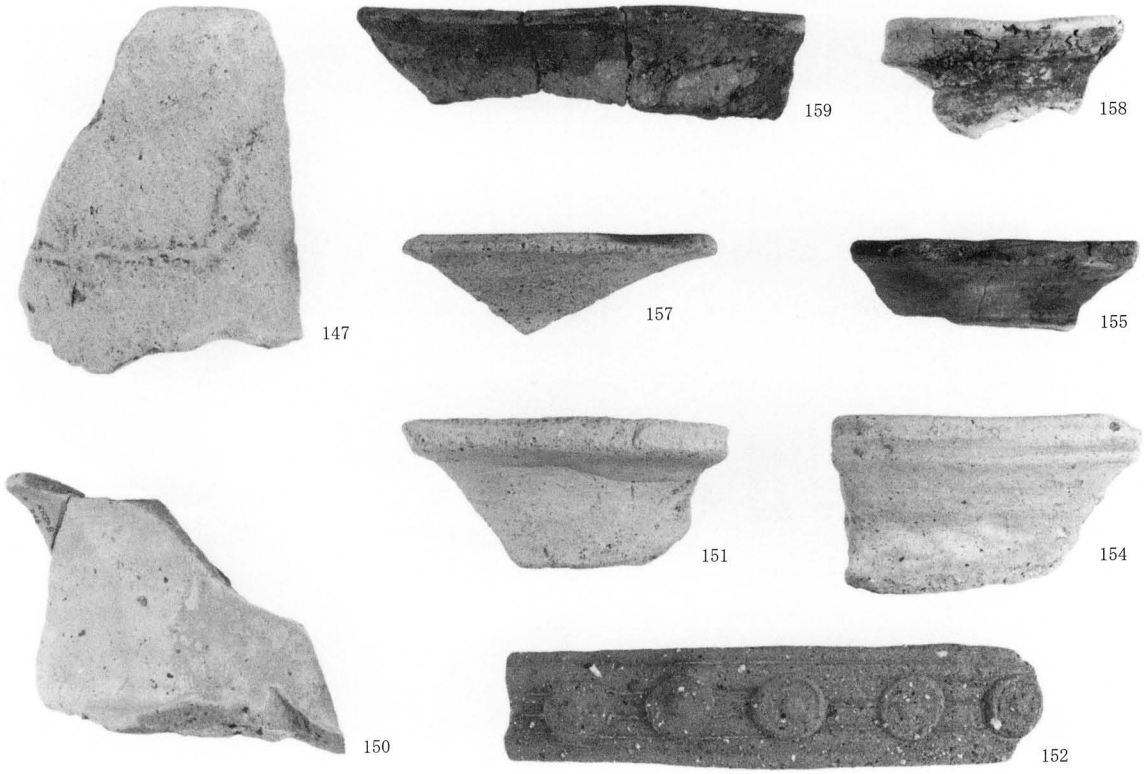
1. SD2 出土弥生土器　甕・底部・ミニチュア土器



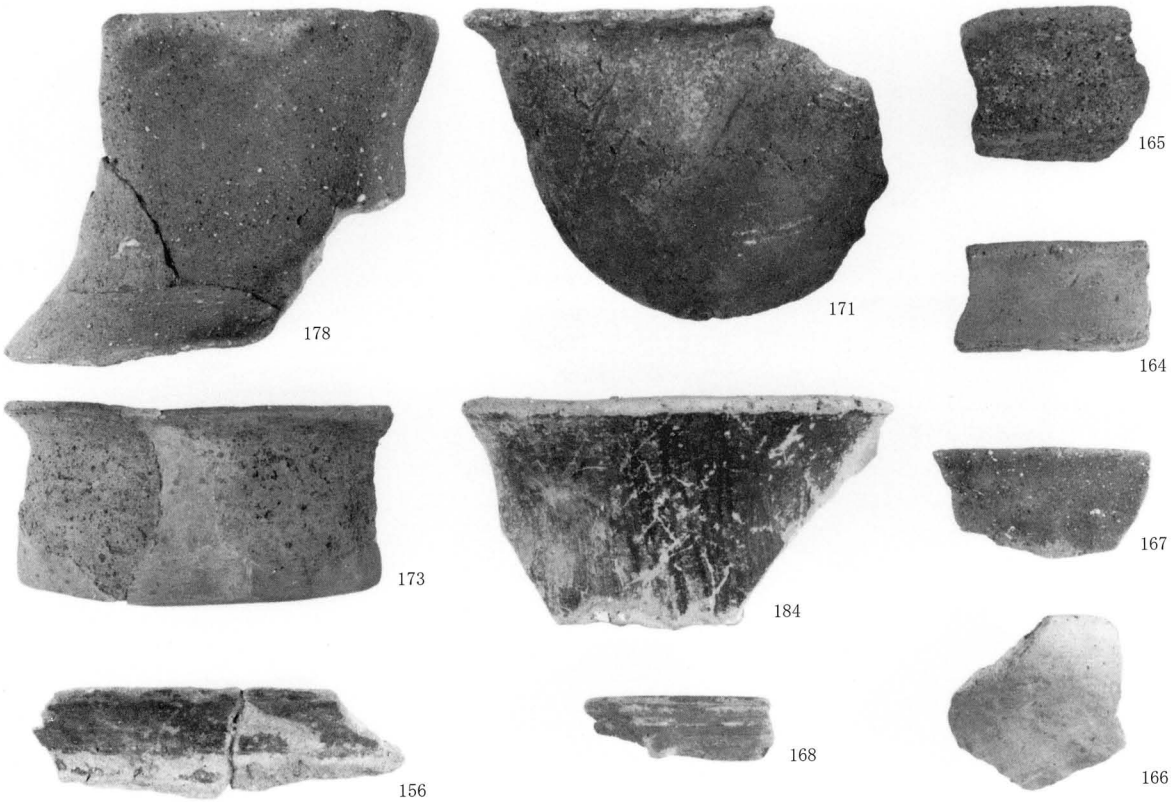
2. SD2 出土弥生土器　手焙型土器・高杯



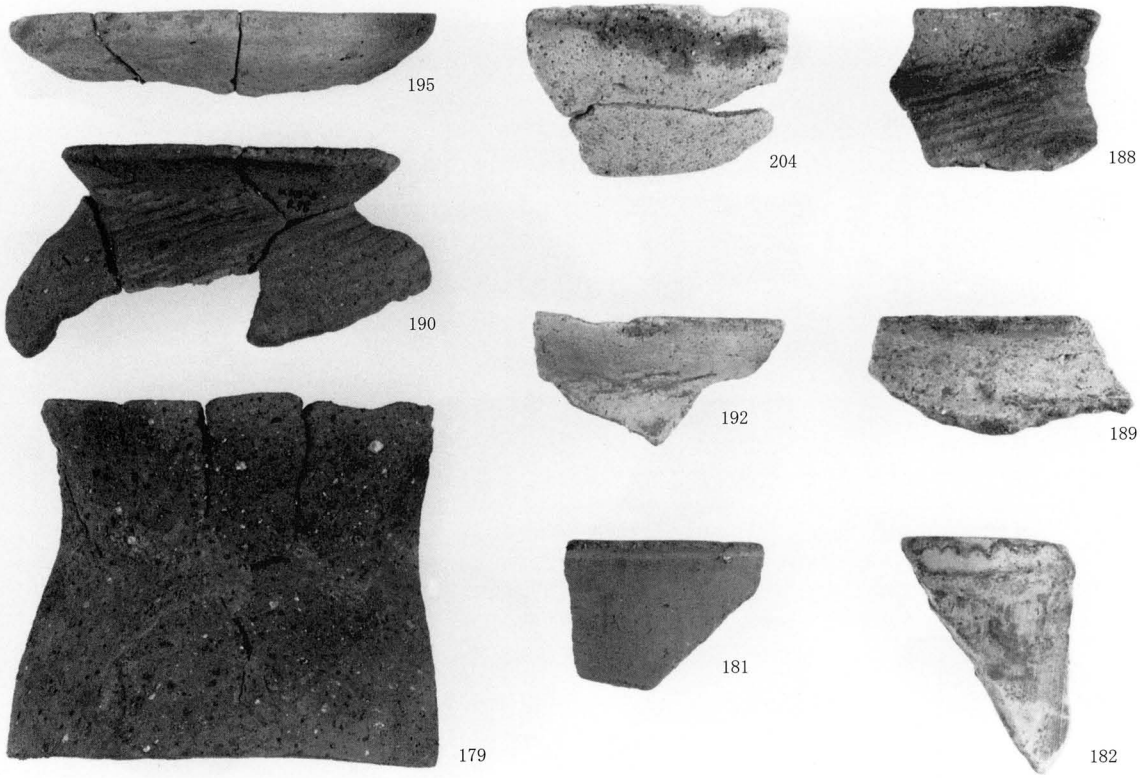
1. SD2・SD3 出土弥生土器　高杯・鉢・壷



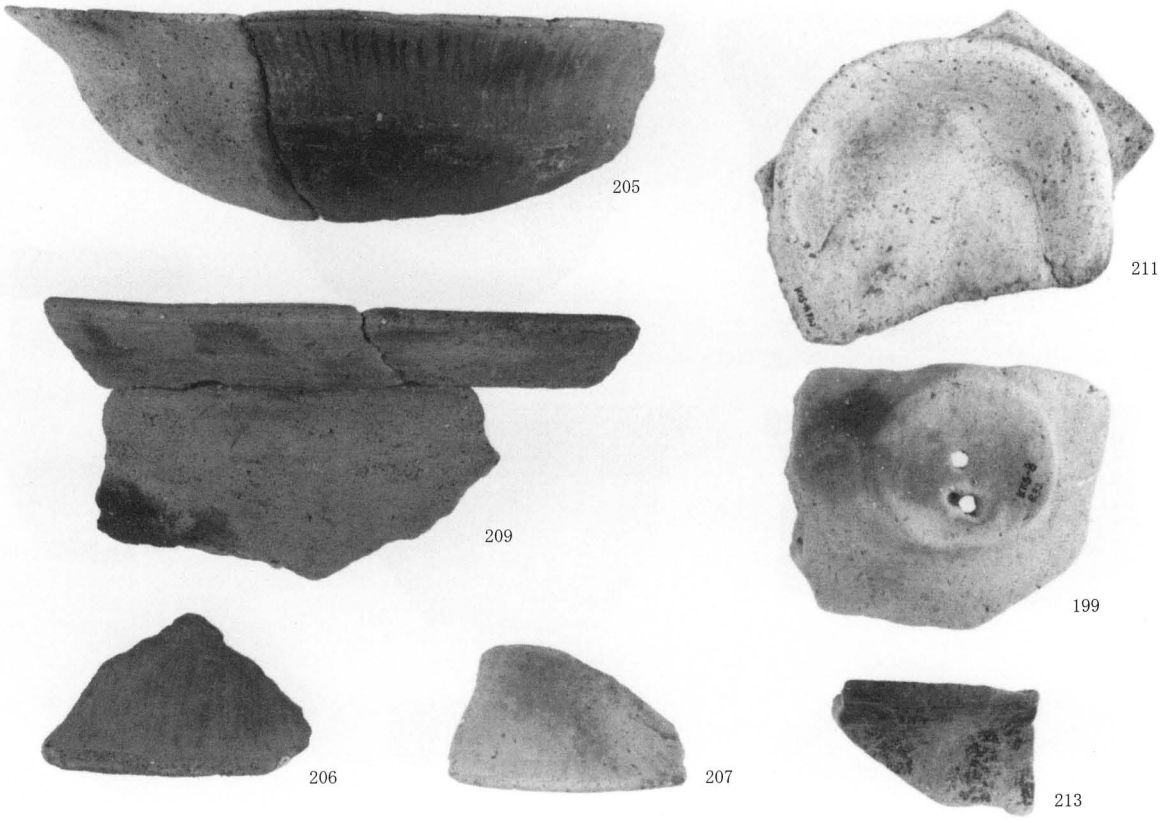
2. SD3 出土弥生土器　長頸壷・壷・甕



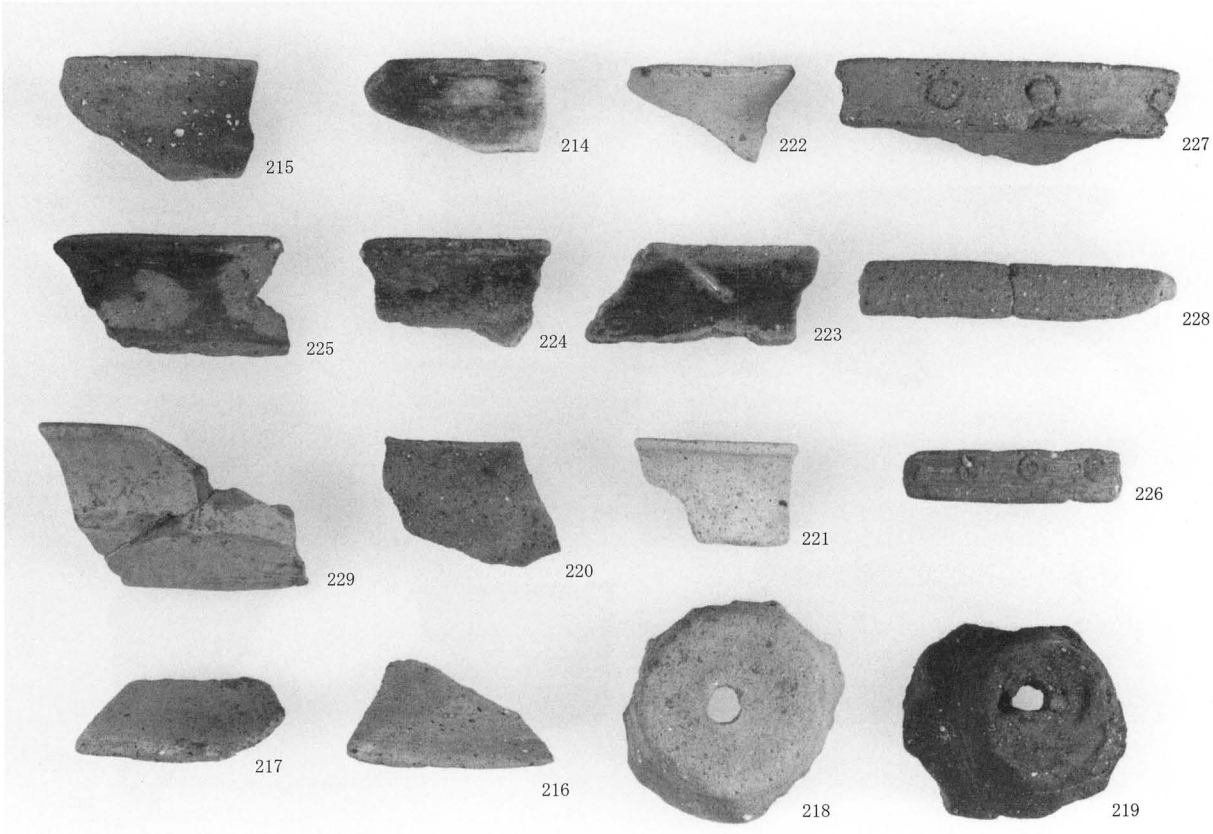
1. SD3 出土弥生土器　甕・高杯・器台・鉢・短頸壷・壷



2. SK2 出土弥生土器　短頸壷・長頸壷・甕・高杯

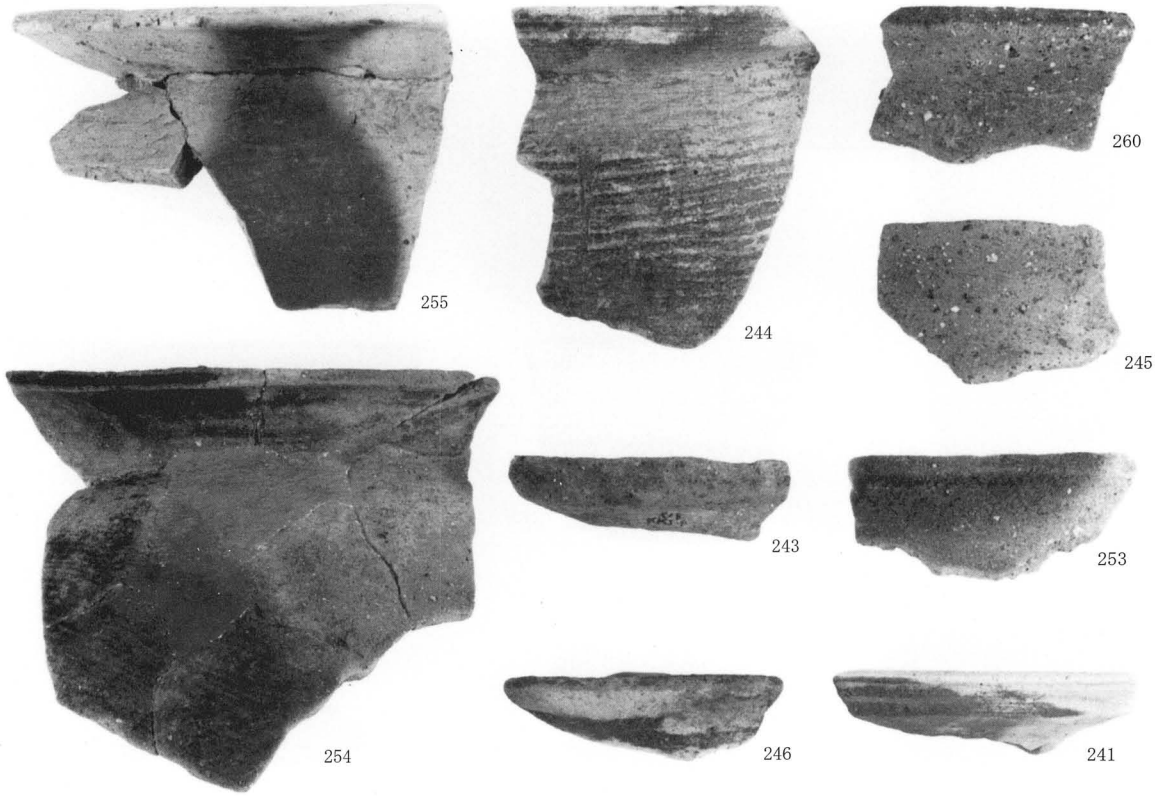


1. SK2・SP12 出土弥生土器　甕・高杯・底部・鉢・壷

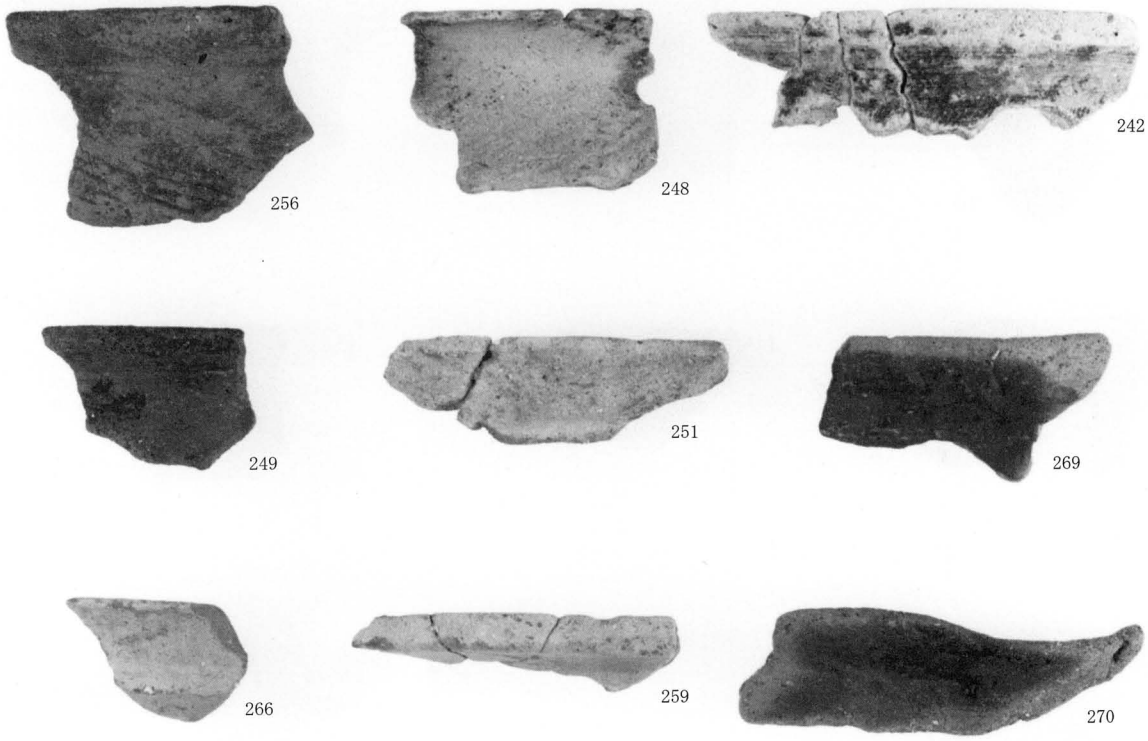


2. 第1～4層、第5層、第5～7層出土弥生土器　壷・甕・高杯・底部

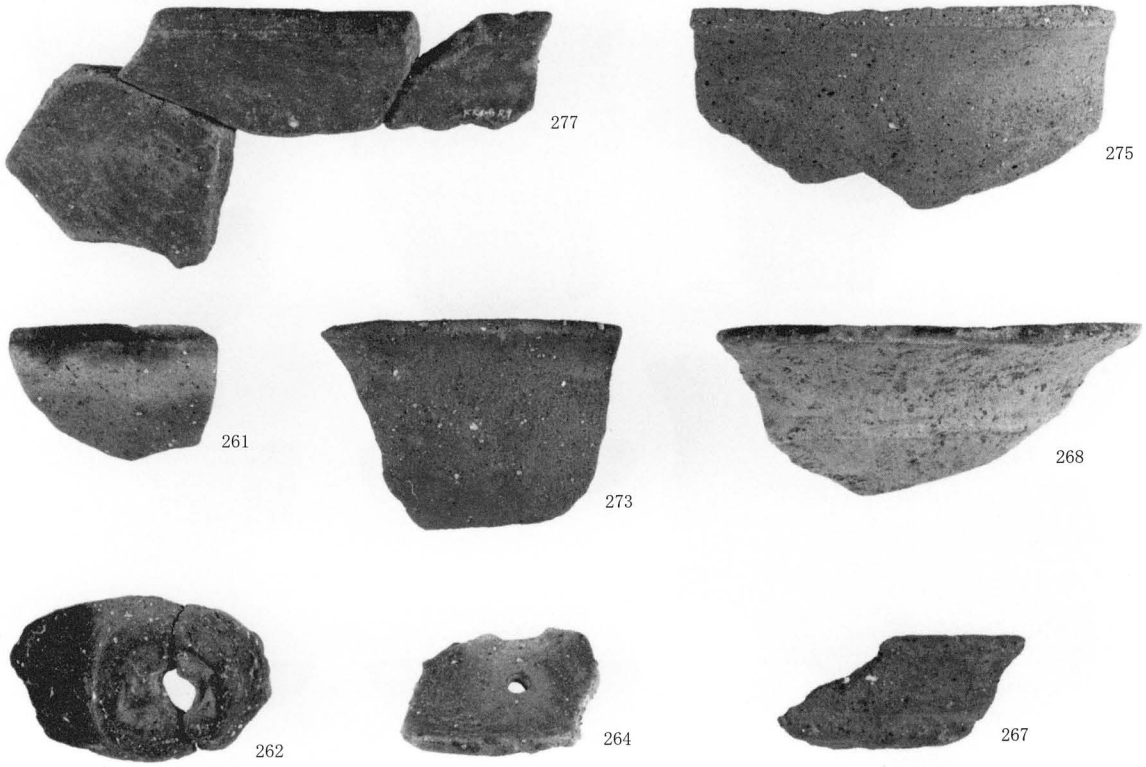
1. 第7層出土弥生土器　壷・短頸壷・長頸壷



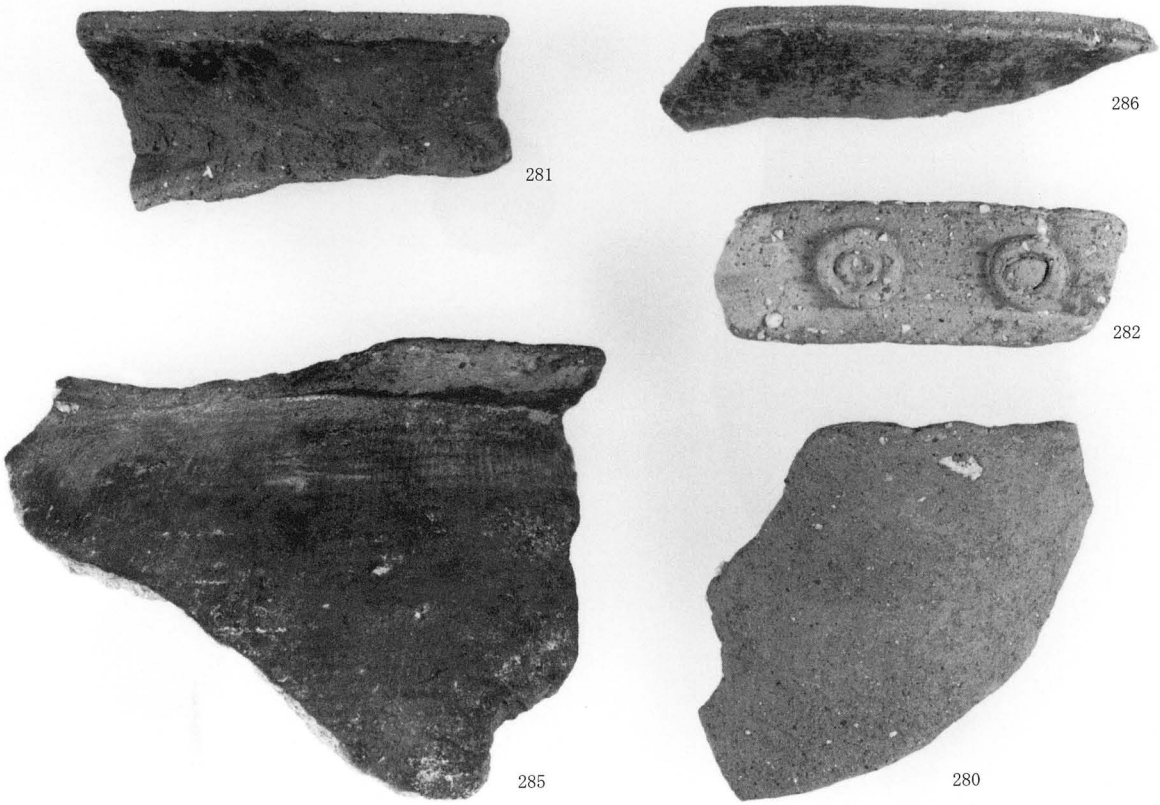
2. 第7層出土弥生土器　甕



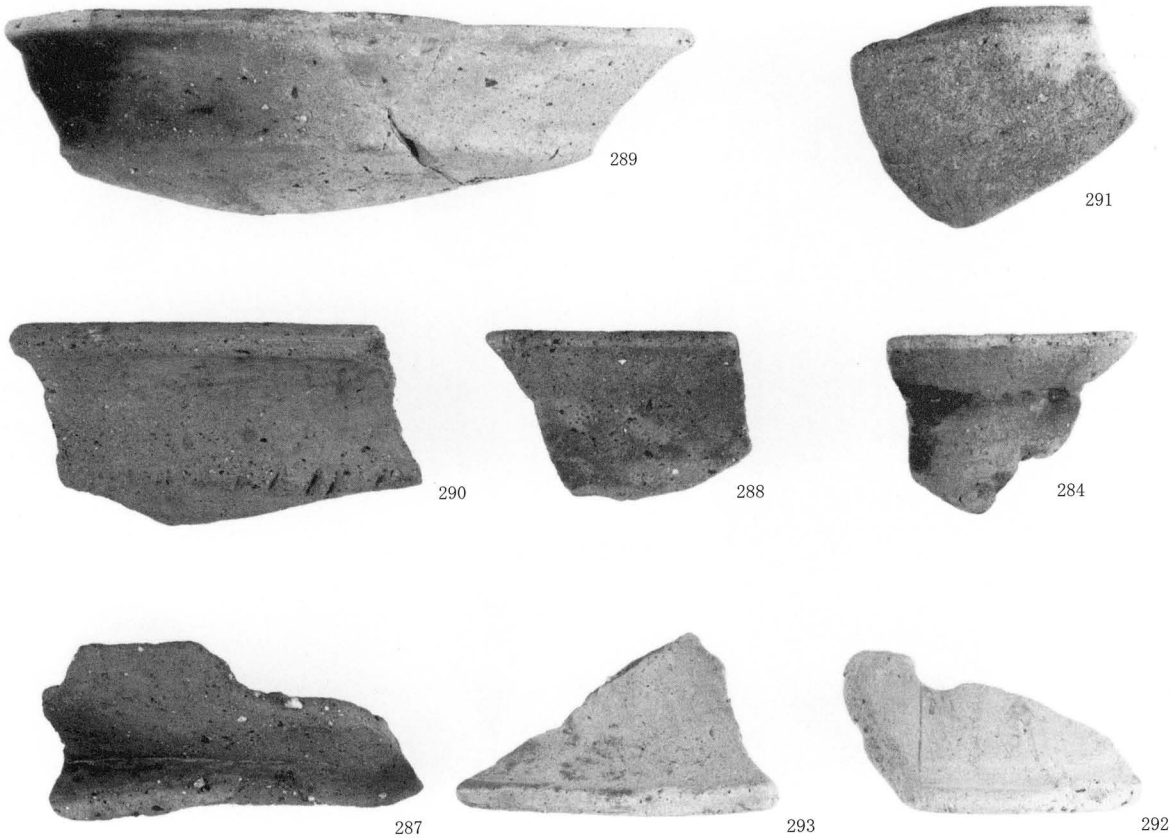
1. 第7層出土弥生土器　甕・高杯・鉢



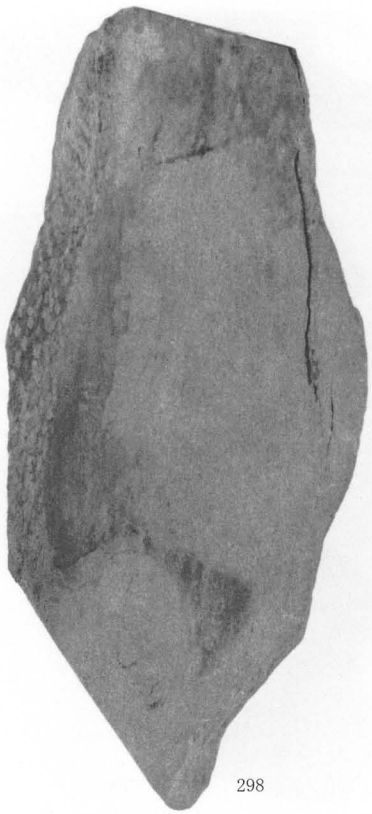
2. 第7層出土弥生土器　高杯・底部・鉢



1. 試掘確認調査出土弥生土器　長頸壷・壷・甕



2. 試掘確認調査出土弥生土器　甕・鉢・高杯


298

295

294

297

296

1. 土製品、石器（表）

298'

295'

294'

297'

296'

2. 同上（裏）

第３章　船山遺跡第８次発掘調査

１）はじめに

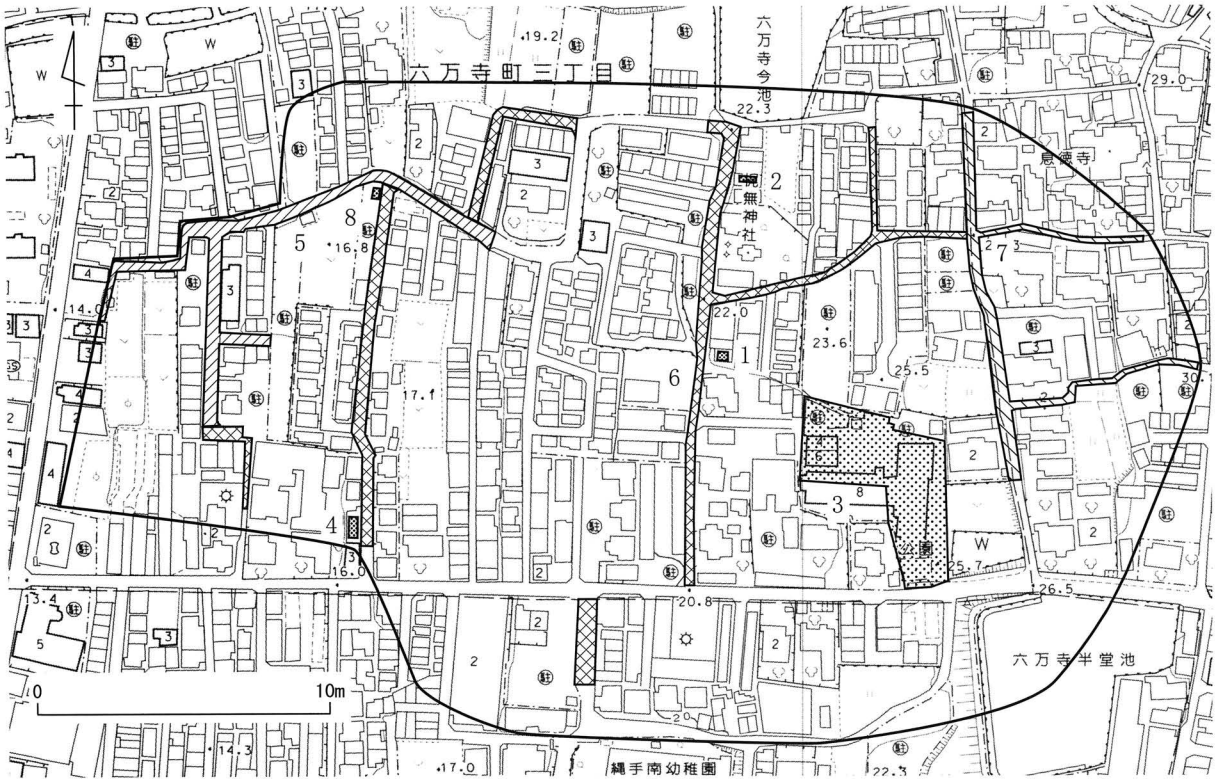
船山遺跡は、東大阪市六万寺町１丁目・３丁目町に広がる縄文時代から江戸時代にわたる複合遺跡である。本遺跡の調査は８次を数えるが、個人住宅建設に伴う小範囲の調査（１・２・４次）、下水道管埋設工事に伴う狭い幅の調査（５～７次）が大半であり、トレンチ設定ではあったが調査域を限った調査は４次だけである。

東端部域で縄文土器の出土が確認されている。周知の縄文時代の集落遺跡である縄手遺跡と馬場川遺跡のほぼ中間に位置しているが、その状況は不明である。弥生時代も後期の包含層および土器は出土しているものの、性格はやはり不明である。

古墳時代は整地土および溝が確認されているとともに、家・靫・動物・円筒などの埴輪や須恵器が出土している。南東部には多種類の形象埴輪・円筒埴輪を有する大賀世２・３号墳があり、出土地近辺に古墳の存在をうかがわせている。平安時代前半期には、井戸・貯蔵施設、ピット群とともに須恵器、土師器、木製品（井戸枠・曲物底板など）があり、集落が形成されていた。しかし、平安時代後半以降は瓦器・土師器などが出土し、溝など耕作地を確認しているが、江戸時代に至る集落状況は不明である。

平成21年７月６日、個人住宅建設に伴う届出があり、柱状改良工事を伴うことから８月４日に確認調査を実施し、古墳時代および弥生時代後期の土器を含む遺物包含層が検出された。代理者を通しての協議の結果、建設予定域のほぼ中央部約4.9㎡を対象として８月20日～22日まで発掘調査を実施した。

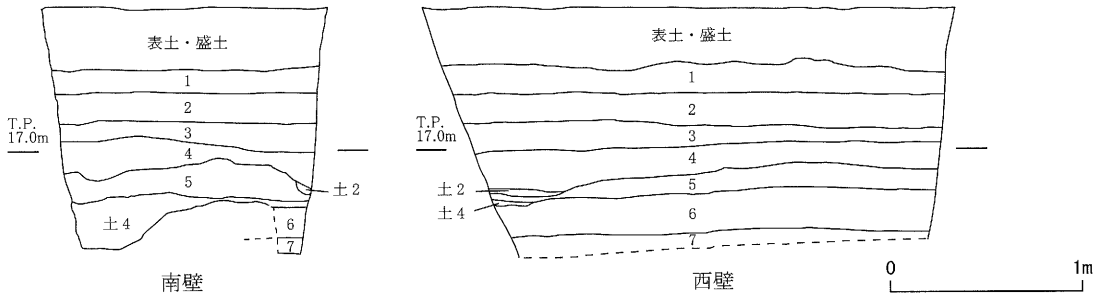
第１図　遺跡周辺図（1/15000）



第２図　調査地位置図

第１表　調査歴

次数 理由	調査期間	調査地	調査面積 ㎡	概・報告書	概要
1 個人 住宅	S60.4.11～4.25	六万寺町 3 丁目 629-4	46	『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要　1985 年度』1986.3	古墳後期 - 溝、縄文･須恵器･土師器･瓦器
2 個人	H5.8.17～8.27	六万寺町 3 丁目 1055-3・4	50	（業務報告）	室町 - 溝、土師器･陶器･瓦･石硯
3 共同 住宅	H6.2.21～6.8	六万寺町 3 丁目 642 、 635-1 、 636-1・2	494.2	『船山遺跡第 3 次・神並遺跡第 23 次発掘調査報告』2001.1.12	弥生後期 - 包含層、古墳後期･溝、奈良･平安前期の柱穴･溝･井戸、弥生～中世の遺物
4 個人 住宅	H11.5.6～5.10	六万寺町 3 丁目 599-1	33	『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概要　平成 11 年度』200.3	中世整地･耕作、弥生～中世の遺物
5 下水	H13.3.19～6.22	六万寺町 3 丁目	104	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告平成 13 年度』2002.3.31	弥生･包含層、中世整地層、弥生～中世の遺物
6 下水	H15.5.27～11.7	六万寺町 3 丁目 599-11～603-8 他	654	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告平成 15 年度』2004.3.31	弥生～中世の遺物
7 下水	H16.1.14～8.31	六万寺町 1 丁目 1029～1030、1394 他	232	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告平成 16 年度』2005.3.31	古墳～中世の遺物、埴輪(円筒･家・靫･動物など)
8 個人 住宅	H21.8.20～8.22	六万寺町 3 丁目 603-5 の一部	4.9	本書	平安中葉･古墳後期の土坑･ピット、弥生～中世の遺物



第３図　調査トレンチ断面図

２）基本層位（第３図　図版１・２）

表土・盛土

第１層　黒色 N2/　砂混じりシルト質粘土。旧耕土。

第２層　緑灰色 5G5/1 砂混じり粘土質シルト。床土。

第３層　オリーブ黒色 5Y3/2 シルト質土。弥生土器・須恵器・土師器・瓦器・製塩土器片など出土。江戸時代の耕土。

第４層　灰色 7.5Y4/1 砂混じりシルト質壌土。弥生土器・須恵器・土師器・製塩土器・瓦器片など出土。江戸時代の整地土。

第５層　灰オリーブ色 5Y4/2 砂礫混じり土。中世の整地土。須恵器・土師器・黒色土器片出土。平安時代中葉の整地土。第１遺構面。

第６層　暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂礫混じりシルト質土。古墳時代後期の整地土。須恵器・土師器出土。第２遺構面。

第７層　暗緑灰色 10GY4/1 砂混じりシルト。

３）遺構

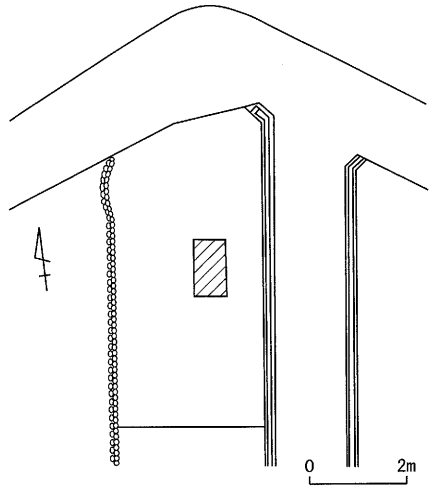
調査は、トレンチ内の盛土および第１層の耕土、第２層の床土を機械掘削、第３層の大半を機械掘削と人力掘削によって除去した。以下、西側に側溝を設定しながら、第７層上部まで層ごとに人力掘削を行ない、遺物の採集とともに遺構の検出作業を行なった。

調査範囲が狭く、上記の各層はほぼ全域で確認した。

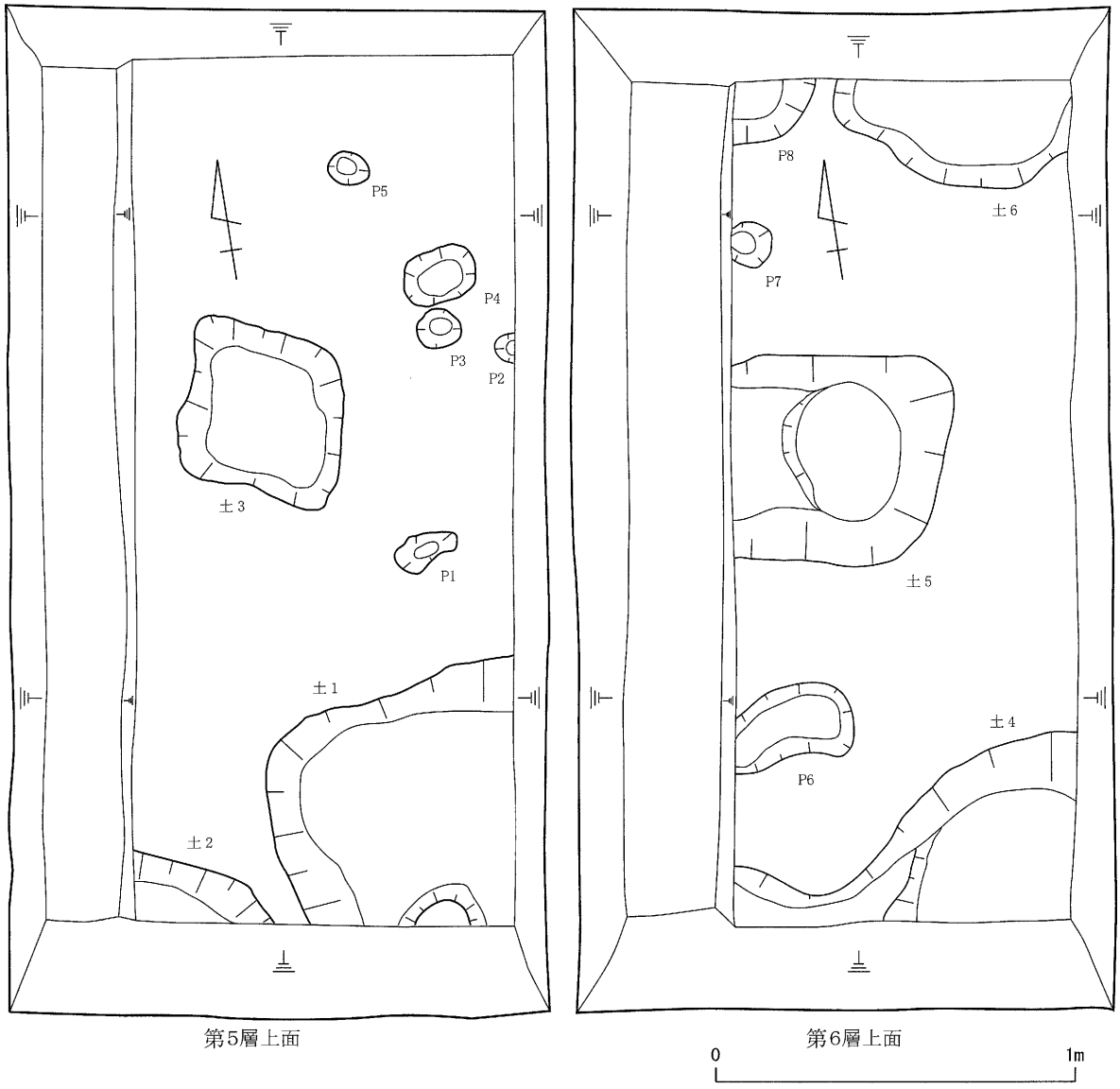
第１・２層は近・現代の耕土・床土。

第３層は、若干の細・中粒砂と細礫を含むオリーブ黒色シルト質土で、弥生土器の底部（１）、製塩土器（２）、土師器の杯（３）・皿（４）、黒色土器椀（５）、瓦器椀（６）、須恵器の杯蓋（７～10）・身（11）・有蓋高杯（12）などが出土しているが、磁器片を確認しており、土質状況から江戸時代の耕作土である。

第４層は、若干の細・小礫をも含む細～粗粒砂混じりの灰色砂混じりシルト質壌土で、弥生土器の甕（13）、土師器の甕（14）、製塩土器（15）、須恵器の杯蓋（16・17）・身（18）・蓋（19）・無蓋高杯（20）・高杯の脚（21）などの多くの遺物を包含していたが、磁器片の小片が見られ、江戸時代前半期ごろの整地土である。



第４図　調査トレンチ位置図



第５図　第５・６層上面遺構平面図

第５層上面遺構－第１遺構面－（第５図　図版２）

第５層は、細～粗粒砂および小～中礫の混じる灰オリーブ色土で、須恵器の杯蓋（22・23）・高杯の脚（24）と土師器・黒色土器の小・細片を包含する平安時代中葉以前の整地層である。上面においてピット５個（Ｐ１～５）と土坑３基（土１～３）を検出した。

ピット５個検出した。埋土が灰色の砂質土である小径（８～11cm）のＰ２・３・５と、暗オリーブ灰色の砂質土が埋土のやや大き目のＰ１・４に大別することはできるが、調査範囲が狭いこともあってそれぞれの関係は不明である。土坑は３基で、２基（土１・２）は調査トレンチ南端で検出したことから、明確な形状および用途は不明である。土１は南端に低い隆起のある奇形を呈し、土師器、須恵器・製塩土器の小片などが出土している。土２とも同質の埋土であることから同時期に埋没したと思われる。土３は隅丸の方形をなし、底面はほぼ平らであった。埋土内には土師器、須恵器（杯蓋・身）小片とともに炭の細・小片がやや多く含まれていた。

これらの遺構の明確な時期は確定できないが、第５層内の黒色土器片などから平安時代中葉以降と思われる。

第２表　遺構一覧

＜第５層上面＞

遺構	規模 cm（:検出長）	土色・質	遺物	備考
P１	20×10　深 3.6	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂質土　やや粘質		
P２	径８　深 1.9	灰色 10Y4/1 砂質土		
P３	径 10　深 6.5	灰色 10Y4/1 砂質土		
P４	20×17　深 10.5	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂質土　やや粘質		
P５	径 11　深 6.4	灰色 10Y4/1 砂質土		
土１	:40×:58　深９	オリーブ灰色 5GY5/1・暗灰黄色 2.5Y5/2 砂混じり壌土	土師器、須恵器、製塩土器	
土２	:24×:18　深 9.2	オリーブ灰色 5GY5/1・暗灰黄色 2.5Y5/2 砂混じり壌土		
土３	50×45　深８	灰色 7.5Y4/1 砂混じりシルト質土　炭多く含む	土師器、須恵器	

＜第６層上面＞

遺構	規模 cm（:検出長）	土色・質	遺物	備考
P６	20×:35　深 5.8	オリーブ灰色 2.5GY5/1・暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質壌土、		
P７	12×:12　深３	オリーブ灰色 2.5GY5/1・暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質壌土		
P８	:25×:17　深 6.2	オリーブ灰色 2.5GY5/1・暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質壌土		
土４	:50×:110　深 29.8	1 オリーブ灰色 2.5GY5/1・暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質壌土 2　灰色 N4/　砂混じり壌土	土師器、須恵器、製塩土器	
土５	:54×61　深 13.6	1 オリーブ灰色 2.5GY5/1・暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質壌土 2　暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じり砂質土	土師器、須恵器、製塩土器	
土６	:30×:67　深 5.6	オリーブ灰色 2.5GY5/1・暗灰黄色 2.5Y4/2 砂質壌土		

第６層上面遺構－第２遺構面－（第５図　図版２・３）

第６層は、細～粗粒砂および小～中礫の混じる暗オリーブ灰色シルト質土で、サヌカイト・須恵器・土師器の各小・細片を包含する古墳時代後半の整地土である。上面でピット３個（P６～８）と土坑３基（土４～６）を検出した。

いずれの遺構も調査地面の端で検出したことから明確な形状は不明である。埋土が同じであることから同時期に埋没したものと思われる。

Ｐ６は、本来径約20cmの円形であったが、柱が抜き取られた際に西側へ広がったものである。Ｐ７は径12cmと小さく浅いものであり、Ｐ８の底面は西側が浅くなっていた。

土４は、ほぼ南端全域におよび、２段に落ちていた。深い東部には若干の小・細礫を含む細～粗粒砂混じりの灰色壌土が埋まっていた。埋土内からは須恵器の甕（31）と須恵器（杯蓋）、土師器、製塩土器の小・細片が出土した。土５も２段に落ち、東部は60cm×46cmの楕円状で深さ９～13cmを測る筒形を呈し、細・中粒砂の混じる暗オリーブ灰色砂質土で埋まっていた。埋土内からは須恵器（甕）、土師器、製塩土器の小・細片が出土した。土６は底面がほぼ平らであった。

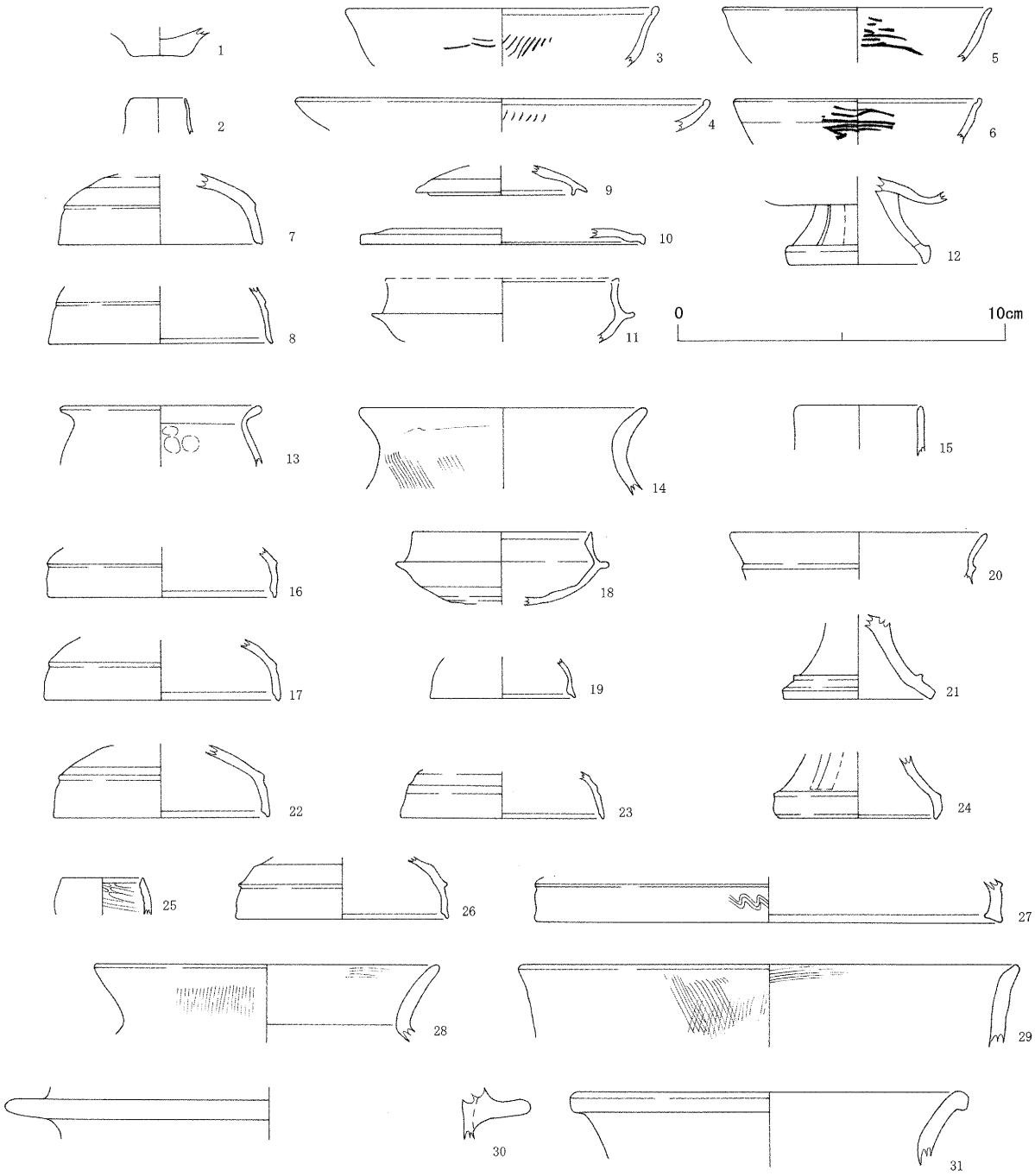
明確な時期は確定できないが、遺構および第６層内からは５世紀後半から７世紀代の須恵器・土師器が検出されていることから、これらの遺構は古墳時代後期～末ごろのものと思われる。

第５・６層で古墳時代後期～末および平安時代中葉ごろの遺構を確認したが、調査地が狭小であったこともあり、各時期の状況は不明である。

4）出土遺物（第６図　図版３）

今回の調査では、弥生土器（１・13)、土師器（３・４・14・28～30)、須恵器（７～12・16～24・26・27・31)、製塩土器（２・15・25)、黒色土器（５)、瓦器（６）が出土した。１～12は第３層、13～21は第４層、22～24は第５層、25～27は第３・４層、28～30は第３～５層、31は土４からの出土である。土器の胎土に、石英・長石・角閃石・雲母が含まれるものを生駒西麓産と記す。

１は、弥生土器の底部である。底径は 3.6cm で、内外面ともにナデが施される。Ｖ様式。２は、製塩土器である。器壁は非常に薄く、口縁端部は鋭く終わる。内外面ともにナデが施される。丸底と考えられる。３は、杯である。内湾気味に立ち上がり、口縁部を緩やかに外反させ、端部は丸くおさめる。口縁端部内面に段を有するがあまり明瞭ではない。内外面ともにナデ調整された後、外面には口縁部と平行したヘラミガキ、内面には放射状暗文が施される。時期は８世紀後半であろう。４は、皿である。底部から口縁部にかけてやや直線的に外方へと広がり、端部は内側へと丸くおさめ、内面に段を有する。内面には放射状暗文が施される。８世紀後半。５は、椀である。体部は内湾しており、口縁部で僅かに外反させる。内面には、密にヘラミガキが施される。外面調整は摩滅のため不明である。内黒であることから９世紀～10世紀中頃。６は、椀である。口縁部は外反しており口縁端部の内面には明瞭な段が認められる。内外面ともに口縁部に平行したヘラミガキが施される。時期は、11 世紀後半～12 世紀前半。７は、杯蓋である。天井部と口縁部の境にある稜は鈍く、口縁部はハの字に外反し、口縁端部に内傾する鈍い段を有する。天井部外面に２分の１程度の回転ヘラケズリが施され、内面と口縁部は回転ナデ調整を行う。胎土には１mm 程度の石英がやや多く含まれる。Ⅱ型式１段階。８は、杯蓋である。天井部と口縁部の稜は鈍く、ナデにより造り出している。口縁部はやや外反し、口縁端部には鈍い段がある。内外面とも回転ナデが施される。Ⅱ型式２段階。９は、杯蓋である。内面に付くかえりは、内傾しながら口縁端部よりも下方に延びる。内外面ともに回転ナデが施される。Ⅲ型式１段階であろう。10 は、杯蓋である。天井部は平らで、口縁端部を内側へと屈曲させることにより、内面に段を作り出す。天井部外面は丁寧な回転ヘラケズリが施される。Ⅳ型式２または３段階と考えられる。11 は、杯身である。内傾気味に立ち上がり、端部には内傾する段を有する。内外面ともに回転ナデが施されている。Ⅱ型式１段階。12 は、有蓋高杯である。脚部はハの字に外反し、端部には明瞭な段を有する。杯部の内面はナデが施され、外面には回転ヘラケズリが認められる。透かしの長辺が二箇所に残存していることから、長方形４方透しと推測される。Ⅰ型式５段階。13 は、甕である。口縁部は外反させ、端部は丸くおさめる。外面はナデ調整である。生駒西麓産。Ⅳ様式。14 は、甕である。口縁部は外反させ、端部は尖り気味である。肩部外面には粗いナナメハケが施される。内面の調整は摩滅しているため不明である。生駒西麓産。（辻 1999）の４または５段階と考える。15 は、製塩土器である。口縁部は直線的に伸び、端部は丸くおさめる。内外面ともにナデが施される。丸底と考えられる。16 は、杯蓋である。稜は鈍く、ナデによって稜を作り出す。口縁部は直下に下り、端部に内傾する明瞭な段を有する。内外面ともに回転ナデを施す。Ⅱ型式２段階。17 は、杯蓋である。稜は鈍く、口縁部は緩く外反させる。端部は内傾させることにより段を有するが、あまり明瞭ではない。内外面ともに回転ナデを施す。Ⅱ型式２段階。18 は、杯身である。内湾気味に立ち上がり、端部は内傾させて明瞭な段を形成する。受け部は比較的長く平行に伸び、丸く仕上げる。底部外面全体の約２分の１に回転ヘラケズリが施される。内面には回転ナデが施される。胎土には、１mm 程度の石英がやや多く含まれる。Ⅱ型式２段階。19 は、蓋である。天井部から口縁部にかけて丸くカーブを描き、端部は内傾



第６図　出土遺物実測図

させることにより明瞭な段を作り出す。内外面ともに回転ナデを施す。口径が 9.0cm と小さいことから、無頸壷の蓋となる可能性が高い。無頸壷の蓋ならⅡ型式３・４段階と推測される。

20 は、無蓋高杯である。体部は内湾し、外面に明瞭な段を作り出す。口縁部は外方へと直線的に伸び、端部は丸くおさめる。内外面は、回転ナデ調整である。Ⅱ型式２段階。21 は、高杯の脚部である。端部は四角く仕上げられる。端部のやや上方に断面三角形の凸線がめぐる。脚部の内外面ともに、回転ナデを施す。Ⅰ型式２段階と推測される。22 は、杯蓋である。天井部と口縁部の稜は鈍く、ナデにより作り出している。口縁部はやや外反し、口縁端部は内傾させて段を有するがあまり明瞭

ではない。天井部外面の約２分の１まで回転ヘラケズリが施される。内面には回転ナデが施される。胎土には１㎜程度の石英がやや多く含まれる。Ⅱ型式１段階。23 は、杯蓋である。杯部は浅く、口縁部は緩やかに外反し、端部は内傾させ段を作り出す。段はあまり明瞭でない。体部外面にある稜は、上下のナデによって僅かに稜が形成されている。調整は、内外面ともに回転ナデを施す。Ⅱ型式１段階。24 は、高杯の脚部である。端部で大きく下方へと屈曲させる。端部付近に凸線をめぐらせる。透かしの一辺が残存しており、長方形三方透かしと推測される。Ⅰ型式３または４段階であろう。25 は、製塩土器である。口縁端部は内傾しており、肩部に最大径を測る。外面はナデ調整、内面は貝殻調整である。丸底と考えられる。26 は、杯蓋である。天井部と口縁部の境の稜は、短いがやや鋭さを有している。口縁端部は内傾させることにより、段を有する。外面調整の回転ヘラ削りは２分の１程度で、内面調整はナデである。Ⅰ型式５段階。27 は、器台の脚端部である。小破片であるため、復元した径にやや不安はあるが、端部では内側へと肥厚させ、底部に面を持たせる。外面には波状文が施される。Ⅰ型式３段階。28 は、甕である。口縁部は外反させ、端部は尖り気味である。口縁部外面にはタテハケが施されているがあまり明瞭ではない。内面はヨコハケの後、ナデ調整を行う。肩部外面にススが付着している。生駒西麓産。時期は７世紀か。29 は、羽釜または甑と考えられる。口縁部は直線的に立ち上がり、端部を外方へと広げる。外面には粗いハケが格子状に施され、内面には口縁部と平行のハケ調整をした後、ナデを施す。７世紀の所産であろう。30 は、羽釜である。鍔の部分で直径は 32cm に復元できる。７世紀。31 は、甕の口縁部である。頸部から口縁部にかけて外反し、端部は外方へと肥厚させる。端部の断面は矩形で、突帯がめぐるような形状を呈する。内面の調整は灰の付着により不明で、外面はナデが施される。Ⅱ型式２段階と推測される。

【参考文献】

秋山浩三 1996「近畿南部の煮沸具―播磨・摂津・河内・和泉・紀伊・淡路―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東４　煮沸具―』古代の土器研究会第４回シンポジウム　古代の土器研究会

宮崎泰史・藤永正明編 2006『年代のものさし―陶邑の須恵器―』大阪府立近つ飛鳥博物館

寺沢薫・森井貞夫 1989「河内地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅰ　木耳社

辻　美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室

積山　洋 2004「大阪湾沿岸の古墳時代土器製塩」『畿内の巨大古墳とその時代』季刊考古学・別冊 14　雄山閣出版

中世土器研究会編 1995『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

５）まとめ

調査トレンチは約4.9㎡と極めて狭小なものであったが、古墳時代後期～末および平安時代中葉相当期の遺構を検出することができた。東方の３次調査で10世紀後半に埋没した建物および井戸が検出されており、第５層上面遺構はほぼこの時期に相当するものと思われる。また、古墳時代後期の溝が西方の１次調査地で確認されており、第６層上面遺構はこれとの関係がうかがえる。今回検出したピットが建物に伴うと思われる柱穴などであったと思われることから、調査地周辺にこれらの時期の集落があったことが知れよう。弥生土器、古墳時代後期の須恵器、瓦器なども出土してはいるが、いずれの遺構も確認することはできなかった。

調査範囲が小さく遺物も少量であったことから、各遺構時期の確定および性格については今後の周辺地での調査に期待したい。

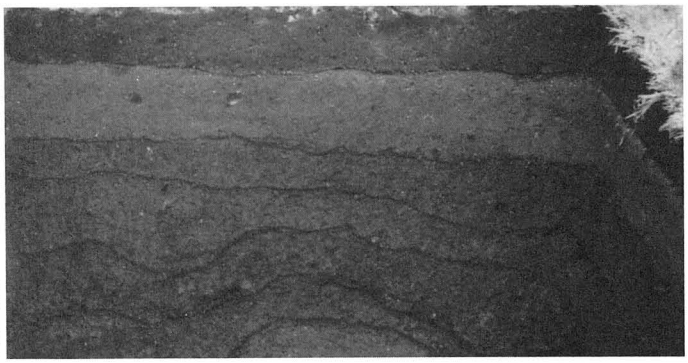
図版1　船山遺跡第8次調査　遺構

1.　調査地および調査トレンチ位置（南東から）

2.　機械掘削状況（北西から）

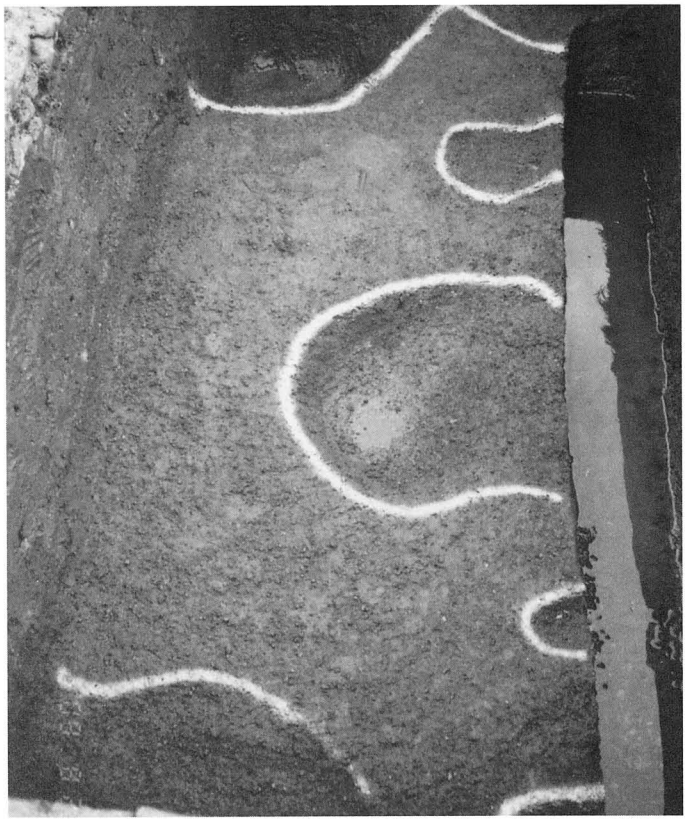
3.　調査トレンチ西壁面（東から）

図版2　船山遺跡第8次調査　遺構

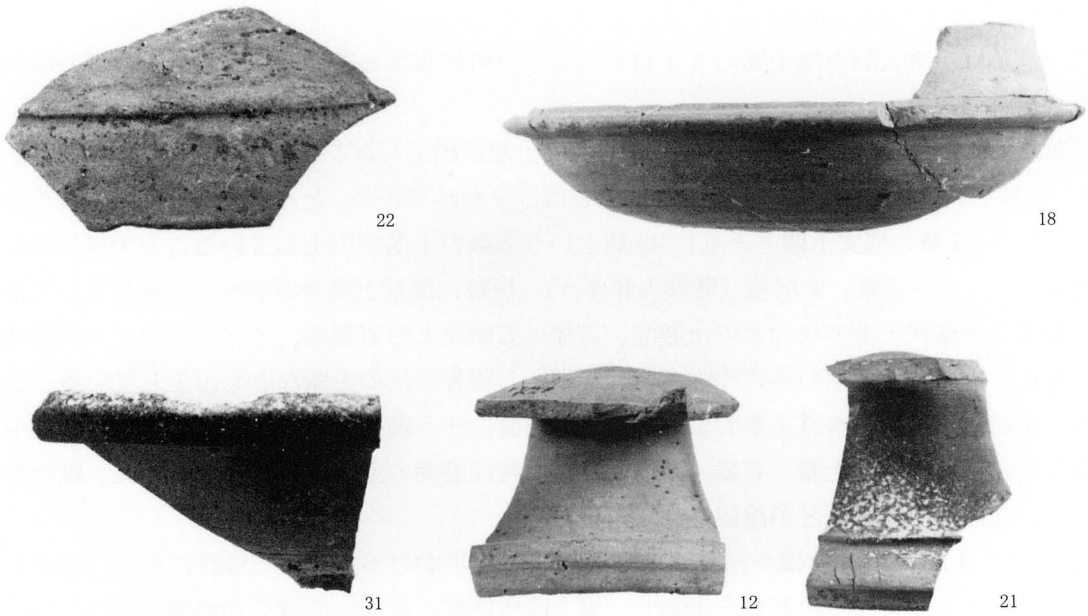


1.　調査トレンチ南壁面（北より）

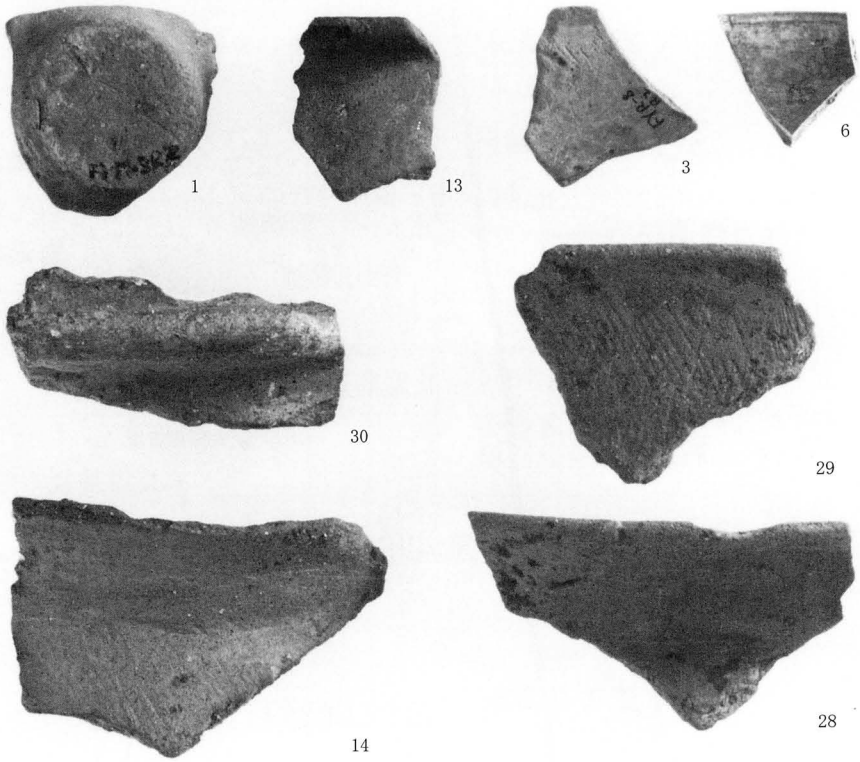
2.　第5層上面遺構（北より）



2.　第6層上面遺構（北より）



1. 第3・4・5層出土須恵器　杯蓋・杯身・高杯、土4出土須恵器　甕



2. 第3層出土弥生土器　甕、土師器　杯、瓦器　椀、第4層出土土師器　甕、第3～5層出土土師器　羽釜・甑

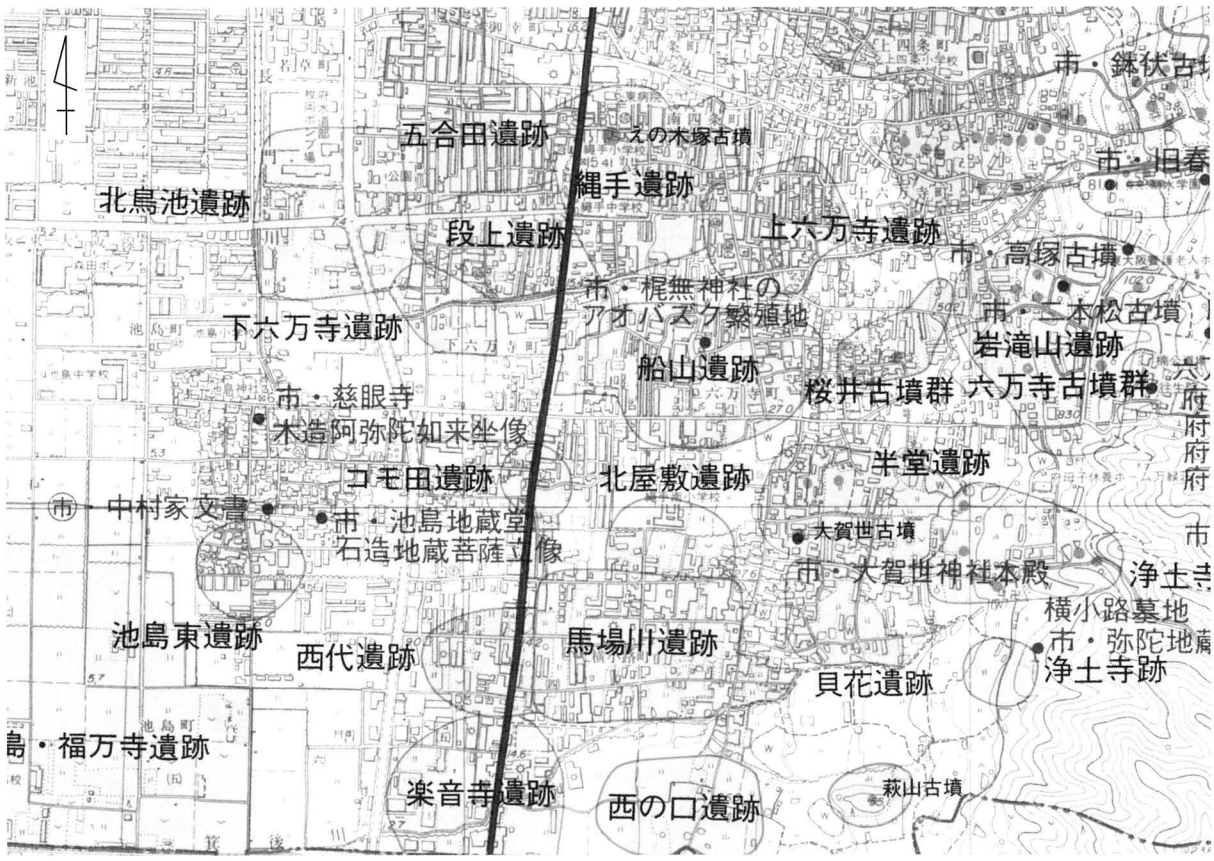
第４章　馬場川遺跡第 20 次発掘調査

１）はじめに

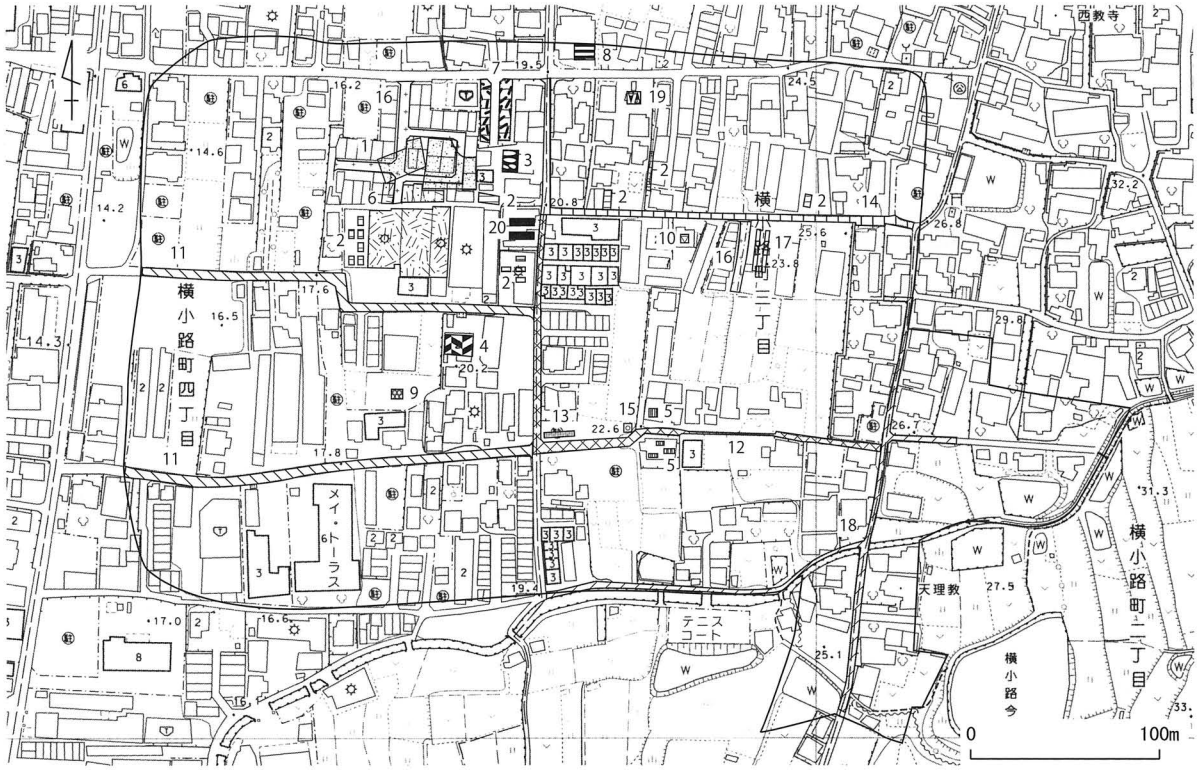
馬場川遺跡は、東大阪市横小路町３丁目から４丁目町に広がる縄文時代中期末から江戸時代にわたる複合遺跡である。

本遺跡は、昭和 42 年工場建設に伴い多量の縄文土器が出土したことから、その存在が明らかとなり、それ以降これまでに 20 次におよぶ発掘調査は行なわれてきた。とくに縄文時代の集落遺跡としてよく知られ、多量の縄文土器とともに 49 個という多数の土偶が出土していることで周知されている。遺構としては住居跡、土坑墓（埋葬人骨伴う）、炉跡、埋設土器などがあり、遺物としては他に動物・勾玉・半球状・十字状などの土製品、石棒・石鏃などの石製品、イノシシなどの動物遺体もある。また、古墳時代前期の井戸や弥生時代後期から鎌倉時代の土器なども出土している。近年、遺跡南・東部において下水道工事および個人住宅建設に伴う調査が行なわれ、縄文時代晩期中葉の土坑墓などの遺構と縄文土器・石器・土製品と古墳時代前期の土器、白鳳期などの瓦、鎌倉時代の溝・土坑、瓦器・土師器などが確認されている。

平成 21 年７月 28 日付けで横小路町４丁目 433 - ３番地における分譲住宅建設に先立つ造成工事の届出があり、８月４日に確認調査を実施し、縄文時代晩期の遺物包含層などが確認された。この結果に基づき、代理者を通して協議を行なわれ、位置指定道路部分については立会調査、柱状改良工事を伴う住宅建設部分については発掘調査を行なうことになった。発掘調査は９月 17 日から 10 月 31 日までの間、道路部分の埋設管工事に伴う立会調査は 12 月３日に実施した。



第１図　調査地周辺図（1/15000）



第２図　調査地位置図

第１表　調査歴表

次数 理由	調査期間	調査地	調査面積 ㎡	概・報告書	概要
1 範囲	S44.7.10～9.18	横小路町４丁目	1000	『埋蔵文化財包蔵地調査概報 4　馬場川遺跡Ⅰ』1970	竪穴住居、炉、埋設土器、溝、縄文晩期土器、石鏃、石斧、石皿、敲石、土偶、玉、弥生後期土器
2 範囲	S45.7.18～8.28	横小路町 3～4 丁目	1000	『馬場川遺跡調査概報Ⅱ』1970.10 『埋蔵文化財包蔵地調査概報 6　馬場川遺跡Ⅱ』1971.3	土坑墓、竪穴住居、縄文中期・後期・晩期土器、土偶、土製品、石鏃、石錘、玉類、動物遺体、弥生後期土器、須恵器、土師器
3 範囲	S49.8.5～8.27	横小路町４丁目 434・744	120	『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 14 馬場川遺跡Ⅲ』1975	井戸、縄文土器後期末～晩期土器、土偶、土製品、石製品、動物遺体
4 個人	S50.2.14～2.17	横小路町４丁目 744	33	『馬場川遺跡発掘調査報告』1977.3	井戸、弥生後期土器、土製品
5 範囲	S50.8.2～9.16	横小路町４丁目 406-2、横小路町 3 丁目 735・1157	60	『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 16 馬場川遺跡発掘調査概要Ⅳ』1976	縄文後期土器、石鏃、石錘、土師器
6 確認	S55.10.23～11.29	横小路町４丁目 417	500	『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報 22 馬場川遺跡・上六万寺遺跡・山畑 66 号墳調査報告』1981.3	ピット群、炉、縄文晩期土器、石鏃、横刃型石器、石刀、石錘、凹石、磨石、土偶、弥生土器
7 分譲	H5.2.22～2.26	横小路町４丁目 436-11、17	10	『馬場川遺跡発掘調査報告』2000.9.31	
8 住宅	H5.10.18～11.29	横小路町３丁目 167-1	327	『馬場川遺跡発掘調査報告』2000.9.31	
9 浄化	H6.5.9～5.13	横小路町４丁目 746、745-1	15.75		縄文土器
10 浄化	H7.12.4～12.7	横小路町３丁目 452-3	13.5		縄文土器

11 下水	H11.8.23～H12.2.22	横小路町 4 丁目	371	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告　平成 11 年度』2000.3.31	縄文後期土器、弥生後期土器、石錘、石棒、削器
12 下水	H13.5.1～10.12	横小路町 3 丁目	279	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告　平成 13 年度』2002.3.31	縄文晩期土器、石製品、弥生土器、土師器、須恵器
13 個人	H14.11.6～11.27	横小路町 3 丁目 1150-3	30	『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報平成 14 年度』2003.3.31	土坑墓、土坑、ピット、溝、縄文晩期土器、弥生土器、石鏃、石匙、石刀、石錘、石玉、土玉
14 下水	H14.5.22～5.22	横小路町 2・3 丁目 437 ～ 476-4 、 490 ～ 546 、 582-3 ～ 604	341	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告　平成 14 年度』2003.3.31	縄文晩期土器
15 個人	H15.3.26	横小路町 3 丁目 1151-3 の一部	2	『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報平成 15 年度』2004.3.31	縄文晩期土器、土師器、石斧
16 下水	H16.5.6～7.26	横小路町 4 丁目 417～427	298	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告　平成 16 年度』2005.3.31	縄文晩期土器、須恵器
17 賃貸 共同	H17.9.12～9.22	横小路町 3 丁目 460	77	『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報平成 16 年度』2005.3.31	鋤溝、溝、落ち込み、土坑、縄文晩期土器、石鏃、磨石、土製品、須恵器、土師器、瓦（白鳳～平安）
18 下水	H17.5.9～8.31	横小路町 3 丁目 721～1147	274	『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告　平成 17 年度』2006.3.31	縄文晩期土器、土師器、瓦
19 個人	H18.6　～	横小路町 3 丁目 449-1・2	1.4	『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報平成 18 年度』2007.3.31	縄文土器晩期、弥生土器、石鏃、石棒、磨石
20 分譲	H21.9.17～10 .31	横小路町 4 丁目 433 - 3	184.7	本書	土坑墓、埋設土器、炉、貯蔵穴、環状遺構、地震跡、竪穴住居、縄文後期・晩期土器、土偶、土製品、石鏃、石斧、弥生後期土器

＜遺構表記について＞

遺構番号は検出層によって表記方法を変えた、以下のとおりである。

5 層上面遺構　北トレンチ　土坑 - アラビア数字（土１、土２など）　溝 - アラビア数字（溝１、溝２）

土１（竪穴住居）内のピット - 単に小ローマ字（ａ・ｂなど）　溝 - 大ローマ字（溝Ａ・溝Ｂ）

9 層上面遺構　北トレンチ　土坑 - 漢数字（土一、土二など）　ピット - 漢数字（土Ｐ一、Ｐ二など）

南トレンチ　土坑 - アラビア数字（土１、土２など）

10 層上面遺構　北トレンチ　土坑 - ローマ数字（土Ⅰ、土Ⅱなど）　ピット - 小ローマ字（Ｐａ・Ｐｂなど）

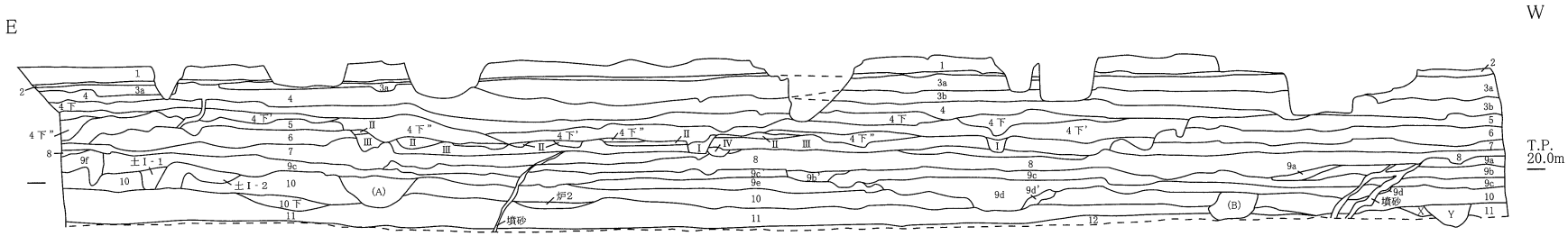
南トレンチ　土坑 - ローマ数字（土Ⅰ、土Ⅱ）　ピット - 小ローマ字（Ｐａ・Ｐｂ）

11 層上面遺構　北トレンチ　土坑 - 大ローマ字（土Ａ・土Ｂなど）　ピット - 大ローマ字（ＰＡ・ＰＢなど）、炉

南トレンチ　土坑 - 大ローマ字（土Ａ・土Ｂなど）　ピット - 漢数字（土Ｐ一、Ｐ二など）　溝１、大溝

12 層上面遺構　南トレンチ　ピット - 大ローマ字（ＰＡ・ＰＢなど）　炉、自然流路（流路）

＊検出面と実際の形成層が異なる場合がある（例　土Ⅴは９層上面の遺構など）。



北トレンチ南壁面

北トレンチ　南・西壁

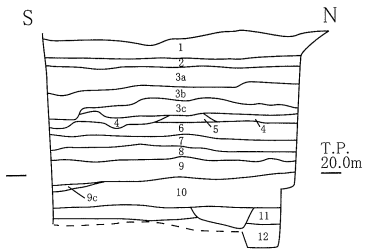
1：緑灰色 10G5/1 砂混じり粘土質シルト
2：明黄褐色 10YR6/6・黄灰色 2.5Y6/1 砂礫混じりシルト質粘土
3a：灰黄色 2.5Y6/2 砂礫混じり砂質土
3b：灰黄褐色 10YR5/2 砂礫・シルト混じり砂質土
3c：にぶい黄色 2.5Y6/4 砂混じりシルト質土
4：黒褐色 10YR3/2 砂礫混じりシルト質土
4下：褐灰色 10YR4/1 砂礫混じり粘土質シルト
4下’：黒褐色 10YR3/1・褐灰色 10YR4/1 砂礫混じりシルト質土　やや砂質
4下”：褐灰色 10YR5/1 砂礫混じりシルト質土
5：灰オリーブ色 5Y5/2・灰黄褐色 10YR5/2 礫混じり粗～細粒砂
6：オリーブ黄色 5Y6/3・にぶい黄色 2.5Y6/3 砂礫混じり粘土　ややシルト質
7：灰色 5Y4/1・褐灰色 10YR5/1 砂礫混じりシルト質粘土
8：黒褐色 10YR2/2 砂礫混じりシルト質土
9a：黄灰色 2.5Y5/1・にぶい黄色 2.5Y6/4 砂礫混じり砂質シルト
9b：灰色 5Y4/1 砂礫混じりシルト質土
9b’：灰色 5Y5/1 砂礫混じりシルト　やや砂質
9c：黄灰色 2.5Y4/1・灰オリーブ色 5Y5/2 砂礫混じり粘土質シルト　粘質やや強い
9d：灰色 5Y4/1 砂礫混じりシルト質土　にぶい黄色 2.5Y6/4 砂含む
9d’：灰色 10Y5/1・灰色 7.5Y6/1 砂礫混じりシルト質砂
9e：黄灰色 2.5Y5/1・にぶい黄色 2.5Y6/4 砂礫混じりシルト質土　ややシルト強い
9f：褐灰色 10YR5/1 砂礫混じりシルト質土
10：灰色 10Y4/1 砂礫混じり粘土質シルト、炭やや多く含む
10 下：褐灰色 10YR4/1 砂礫混じりシルト質土　砂やや多い
11：灰色 7.5Y4/1 砂礫混じり粘土質シルト　砂やや多い
12：にぶい黄色 2.5Y6/4 粗～細粒砂
　にぶい黄色 2.5Y6/4・オリーブ黄色 5Y6/3 シルト質砂
13：にぶい黄色 2.5Y6/4・明黄褐色 2.5Y6/6 シルト質粘土

竪穴住居内埋土等

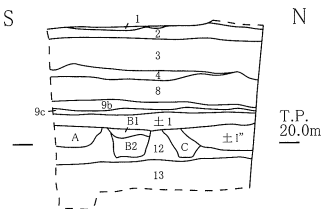
Ⅰ：黄灰色 2.5Y5/1 砂礫混じり砂質土
Ⅱ：灰色 5Y5/1・灰色 7.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土
　黄褐色 10YR5/6・灰白色 5Y7/1 シルトブロック・炭含む
Ⅲ：灰色 7.5Y5/1 砂混じり粘質土　灰オリーブ 5Y6/2 シルト・砂質シルトのブロック含む
Ⅳ：灰色 10Y5/1 砂・シルト混じり粘質土
噴砂：灰黄色 2.5Y7/2・黄灰色 2.5Y5/1 粗～細砂
土Ⅰ-1：灰黄褐色 10YR5/2 砂礫
土Ⅰ-2：暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫
(A)：暗緑灰色 7.5GY3/1 砂礫混じりシルト質土
(B)：オリーブ黒色 7.5Y3/1 砂礫混じりシルト質土
X：灰色 7.5Y4/1 砂礫混じり粘土質シルト
Y：灰色 10Y5/1 砂礫混じり粘土質シルト
炉2：橙色 7.5YR6/6・にぶい橙色 7.5YR6/4 砂混じりシルト質粘土

南トレンチ　西壁

1：緑灰色 10G6/1 砂混じりシルト質土
2：明褐色 7.5YR5/6 砂混じりシルト
3a：にぶい黄褐色 10YR5/4 砂混じりシルト質土
4：黒褐色 10YR3/1 砂礫混じりシルト質土
8：暗青灰色 5B4/1 砂礫混じりシルト質土
9b：灰色 10Y5/1 砂・シルト混じり砂質土
9c：黄灰色 2.5Y4/1・灰オリーブ色 5Y5/2 砂礫混じり粘土質シルト　粘質やや強い
12：にぶい黄色 2.5Y6/4 粗～細粒砂。相当　にぶい黄色 2.5Y6/4・オリーブ黄色 5Y6/3 シルト質砂
13：にぶい黄色 2.5Y6/4・明黄褐色 2.5Y6/6 シルト質粘土
土1：2 の褐灰色 10YR4/1 砂礫混じりシルト質土
土I：黄灰色 2.5Y5/1・オリーブ黄色 5Y6/3・暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じり砂質シルト
A・C・B2：黄灰色 2.5Y5/1 砂礫混じり砂質シルト　灰色 5Y4/1 砂質シルト・炭含む
B1：にぶい黄色 2.5Y6/4・オリーブ黄色 5Y6/3 シルト質砂



北トレンチ西壁面



南トレンチ西壁面

0　2m

第3図　北・南トレンチ断面図

2）基本層位（第３図　図版１）

表土・盛土

１層　緑灰色砂混じり粘土質シルト　旧耕土

２層　明黄褐色・黄灰色砂礫混じりシルト質粘土　旧床土

３層ａ　灰黄色砂礫混じり砂質土

ｂ　灰黄褐色砂礫・シルト混じり砂質土

ｃ　にぶい黄色砂混じりシルト質土 等。磁器片など出土。江戸時代。

４層　黒褐色砂礫混じりシルト質土 等。灯明皿、黒色土器、須恵器、土師器、弥生土器、縄文土器、サヌカイト片出土。江戸時代。

５層　灰オリーブ色・灰黄褐色礫混じり粗～細粒砂。弥生土器、縄文土器、サヌカイト片出土。弥生時代。北トレンチ第１遺構面。

６層　オリーブ黄色・にぶい黄色砂礫混じり粘土（ややシルト質）。縄文土器、石製品、サヌカイト片出土。

７層　灰色・褐灰色砂礫混じりシルト質粘土。縄文土器、土製品、石製品、サヌカイト片出土。縄文時代晩期。噴砂跡。

８層　黒褐色砂礫混じりシルト質土。縄文土器、土製品、石製品、サヌカイト片出土。縄文時代晩期。

９層ａ　黄灰色・にぶい黄色砂礫混じり砂質シルト

ｂ　灰色砂礫混じりシルト質土

ｃ　黄灰色・灰オリーブ色砂礫混じり粘土質シルト　粘質やや強い　等。縄文土器、石製品、土製品、サヌカイト片出土。縄文時代晩期。北トレンチ第２遺構面。南トレンチ第１遺構面。

10層　灰色砂礫混じり粘土質シルト、炭やや多く含む。縄文土器、石製品、サヌカイト片出土。縄文時代晩期。北トレンチ第３遺構面。南トレンチ第２遺構面。

11層　灰色砂礫混じり粘土質シルト　砂やや多い。縄文土器、石製品、サヌカイト片出土。縄文時代後期・晩期初頭相当。北トレンチ第４遺構面。南トレンチ第３遺構面。

12層　にぶい黄色粗～細粒砂、にぶい黄色・オリーブ黄色シルト質砂。縄文土器片出土。縄文時代後期。南トレンチ第４遺構面。

13層　にぶい黄色・明黄褐色シルト質粘土。

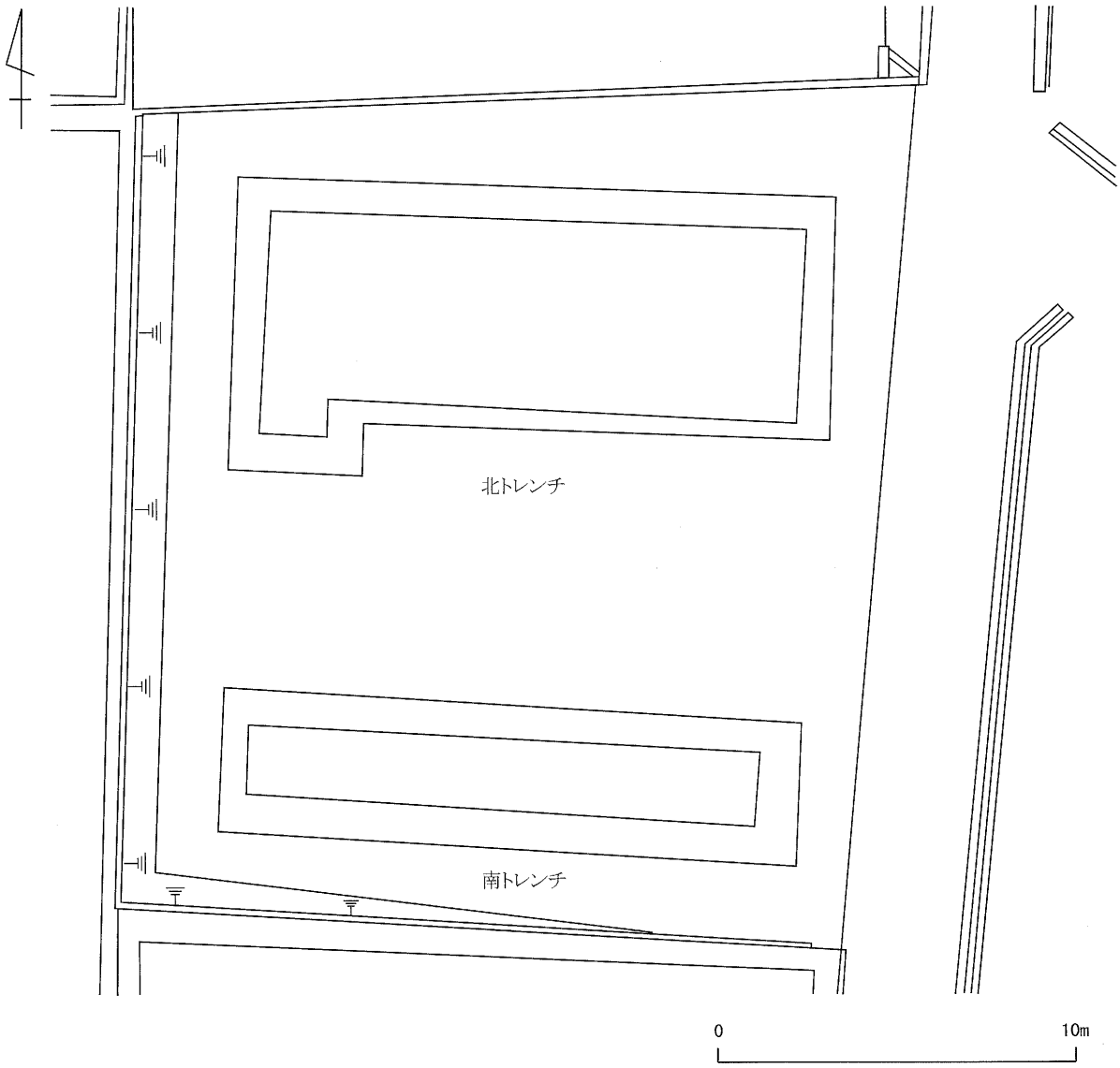
３）遺構

調査は、北トレンチ・南トレンチとも、確認調査で確認した盛土および１層の耕土、２層の床土、３層の江戸時代以降の堆積・埋土と現代の撹乱坑の大半を機械掘削と人力掘削によって除去し、４層以下を層ごとに人力掘削し、遺物・遺構を検出していった。５層以下で検出した遺構は層・トレンチごとに一覧表を作成し、個々の遺構の計測値、埋・堆積土、出土遺物を列記した。本文における遺構説明は主なものに限った。

12月３日に行なった下水管埋設工事に伴う立会調査では、７層相当の縄文時代晩期後半の遺物包含層を検出したが、工事では抵触しないことを確認した。

３層には瓦器・土師器の細片が少量みられたが、磁器片があり、江戸時代の埋土、堆積層。

４層の黒褐色砂礫混じりシルト質土は少量の土師器＝灯明皿、黒色土器、須恵器、弥生土器、縄文土器片を包含した江戸時代の整地層であるが、遺構はなかった。５層が弥生時代後期の整地層であり、古墳時代から中世の層はなく江戸時代の整地時に削平されたものと思われる。



第４図　調査トレンチ位置図

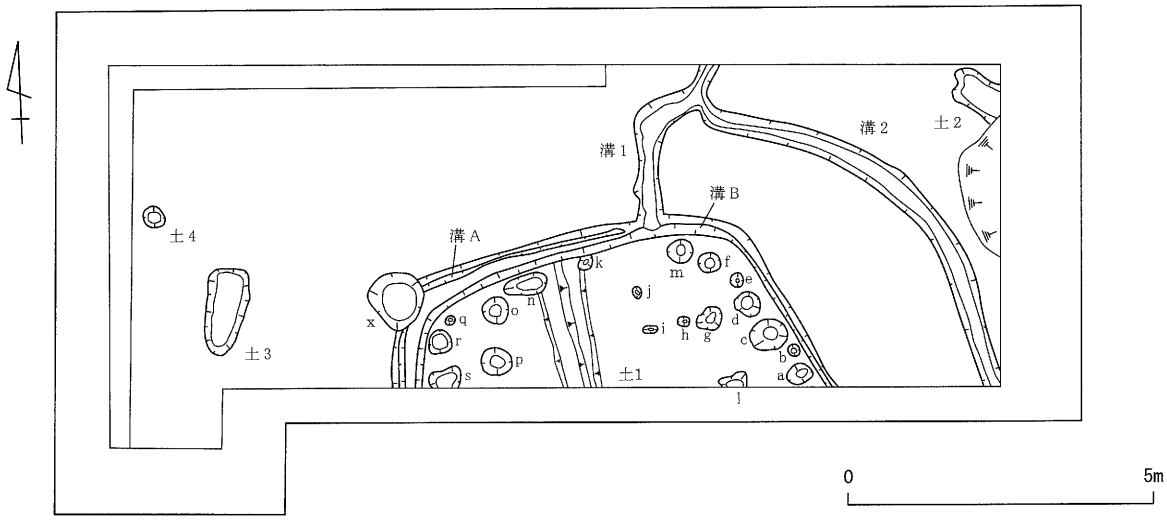
５層上面遺構－北トレンチ第１遺構面－（第５図　図版１）

５層は灰オリーブ色等の粗～細粒砂で、弥生土器（Ｖ様式甕など）、縄文土器、サヌカイト片が出土した。北トレンチにおいては竪穴住居跡（土坑１）－内ピット20個（a～ｓ・ｘ）、溝２条（溝Ａ・Ｂ）－と土坑３基（土２～４）、溝２条（溝１・２）と多数の小ピット（植物根跡）を検出した。南トレンチでは遺構は見られず、６層ともほとんどなかった。

溝１は竪穴住居内の溝Ｂに接続し、北そして東に曲折してさらに北へ延び、溝２はその曲折箇所から南東－南へ湾曲して延びる。断面は逆台形状を呈していた。埋土は暗灰色・灰オリーブ色砂混じりシルト質土で、溝１から弥生土器壷（34）・長頸壷（35）などが出土した。

竪穴住居跡－土１－（第５・６図　図版２）

トレンチ内で隅丸五角形の竪穴住居跡の北側を検出した。東西幅6.5m、検出南北幅3.2～2.0m、深さ0.335mを測り、内縁に沿った幅0.18～0.12m深さ0.08mの壁溝（溝Ｂ）があり、北西部および西外側には幅0.12～0.08m深さ0.06mの二重目の壁溝（溝Ａ）と西北隅には円形ピット（ｘ）があった。外側の溝ＡおよびｘはＶ拡幅時のものである。北辺の溝Ｂの東よりからは住居外の北へ延びる溝１に接続していた。

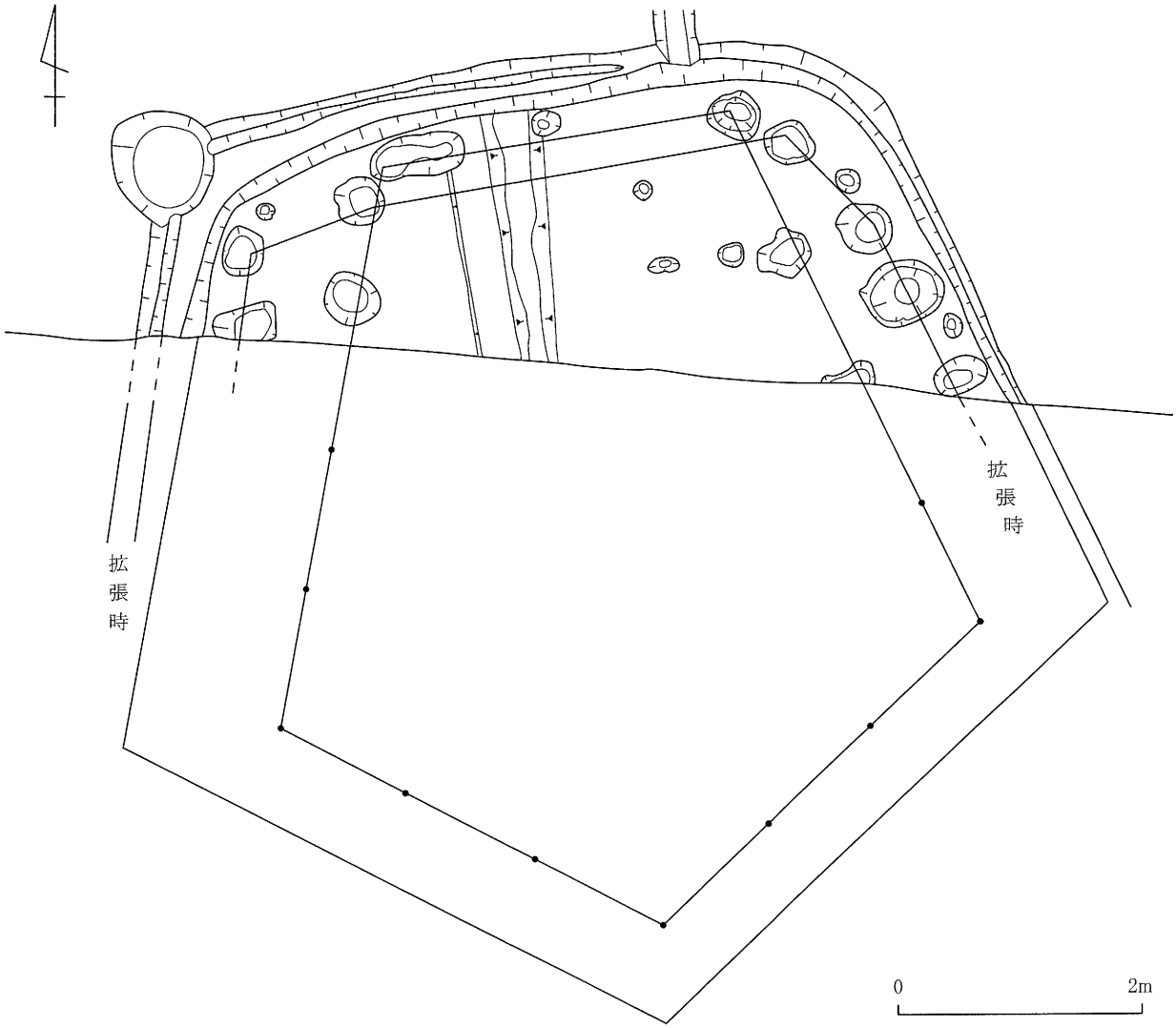


第５図　北トレンチ５層上面遺構平面図

第２表　北トレンチ５層上面遺構表

遺構	規模 cm(：は検出)	土色・質	遺物	備考
土１	750 × :240　深 33.5	1 褐灰色 10YR4/1 砂・小礫混じり砂質土 2 黄灰色 2.5Y5/1 砂・小礫混じり土、黄褐色 10YR5/6 シルトブロック・大礫を含む 3 灰色 5Y5/1・灰色 7.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土 大礫、黄褐色 10YR5/6・灰白色 5Y7/1 シルトブロック含む 4 灰色 7.5Y5/1 砂混じりシルト質土　灰オリーブ色 5Y6/2 シルトブロック・灰オリーブ色 5Y6/2 砂混じりシルトまばらに含む	弥生土器（壷・甕）・製塩土器・縄文土器（深鉢・浅鉢）、石斧、サヌカイト片	竪穴住居
a	40×30　深 13.2	1 暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土 2 灰色 7.5Y4/1 砂混じりシルト質土 3 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 砂混じり粘質土	縄文土器片	住居内
b	20×13　深 8.1	暗灰色 N3/、灰オリーブ色 5Y5/3 砂混じりシルト質土　炭含む 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 砂質土	縄文土器片	同
c	60×52　深 8.3	1 暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土 2 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 砂質土		同
d	45×40　深 15.4	1 暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土 2 灰色 10Y4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	同
e	19×18　深 7.6	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	同
f	36×34　深 4.2	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片	同
g	42×40　深 12.9	暗灰色 N3/、灰オリーブ色 5Y5/3 砂混じりシルト質土　炭含む	縄文土器片、サヌカイト片	同
h	20×18　深 4.8	灰色 7.5Y5/1・灰オリーブ色 5Y5/3 砂質土		同
i	26×13　深 5.7	1 灰色 7.5Y5/1・灰オリーブ色 5Y5/3 砂質土 2 暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	同
j	20×13　深 11.2	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土		同
k	15×14　深 6.2	灰色 7.5Y5/1・灰オリーブ色 5Y5/3 砂質土		同
l	44×:23　深 12.3	灰色 7.5Y5/1・灰オリーブ色 5Y5/3 砂質土	縄文土器片	同
m	44×36　深 13.6	暗灰色 N3/、灰オリーブ色 5Y5/3 砂混じりシルト質土　炭含む		同
n	69×32　深 10.2	暗灰色 N3/、灰オリーブ色 5Y4/2 砂混じりシルト質土　炭含む 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 砂質土	縄文土器片、サヌカイト片	同
o	40×37　深 18.2	1 暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土 2 灰オリーブ色 5Y4/2 砂混じりシルト質土		同
p	48×43　深 10.1	暗灰色 N3/、灰オリーブ色 5Y4/2 砂混じりシルト質土　炭含む	縄文土器片、サヌカイト片	同
q	13×12　深 5.2	灰色 7.5Y5/1・灰オリーブ色 5Y5/3 砂質土		

r	50×41　深 6.1	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	同
s	51×:32　深 5.1	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片	同
x	92×90　深 48.2	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土 灰色 7.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土	弥生土器（甕・鉢）、サヌカイト片	同
溝 A	幅 8~12、深 4.5~6	暗灰色 N3/、灰オリーブ色 5Y5/3 砂混じりシルト質土　炭含む	縄文土器片	同
溝 B	幅 18~12　深 6.5～8	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片	同
溝 1	幅 43~23 深 10～15	暗灰色 N3/、灰オリーブ色 5Y5/3 砂混じりシルト質土	弥生土器片（壷）、縄文土器片（深鉢）、サヌカイト片	
溝 2	幅 42~26、深 10～20	暗灰色 N3/、灰オリーブ色 5Y4/2 砂混じりシルト質土	弥生土器片（壷）、縄文土器片、サヌカイト片	
土 2	96×:56　深 6.1	灰色 5Y5/1 砂混じり砂質土	縄文土器片、サヌカイト片	
土 3	146×62　深 12.5	灰白色 5Y7/1 細粒砂、灰色 5Y5/1 砂混じり砂質土	縄文土器片（深鉢・浅鉢）、サヌカイト片	
土 4	37×32　深 5.5	灰色 5Y5/1 砂混じり砂質土	縄文土器片、サヌカイト片	



第 6 図　竪穴住居平面想定図

西への拡張があるため正確な寸法は不明であるが、当初のものは北辺約5.35mを測り、床面（壁溝＝溝Ｂ内）の北辺は5.05m、東西の各角度108°を測る。このことから平面プランは隅丸正五角形。柱穴のｍ・ｇ・ｌ東列とｎ・ｐ西列は柱間 1.2mを測る当初のものであり、拡張後はａ・ｃ・ｄ・ｆ東列とｏからｒ・ｓ西列と、より外側に柱を設置し、貯蔵穴のｘを設けていた。床面が７・８層まで達していたことから、住居内および柱穴・溝の埋土内などからは弥生土器片とともに縄文土器小・細片、土偶（38）、石斧（56）、サヌカイトも出土しているが、ｘから弥生土器の甕（32）・鉢（33）、上記の溝１から弥生土器の壷・長頸壷などが出土している。弥生時代後期後葉。

７層上面地震跡（図版２）

７層は灰色砂混じり粘土質シルトで、縄文土器の深鉢・浅鉢、石刀（54）、動物形土製品（40）、サヌカイト片など多数の遺物を包含していた。縄文土器は後期末の宮滝式・滋賀里Ⅰ式、晩期の滋賀里Ⅱ式・Ⅲａ式・篠原式もあったが滋賀里Ⅳ式が出土しており、晩期後半の整地層である。北トレンチのこの層の上面において、ほぼ東－西方向に走る幅３～８㎝、長さ約２～８ｍの噴砂筋を６本検出し、南断面でも２箇所確認した（第３図）。

上層の６層からは石鏃（46・47）、サヌカイト片とともに縄文土器の深鉢・浅鉢・注口土器（篠原式など）が出土しているが弥生土器はない。下層の８層からは土偶（36・37）、半球形土製品（41・42）、石鏃（48・49）、サヌカイト片などとともに後期末の宮滝式・滋賀里Ⅰ式、晩期の滋賀里Ⅱ式・篠原式の縄文土器が出土しており、地震は縄文時代晩期末のものと考えられる。

９層上面遺構－北トレンチ第２遺構面、南トレンチ第１遺構面－（第７図 第３表 図版２・３）

９層はにぶい黄褐色・灰色砂混じりシルト質土、灰色砂・シルト混じり砂質土、黄灰色・灰オリーブ色砂礫混じり粘土質シルトなどで、縄文土器（後期末の宮滝式・滋賀里Ⅰ式、晩期の滋賀里Ⅱ式・篠原式など）、石鏃（50）、サヌカイト片などを包含した縄文時代晩期中葉の整地層である。北トレンチではピット22個（Ｐ一～二二）　土坑９基（土一～八、Ｖ）、南トレンチでピット１個（Ｐ１）と土坑４基（土１～４）を検出した。

北トレンチのＰ十四・土Ｖと南トレンチの土３は、内に深鉢が埋納された、いわゆる埋設土器である。

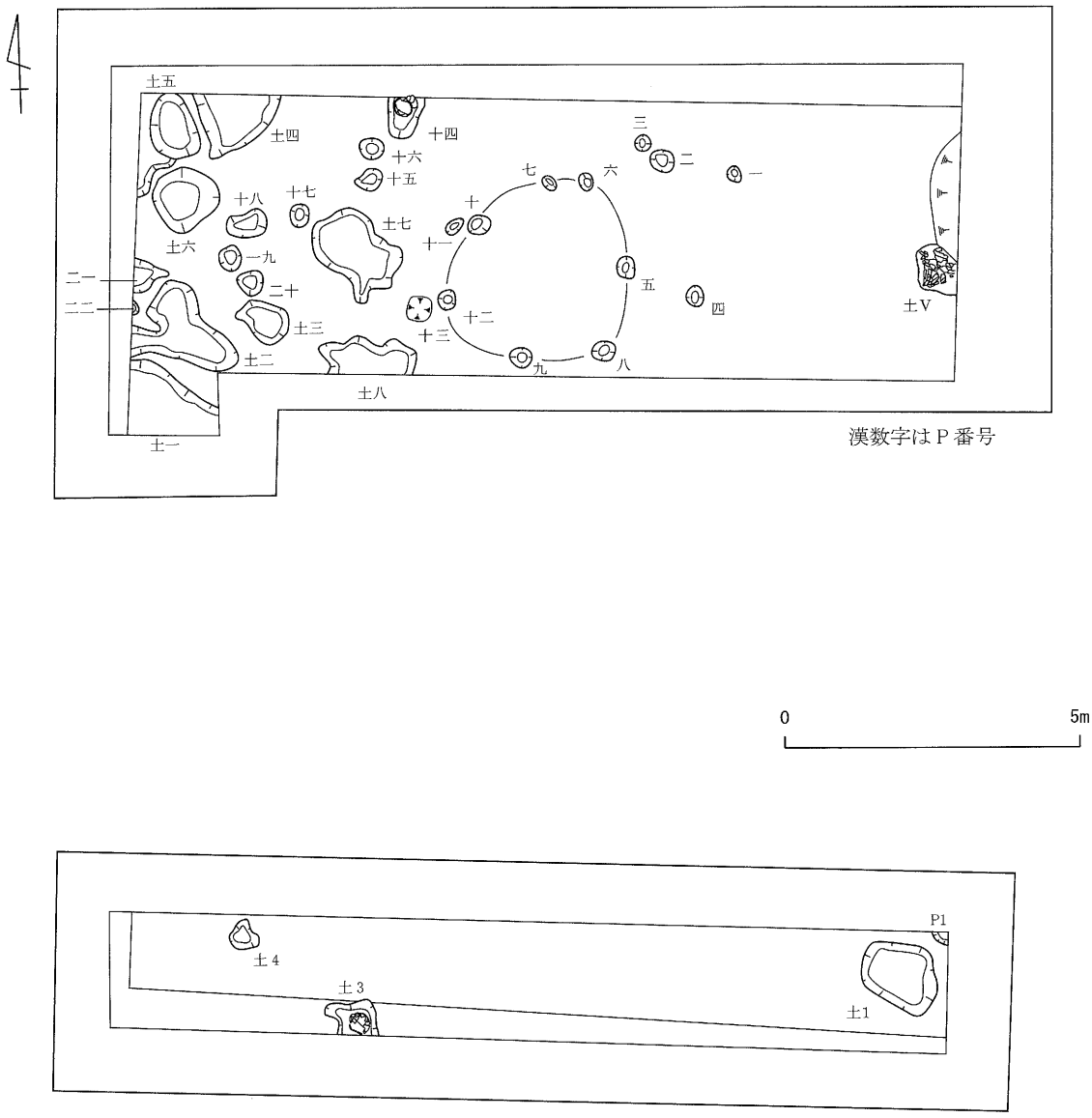
北トレンチ

Ｐ十四（第９図　図版３）は、北壁外および北側溝により北側が切断され明確な形状は不明であるが、南北方向に長い土坑で、内に深鉢（15）が斜位で埋納されていた。深鉢は土坑掘削底面から北北東に約65°傾けられ、口縁を斜め上方にむけられていた。埋納に際し北東部外上部に別の深鉢片（16）を添えて安定させてあった。

土Ｖは（第10図　図版６）は、調査地東端の撹乱部南で９層掘削後に東壁に沿って検出したため土坑形状は不明である。東壁断面において９層から掘り込まれたものであることを確認した。土坑内からは２個体の分の深鉢（18・19）が出土した。18は口縁を北方向、19は西方向にＬ状にして横位で埋納されていた。

土一は、南西隅で検出したため形状は不明である。埋土内からは縄文土器深鉢（20・21）やサヌカイトの石核・破片などが出土した。

土二は、「卜」状を呈する土坑である。東西方向に長く北に径85㎝、深さ10㎝の不正円形の突出部があった。不正円形突出部には多量の焼人骨細片が集積して埋納されていた。その細片の少量は東西長坑部にも散乱していた。焼人骨細片群は成人で、火葬されたのち土坑内に改葬されたものと思われる。



第７図　北・南トレンチ９層上面遺構平面図

第３表　９層上面遺構表

北トレンチ

遺構	規模 cm(:は検出)	土色・質	遺物	備考
Ｐ一	28×24　深 19.0	オリーブ灰色 5GY5/1 砂礫混じり砂質土	縄文土器片	
Ｐ二	40×36　深 15.5	黄灰色 2.5Y5/1 砂礫混じりシルト質土		
Ｐ三	28×22　深 7.5	オリーブ灰色 2.5GY5/1 砂礫混じり砂質土　炭含む	縄文土器片、サヌカイト片	
Ｐ四	35×28　深 11.8	灰色 7.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土　炭含む	縄文土器片	
Ｐ五	37×30　深 22.8	灰色 10Y5/1・暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	
Ｐ六	26×25　深 14.7	灰色 10Y5/1・暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
Ｐ七	30×21　深 12.6	オリーブ灰色 5GY5/1 砂礫混じりシルト質土　やや粘土質	縄文土器片	
Ｐ八	45×33　深 13.1	灰色 10Y5/1・暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土		
Ｐ九	37×34　深 7.5	灰色 10Y5/1・暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土		
Ｐ十	40×35　深 5.8	灰色 10Y5/1・暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
Ｐ十一	27×22　深 8.7	オリーブ灰色 2.5GY6/1 粘土質シルト		
Ｐ十二	32×30　深 8.8	灰色 10Y5/1・暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
Ｐ十三	50×41　深 2.1	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	弥生土器片（甕）	弥生住居内ｒの残欠番

P十四	:68×59　深 28.3	1 オリーブ灰色 5GY5/1 砂礫混じりシルト質土 2 灰色 5Y6/1 砂礫混じりシルト質土 内灰色 10Y5/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器（深鉢）	＊埋設土器
P十五	46×32　深 6.0	オリーブ灰色 5GY5/1 砂礫混じりシルト質土 炭含む	縄文土器片	
P十六	35×34　深 5.3	緑灰色 7.5GY6/1 砂礫混じりシルト質土 炭含む	縄文土器片	
P十七	39×36　深 5.3	黄灰色 2.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土 炭含む	縄文土器片	
P十八	69×34　深 4.6	黄灰色 2.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト石核	
P十九	39×38　深 6.3	灰色 5Y5/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
P二十	50×42　深 4.2	オリーブ灰色 5GY5/1 砂礫混じり砂質土	縄文土器片	
P二一	:60×49　深 4.8	黄灰色 2.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
P二二	20×0.9　深 8.0	灰色 5Y4/1 砂礫混じりシルト質土		
土一	:136×:115 深 8.5	黄灰色 2.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土　炭含む	縄文土器片（深鉢）、サヌカイト石核・片	
土二	:132×130 深 8.5	黄灰色 2.5GY4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片（深鉢）、サヌカイト片 焼骨片多数	焼人骨埋納改葬坑付
土三	96×68　深 16.7	灰色 7.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土　炭含む	縄文土器片（深鉢）、サヌカイト片	
土四	145×:107 深 8.5	灰色 5Y4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片（深鉢）、石鏃、サヌカイト片	
土五	:173 × :100　深 47.0	オリーブ灰色 5GY5/1・灰色 5Y4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	
土六	113×107 深 15.0	1 黄灰色 2.5Y5/1 砂礫混じりシルト質土 2 オリーブ灰色 5GY5/1 砂礫混じり砂質土　炭含む	縄文土器片（深鉢）、石錘、サヌカイト石核・片	
土七	164×120 深 16.3	灰色 5Y5/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片（深鉢）、石鏃、サヌカイト片、	
土八	145×:58 深 6.3	黄灰色 2.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片（深鉢）、サヌカイト片	

南トレンチ

遺構	規模 cm(:は検出)	土色・質	遺物	備考
P1		暗緑灰色 7.5GY4/1 砂礫混じりシルト質土		
土1	:126×:108 深 13.5	1 暗青灰色 5B3/1 砂礫・シルト 2 褐灰色 10YR4/1 砂礫混じりシルト質土 3 灰色 5Y4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片（深鉢）、土製円板、石鏃、サヌカイト片	
土2				欠番、土Ⅱ上の窪み
土3	85×:57 深 20.0	1 オリーブ灰色 5GY4/1 砂礫混じりシルト質土 2 暗緑灰色 7.5GY4/1 砂礫混じり土 内 灰色 7.5Y5/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器（深鉢）、サヌカイト片	＊埋設土器
土4	42×40　深 9.4	褐灰色 10YR4/1 砂礫混じり土・シルト	縄文土器片（深鉢）、サヌカイト片、骨片	

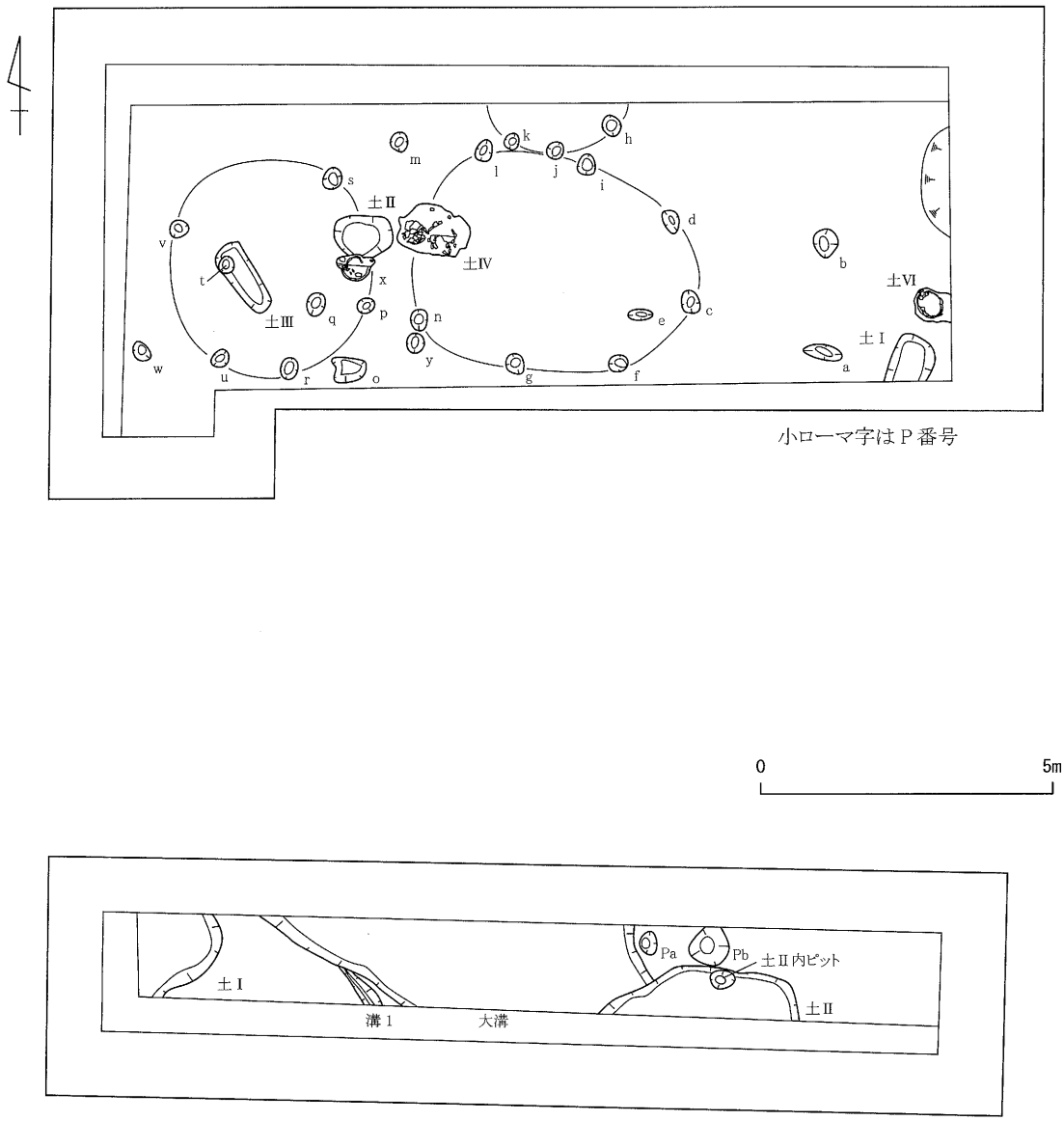
土五は、トレンチ北西部で検出し、西・北壁外および各側溝によっても切断され全形は不明である。土坑内は２段に落ち、内坑は楕円形の円筒状をなす。その底部付近から少量の種実が出土したことから貯蔵穴であったと思われる。

土六は、不正円形でやや深いボール状をなし、上部からは多くの石塊が出土し、埋土内からは縄文土器深鉢（24・25・26・27）と浅鉢(28)、石錐（51）やサヌカイトの石核・破片などの遺物が出土した。

土七は、不正の隅丸長方形をなす。埋土内からは縄文土器深鉢（22・23）やサヌカイト片などが出土した。

Ｐ十八は、東西に長い瓢箪形を呈し、埋土内からは縄文土器浅鉢（29・30）やサヌカイトの石核などが出土した。

ピット群のうちＰ五・六・十・十二・九・八はほぼ等間隔で、埋土が灰色砂礫混じりシルト質土であり、径約３ｍの円形に配されていた、環状遺構であった。



第8図　北・南トレンチ10層上面遺構平面図

第4表　10層上面遺構表

北トレンチ

遺構	規模cm(:は検出)	土色・質	遺物	備考
Pa	65×21　深15.1	灰色5Y4/1中・細粒砂		
Pb	46×40　深8.2	オリーブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質土	縄文土器片（深鉢）	
Pc	40×30　深20.0	1 暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土 2 緑灰色7.5GY6/1・5/1砂	縄文土器片（浅鉢）	
Pd	40×24　深4.1	暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
Pe	15×26　深3.3	灰色5Y4/1砂混じり粘質土		
Pf	32×30　深5.9	暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土・緑灰色 5G5/1粘土質シルト	縄文土器片	
Pg	33×32　深4.1	暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
Ph	35×30　深3.8	オリーブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質土		
Pi	38×35　深7.8	暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	
Pj	30×29　深3.9	オリーブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質土		
Pk	28×25　深4.6	オリーブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質土		
Pl	36×30　深4.3	暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
Pm	32×24　深4.6	暗灰黄色2.5Y4/2砂混じりシルト質土	縄文土器片（深鉢・浅鉢）	

Pn	32×30　深 6.8	暗灰色N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	
Po	52×40　深 5.6	暗灰色 N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト石核・片	
Pp	32×28　深 7.5	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片	
Pq	40×35　深 7.5	暗灰色 N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、骨片	
Pr	35×31　深 5.7	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土		
Ps	39×34　深 5.9	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	
Pt	30×28　深 6.3	オリーブ灰色 5GY6/1 砂混じりシルト質土		
Pu	30×28　深 7.3	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片	
Pv	30×27　深 8.8	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	
Pw	35×24　深 8.4	暗灰色 N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
Px	49×43　深 11.7	1 緑灰色 7.5GY6/1 砂礫混じりシルト質土 炭含む 2 暗緑灰色 7.5GY4/1 砂礫混じりシルト質土 少し炭含む 内 緑灰色 5G5/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器（深鉢）	＊埋設土器
Py	50×23　深 9.8	暗灰色 N3/砂礫混じりシルト質土		
土Ⅰ	80×67　深 7.5	暗灰黄色 2.5Y5/2・灰黄色 2.5Y5/1 砂礫		
土Ⅱ	95×67　深 7.4	暗灰色 N3/砂礫混じりシルト質土　やや粘土質炭多く含む	縄文土器片、サヌカイト片、土偶	
土Ⅲ	130×53　深 7.1	暗灰色 N3/砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	
土Ⅳ	119×83　深 25	緑灰色 7.5GY6/1 砂礫混じりシルト質土　炭含む 深鉢(横)内 灰色 5Y5/1・灰色 7.5Y6/1 砂礫混じりシルト質土 深鉢(縦)内 浅黄色 2.5Y7/3・灰色 7.5Y6/1・灰色 5Y4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器（深鉢）、土製品	＊埋設土器
土Ⅴ	81×:62　深 15	緑灰色 7.5GY5/1・暗緑灰色 4/1 細粒砂・シルト質土　少し炭含む 深鉢(北)内 灰オリーブ 5Y6/2・黄灰色 2.5Y5/1 砂礫混じりシルト質土 深鉢(南)内 灰オリーブ 5Y5/2・黄灰色 2.5Y5/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器（深鉢）	＊埋設土器 9 層上面遺構
土Ⅵ	56×55　深 26	緑灰色 10G5/1 砂礫混じりシルト質砂 深鉢内 にぶい黄橙色 10YR6/3・灰オリーブ色 5Y5/2 砂礫混じりシルト質土	縄文土器（深鉢）	＊埋設土器

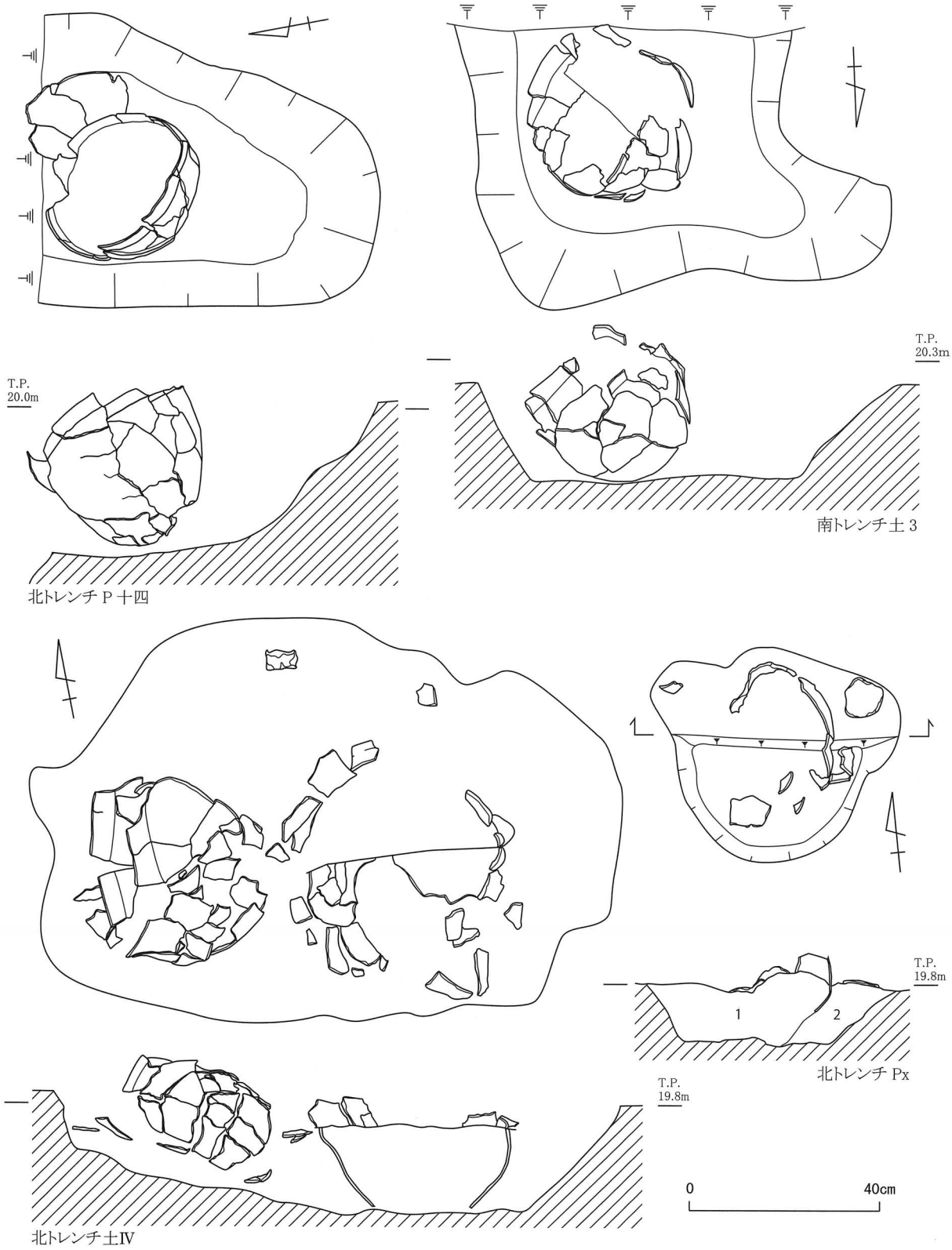
南トレンチ

遺構	規模 cm(:は検出)	土色・質	遺物	備考
Pa	40×28　深 3.4	灰色 5Y4/1・暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質土		
Pb	64×:60　深 8.2	灰色 5Y4/1・暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト質土		
土Ⅰ	:147 × :140　深 10.2	褐灰色 10YR4/1 砂礫混じりシルト質土 粗・中粒砂多い	縄文土器（深鉢）、サヌカイト片	
土Ⅱ	:344 × :82　深 13.8	灰黄褐色 10YR5/2・褐灰色 10YR4/2 砂礫混じりシルト質土 ピット　灰黄色 2.5Y6/2・暗灰黄色 2.5Y5/2 砂混じりシルト質土	縄文土器（深鉢）、サヌカイト片、骨片	
溝 1	幅 10～27　深 7.1	にぶい黄橙色 10YR5/3・暗灰黄色 2.5Y5/1 砂礫混じり土　ややシルト質	縄文土器片	
大溝	幅 440　深 9.6	暗灰黄色 2.5Y4/2 砂礫混じりシルト質土　下部シルト多い	縄文土器（深鉢）、サヌカイト片	

南トレンチ

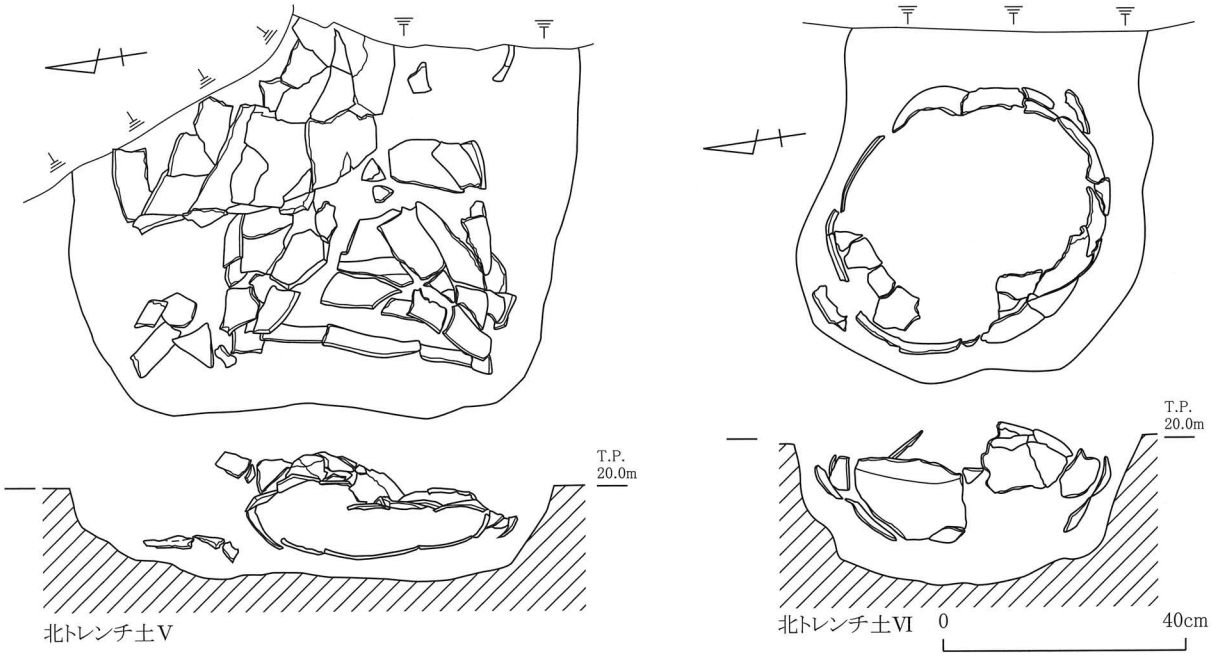
土１は、東端近くで検出。隅丸の台形状を呈し、縄文土器深鉢片、土製円板（43）やサヌカイト片などが出土した。

土３（第９図　図版４）は、南壁外および南側溝により土坑南側は切断され全形は不明であるが、南北方向に長い土坑と思われる。内に深鉢（17）が斜位で埋納されていた。埋設土器。深鉢は土坑掘削底面から南東に約 45°傾けられ、口縁を斜め上方にむけられていた。



第９図　埋設土器図（１）

南側溝掘削時に体部側面を水平にした宮滝式の深鉢片（31）を検出した。極めて浅い窪みにあり、検出時は土坑内とも考えたが、第３遺構の土Ⅱ上面にあたり、その埋土上部の窪み、晩期後半の整地土である８層の下部にあったものと思われる。



第10図　埋設土器図（2）

遺構は、埋設土器が篠原式新段階のものであることなどから、晩期中葉の後半期のものと考えられる。

10層上面遺構－第3遺構面－（第8図　第4表　図版4）

10層は炭をやや多く含む灰色砂礫混じり粘土質シルトで、縄文土器の深鉢・浅鉢・注口土器、石錐(52)、石斧（55)、敲石(58)、サヌカイト片など多くの遺物を包含していた。縄文土器は後期の中葉および宮滝式・滋賀里Ⅰ式と晩期の滋賀里Ⅱ式もあったが篠原式を含み、晩期中葉の整地層と考えられる。

北トレンチでは、ピット26個（Ｐａ～ｚ－２欠)、土坑６基（土Ⅰ～Ⅵ)、炉２個（炉１・２）を、南トレンチではピット２個（Ｐａ・ｂ)、土坑２基（土Ⅰ・Ⅱ)、溝１条（溝１）大溝１条（大溝）を検出した。

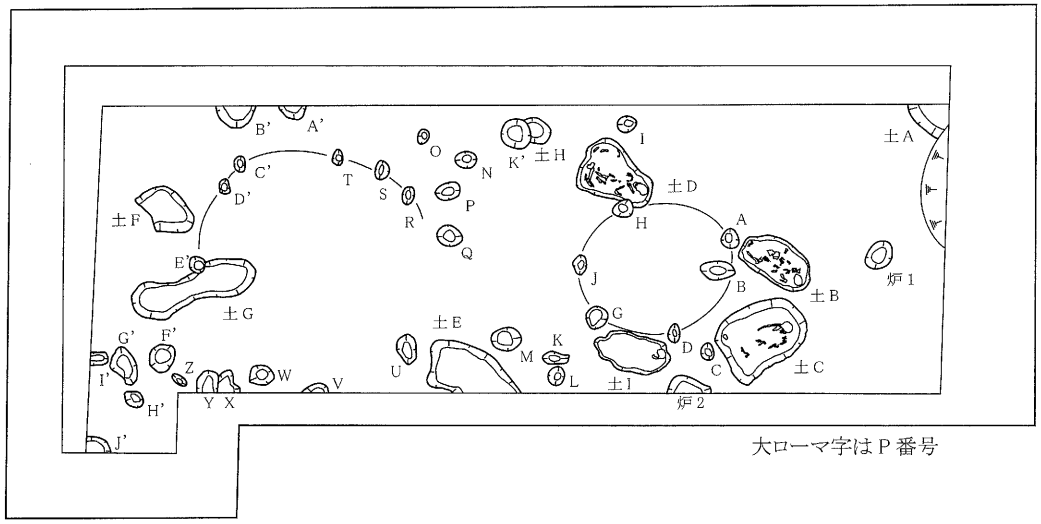
北トレンチ

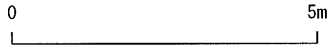
Ｐｘ、土Ⅳ・Ⅵ内は深鉢が埋納された、いわゆる埋設土器である。

Ｐｘ（第９図　図版６）は、９層上面遺構の土七によって上部は削平されていた。変形楕円状の土坑の中央に深鉢（10）が縦位に埋納されていた。体部下部を打ち欠いていたが、上層遺構のためもあって残存状況は悪く、詳細は不明である。

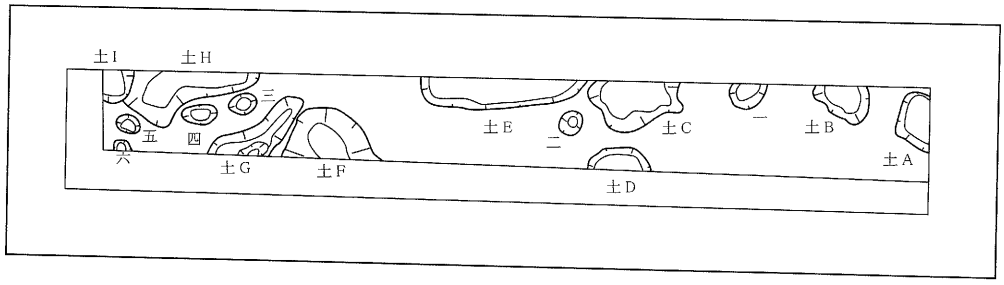
土Ⅳ（第９図　図版５）は、東西に長い変形のトラック状を呈する土坑で、２個体の深鉢（８・９）が埋納されていた。深鉢（９）は土坑の西側に位置し、土坑底面を斜上にしそれに沿うようにして置かれ、口を西南西方向に向けて斜位（東部底面からの角度約25°）をなしていた。深鉢（９）は底部を穿孔していた。深鉢（８）は体部下部が打ち欠かれ、土坑の東側に縦位で埋納されていた。両深鉢間の北側からはやや斜位に置かれた手づくねの土製品（45、形状・用途未詳）が出土した。

土Ⅵ（第10図　図版６）は、土Ⅴにより北上部は削平され、東側は東側壁外となるため明確な土坑形状は不明である。土坑の南・西・北壁に沿うようにして、体部下部の打ち欠かれた深鉢（11）が縦位で埋納されていた。





漢数次はP番号



第11図　北・南トレンチ11層上面遺構平面図

第5表　11層上面遺構表

北トレンチ

遺構	規模cm(:は検出)	土色・質	遺物	備考
PA	26×25　深15.3	オリーブ灰色2.5GY6/1・オリーブ灰色5GY5/1砂混じりシルト　炭・焼土含む	縄文土器片（深鉢）、サヌカイト片	
PB	42×24　深7.3	オリーブ灰色5GY5/1砂混じりシルト	サヌカイト片	
PC	20×19　深9.3	オリーブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質砂　炭・焼土含む	サヌカイト片	
PD	30×24　深10.3	オリーブ灰色2.5GY6/1砂混じりシルト　炭含む	サヌカイト片	
PE	20×16　深5.8	にぶい黄橙色10YR6/4中～極細粒砂		土I上遺構
PF	18×15　深5.3	灰黄色2.5Y6/2砂・シルト質砂		土I上遺構
PG	35×30　深10.2	オリーブ灰色2.5GY6/1砂礫混じりシルト	サヌカイト片	
PH	34×27　深16.4	オリーブ灰色2.5GY6/1砂混じりシルト　炭少量含む		
PI	24×20　深8.7	オリーブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質砂　砂やや多く、炭・焼土含む	縄文土器片、サヌカイト片	
PJ	29×24　深8.6	オリーブ灰色2.5GY6/1・オリーブ灰色5GY5/1砂混じりシルト　炭・焼土含む	縄文土器片、サヌカイト片	
PK	40×21　深4.2	オリーブ灰色5GY5/1砂混じりシルト質砂　炭・焼土含む		

PL	32×30　深 8.4	オリーブ灰色 5GY5/1 砂混じりシルト質砂　炭・焼土含む	縄文土器片、サヌカイト片	
PM	43×33　深 12.0	灰色 7.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土　炭含む	縄文土器片、サヌカイト片	
PN	33×30　深 9.5	灰色 10Y5/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
PO	21×20　深 6.5	オリーブ灰色 2.5GY6/1 砂混じりシルト質砂		
PP	40×25　深 9.5	灰色 7.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土　焼石多く	縄文土器片	
PQ	42×32　深 12.1	灰色 7.5Y4/1・オリーブ黒色 5Y3/2 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
PR	22×19　深 7.1	灰色 5Y4/1・暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
PS	23×20　深 7.0	灰色 5Y4/1 砂礫混じりシルト質土　砂多い	縄文土器片	
PT	20×19　深 6.5	灰色 5Y4/1・オリーブ灰色 2.5GY6/1 砂礫混じりシルト質土　砂やや多い	縄文土器片	
PU	50×29　深 9.5	暗オリーブ灰色 2.5GY3/1 砂礫混じりシルト質土		
PV	40×:13　深 10.2	灰色 10Y5/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	
PW	36×32　深 11.3	灰色 N4/砂礫混じりシルト質土		
PX	:36×:36　深 7.5	灰色 7.5Y4/1 砂礫混じりシルト質土		
PY	:37×35　深 6.5	灰色 10Y5/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
PZ	21×19　深 6.0	オリーブ灰色 5GY5/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
PA´	45×:23　深 8.6	黄灰色 2.5Y5/1 砂礫混じりシルト質土　炭含む	縄文土器片	
PB´	66×:36　深 6.0	灰色 5GY5/1 砂礫混じりシルト質土　炭含む	縄文土器片、サヌカイト片、骨片	
PC´	20×19　深 9.5	灰色 5Y4/1 砂礫混じりシルト質土		
PD´	19×18　深 8.5	灰色 5Y4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
PE´	21×19　深 6.0	灰色 10Y5/1 砂礫混じりシルト質土		
PF´	45×43　深 3.5	灰色 10Y6/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片	
PG´	60×40　深 4.4	にぶい黄色 2.5Y6/4・灰色 10Y5/1 中・細粒砂		
PH´	32×27　深 3.6	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂礫混じりシルト質土 炭含む	縄文土器片	
PI´	:30×21　深 7.8	灰色 10Y5/1 砂礫混じりシルト質土　炭含む		
PJ´	:40×:15　深 7.1	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂礫混じりシルト質土 炭含む	縄文土器片	
土A	67×54　深 9.2	暗緑灰色 7.5GY4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、サヌカイト片	
土B	148×67　深 12.0	灰オリーブ色 7.5Y5/2 粘土質シルト・灰色 5Y5/1 中・細粒砂	人骨、縄文土器片（深鉢・浅鉢）、サヌカイト片	土坑墓
土C	150×107 深 11.5	灰オリーブ色 5Y6/2 中・細粒砂・灰オリーブ色 7.5Y5/2 粘土質シルト	人骨、縄文土器片、サヌカイト片	土坑墓
土D	132×96　深 10.2	灰オリーブ色 5Y5/2 シルト質砂・灰オリーブ色 7.5Y5/2 粘土質シルト	人骨、縄文土器片、サヌカイト片	土坑墓
土E	:150×72 深 12.0	緑灰色 7.5GY5/1・灰オリーブ色 7.5Y4/2 シルト質砂		
土F	80×:60　深 8.8	灰色 5Y5/1・にぶい黄橙色 10YR6/4 シルト・砂		
土G	208×63　深 32.1	オリーブ黄色 5Y6/3 粗～細粒砂		
土H	:38×37　深 11.7	暗緑灰色 7.5GY4/1 砂礫混じりシルト質土	縄文土器片、石鏃	
土I	130×65　深 6.8	灰オリーブ色 7.5Y6/2 砂礫混じりシルト質土・灰色 5Y5/1 中・細粒砂	人骨	土坑墓
炉1	50×38　深 7.9	橙色 7.5YR6/6・にぶい橙色 7.5YR6/4 砂混じりシルト質粘土	炭・焼土塊	
炉2	60×:32　深 6.6	橙色 7.5YR6/6・にぶい橙色 7.5YR6/4 砂混じりシルト質粘土	炭・焼土塊	

南トレンチ

遺構	規模 cm(:は検出)	土色・質	遺物	備考
P一	50×:32　深 10.0	灰色 5Y4/1・7.5Y5/1 砂混じり砂質シルト		
P二	36×34　深 26.9	緑灰色 10G5/1・黄灰色 2.5Y4/1 砂礫混じり砂質シルト		
P三	50×30　深 27.9	オリーブ灰色 5GY5/1・灰色N4/砂礫混じり砂質シルト　やや粘質	縄文土器片、サヌカイト片	
P四	56×30　深 18.4	オリーブ灰色 5GY5/1・灰色N4/砂礫混じり砂質シルト　やや粘質	縄文土器片	

P五	36×33　深 19.0	灰色 10Y4/1 砂礫混じり粘土質シルト	縄文土器片、サヌカイト片	
P六	20×:14　深 9.5	灰色 10Y4/1 砂礫混じり粘土質シルト	縄文土器片、サヌカイト石核・片	
土A	80×:59　深 26.6	緑灰色 5G5/1 砂礫混じりシルト質砂　オリーブ灰色 2.5GY5/1 砂質シルト含む	縄文土器片（深鉢・浅鉢）	
土B	87×:58　深 10.0	灰色 5Y4/1・7.5Y5/1 砂混じり砂質シルト　やや粘土質	縄文土器片	
土C	148×:69 深 20.1	オリーブ灰色 2.5GY6/1 砂礫混じりシルト質砂 明黄褐色 10YR6/6 砂礫	縄文土器片	
土D	102×:35　深 8.5	青灰色 5BG5/1 砂礫土　ややシルト質	縄文土器片	
土E	268×:44　深 8.5	緑灰色 7.5GY5/1 砂質シルト		
土F	154×:77 深 13.4	オリーブ灰色 2.5GY5/1・青灰色 5BG5/1 砂礫混じり砂質土	縄文土器片	
土G	:145×34 深 22.9	青灰色 5BG5/1・暗青灰色 5BG4/1 砂・シルト質砂	縄文土器片、サヌカイト片	
土H	:210×:90 深 16.6	上　緑灰色 5G5/1・暗緑灰色 5G4/1 砂礫混じりシルト質土 下　青灰色 5BG5/1 砂礫	縄文土器片（深鉢）、サヌカイト片	
土I	:50×:46　深 16.3	黄灰色 2.5Y5/1・オリーブ黄色 5Y6/3・暗灰黄色 2.5Y5/2 砂礫混じり砂質シルト	縄文土器片	

ピット群のうち、土Ⅳを含むPのｃ・ｄ・ｉ・ｌ・ｎ・ｇ・ｆはほぼ等間隔で、埋土は暗灰色砂礫混じりシルト質土を主とし、3.7mと 4.5mの楕円形に配されている、いわゆる環状遺構であった。また、Pのｐ・ｓ・ｖ・ｕ・ｒも埋土が暗オリーブ灰色砂混じり土を主とする径約 3.5mの環状をなしていた。Pのｈ・ｊ・ｋも埋土がオリーブ灰色砂混じりシルト質土を主とし、ほぼ等間隔の弧状をなし環状をなしていたものと思われる。

南トレンチ

10 層内掘削時にトレンチ東部から４個の人骨が出土している（図版５）。後述するように北トレンチの 11 層上面で４基の土坑墓が検出されており、本トレンチ周辺にあった土坑墓が 10 層整地時に破壊され、散乱したものと思われる。北トレンチに対し遺構はおおぶりである。

大溝　中央西で一部土坑（土Ⅱ）によって東岸部が削り取らた南東から北西ないし西北西に走る。埋土内からは縄文土器深鉢（12・13）と浅鉢（14）などが出土した。

遺構は、埋設土器が篠原式中および新段階のものであることなどから、晩期中葉の中・後半期のものと考えられる。

11 層上面遺構－第４遺構面－（第 11 図　第５表　図版７）

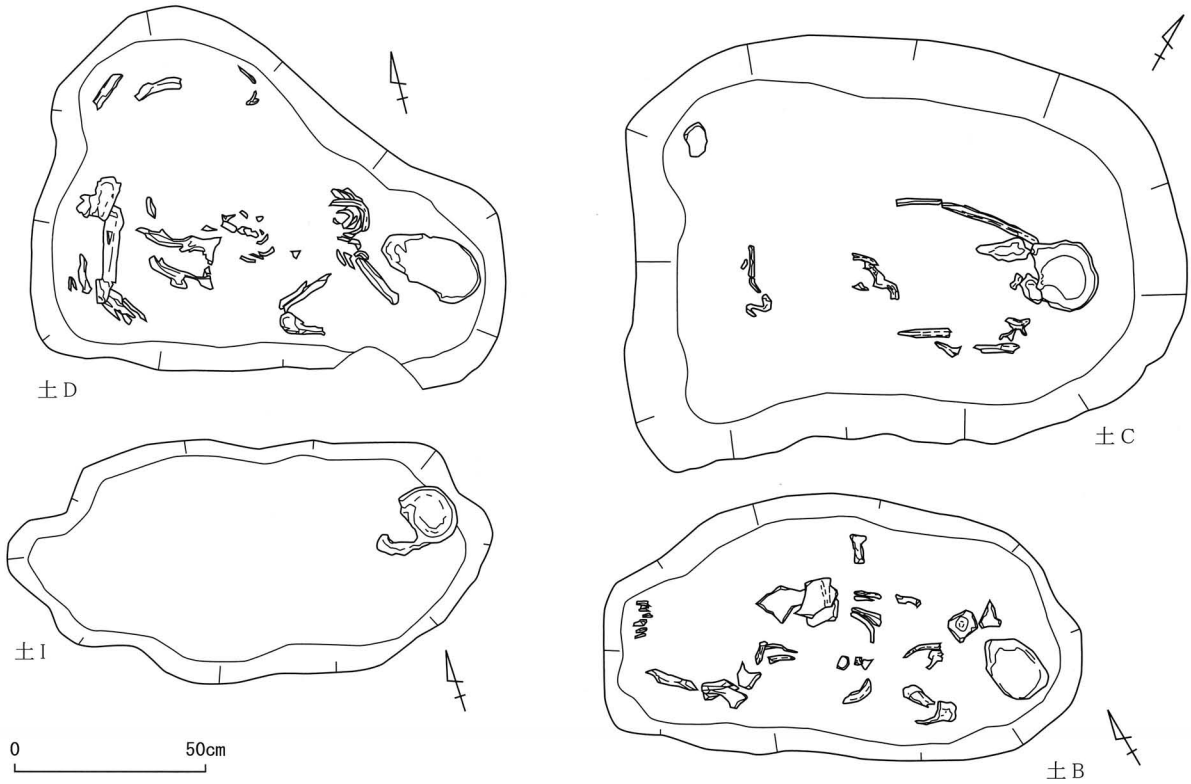
11 層は砂がやや多い灰色砂礫混じり粘土質シルトで、縄文土器の深鉢・浅鉢・注口土器、土製円板（44）、サヌカイト片など多くの遺物を包含していた。縄文土器は後期中葉から宮滝式および滋賀里Ⅰ式もあったが、晩期の滋賀里Ⅱを含んでいた。縄文時代晩期前半の整地層。北トレンチでピット 36 個（ＰＡ～Ｊ´）、土坑９基（土Ａ～Ｉ）、南トレンチではピット６個（Ｐ一～六）、土坑９基（土Ａ～Ｉ）を検出した。

北トレンチ

９基の土坑のうち４基（土Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｉ）は土坑墓であった。

土Ｂ（第 12 図　図版８）は、東南東 - 西北西を長軸とする不定の楕円形を呈する。人骨の残存状態は極めて悪く、頭蓋骨、肋骨、上肢骨、下肢骨などの各一部を検出した。顔面は 10 層の整地時に削平されていた。土坑の規模・形状に合わせ、頭部および体上部を東南 - 西北軸に仰向けにして、仰臥屈葬で埋葬されていたものと思われる。土坑内には多数の縄文土器片（１～４など）が散乱し、サヌカイト片なども出土した。

土Ｃ（第 12 図　図版７）は、北東 - 南西を長軸とする不定の隅丸の台形を呈する。人骨の残存状



第12図　北トレンチ土坑墓平面図

態は極めて悪く、頭蓋骨、上肢骨、下肢骨などの各一部を検出した。顔面は10層の整地時に削平されていた。ほぼ土坑長軸に合わせて頭・体部を仰向けにして、仰臥屈葬で埋葬されていたと思われる。縄文土器片やサヌカイト片なども出土している。

土D（第12図　図版7）は、南東‐北西を長軸とする上辺の短い不定の隅丸の台形を呈する。人骨の残存状態は極めて悪く、頭蓋骨、上肢骨、下肢骨などの各一部を検出した。顔面は10層の整地時に削平されていた。ほぼ土坑長軸に合わせて頭・体部を仰向けにして、仰臥屈葬で埋葬されていたものと思われる。埋土内からは縄文土器片やサヌカイト片などが出土している。

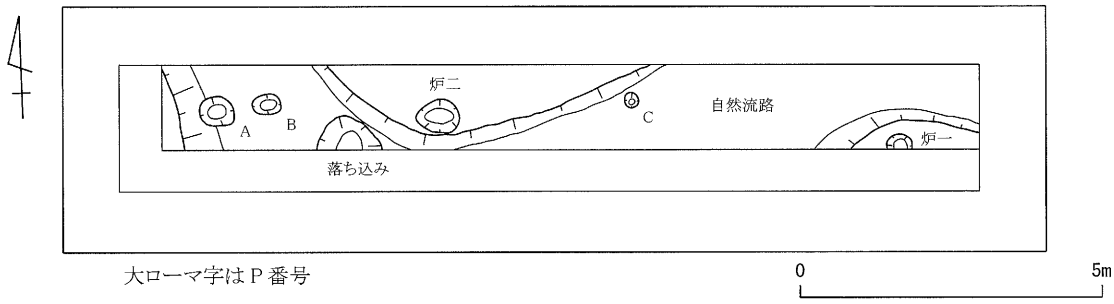
土I（第12図　図版8）は、東北東‐西南西を長軸とする不定の長楕円形を呈する。中央部などが10層の整地時およびピット（PE・F）で大きく撹乱されていたこともあって、胴・脚部は全くなく、成人の頭骨のみを検出した。頭骨は頭蓋骨と左下顎骨部が残存していた。顔面は10層の整地時に削平されており、残存状況は極めて悪い。土坑の形状・規模からして、頭頂をほぼ東北東にした仰臥屈葬または横臥屈葬で埋葬されていたものと思われる。

土坑墓4基間にある5個のピット（PA・D・G・J・H）は、埋土がオリーブ灰色砂混じりシルトで炭・焼土を含むものもあったが、径2.4mの環状をなしていた。そして、各土坑墓の後部またはその付近に、円または楕円のピットが見られた（土B‐PB、土C‐PC、土D‐I、土I‐PK）。

また、小ピットのR・S・T・C´・D´・E´は径20cm前後の小さいピットで、埋土が灰色砂礫混じりシルト質土を主とし、弧状をなしている。

炉1・2は、ボール状に掘り窪められたもので、内壁面が橙色からにぶい橙色を呈し、焼けていた。埋土内および周辺から遺物は見られなかったが、炭の小・細片および焼土塊・粒が多く散乱していた。

南トレンチ



第13図　南トレンチ12層上面遺構平面図

第６表　南トレンチ12層上面遺構表

遺構	規模cm(：は検出)	土色・質	遺物	備考
PA	56×48　深15.4	灰色10Y4/1砂礫混じり粘土質シルト	縄文土器片、サヌカイト片	
PB	52×26　深6.4	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂礫混じりシルト質土 少量の炭含む		
PC	30×28　深11.0	暗オリーブ灰色 5GY4/1 砂礫混じりシルト質土 少量の炭含む		
炉一	70×52　深10.9	明赤褐色5YR5/6・褐灰色7.5YR5/1砂礫混じり砂質シルト		
炉二	40×:26　深11.7	黄灰色 2.5Y4/1 砂礫混じりシルト質砂・砂質シルト		
自然流路	幅370以上 深25.2	灰黄色 2.5Y7/2・灰オリーブ色 7.5Y6/2 粗～細粒砂・シルト		
落ち込み	100×:64　深9.5	浅黄色 2.5Y7/3 粗～細粒砂・灰色 7.5Y6/1 砂質シルト　炭など少量含む		流路内

土Ａは、トレンチ東端で検出したため正確な形状は不明である。土坑内からは縄文土器深鉢・浅鉢片（５～７）やサヌカイト片などが出土した。

上述したように11層は晩期前半の整地層と思われるが、東部域はとくに後期末の土器を多く包含していた。そのため遺構の埋土内には、北トレンチ土Ｂのように宮滝２式の土器を含んでいるものがあったが、南トレンチ土Ａに篠原古～中段階の土器があったことなどから、本層上面遺構は晩期前半から中葉の前半期までに形成されたものと思われる。

12層上面遺構－第５遺構面－（第13図　第６表　図版８）

12層は、にぶい黄色粗～細粒砂、およびにぶい黄色・オリーブ黄色質砂で、縄文土器小片などを少量含み、南トレンチにおいてピット３個（ＰＡ～Ｃ）、炉２個（炉一・二）、落ち込み１基、自然流路１条を検出した。

ピットは自然流路部または肩付近にあったが、いずれも流路上面で検出した。

炉１・２は、ボール状に掘り窪められたもので、内壁面が橙色から白赤色を呈し、焼けていた。埋土内および周辺から遺物は見られなかったが、炭の小・細片および焼土塊・粒が散乱していた。

自然流路は、トレンチ内で東南東から南西そして北東方向へと蛇行していた。調査幅が狭く正確な流路幅は不明である。検出深は10.5～25.2㎝とそれほど深いものではない。東側の南肩側および西端の西肩側が深く、瀬をなしていたようである。

西流路部東部に溜まり状の落ち込みがあり、内部から少量の小焼土塊と炭が出土した。炉二使用時に投棄されたものと思われる。

炉の内外で炭の小細片の散乱を確認したが、遺物はＰＡで出土した縄文土器小片およびサヌカイト片のみであった。そのため明確な時期は不明であるが、検出状況などからして、縄文時代後期末を上るものではない。

4）出土遺物

今回の調査で出土した遺物に関して、土器は遺構ごとに記述を行い、土製品と石器は遺構に関係なく一括して記述する。

北トレンチ土B（第14図　1～4　図版11）

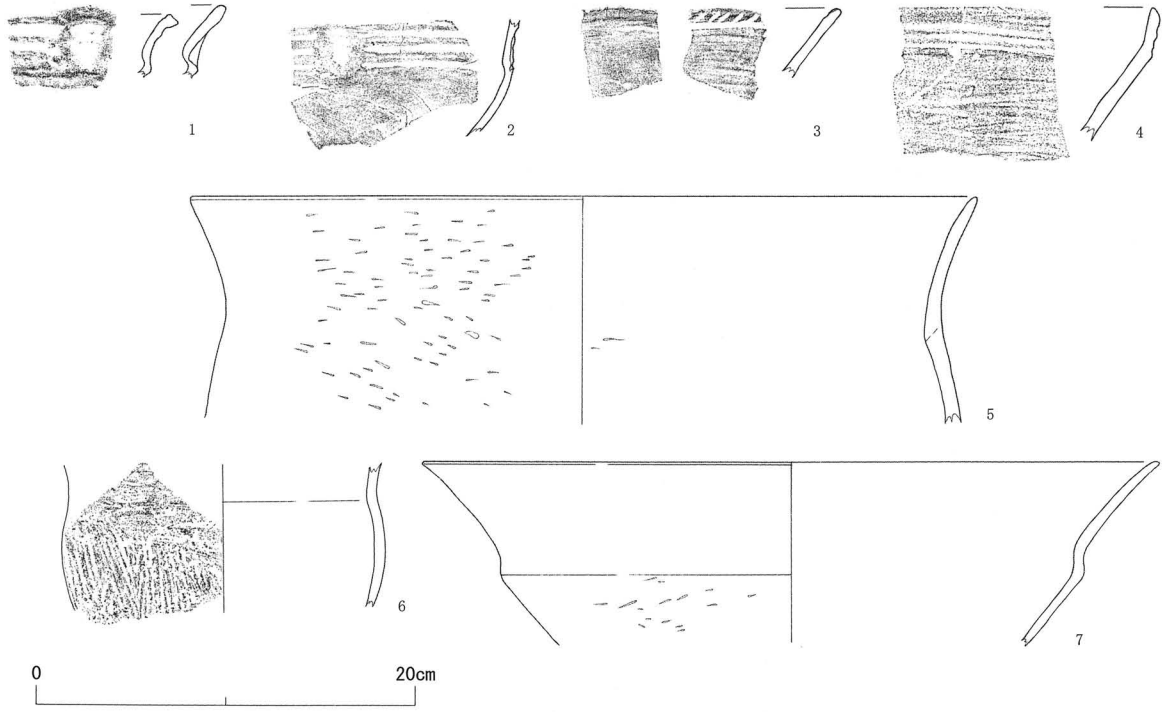
1は、粘土を貼り付けた扇状圧痕文が配される深鉢である。口縁部は緩やかに外反する。口縁部にある2条の凹線は、あまり明瞭ではない。内外面とも風化のため調整方法は不明である。2は、深鉢の体部下半である。巻貝頂部による3条の凹線が施され、粘土貼り付けによる扇状圧痕文が配される。外面は巻貝条痕を施した後、ナデ調整を行う。内面はナデ調整である。3は、広口深鉢の口縁部である。口縁端部内面には、1条の凹線と斜行する刻目が配される。調整は内外面ともに巻貝条痕である。4は、口縁部と体部の境に屈曲をもたせ、直立気味の口縁を持つ深鉢である。口縁部外面には、3条の粗雑な凹線が施される。凹線内にはスジ状の圧痕が認められる。外面は巻貝条痕を施し、内面はナデ調整である。いずれも宮滝2式と考える。

南トレンチ土A（第14図　5～7　図版11）

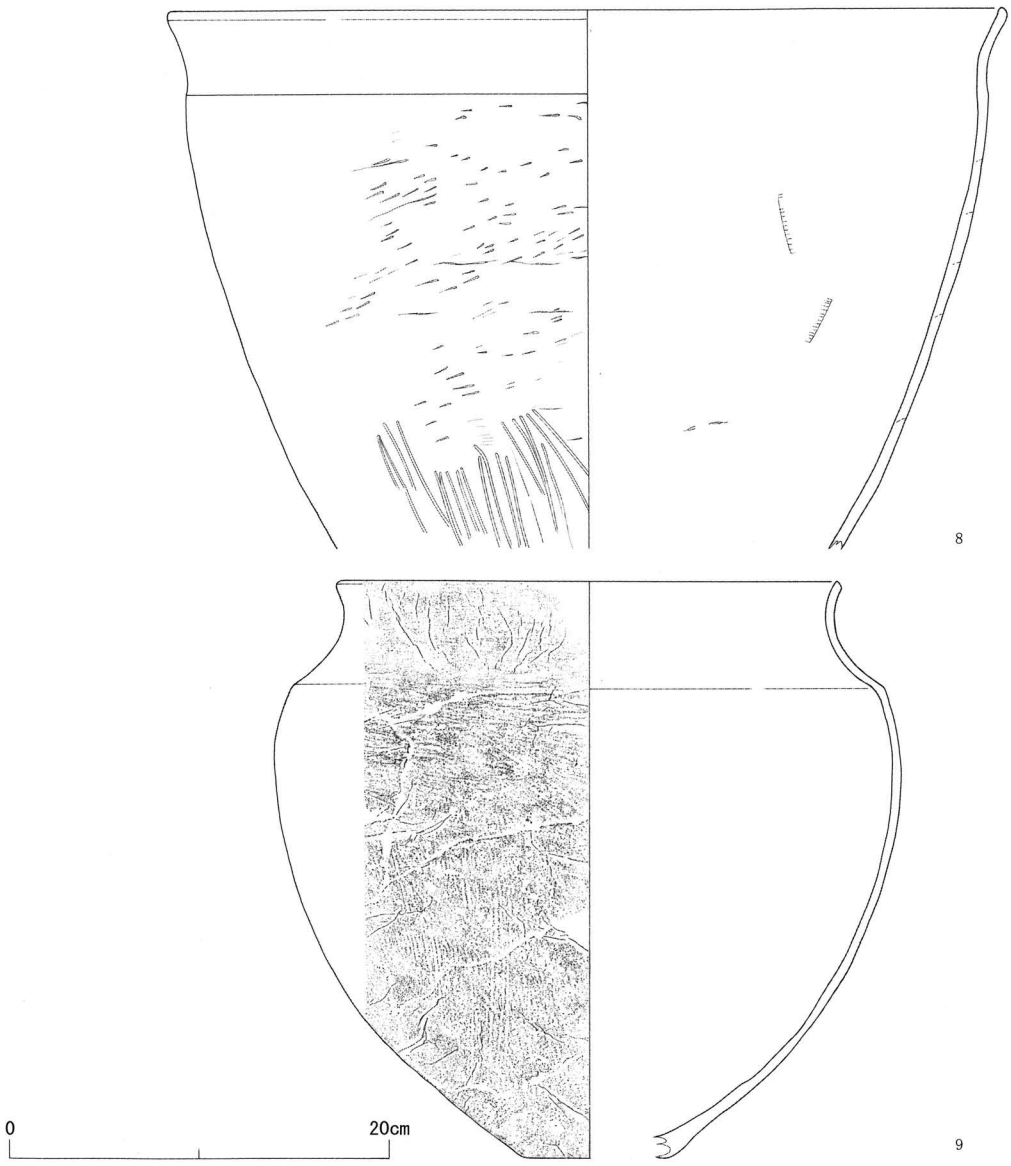
5は、無文深鉢である。頸部の屈曲は緩く、やや外反気味の長い口縁部を持つ。外面は、口縁部から体部にかけてケズリ調整が施される。内面はナデ調整である。6は、無文深鉢である。体部は球形で口縁部と体部の境が不明瞭である。外面は、ケズリを施した後、体部には二枚貝条痕を施す。内面はナデ調整である。7は、口縁部と体部の境に段を有し、長い口縁部を持つ浅鉢である。口縁部は内外面ともにミガキが施され、体部はケズリを施した後、一部にミガキ調整を行う。いずれも篠原式古～中段階であろう。

北トレンチ土Ⅳ（第15図　8・9　図版9）

8は、口縁部を緩やかに外反させ、端部を内側へと肥厚させる深鉢である。口縁部はナデが施され、体部はケズリを施す。内面には板状工具による圧痕が認められる。9は、頸部で大きく内側へと屈曲させ、外反する口縁を持つ深鉢である。外面はケズリを施した後、体部には二枚貝条痕に似



第14図　縄文土器実測図（1）



第15図　縄文土器実測図（2）

た調整を施す。この調整は、幅が1mm程度、痕跡として浅く、二枚貝とは異なるが工具がいかなるものになるか判然としない。いずれも篠原式新段階である。

北トレンチPx（第16図　10　図版9）

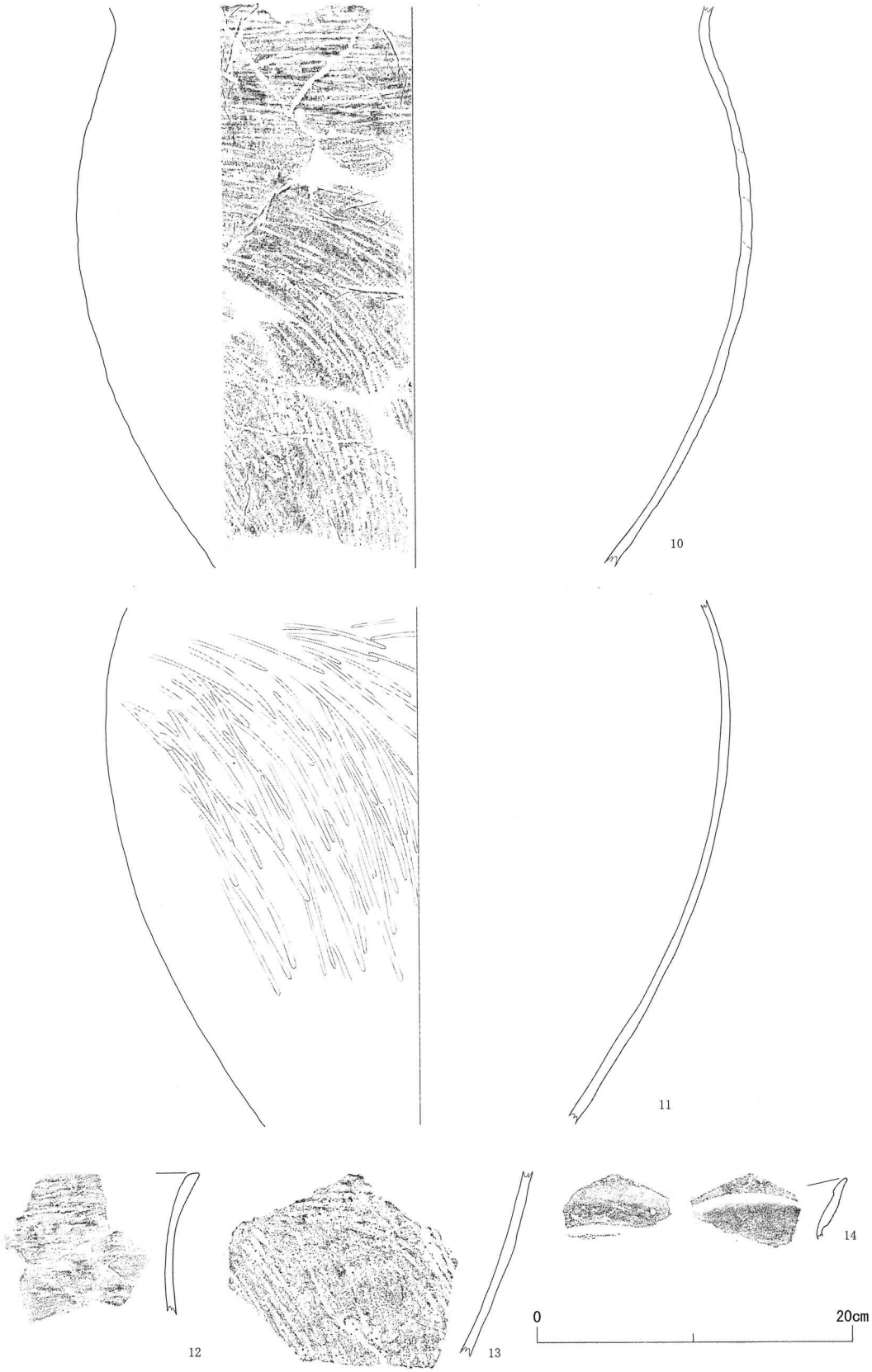
10は、口縁部と底部を欠く砲弾形の深鉢である。口縁部と体部の境は不明瞭で、外面は二枚貝条痕が施され、内面は二枚貝条痕を施した後ナデ調整を行う。篠原式古～中段階の所産と考える。

北トレンチ土Ⅵ（第16図　11　図版9）

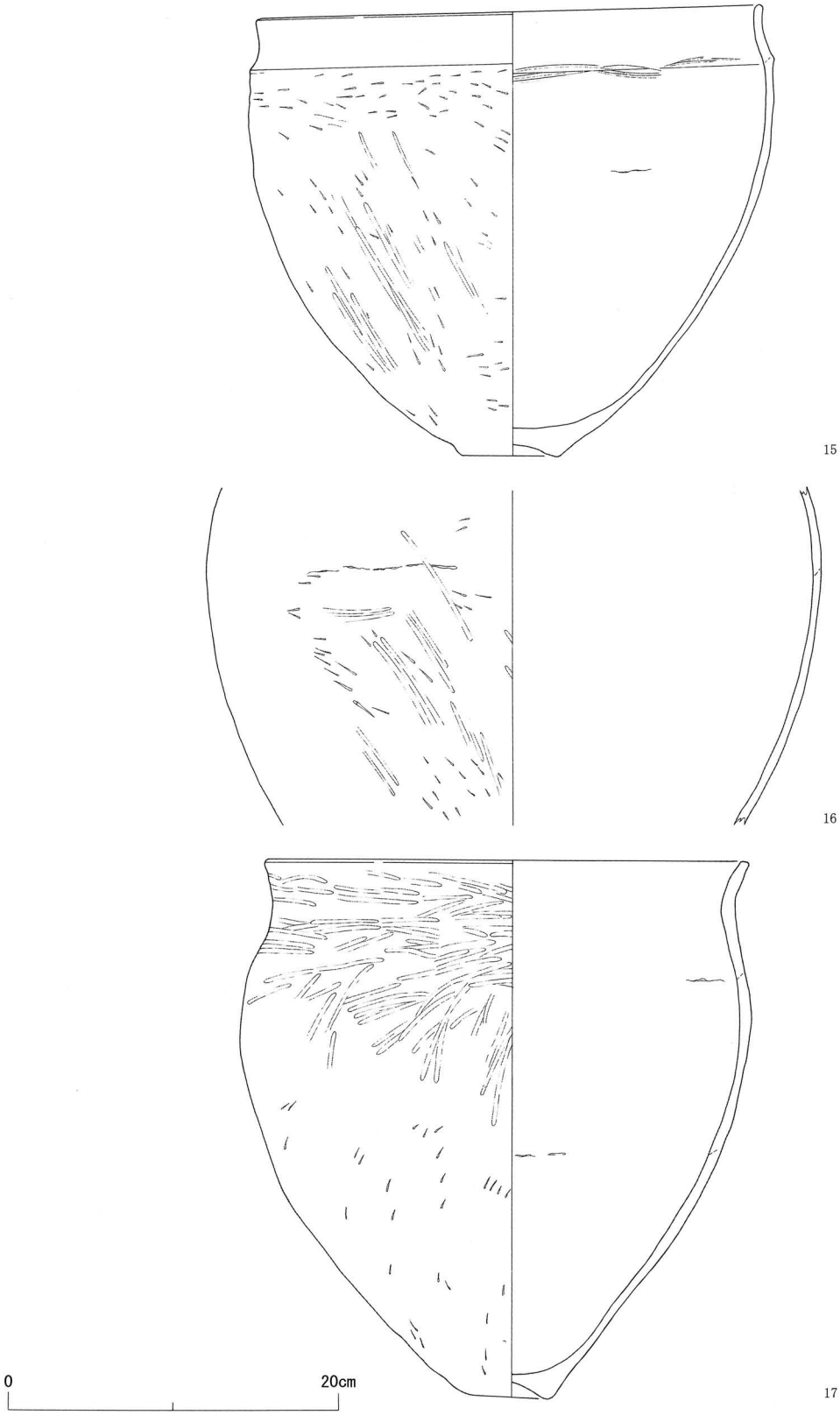
11は、口縁部と底部を欠く砲弾形の深鉢である。外面は、ケズリを施した後、ミガキ調整を行う。内面はナデ調整である。篠原式新段階であろう。

南トレンチ大溝（第16図　12～14　図版12）

12は、広口深鉢である。口縁部と体部の境は明瞭ではない。口縁部はやや外反し、端部に少し厚みを持つ。内外面ともにナデ調整である。篠原式新段階か。13は、深鉢の体部下半である。外面はケズリ調整が施される。内面はナデ調整である。篠原式。14は、黒色磨研浅鉢である。波状口縁で内面に明瞭な段を有する。また、口縁部と体部の境に明瞭な沈線がめぐる。滋賀里Ⅱ～Ⅲa式か。



第16図　縄文土器実測図（3）



第17図　縄文土器実測図（4）

北トレンチＰ十四（第17図　15・16　図版10）

15は、無文深鉢である。端部に向かって緩やかに外反する口縁を持つ。口縁部と体部の境は明瞭で、体部はケズリ調整の後、一部にミガキが施される。口縁部はナデ調整である。底面はケズリの後、中心部分を残して平滑な面を形成する。頸部内面には、二枚貝による条痕が認められる。16は、砲弾形を呈する無文深鉢の体部破片である。外面はケズリを施した後、ミガキ調整を行う。内面はナデ調整である。いずれも篠原式新段階。

南トレンチ土３（第17図　17　図版９）

17は、無文深鉢である。頸部はあまり明瞭ではなく、外反気味の口縁部を持つ。口縁部から体部上半にかけてミガキ調整を行い、体部下半から底部はケズリを行う。底面は、ケズリを施した後、中央部分を残して平滑な面を形成する。篠原式新段階。

北トレンチ土Ｖ（第18図　18・19　図版10）

18は、無文深鉢である。頸部を大きく内側へと屈曲させ、口縁部は直線的に外方へと立ち上がる。体部はケズリによって調整を施した後、上半部ではミガキ調整を行う。底面はケズリの後、中央部分を残して平滑に仕上げる。頸部内面に二枚貝による条痕を施す。その他の部分はナデ調整である。19は、波状口縁の無文深鉢である。口縁部と体部の境は不明瞭で、口縁部は直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。外面はケズリを施した後、口縁部から頸部にかけてミガキが施される。内面はナデ調整である。いずれも篠原式新段階。

北トレンチ土一（第19図　20・21　図版12）

20は、有文深鉢である。口縁部に穿孔を持ち、３条の沈線が施される。外面は、巻貝条痕の後、ナデを行う。滋賀里Ⅰ式。21は、無文深鉢の頸部である。外面は、ケズリを施した後、ナデ調整が行われる。口縁部と体部の境に強い１条のナデが施される。滋賀里Ⅲａ式。

北トレンチ土七（第19図　22・23　図版12）

22は、有文深鉢である。緩やかに外反する口縁部を持ち、口縁端部に１条、頸部付近に３条の沈線が施される。滋賀里Ⅰ式。23は、浅鉢で鍵形に屈曲する口縁部を持つ。外面は磨滅しているため調整は不明であるが、内面は丁寧なミガキ調整である。頸部の屈曲する内面に二枚貝の条痕が認められる。篠原式。

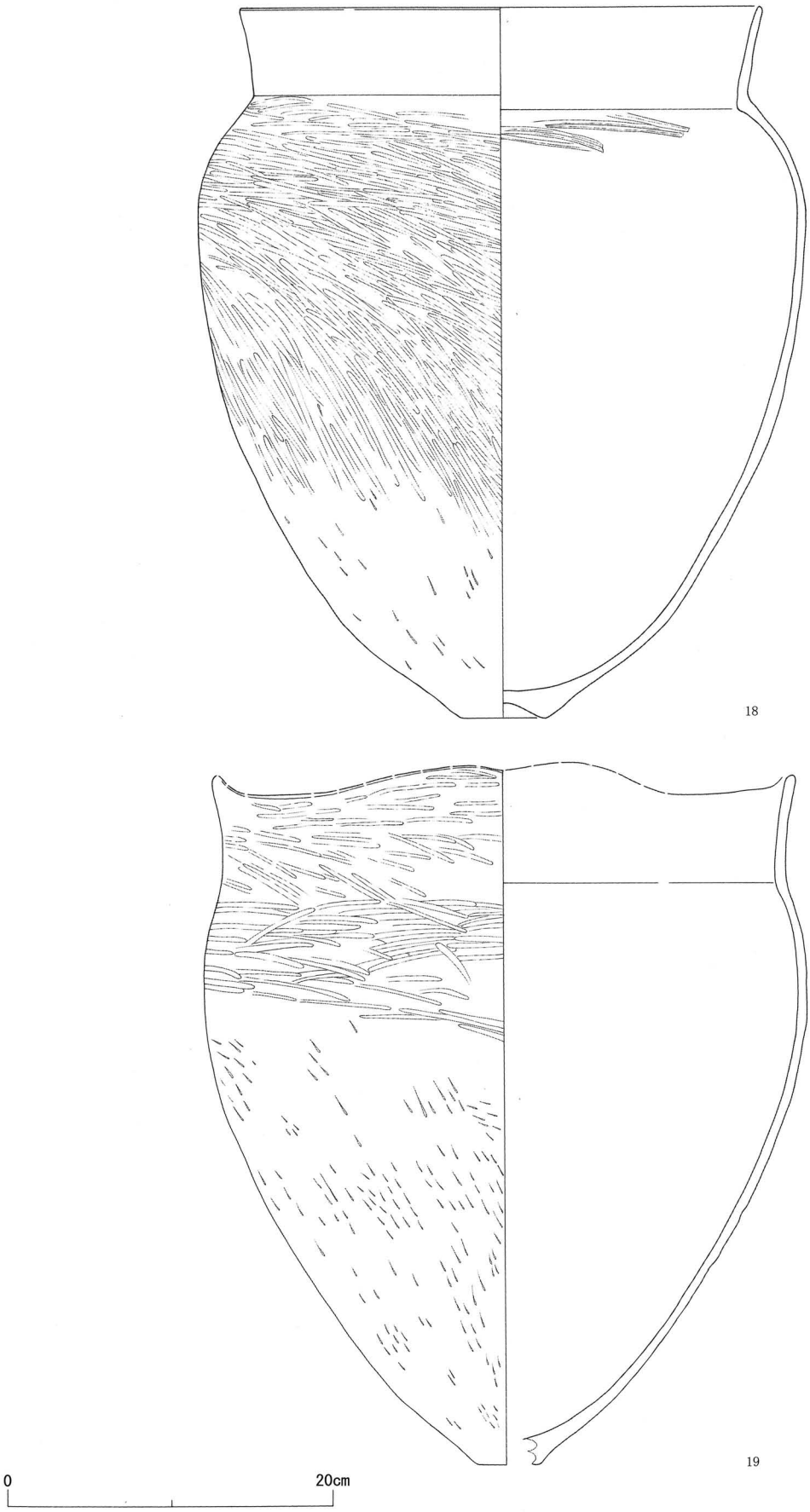
北トレンチ土六（第19図　24～28　図版12）

24は、無文深鉢である。口縁部と体部の境に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反し、上部に面を持つ。内外面ともにナデ調整である。篠原式新段階。25は、無文深鉢である。口縁部は外反しており、端部を丸くおさめる。外面は二枚貝条痕、内面はナデ調整が施される。篠原式古～中段階。26は、深鉢である。口縁端部に向かって緩やかに外方へと開くが、口縁部と体部の境は不明瞭である。外面は、巻貝条痕を施す。内面は、巻貝条痕を施した後、ナデ調整を行う。滋賀里Ⅰ～Ⅱ式。27は、深鉢の底部である。外面は、巻貝条痕を施し、内面には板状工具による圧痕が認められる。底面には中央部を残して平滑面が認められる。また、葉脈痕跡が明瞭に残る。滋賀里Ⅰ～Ⅱ式か。28は、黒色磨研浅鉢である。口縁端部には刻目を施す。篠原式中～新段階。

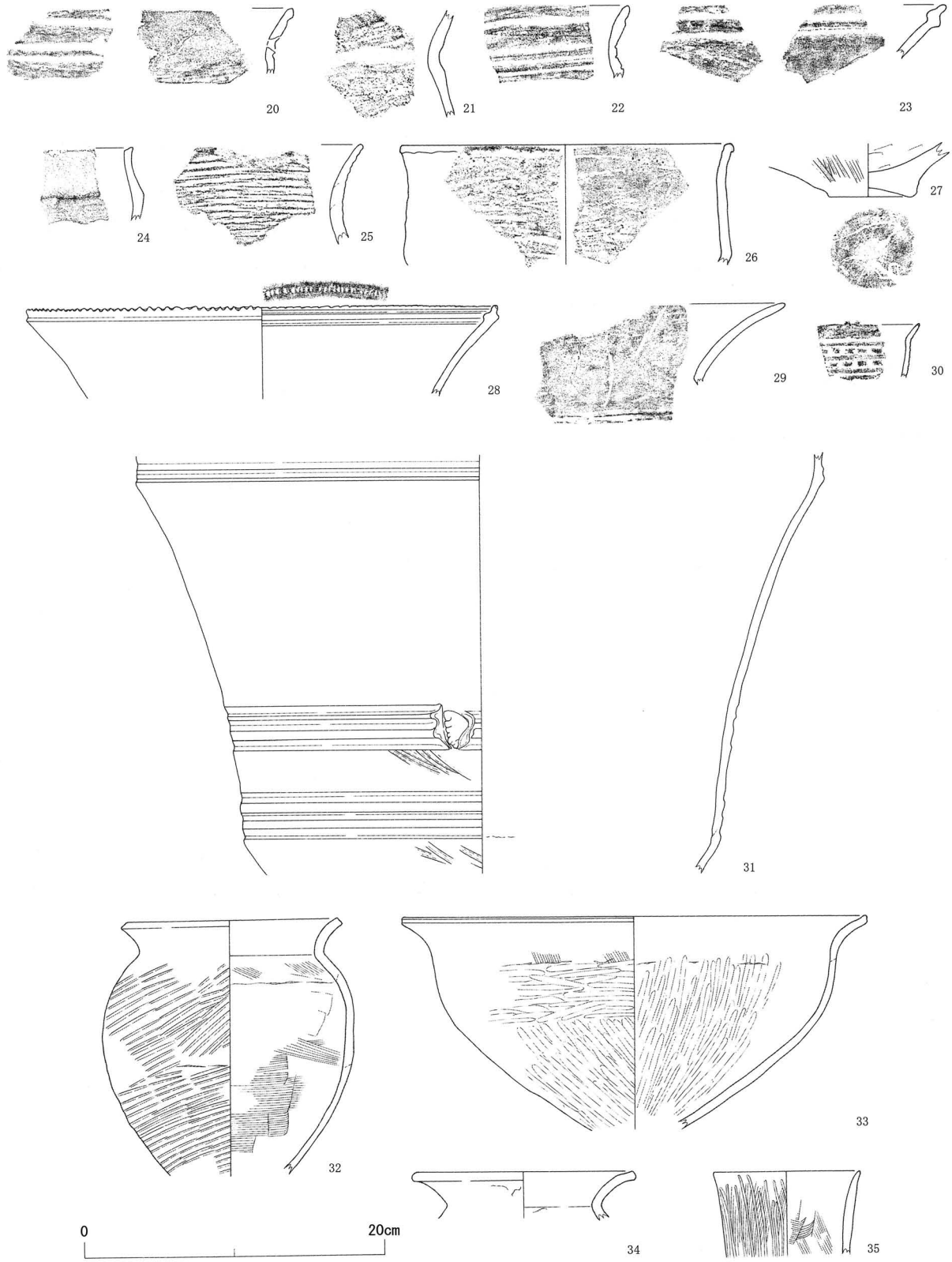
北トレンチＰ十八（第19図　29・30　図版12）

29は、緩やかに外反する長い口縁部を持つ浅鉢である。内外面ともにナデ調整である。篠原式古～中段階。30は、２条の沈線間に２条の刻目帯の横線化した文様帯を持つ浅鉢である。口縁端部には２つの小突起を持つ。大洞Ｃ１式と考えられる。

南トレンチ８層下部（第19図　31　図版10）



第 18 図　縄文土器実測図（5）



第 19 図　縄文土器・弥生土器実測図

31 は、有文深鉢である。体部は外方へと開くラッパ状を呈する。口縁部と体部の境を屈曲させ、直立気味の口縁部を持つ。体部には３条を一つの単位とした凹線が施され、粘土貼り付けによる扇状圧痕文が配される。凹線は、ナデによるためか幅が広く、断面はU字を呈する。外面は巻貝条痕

を施した後、ナデ調整を行う。内面はナデ調整である。宮滝１式。

北トレンチ土１内ｘ（第19図　32・33　図版10）

32は、甕である。口縁部は頸部から「く」の字状に外反させ、口縁端部には面を持つ。外面は右上がりのタタキで、２条／cmとやや粗い。内面はハケ調整である。33は、鉢である。底部から体部下半まではやや直線的で、体部上半に丸みを持つ。口縁部は大きく外反する。外面はハケ調整の後ミガキを施す。内面はミガキ調整である。いずれも弥生時代後期後葉。

北トレンチ溝１（第19図　34・35）

34は、壷である。口縁部は、「く」の字状に外反し、やや長い。内外面ともに丁寧なナデ調整が施される。35は、長頸壷である。口縁部は、直線的にやや外方へと伸び、端部は鋭くおさめる。外面は、タテハケを施した後、ミガキ調整を行う。いずれも弥生時代後期後葉。

土製品（第20図　36～45　図版13）

土製品の出土層位と遺構は、36・37・41・42（北トレンチ８層）、38（北トレンチ土１）、39（北トレンチ土Ⅱ）、40（北トレンチ７層）、43（南トレンチ土１）、44（南トレンチ11層）、45（北トレンチ土Ⅳ）である。

土偶

36は、下半身が遺存している。胴部は板状を呈し、背面は丸みを帯びるが、前面は平坦である。腰部にあたる部分は明瞭にくびれており、足は短い。背面には臀部を表現したと思われる円形の隆帯を持ち、中央が窪む。前面上部に粘土の隆帯が認められる。胸の表現か。37は、脚部である。付け根にあたる破断面に凸状の粘土塊が認められ、胴部に挿入するように接合したものと考えられる。38は、直径3.6cmの円柱状で、前面の付け根には粘土の隆帯が認められる。腕部か。39は、腕部である。端部に向かって尖る円錐状を呈する。端部脇側には平坦面が存在し手を表現した可能性がある。

動物形土製品

40は、動物形土製品である。端部に楕円形の平坦面を作り出し、直径約２mmの刺突を２つ施す。イノシシの鼻部と思われる。

半球状土製品

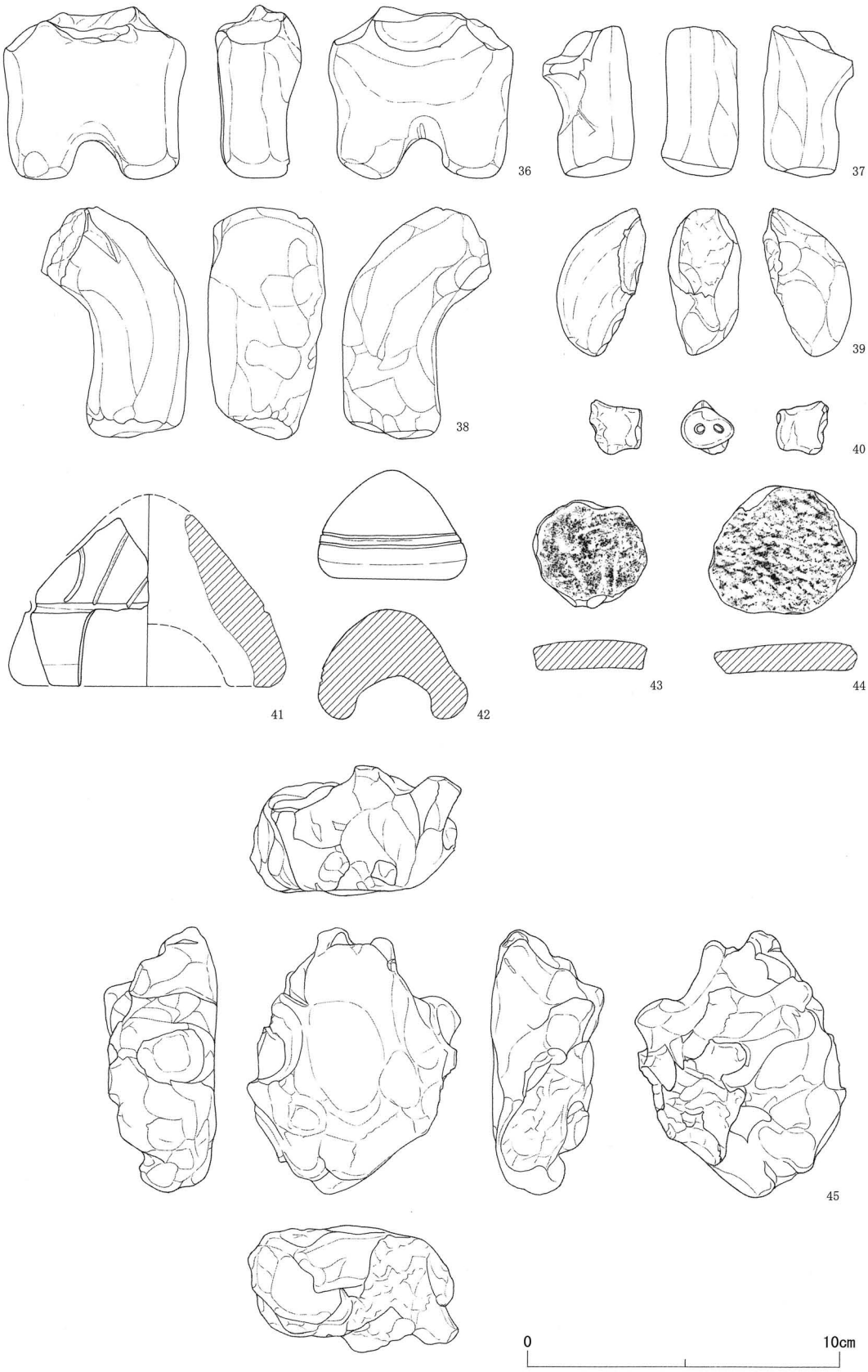
41・42は、半球状土製品である。41は、縦に３本、横に１本の線刻を施す。左の縦線は、円弧を描き横線までであるが、中央の縦線は底部まで達する。42は、内外面ともにナデによって丁寧に仕上げられており、外面に浅い２本の線刻が横走する。

土製円板

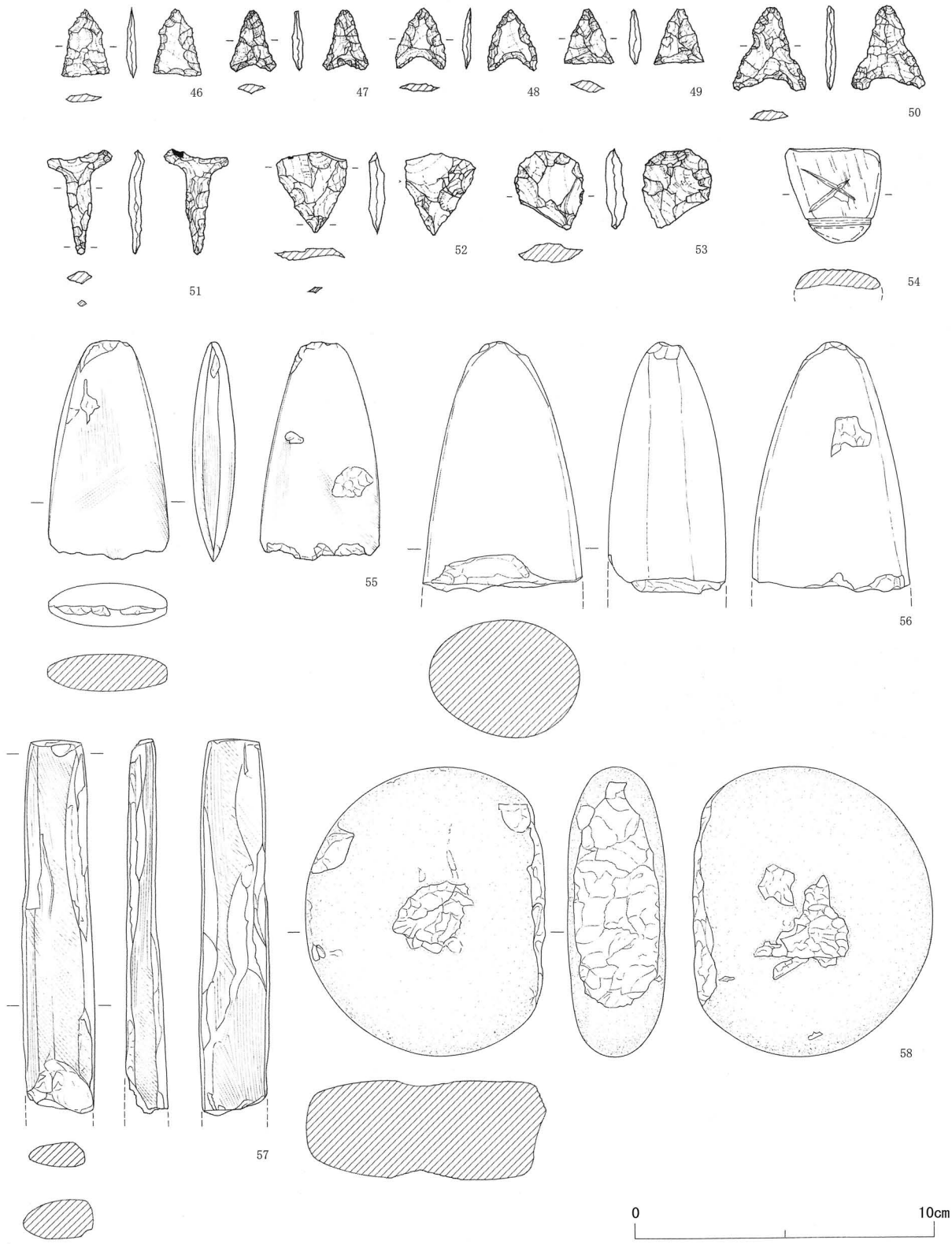
43・44は、ともに深鉢を加工した土製円板である。43の外面は、ケズリ調整である。44の外面には縄文が施され、胎土に１mm程度の石英を多く含む。

不明土製品

45は、機能・用途が不明であるため、便宜的に図面左から、左面、前面、右面、背面、上面、下面と呼称し記述する。左面は、中央と下半に明瞭な指頭圧痕が見られる。中央を強く押したため、粘土が上方へと押し上げられ、１条のしわが走る。前面は、唯一の平坦面を持ち、中央部分が若干窪む。右面は、中央部分で右上へと伸びる突起が作り出されている。背面は、右上から左下に走る浅い溝状の窪みがあり、中央の二箇所で内側へと大きな抉り込みを持つ。また、一部に２次焼成が認められる。上面では、２つの突起が作り出される。何らかの造形を意識して製作されたものではなく焼成粘土塊の可能性もある。



第 20 図　土製品実測図



第21図　石器実測図

石器（第21図　46～58　図版14）

石器の出土層位と遺構は、**46・47**（北トレンチ6層）、**48・49**（北トレンチ8層）、**50**（北トレンチ9層）、**51**（北トレンチ土六）、**52・55・58**（北トレン10層）、**53**（北トレンチ9～11層）、**54**（北トレンチ7層）、**56**（北トレンチ土1）、**57**（南トレンチ7層）である。

石鏃

五角形（46）、凹基無茎式（47・48）、平基無茎式（49）、比較的大型で側縁の中央に抉りを持つ凹基無茎式（50）がある。いずれもサヌカイト製である。

石錐

51 は、棒状の錐部につまみを持つ形状である。回転痕は認められない。52 は、形状から石錐と判断した。回転痕は認められない。石鏃の未製品の可能性もある。53 は、錐部を欠損しているが、形状と厚さから石錐と判断した。いずれもサヌカイト製である。

石斧

55 は、いわゆる定角式磨製石斧である。刃部には使用痕と考えられる剥離が認められる。蛇紋岩製。56 は、磨製石斧である。刃部は折れによって欠損する。基部先端に敲打痕が認められる。

石刀

54 は、石刀の基部と思われる。平坦な面に、下辺に１本の横線と中央部分には２本の交差した線が刻まれる。57 は、基部を欠損する破片である。上半では刃を研ぎ出しているが、下方へいくに従い楕円となる。背部と上部には研磨によって面を持つ。いずれも結晶片岩製である。

敲石

58 は、砂岩製の敲石である。両面の中央部に敲打痕が残る。また、側面には敲打によって面が形成される。

遺物執筆にあたり、大野薫氏（大阪府教育委員会文化財保護課）、遺物撮影に関して、南部裕樹氏（立命館大学文学部）から有益な助言をいただいた。記して謝意を表する。

【参考文献】

大野　薫 2003「顔のない土偶」『立命館大学論集』Ⅲ　立命館大学考古学論集刊行会

岡田憲一 2000「西日本縄文後期後葉土器編年序論―向出遺跡出土土器の研究―」『向出遺跡』（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第 55 集　財団法人大阪府文化財調査研究センター

岡田憲一 2003「滋賀里式再考」『立命館大学論集』Ⅲ　立命館大学考古学論集刊行会

角南聡一郎・佐藤亜聖編 1998『秋篠・山稜遺跡』奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書第 17 集　奈良大学文学部考古学研究室

関西縄文文化研究会 2004『縄文時代の石器Ⅲ―関西の縄文後期・晩期―』第６回関西縄文文化研究会

小林達雄編 2008『総覧縄文土器』　株式会社アム・プロモーション

高橋龍三郎 2002「大洞諸型式の伝播と変容」『日本考古学協会 2002 年度橿原大会発表資料集』日本考古学協会 2002 年度橿原大会実行委員会

田辺昭三・加藤修也 1973『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会

原田昌則 2003「中南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半（庄内式古相）の土器の細分試案について」『久宝寺遺跡第 29 次発掘調査報告書』（財）八尾市文化財調査研究報告 74　財団法人八尾市文化財調査研究会

家根祥多 1981「晩期の土器―近畿地方の土器」『縄文文化の研究』第４巻　縄文土器Ⅱ　雄山閣出版

家根祥多 1994「篠原式の提唱―神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討―」『縄文晩期前葉―広域編年』北海道大学文学部

山内清男編 1964『日本原始美術』１　講談社

5）馬場川遺跡第20次調査出土人骨

安　部　　み　き　子
（大阪市立大学院医学研究科器官構築形態学講座）

東大阪市に位置する馬場川遺跡の縄文時代後晩期の遺構および包含層から人骨が出土した。土坑内から出土した人骨の埋葬様式は、土葬と火葬の2様式があった。土葬人骨の保存状態は非常に悪く、骨格の輪郭が分かる程度の遺存度であり、火葬人骨は白色を呈し、小片の塊状で出土した。

北トレンチ
11層上面
土B
埋葬様式は土葬で、頭位は東南東である。遺存している骨は頭骨と長骨の一部の輪郭であり、埋葬時の姿勢は判断できなかった。

土C
埋葬様式は土葬で、頭位は北東である。遺存している骨は頭骨と長骨の一部の輪郭であり、埋葬時の姿勢は判断できなかった。

土D
埋葬様式は土葬で、頭位はほぼ東である。遺存している骨は頭骨と長骨の一部の輪郭であり、埋葬時の姿勢は判断できなかった。

土I
埋葬様式は土葬で、頭位はほぼ東である。遺存している骨は頭骨の輪郭のみであった。

9層
土二
埋葬様式は火葬で、骨が白色になるまで焼かれている。出土骨は小片となっているが、ほぼ全身の骨格がみられた。

南トレンチ
10層
4点の人骨と思われる骨格が遺存しているが、何れも輪郭のみで、骨の部位の同定はできなかった。

これらの人骨は、保存処理を行なった後、詳細を報告したい。

6）まとめ

これまで馬場川遺跡は縄文時代中期末から晩期前半、弥生時代後期、古墳時代前期の集落遺跡として知られていた。縄文時代の集落状況は明確ではないが、多量に出土している縄文土器やその出土範囲およびその状態などから、この期間に大きな集落が形成されていたことがうかがえる。以下、本調査の主要事項を簡単に列記しておく。

1．弥生時代後期後葉の平面プランが隅丸正五角形の竪穴住居。この時期、各地で多角形プランの住居が構築されている。大阪府下では五角形～八角形のものが知られている（枚方・高槻・堺各市など）。近畿地方で五角形は滋賀県でも確認されているが、正五角形ではない。五角形は山陰地方で多くみられることが報告されている注1）が、その関係は不明である。

2．縄文時代晩期後半ないし末の地震跡＝噴砂。縄文時代晩期から弥生時代前期の地震跡は、大阪府の松原市東新町、八尾市久宝寺などで液状化現象による噴砂、本市の宮ノ下では変形構造が確認されている注2）。

3．縄文時代では後期末から晩期後半にかけての整地と４面の遺構を検出した。

4．９層上面および10層上面の縄文時代晩期中葉中・後半期は、埋設土器、焼人骨群土坑、貯蔵穴などが形成されていた。

5．埋設土器土坑は６基あり、うち２基には２個体分の深鉢が埋納されていた。

6．縄文時代晩期の焼人骨群土坑。鬼塚遺跡第８次調査においても晩期末に比定されているものが検出されている（成人５体、小人１体）注3）。

7．11層上面の縄文時代晩期前半から中葉前半期は、埋設土器は見られず土坑墓群などが形成されていた。人骨は晩期中葉の整地層＝10層内（南トレンチ）から散乱した状態でも出土している。晩期前・中葉は南方の第13次調査地注4）周辺をも含めた地域が墓域であったと思われる。

8．９・10・11層の各上面において数個のピットなどで構成された環状遺構・弧状遺構を検出した。とくに11層上面の環状遺構は土坑墓４基間にあり、周辺ピットとともに墓・墓形成に関係するものと思われる。

9．本遺跡は多量の土偶・土製品が出土していることでも知られており、東大阪市立郷土博物館が収蔵している土偶・土製品は大阪府の文化財に指定されている。これまで49個の土偶が確認されていたが注5）、今回７個出土し、総数56個を数えることになり、近畿地方では奈良県橿原遺跡（183個）、三重県天白遺跡（70個）についでいる。

10．今回の調査において遺物、とくに土器の出土が大量であったことから遺物類の詳細および本調査の位置付けなどについては来年度の報告書に譲ることにした。

注１）近藤宏「滋賀県における弥生時代後期の社会変化」　第58回埋蔵文化財研究集会　『弥生時代後期の社会変化　発表要旨・資料集』　第58回埋蔵文化財研究集会実行委員会　2009、福島孝行「平面多角形の竪穴住居の検討」　森浩一　松藤和人編『同志社大学考古学シリーズⅦ　考古学に学ぶ』　同志社大学考古学シリーズ刊行会　1999

注２）寒川旭「池島・福万寺遺跡で検出された地震の痕跡」　『池島・福万寺遺跡 3』本文・考察編　財団法人大阪府文化財センター　2007 など。

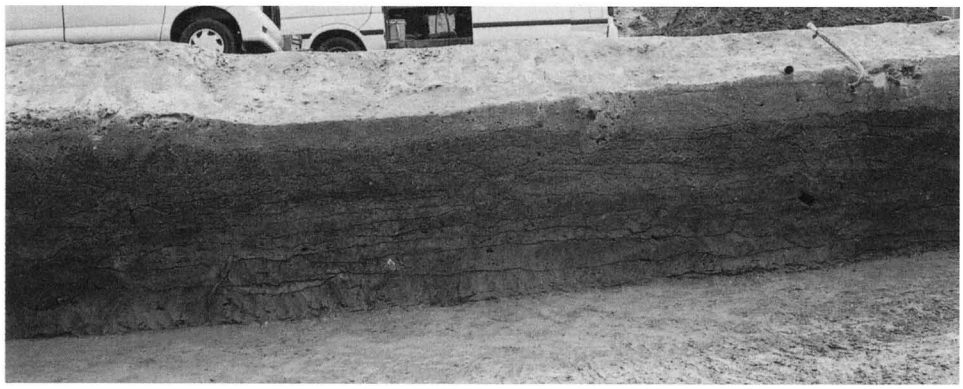
注３）『鬼塚遺跡第８次発掘調査報告書』　財団法人東大阪市文化財協会　1997

注４）「馬場川遺跡第13次発掘調査」　『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報　平成14年度』　2003

注５）藤城泰・三輪若葉・若松博惠「東大阪市内出土の土偶・土製品」　『光陰如矢 - 荻田昭次先生古稀記念論集 - 』　「光陰如矢」刊行会　1999

田中万紀子・中西克宏「馬場川遺跡出土の土偶の新資料」　『海が好きだ』　藤城泰氏追悼文集刊行会　1999

1. 北トレンチ位置
機械掘削前状況
（南東より）

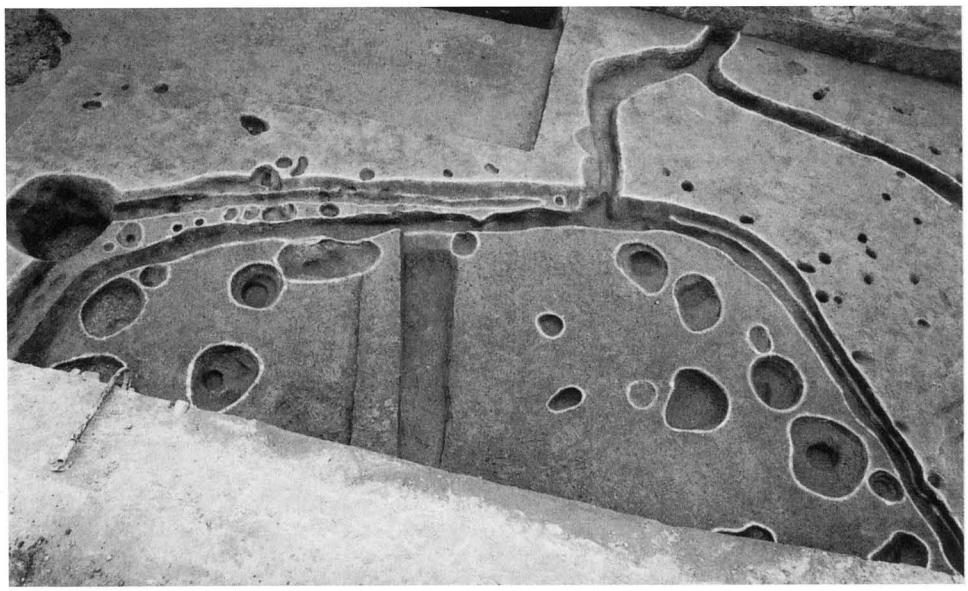


2. 北トレンチ南壁面
・部分（北より）

3. 南トレンチ西壁面
（東より）

4. 北トレンチ
5層上面遺構
（東より）

図版2　馬場川遺跡第20次調査　遺構

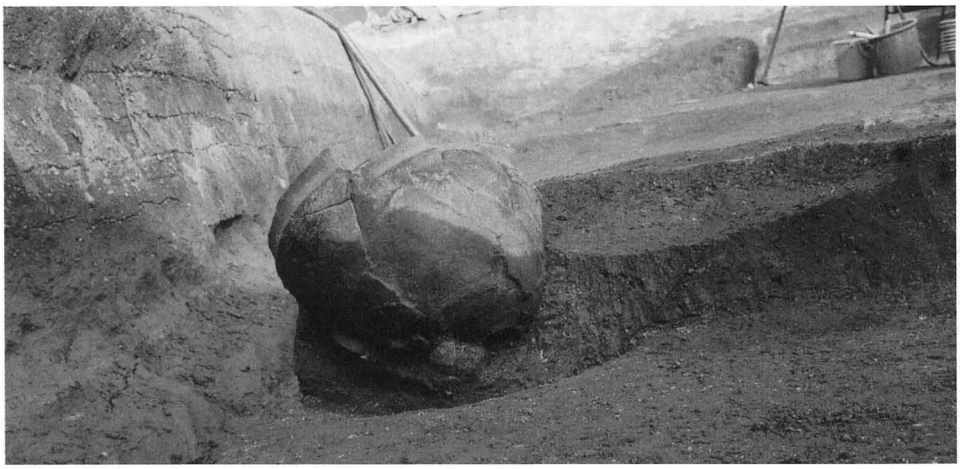


1. 北トレンチ
5層上面竪穴住居
(南南東より)

2. 北トレンチ
7層上面噴砂跡
(南より)

3. 北トレンチ
9層上面遺構
(西より)

1. 北トレンチＰ十四
埋設土器（西より）

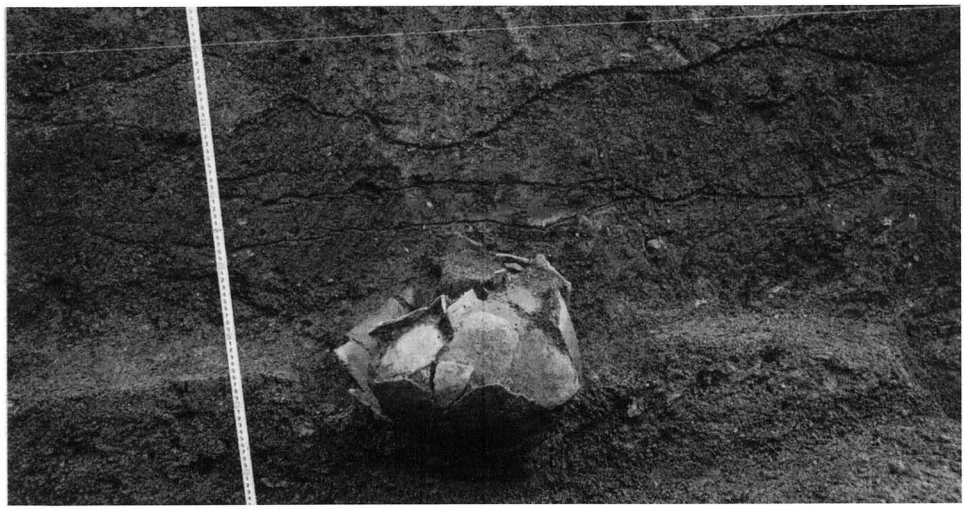


2. 北トレンチＰ十四
埋設土器側面
（西より）

3. 南トレンチ９層上面遺構（西より）

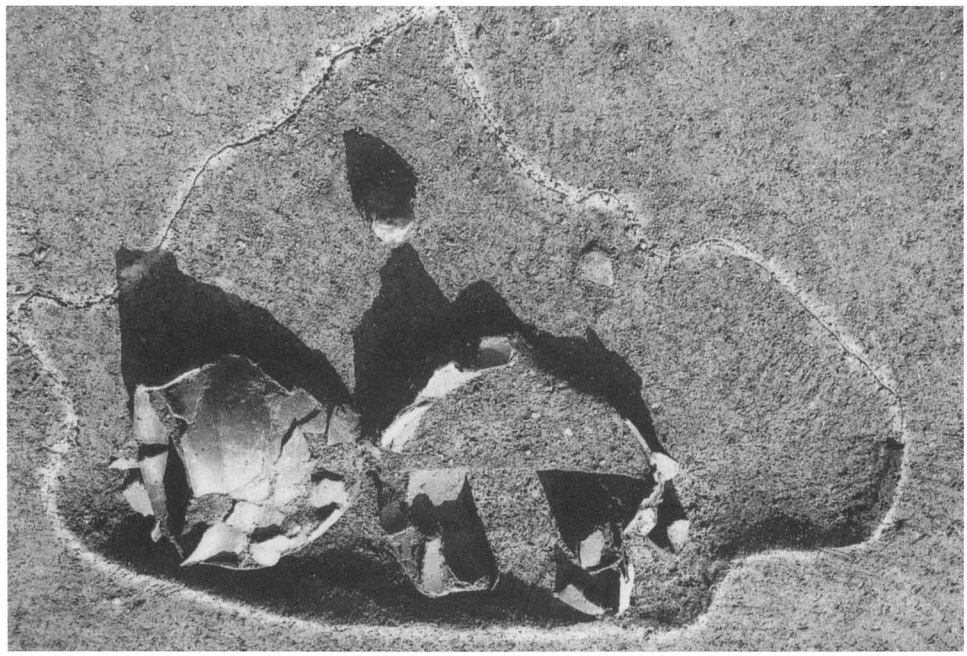
図版4　馬場川遺跡第20次調査　遺構

1. 南トレンチ土3
埋設土器（南より）



2. 南トレンチ土3
埋設土器側面（北より）

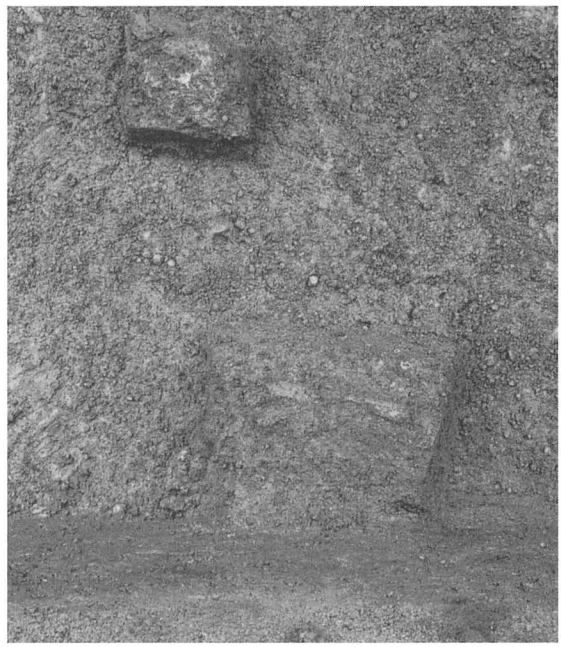
3. 北トレンチ
10層上面遺構
（西より）



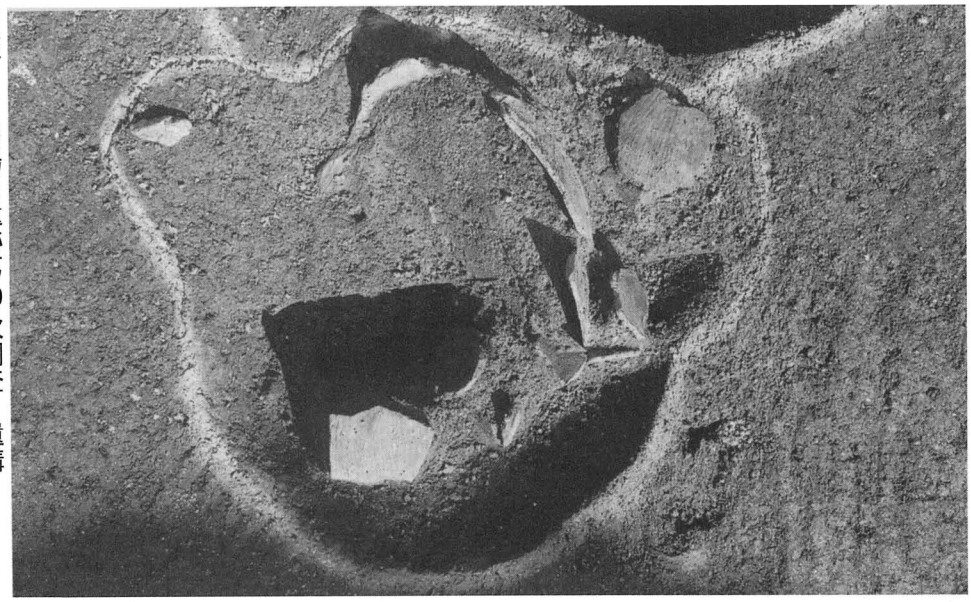
1. 北トレンチ土Ⅳ
埋設土器（北より）

2. 北トレンチ土Ⅳ
埋設土器側面
（南より）

3. 南トレンチ10層上面遺構（西より）

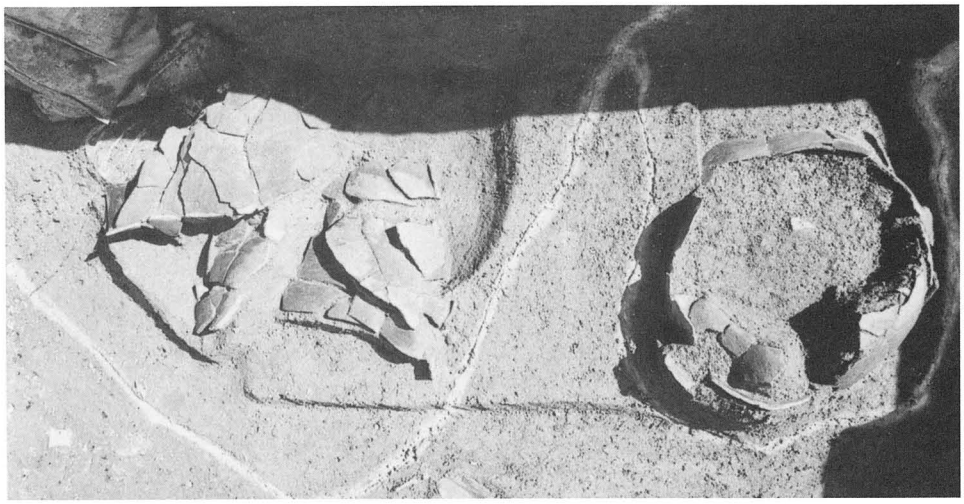


4. 南トレンチ10層内人骨出土状況（北より）

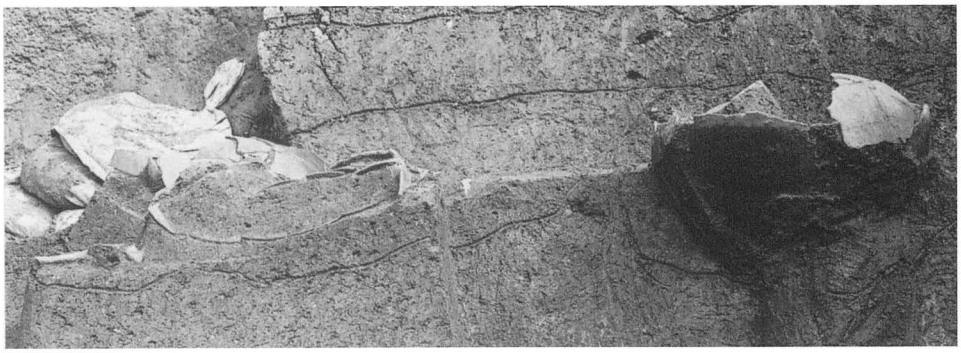


1. 北トレンチ Px
埋設土器（南より）

2. 北トレンチ Px
埋設土器側面（北より）



3. 北トレンチ土Ⅴ・Ⅵ
埋設土器（西より）



4. 北トレンチ土Ⅴ・Ⅵ
埋設土器側面（西より）

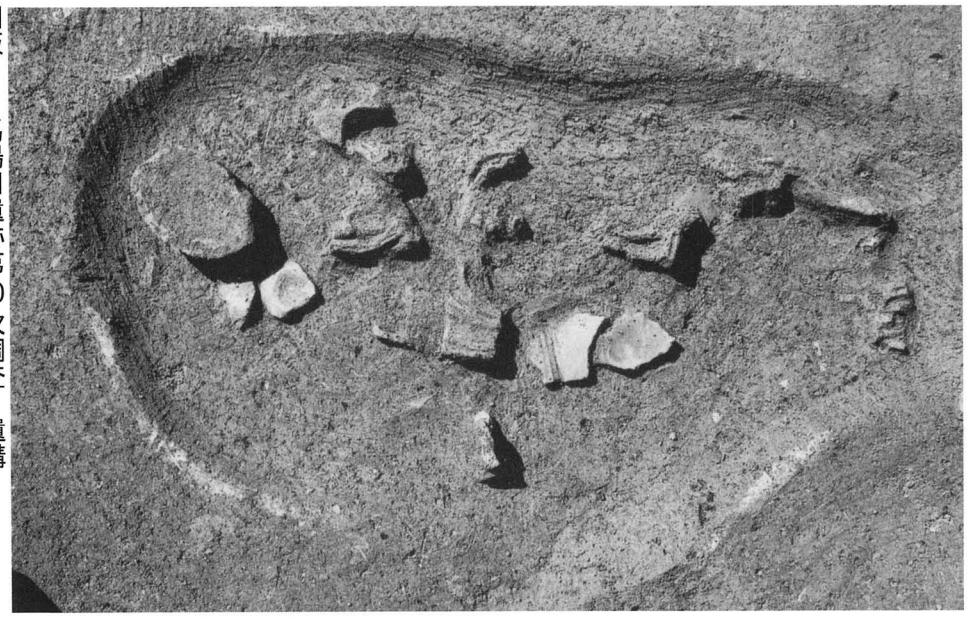
図版7　馬場川遺跡第20次調査　遺構

1. 北トレンチ11層
上面遺構（西より）

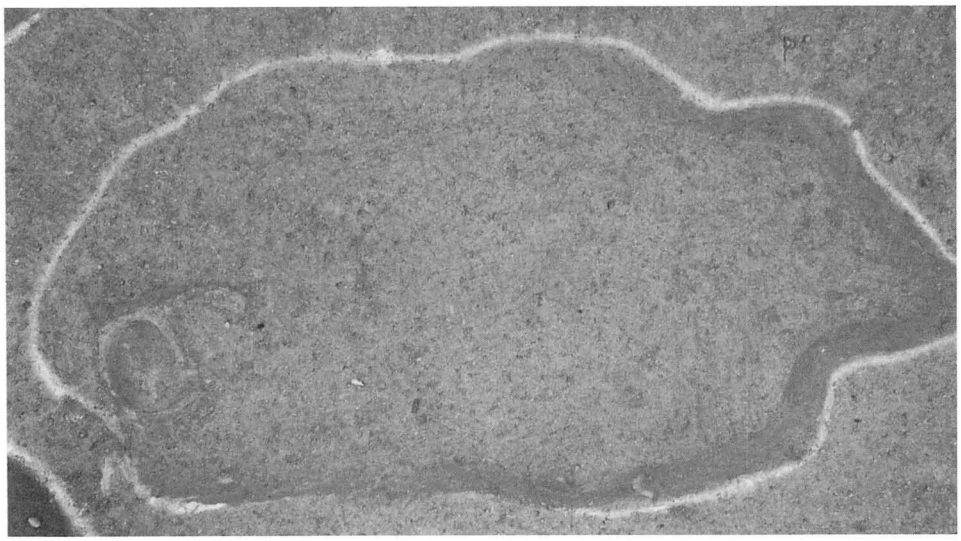
2. 北トレンチ土C
土坑墓（南より）

3. 北トレンチ土D
土坑墓（南南西より）

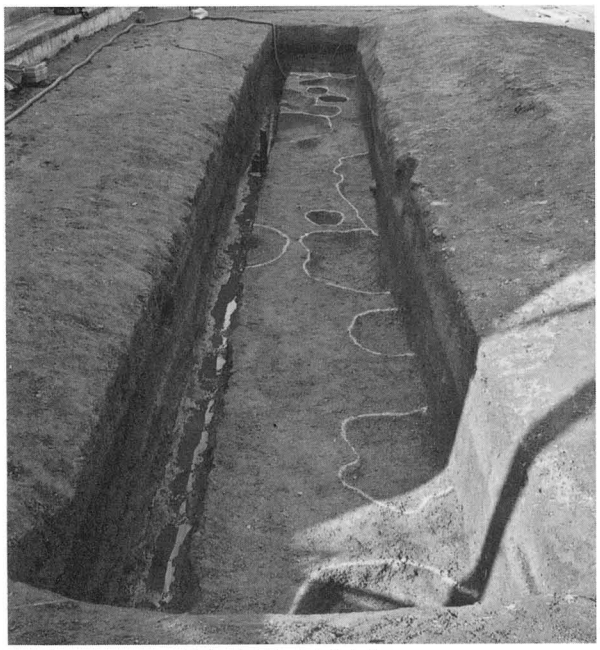
図版8　馬場川遺跡第20次調査　遺構



1. 北トレンチ土B
土坑墓（南南西より）



2. 北トレンチ土I
土坑墓（南より）



3. 南トレンチ 11 層上面遺構（東より）

4. 南トレンチ 11 層上面遺構（東より）

10

8

11

17

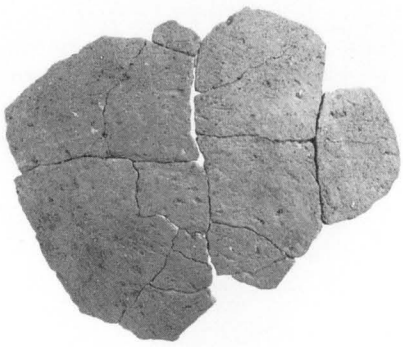
9

15

北トレンチ土Ⅵ出土縄文土器　深鉢、北トレンチピット Px 出土縄文土器　深鉢、北トレンチ土Ⅵ出土縄文土器　深鉢、南トレンチ土３出土縄文土器　深鉢

18

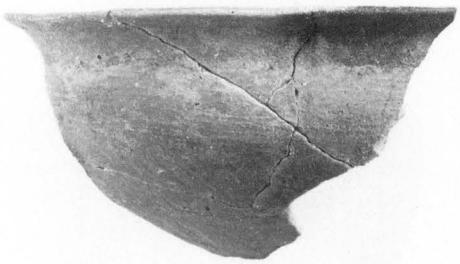
19



16

31

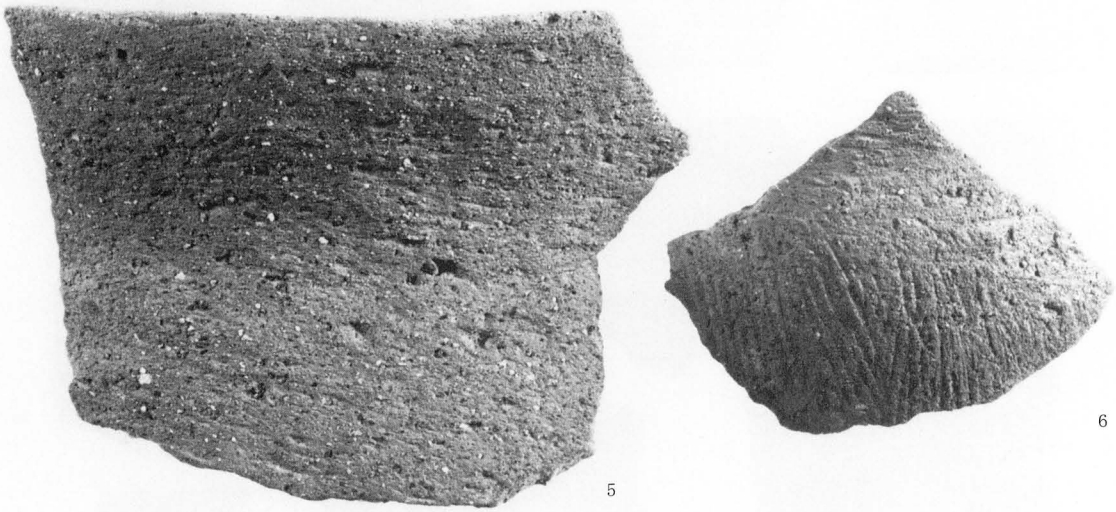
32



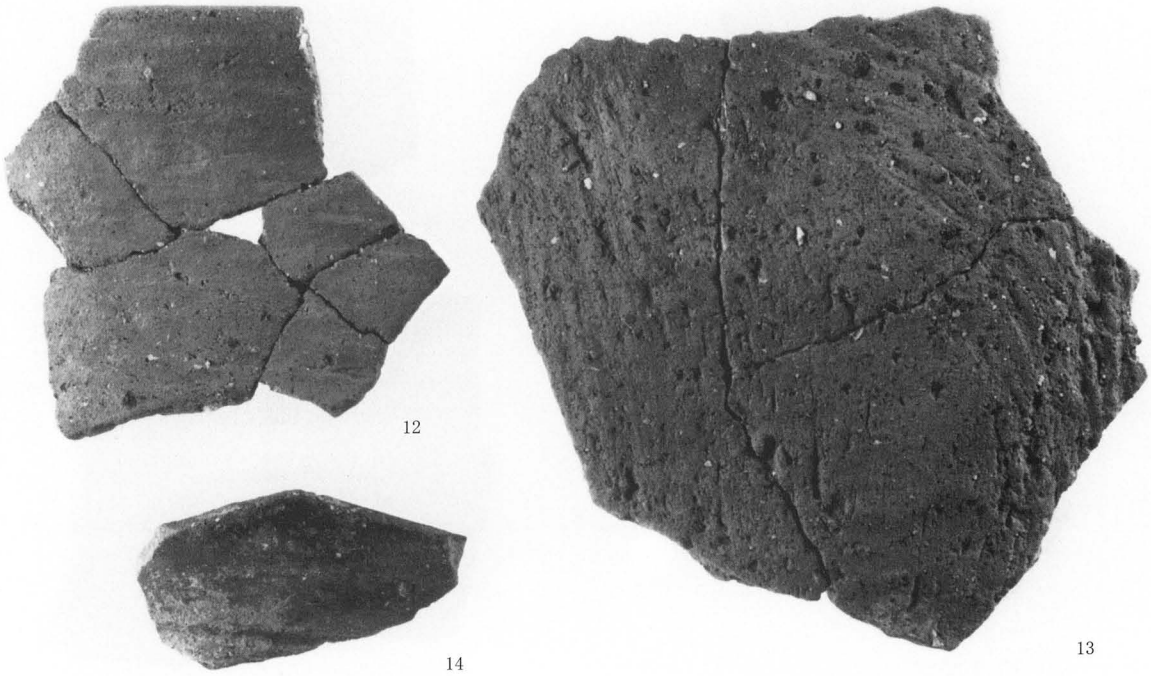
33

北トレンチ土Ⅴ出土縄文土器　深鉢、北トレンチＰ十四出土縄文土器　深鉢、南トレンチ土２出土縄文土器　深鉢、
北トレンチ土Px出土縄文土器　甕・鉢

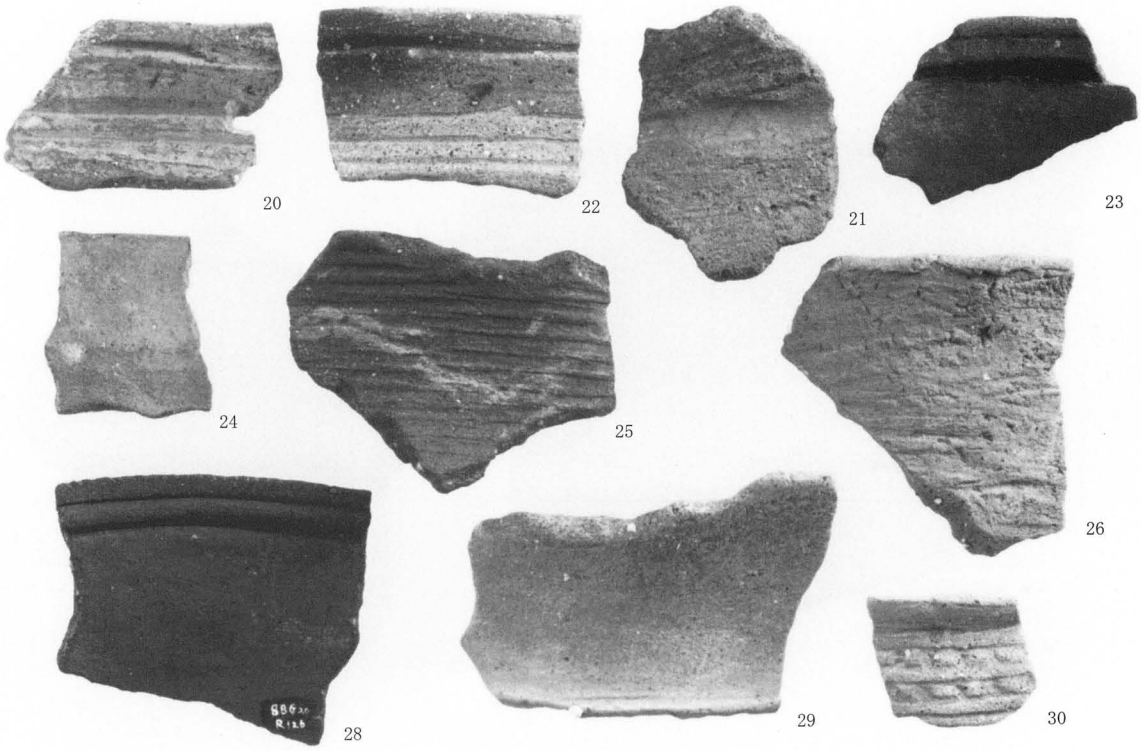
1. 北トレンチ土B出土縄文土器　深鉢



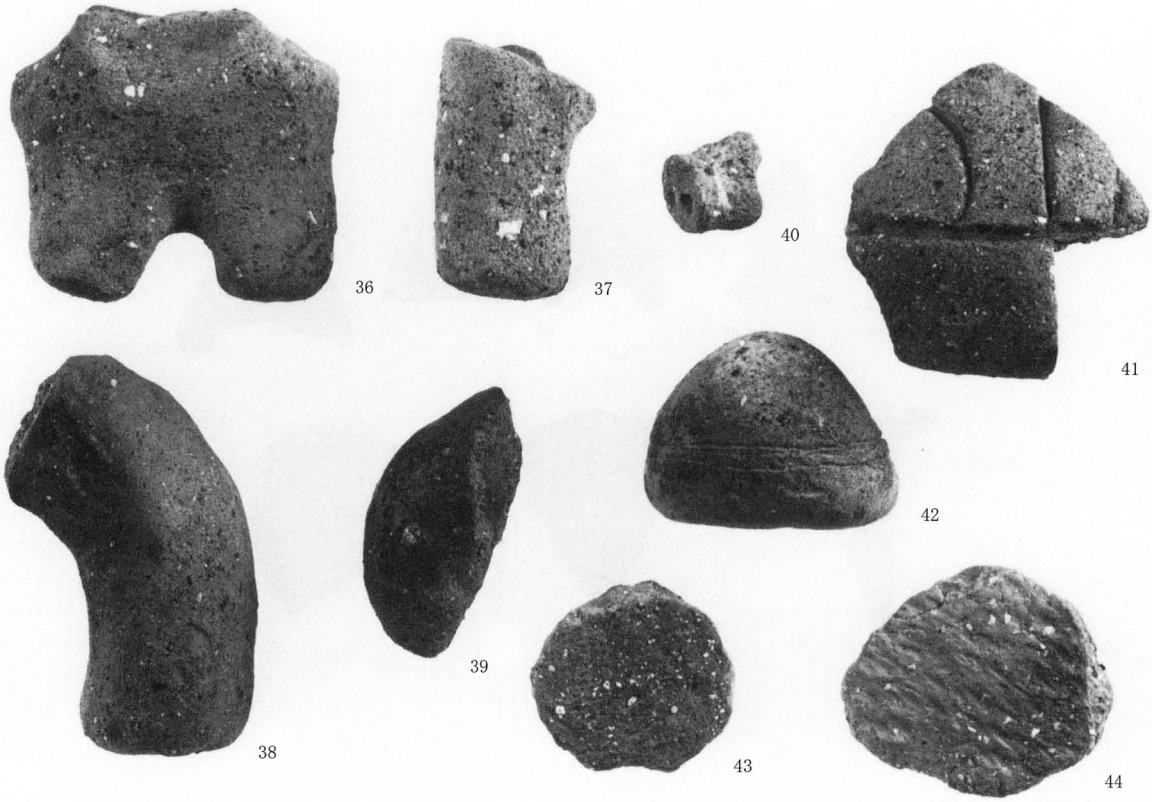
2. 南トレンチ土A出土縄文土器　深鉢



1. 南トレンチ大溝出土縄文土器　深鉢・黒色磨研浅鉢

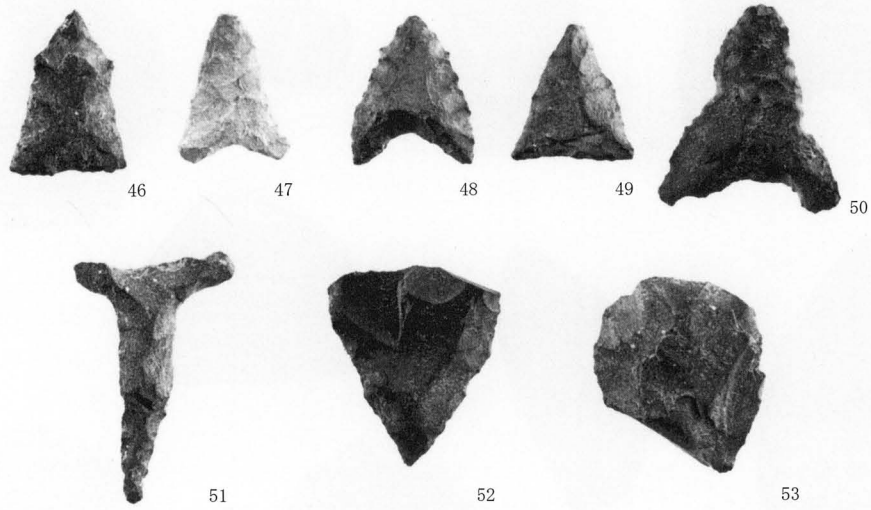


2. 北トレンチ土一出土縄文土器　深鉢、北トレンチ土七出土縄文土器　深鉢・黒色磨研浅鉢、
北トレンチＰ十八出土縄文土器　浅鉢



1. 包含層・遺構出土土製品　土偶・動物形土製品・半球状土製品・土製円板

2. 北トレンチ土Ⅳ出土土製品



1. 包含層・遺構出土石器　石鏃

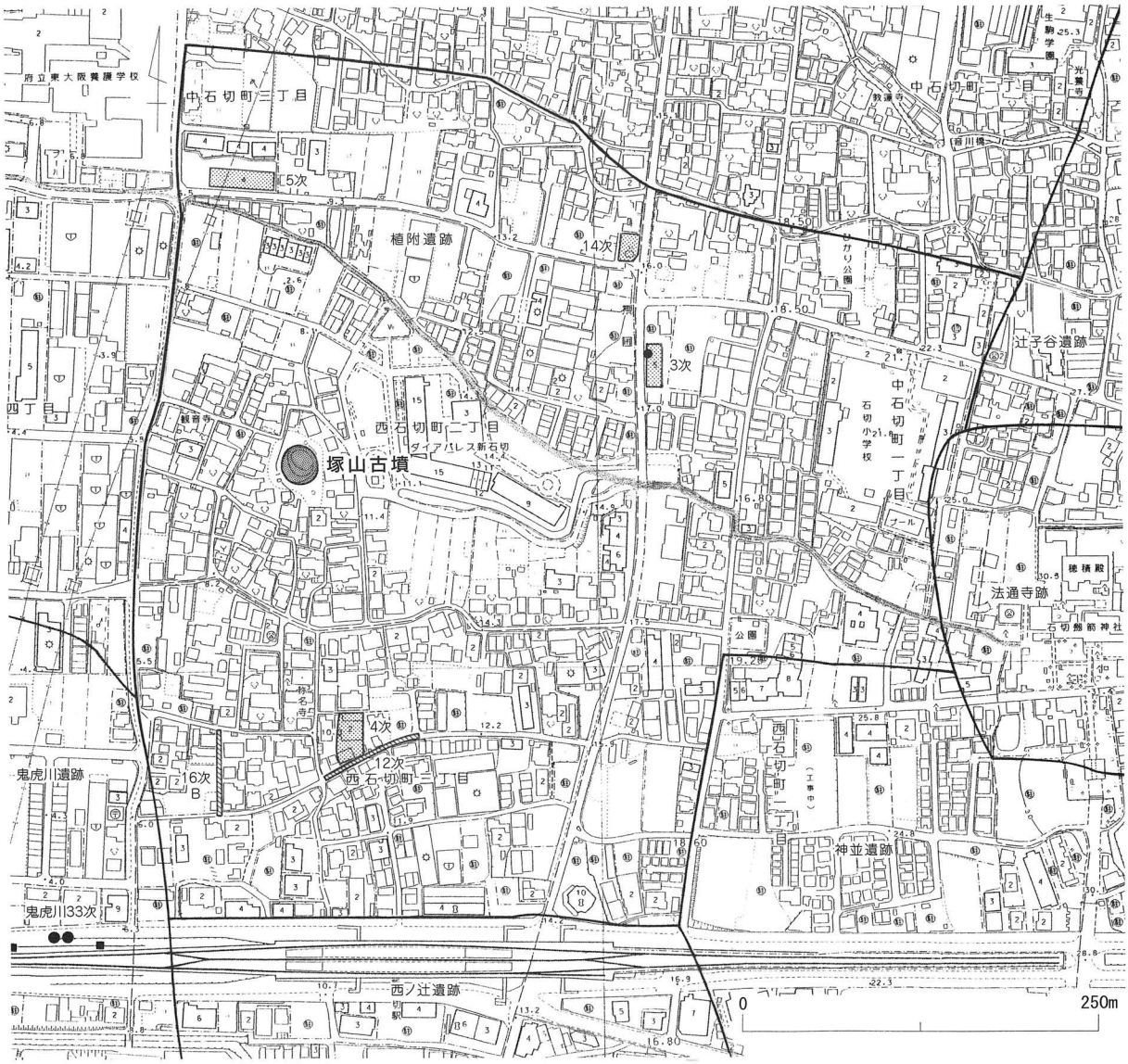
2. 包含層・遺構出土石器　石刀・石斧・敲石

第５章　塚山古墳の現況測量

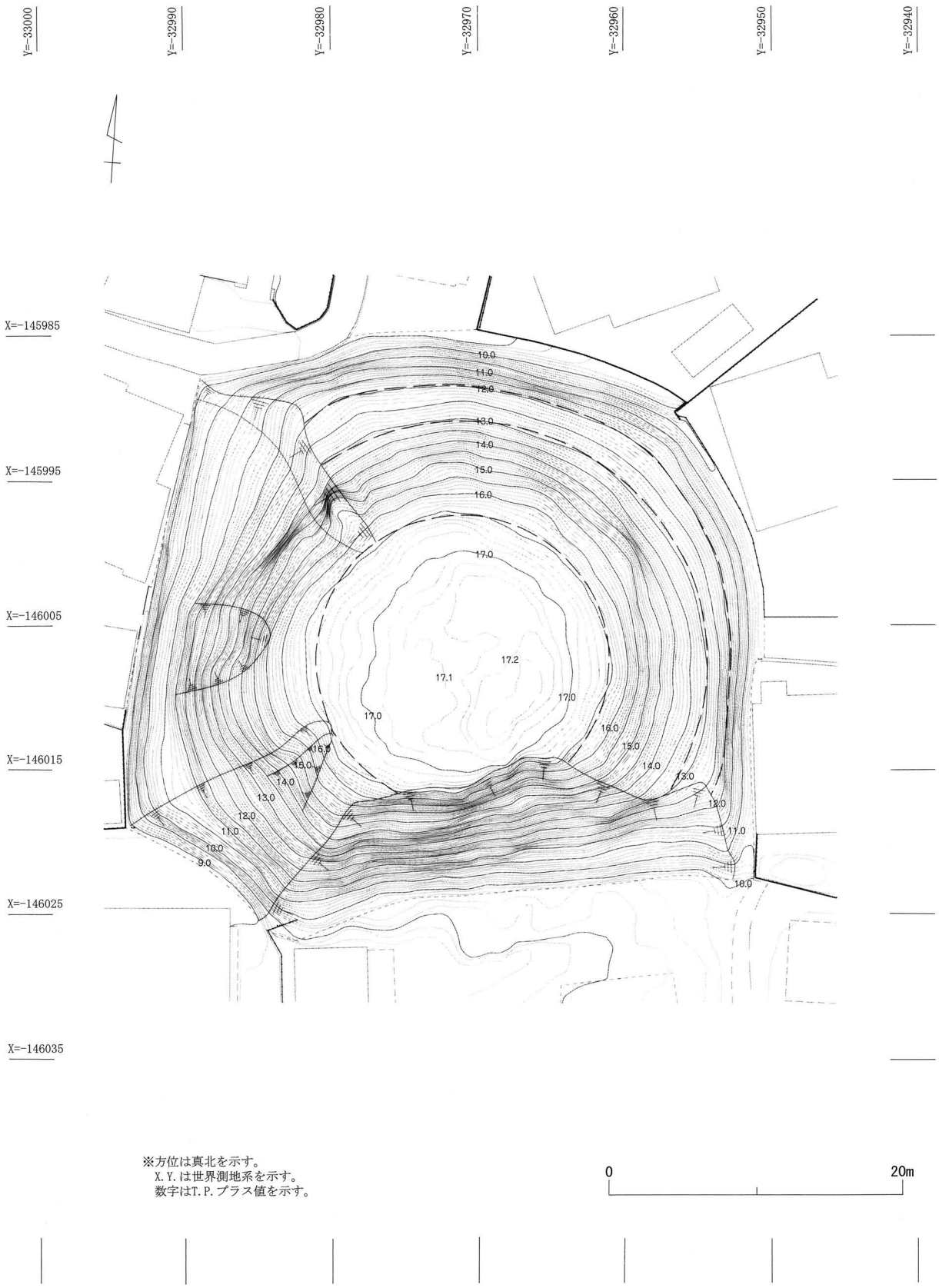
1)　塚山古墳について

塚山古墳は、東大阪市西石切町２丁目に所在する中期の円墳である。古墳は生駒山地西麓部で発達する扇状地の扇端部に立地する。墳丘の裾端部は現況で、北側Ｔ.Ｐ.９.３m、南側Ｔ.Ｐ.９.７mを測る。近年、裾端部まで人家が取り囲み、墳丘の変形や流失が著しくなっている。墳形については、以前、方墳や前方後円墳との推定が行われたことがあった。周辺にあった水田の形が周濠と似ているところから、周囲に周溝を巡らせていた可能性も指摘されている。現在まで一度も発掘調査が行われていないため、古墳の内部主体については全く不明である。墳丘すぐ南の道路上で盾形埴輪・蓋形埴輪・円筒埴輪、墳丘の北側で蓋形埴輪・円筒埴輪・朝顔形埴輪が採集された。円筒埴輪は川西編年の第Ⅲ期に属し、5世紀前半期の年代観を示す。このことから塚山古墳は5世紀前半期の築造と推定された。

塚山古墳の築造時期についてほぼ大過なければ、東大阪市内で最も古いえの木塚古墳(南四条町、４世紀末)に次ぎ、市内で数少ない中期古墳となり、被葬者集団の動向の把握が課題となってきた。



第１図　塚山古墳の位置と植附遺跡・鬼虎川遺跡の調査地点(●:竪穴住居、■;掘立柱建物)



※方位は真北を示す。
X.Y.は世界測地系を示す。
数字はT.P.プラス値を示す。

第2図　塚山古墳現況測量図

2) 墳丘の現況測量

塚山古墳の地権者から、東大阪市文化財保護条例の規定に基づく文化財指定申請書及び同意書が提出された。これを受けて、塚山古墳が文化財指定に相当するかどうかを調査する必要が生じた。塚山墳丘が現地に完存することから、大阪府教育委員会と協議を行った。協議の結果、まず保存に向けた基礎的データを収集することとし、墳丘の現況測量を実施することになった。測量は平成 21 年 2 月 23 日に行った。測量の結果、次の点が明らかになった。

① 今回の測量では前方部は確認できず、塚山古墳は二段築成の円墳の可能性が高い。

② 墳丘の西北部から南側にかけて、本来の形状は大きく損なわれている。とくに南側の墳丘傾斜面は急激な崖面となっている。西側で墳丘の裾端部が直線状に見え方墳と推定されたことがあったが、これは水田耕作等のためにごく近辺まで墳丘の裾端部を削った結果によるものである。

③ いっぽう、墳丘の北側から東側にかけては、墳丘の形状をよく伝えている。墳頂は円丘ではなく截頭円錐形を呈し平坦面をもつ。

④ 墳頂平坦面の中心から、最も遺存のよい墳丘裾端部北西隅までを計測すると、現存長で直径45mを測る。裾端部北側からの高さは 8.0m、南側からの高さは 7.5m になる。これまで、墳丘の規模は直径約 20m とされ、その 2 倍以上の規模になる。

⑤ 墳丘形状をよくとどめる北側から東側にかけては、T.P.12.0m と 13.0m の等高線間隔が広くなっており、ここに二段築成の平坦面(犬走り)が遺存すると考えられる。この間隔は最小 1.7m、最大 3.4m を測る。

3) 塚山古墳をめぐる諸課題

塚山古墳が位置する一帯は植附遺跡の範囲にあたる。塚山古墳の北約 200m の地点にあたる植附遺跡第 5 次調査では、小型低方墳が 6 基検出された。全て墳丘が削平されているが、一辺約 10m の規模で、幅 3 m 深さ 1 m 前後の周溝が巡る。周溝の出土土器から小型低方墳は 5 世紀後半から 6 世紀後半までに築かれたと考えられている。時期的に塚山古墳に後続する。下水道埋設に伴う第 16 次調査 B 地区では約 4.0m の限られた区間から、形象埴輪・円筒埴輪・朝顔形埴輪が出土した。形象埴輪には、甲冑形・人物・盾形・蓋形などがみられた。円筒埴輪は川西編年で第Ⅴ期、6 世紀初頭に属する。第 5 次調査と同様、埴輪を伴う古墳の存在が推定される。次に古墳時代の集落をみてみよう。第 3 次調査で 5 世紀後半から末の竪穴住居、第 14 次調査では 5 世紀末の溝・土器溜まりが検出された。塚山古墳の北東約 250m 周辺に同期の集落が存在するようである。塚山古墳の南方約 200m の第 4 次・第 12 次調査では各々古墳時代のピット、5 世紀末の遺物包含層が発見された。南西約 350m に位置する鬼虎川遺跡第 33 次調査では、5 世紀末に属する竪穴住居(第 1 図の●印)と掘立柱建物(第 1 図の■印)が検出されている。塚山古墳の南方にも時期的に 5 世紀末前後の集落が営まれたことがわかる。また東方の式内社石切劔箭神社には神宝として古鏡が伝えられ、塚山古墳の副葬品とする説がある。

塚山古墳の被葬者集団の推定など、当時の社会状況を捉えるには、今後の調査とともに、古墳築造時における周辺の集落の動向を推し量る必要があろう。

【参考文献】

藤井直正・都出比呂志ほか 1966『原始・古代の枚岡　第 1 部　各説』

川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』64－2)

中西克宏 1988「塚山古墳採集の埴輪」(『東大阪市文化財協会ニュース』2－1)

東大阪市教育委員会 2001『東大阪市の古墳(改訂版)』

図版1　塚山古墳

1. 塚山古墳墳丘現況（北から南を望む）

2. 塚山古墳航空写真（写真上方が北）

報告書抄録(その 1)

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう －へいせい 21 ねんど－
書名	東大阪市埋蔵文化財調査概報　－平成 21 年度－
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	菅原章太・若松博恵・佐藤由美・奈良拓弥・安部みき子
所在地	〒577-8521　東大阪市荒本北一丁目 1 番 1 号
発行年月日	2010 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
かみこさかいせき 上小阪遺跡	東大阪市若江西新町 4 丁目 17-1 番地	27227	103	平成 21 年 3月4日～ 3月 25 日	108 ㎡	個人賃貸 共同住宅 建設
ふなやまいせき 船山遺跡	東大阪市六万寺町 3 丁目 603-5 番地 の一部	27227	111	平成 21 年 8月 20 日～ 8月 24 日	4.9 ㎡	個人住宅 建設
ばばがわいせき 馬場川遺跡	東大阪市横小路町 4丁目 433-3 番地	27227	89	平成 21 年 9月 17 日～ 10 月 31 日	184.7 ㎡	零細事業主 分譲住宅 建設
つかやまこふん 塚山古墳	東大阪市西石切町 2丁目 269 番地	27227	38	(平成 21 年 2月 23 日測量)	－	(保存目的)

報告書抄録(その 2)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上小阪遺跡 (第 8 次調査)	集落跡	弥生時代 後期	大溝・土坑 ・ピット・溝	弥生土器 土製品 石製品	大溝・土坑から 多量の弥生 土器が出土
船山遺跡 (第 8 次調査)	集落跡	古墳時代 ～中世	ピット・土坑	弥生土器 須恵器 土師器 瓦器	
馬場川遺跡 (第 20 次調査)	集落跡	縄文時代 ～古墳時代	土坑墓 埋設土器 焼骨埋納土坑 環状遺構 竪穴住居	縄文土器 石器 土偶 土製品 弥生土器	縄文時代晩期の 土坑墓群・ 埋設土器群・ 環状遺構 弥生時代後期の 正五角形竪穴住居
塚山古墳	古墳	古墳時代	古墳	―	墳丘の 現況測量

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報
―平成 21 年度―

発　行　日　　平成 22 年 3 月 31 日
編集・発行　　東大阪市教育委員会
〒577-8521
東大阪市荒本北一丁目 1 番 1 号
TEL 06-4309-3283
印　刷　所　　(株) 熨斗秀興堂